



동학농민혁명 국제학술대회



새로운 자료를 통해 본

동학농민혁명의 동아시아적 의미

2010년 10월 22일(금) 국립중앙박물관 제1강의실

주최 동학농민혁명기념재단 · 한국사연구회

후원 문화체육관광부 · 국립중앙박물관

동학농민혁명기념재단 · 한국사연구회

새로운 자료를 통해본 동학농민혁명의 동아시아사적 의미

일시 : 2010년 10월 22일(금) 09:20 ~ 18:00

장소 : 국립중앙박물관 제1강의실

주최 : 동학농민혁명기념재단 · 한국사연구회

후원 : 문화체육관광부 · 국립중앙박물관

개 회 사

안녕하십니까, 한국사연구회장 최광식입니다. 먼저 저희 한국사연구회와 학술대회를 공동으로 주최하시는 동학농민혁명기념재단 김영석 이사장님께 감사의 말씀을 드립니다. 동학농민혁명은 한국근대사의 성격을 규정짓는 매우 중요한 주제인 만큼, 오늘 여는 국제학술대회가 한국사 연구에도 많은 기여를 하리라 믿습니다. 이와 함께 이이화 선생님을 비롯하여 오늘 이 자리에 모이신 발표자, 토론자 선생님들께도 감사의 말씀을 드립니다. 아무쪼록 좋은 발표와 열띤 토론을 통하여 자리를 빛내 주시기를 바랍니다.

금번 국제학술대회에서는 그동안 소개되지 않았던 새로운 자료를 중심으로 동학농민혁명이 우리 역사에서 지니고 있는 의미를 재조명하고자 합니다. 특히 최근 들어 일국사적 관점을 넘어 지역적, 국제적, 동아시아적 관점으로 역사를 새롭게 재구성하고자 하는 움직임이 활발하게 일어나고 있습니다. 1894년 한국에서 일어난 동학농민혁명은 비단 한국 내에서만 그친 혁명은 아니었으며, 이 혁명을 진압하기 위해 군대를 파견한 일본, 중국과 밀접한 관련을 맺고 있었습니다. 따라서 한국 뿐 아니라 일본, 중국과 같은 인접국가에서 새롭게 발견한 자료를 활용하여 국제학술대회를 진행하고자 합니다.

먼저 한국 측 자료로는 『균암장 임동호씨 약력』이 소개됩니다. 이를 통해 그동안 제대로 밝혀지지 않았던 북접 농민군의 진로가 드러날 것으로 기대합니다. 다음으로 일본 측 자료로는 동학농민군을 탄압하였던 일본 측 당사자들의 자료가 소개됩니다. 그리고 그동안 구체적인 촬영경위가 드러나지 않았던 ‘전봉준의 사진’에 얽힌 진실을 새롭게 소개하는 발표 역시 진행될 것입니다. 마지막으로 중국 측 자료로는 그동안 동학농민혁명 연구에 적극적으로 활용되지 않았던 『이홍장전집』과 『원세개전집』이 소개됩니다. 좋은 발표를 준비하신 선생님 여러분께 다시 한 번 더 감사의 말씀을 드리며 이만 개회사를 마칠까 합니다. 감사합니다.

2010년 10월 22일
한국사연구회 회장 최광식

기념사

안녕하십니까, 동학농민혁명기념재단 이사장 김영석입니다. 먼저 오늘 이 학술대회를 저희 재단과 공동으로 주최하여 자리를 마련해 주신 최광식 한국사연구회장님께 감사의 말씀을 드립니다. 지난 반세기 동안 한국사 연구에 정력을 기울였던 한국사연구회와 함께 동학농민혁명을 주제로 모인 만큼 오늘 이 자리에서 의미 있는 발표 및 토론이 진행될 것으로 기대합니다. 그리고 오늘 이렇게 발표 및 토론을 위해서 모이신 선생님들 및 청중 여러분께도 감사의 말씀을 드립니다. 학술대회에서 발표를 맡으시면서 도서를 저희 재단에 기증해 주신 나카츠카 아키라 선생님께도 특별한 감사의 말씀을 드립니다.

동학농민혁명은 안으로는 근대시민사회의 수립을, 밖으로는 자주독립국가의 건설을 이루고자 한 우리나라역사 최초의 근대적 혁명이었습니다. 이 혁명은 비록 외세와 결탁한 봉건왕조세력에 의하여 실패로 끝났지만 이후 3. 1운동, 4. 19혁명, 5. 18민주항쟁으로 이어지는 민족·민중항쟁의 시원을 이룬 매우 큰 역사적 의의를 지니고 있습니다. 동학농민혁명기념재단은 이와 같은 의의를 계승하기 위하여 「동학농민혁명참여자등의명예회복에관한특별법」에 따라 문화체육관광부 특수법인으로 2010년 2월 24일 설립되었습니다.

우리는 동학농민혁명의 정신을 올바르게 계승하고 발전시켜 현대민주사회의 성숙에 기여해야 할 시대적 사명을 지니고 있습니다. 따라서 동학농민혁명기념재단은 기념사업 및 교육홍보사업 등을 추진하여 동학농민혁명 정신을 다시 한번 더 되새기고 그 현재적 의미를 널리 알리는 데에 힘쓰고 있습니다. 아울러 전문적인 연구조사사업을 통해 동학농민혁명에 관한 학문적인 기반을 다지고, 더 나아가 한국사 연구에 기여하고자 합니다.

이제 곧 동학농민혁명 120주년을 바라보고 있는 시점에 이 혁명이 우리 역사에서 지니고 있는 의미를 다시금 되새겨보고자 합니다. 이를 통해 동학농민혁명이 단지 과거의 기억에 그치지 않고 현대민주사회를 살아가는 우리들에게 방향을 잡아 줄 수 있는 이정표가 되기를 기대합니다. 감사합니다.

2010년 10월 22일

동학농민혁명기념재단 이사장 김영석

새로운 자료를 통해 본 동학농민혁명의 동아시아적 의미

	개회사 :	최광식 (한국사연구회장)
09:20	기념사 :	김영석(동학농민혁명기념재단 이사장)
~09:50	자료소개 :	金文子 (나라여자대) -전봉준의 사진과 村上天真

第 1 部 사회 : 김태웅(서울대)

	1. 日本資料에 나타난 日本軍 出兵의 名分과 東學農民軍 鎮壓過程 分析 李離和(전 동학농민혁명기념재단 이사장)
10:00	2. 『均菴丈 林東豪氏 略歷』에 나타난 北接農民軍의 移動路와 海月 崔時亨 申榮祐(충북대)
~11:40	토론 : 조재곤(동국대)

第 2 部 사회 : 한철호(동국대)

	1. 雲揚號 事件부터 淸日戰爭까지 - 雲揚艦長 井上良馨의 <艦隊指揮御中> 報告書와 大本營 參謀 東條英教의 <隔壁聽談>을 소개한다-
12:40	中塚明(나라여자대)
~14:30	2. 東學農民軍을 鎮壓한 日本軍隊의 歷史史料 - 東京, 四國, 山口를 찾아서 - 井上勝生(홋카이도대) 토론 : 박맹수(원광대)

14:30 ~14:40 휴식

第 3 部 사회 : 이운상(청원대)

	1. 중국의 청사공정과 동학농민전쟁의 신사료에 관하여 - 新編《李鴻章全集》과 《袁世凱全集》을 중심으로
14:40	王曉秋(북경대)
~16:30	2. 한 청국장병의 조선출병기록 : 섭사성의 <동정일기> 金 俊(청화대) 토론 : 구선희(국사편찬위원회)

16:30 ~16:40 휴식

16:40	종합토론	좌장 : 申淳澈 (원광대)
~18:00		토론 : 발표자 토론자 전원

목 차

자료소개 : 전봉준의 사진과 村上天真

金文子(나라여자대) 13

第1部 사회 : 김태웅(서울대)

1. 日本資料에 나타난 日本軍 出兵의 名分과 東學農民軍 鎮壓過程 分析

李離和(전 동학농민혁명기념재단 이사장) 51

2. 『均菴丈 林東豪氏 略歷』에 나타난 北接農民軍의 移動路와 海月 崔時亨

申榮祐(충북대) 73

토론: 조재곤(동국대)

第2部 사회 : 한철호(동국대)

1. 雲揚號 事件부터 清日戰爭까지

- 雲揚艦長 井上良馨의 <艦隊指揮御中> 報告書와 大本營 參謀 東條英教의 <隔壁聽談>을 소개한다-

中塚明(나라여자대) 131

2. 東學農民軍을 鎮壓한 日本軍隊의 歷史史料

- 東京, 四國, 山口를 찾아서 -

井上勝生(호카이도대) 149

토론: 박맹수(원광대)

第3部 사회 : 이운상(창원대)

1. 中國의 淸사공정과 동학농민전쟁의 신사료에 관하여

- 新編《李鴻章全集》과 《袁世凱全集》을 중심으로

王曉秋(북경대) 183

2. 한 청국장병의 조선출병기록 : 섭사성의 <동정일기>

金 俊(청화대) 209

토론: 구선희(국사편찬위원회)

자료 소개

전봉준의 사진과 村上天真

金文子(나라여자대)

全瑛準の写真と村上天真

— 東学指導者を撮影した日本人写真師 —

金文子(奈良女子大学)

はじめに

写真は近代になってはじめて出現した歴史資料である。一九世紀はじめにフランスにおいて発明された。その技術が朝鮮に伝えられたのは一八六〇年代と言われている。

一八八〇年代初めには、金鏞元、池連永、黄鉄ら、中国や日本を往来しつつ写真術を習得し、ソウルに写真館を開設する朝鮮人写真師たちも登場してきた。ところが彼らの写真館は、一八八四年の甲申政変で破壊され、その後は順調に成長することができなかった。再び朝鮮人写真師がソウルで営業活動を開始するのは、一九〇七年八月の金圭鎮の天然堂写真館の開設を待たねばならない(崔仁辰『韓国写真史』、二〇〇〇年)。

この朝鮮人営業写真師不在の時代を埋めたのが、日本人写真師たちであった。彼らは開港後の朝鮮に、日本人居留民の流入とともに渡来し、写真館を設立して営業活動をはじめた。とりわけ日清戦争期には多くの従軍カメラマンが朝鮮にやって来た。

さて、東学農民戦争に関連する写真として知られているものは多くない。

一九九六年に東学革命百周年を記念して出版された『東学農民戦争史料叢書』の第三〇巻には、三点の展示会図録が収録されているが、それらを点検しても、日清戦争一般の写真を除けば、農民戦争期に撮影されたと思われる、東学の歴史資料と言うべき写真は、「押送される全瑛準將軍」・「農民軍首領の泉示」・「崔時亨」・「金開南」の四点にすぎない(注①)。

これらの写真が、他の文献史料に劣らず、歴史資料として貴重なものであることは、誰もが認めるところであろう。しかしながら、その重要性に見合った研究が行われてきたとは言いがたい。とりわけ「押送される全瑛準將軍」については、この写真が教えてくれる全瑛準將軍の風貌に基づいて、多くの絵が描かれ、銅像が建立されてきた。しかしこの写真が本当に全瑛準將軍の姿をとらえたものかどうか、誰も自信が持てなかった。

筆者は明成皇后の写真資料を調査する過程で、偶然、この写真が撮影された経緯が書かれた日本の新聞記事と、この写真が初めて印刷された雑誌を確認することができた。その成果は拙著『朝鮮王妃殺害と日本人』(高文研、二〇〇九年二月、東京)の第七章「現場からの逃走—法部顧問・星亨と、写真師・村上天真」で明らかにした。

本稿では、まず「押送される全瑛準將軍」写真について、撮影者が日本人写真師村上天真であることを明らかにしよう。これは拙著で書いたことの繰り返しになる部分が多い

が、一部その後判明したことを付け加えた。また前説を訂正した部分があることをお断りしておきたい。

次に、同じく村上天真が撮影した写真をもとにした新聞の挿絵「東学党巨魁梟首の図」について、「農民軍首領の梟示」の写真との関係と、それらが誰の首級であるかを考察してみよう。

最後に、これらの東学関連写真の撮影者村上天真が、その後、統監府御用写真師となり、伊藤博文の指示下で、大韓帝国皇室写真の撮影に関与していくことを述べよう。

全捧準を撮影する

東京で刊行されていた日刊紙『めさまし新聞』三九一号（一八九五年三月一二日）第五面に、「特派写真師 天上天真」と署名された「京城短信（三月二日発）」が掲載されている。その中に「全

捧準を撮影す」という小見出しをつけた記事がある。（図1）

村上天真が「天上天真」となり、全捧準が「全捧準」となっているが、このような誤字は当時の日本の新聞ではめずらしくない。

『めさまし新聞』は『東学農民戦争史料叢書』の日本の新聞調査対象からも外れていた。よって、「全捧準を撮影す」という記事全文を次に掲げておこう。（歴史的仮名遣いはそのままにしたが、漢字は常用漢字に改め、読点・濁点を補った。明かな誤字には初出にのみママを振った。以下の引用史料についても同様である。）

一時全羅道地方に於て猖獗を極めたる東学党中の首魁全捧(ママ)準、崔慶善、孫化仲を初め其他六名は日本兵護送し来り、本邦領事にて一応取調の上、去る廿七日法務大臣に引渡せり、首魁全捧準および崔慶善の両人は足に重傷を受け、身体自由ならざる故、領事は医を招き丁寧なる治療を為さしめ、法務衙門より廻送せし担與に乗せ護送せり、余は彼等撮影のことを予じめ領事に照会し置きたれば、直ちに行て之を捧準等に告げたるに、彼等喜悦満面に現はれ、担與の儘にて程能く写るやなど尋ね、自ら命じて傘を取放たしめたるが、撮影の間も傷所の痛む様子なりし、聞く捧準は全羅道泰仁の一農民、今年四十才、平生頗ぶる学を好み、孔孟の教へを信じ、東学徒の群に入しは今を距る三年前なりしと、彼常に云ふ、方今朝鮮人の心泛々として統一するなく、官吏横暴なるも匡正するものなし、然るに東学党の教旨は己を正して人に及ぼし、人民の協同一致を主とするにあれば、人心を正し吏幣を除くは盛んに我党の結合を計るにありと、是彼れが入党の初志なりける

要約] 東学の首魁、全琫準、崔慶善、孫化仲、その他六名は日本兵が護送して来た。日本の領事が取り調べた後、[二月] 二七日に法務大臣に引き渡された。全琫準、崔慶善の二人は足に重傷を受けていたので、領事は医師に治療させ、法務衙門より回送してきた担輿に乗せて護送した。私は前もって彼ら撮影のことを領事に照会しておいたので、すぐに行って琫準らに告げると、彼らは大変喜んで撮影に応じてくれた。聞くところによると、琫準は全羅道泰仁の一農民で、今年四〇才。学問を好み、孔孟の教えを信じ、東学に入ったのは三年前。彼は常に言う、人心を正し吏弊を除くには、我党の結合を計らねばならないと。これが彼の入党の初志である。

全琫準の写真として唯一伝わり、多数の書物に掲載されてきた、「押送される全琫準將軍」の写真は、日本領事館から法務衙門に引き渡される直前に、写真師村上天真が内田領事の許可を得て撮影されたものであった。撮影日は一八九五年二月二七日、撮影場所はソウルの日本領事館構内である。

「京城短信」末尾には、(記者曰、東学党首魁の写真二葉は次号に譲る) と付記されている。残念ながら、『めざまし新聞』三九二号以下をいくら調べても、「東学党首魁の写真」を見つけることはできない。理由は、次に述べるように、競争紙に先を越されてしまったからであろう。

獄中の全琫準を訪ねた者たち

『大阪毎日新聞』一八九五年三月一二日号第三面には、「押送される全琫準將軍」とほぼ同じ構図の挿絵が掲載され、その挿絵には、「輿ニ乗ルハ即チ全琫準」と書かれている(図2)。

また、その挿絵に添えられた三月一日付け「蘇嵐生」と署名された「朝鮮通信」中にある「全捧(ママ)準を見る」という記事には、次のように書かれている。

一昨日、写真師村上(ママ)真氏及び天佑侠の巨魁と噂されたる田中次(ママ)郎氏と余と三人、領事館内の鉄窓に呻吟する東学党の巨魁全捧準を見たり (中略) 彼銃劍の爲めに足を包帯し、顔色手足蒼白く氣息奄々として頗る危篤の病状なるも、其気力の中々剛健の様見也、年齒三十七八、其容貌は尋常に異ならずと雖も、疎髯ありて眼光鋭く、眉宇の上に幾干となく折重なる一種の小皺ありて、額を横断したるは殆ど他に其類を見ず、彼は喜んで写真を撮り、夫より直に輿に乗り、他の共犯二名と共に法務衙門

に引渡さるゝ為め領事館を立出でたり、ア、可惜名士よ

二月二七日に日本領事館から法務衙門に引き渡される直前の全琫準を領事館の獄舎に訪ねたのは、村上天真だけではなかった。『大阪毎日新聞』に「朝鮮通信」を書き送っていた新聞記者「蘇嵐生」と「天佑侠の巨魁と噂されたる田中次郎」なる人物もいた。

「蘇嵐生」とは、大阪毎日新聞社から一八九五年一月にソウルに派遣され、「朝鮮通信」を担当することになった中島司馬之助のことである（『毎日新聞百年史』巻末年表、一九七二年）。中島はその後長く大阪毎日新聞社京城支局にとどまり、一九〇七年には新入りの同僚橋崎観一の著書『韓国丁未政変史』（日韓書房、一九〇七年一二月）に「中島明浦」名で跋文を書いた。その中で中島は、「余筆を載せて漢城に在ること爰に十四年」（四は余の誤植であろう）と書いている。

また、「天佑侠の巨魁と噂されたる田中次郎氏」が、「田中侍郎」の誤りであることは容易に推測されよう。記事中の（中略）とした部分には、田中と全が昨年三月に全羅道の東学根拠地において国事を談じた仲であったので、田中が全に自分の顔を覚えているかと聞いたところ、全が「アー田中侍郎君か」と言ったが、その途端に警吏に引き裂かれてしまったと書かれている。

「天佑侠」と名乗る日本人グループが、東学本部で党首全琫準と会い、軍議に参加してともに朝鮮官兵と戦ったという回想記を残しているが、とてもそのまま信用できる内容ではない。

この時も、全琫準が本当に「田中侍郎君か」と言ったかどうか疑わしい。声をかけられた全琫準が何か言いかけた途端、警吏に遮られたというのが実情で、中島司馬之助が脚色して記事にしたのではないだろうか。

『めさまし新聞』と『大阪毎日新聞』

さて、村上は「全琫準を撮影す」という記事を書き、写真二葉を添えて三月二日にめさまし新聞社（東京市京橋区山下町拾八番地）宛てに送った。写真の現像や焼き増しにも時間がかかったであろう。

では、中島の方はどうしたか。筆者は拙著において、おそらく中島自身が現場で描いたスケッチを添えて、「全琫準を見る」という記事を三月一日に大阪毎日新聞社（大阪市東区大川町五拾五番屋敷）に送った、と書いた。

しかし『大阪毎日新聞』に掲載された挿絵（図2）は、素人が描いたものとは思えない。中島の他の記事から見て、中島が特別にスケッチの才能をもった記者であったとは思

えない。しかも輿を担いでいる人夫の服の皺などから、このスケッチは写真を見て描いたと考えられる。さらに、二月二七日の記事を三月一日に送ったというのは、写真が出来上がるのを待っていたと考えた方が自然である。以上の理由から中島は村上から写真を得て、記事といっしょに送ったと訂正したい。

村上がめざまし新聞社に記事と写真を送るのが中島より一日遅れたのは、スクープ写真を何枚も焼き増しして販売するという本業に時間を取られていたからであろう。

さて、当時、新聞に写真を印刷することはまだできなかった。そこで、中島が大阪毎日新聞社に送った全琫準の写真は、画家の手を経て絵におこされ、さらに彫刻家の手を経て木版がつくられ、三月一二日の『大阪毎日新聞』の紙面を飾った。

全琫準の容姿を見せるというスクープは『大阪毎日新聞』がとったのである。同日、「東学党首魁の写真二葉は次号に譲る」と予告した『めざまし新聞』の方は、写真を絵におこして彫刻するという作業を中止したと考えたい。

『写真画報』に載った全琫準の写真

ところが、二ヶ月後の五月一〇日に発売された『写真画報』第一四巻(図3)には、輿に乗せられて護送される全琫準の写真が、新聞ではまだなしえない最新の写真製版技術を使って印刷され、「東学党首領全禄斗及朝鮮巡査」(図4)として掲載された。別に「東学党の巨魁」という解説文もついているが、どこにも撮影者村上天真の名前はない。

『写真画報』とは、東京の出版社春陽堂が一八九四年一〇月に創刊した『戦国写真画報』を改題したものである。日清休戦条約調印後、第一二巻(一八九五年四月)より誌名から「戦国」が外され、第二〇巻(同年八月)まで刊行された。同誌第九巻(同年二月)に、いわゆる「閔妃の写真」が「朝鮮宮女」として掲載されていることは拙著で紹介した。

一八九五年二月二七日に、ソウルの日本領事館から法務衙門に移送される直前に撮影された全琫準の写真は、おそらく撮影者村上天真自身によって春陽堂に販売されたのであろう。それは最新の技術で印刷され、『写真画報』第一四巻に掲載されて広く流布した。以来今日に至るまで、転写、トリミングが重ねられ、全琫準と言えば誰もが思い浮かべる写真となっているが、出典が『写真画報』であることも、撮影者が村上天真であることも語られることはなかった。

『朝日新聞』の記事

全琫準の写真撮影に関しては、朝日新聞特派員青山好恵による記事もあることを付け加えておこう。東学党大巨魁全祿斗は、尚ほ日本領事館に拘置し病を養はしめ居りしが、最早快復の見込十分あるに付き、今日法務衙門に引渡す筈なるが、審判一節は我内田京城領事も陪審する筈なりと云ふ、已に法務衙門の審判に附せらるる上は、死刑は免る可らざるべし、就ては責めては其容貌を撮影し与へたしとの某写真師の乞に依り撮影を許されたり、人あり私かに全祿斗に説くに、日本公使に情願して命乞ひをなさんを以てす、彼憤然聴かずして曰く、此期に及んで如何ぞ左る卑劣心をか有すべき、吾は死を俟つこと久しと

右は、ソウルの青山好恵が一八九五年二月二七日付けで送った記事を、『大阪朝日新聞』では三月九日号の「韓山風雲録」中に「全祿斗」という小見出しをつけて、また『東京朝日新聞』では三月一二日号の「朝鮮時事（二月二七日）」中に「東学党大巨魁」という小見出しをつけて掲載されている。

首級を撮影する

さて、時間を少し巻き戻すことになるが、『めざまし新聞』三六五号（一八九五年二月八日）第五面に、「在京城鑄洞 村上天真」という署名入り記事「京城特信」が掲載され、それには「東学党巨

魁梟首の図（社友村上天真氏寄贈）」（図5）が添えられている。

この記事は、ソウルの写真師村上天真が東京のめざまし新聞社宛に出した最初の手紙をそのまま掲載したもののようである。時候の挨拶から始まり、日本出発の際に受けた配慮に礼を述べ、到着の報告が遅れたことを詫び、次いで「東学党領袖の梟首」の写真一枚とこれを「撮影したる大略」を報告するので、新聞の余白に掲載していただけたら幸いです、と書かれている。

「社友」とされているが、写真師村上天真は、あくまで独立した経営主体であり、おそらく金銭を得て、めざまし新聞社に写真を提供する関係であったと推定される。村上から送られてきた写真は、彫刻家の手を経て木版画「東学党巨魁梟首の図」となって紙上に掲載された。

村上が書く「撮影したる大略」は、左記のとおりである。「京城特信」の内「東学党領袖の梟首」という小見出しをつけた部分のみ、その全文を左記に掲げておこう。

東学党領袖の梟首 予て噂有之候、東学党領袖崔在浩・安教善の兩名は、去十九日法務衙門に於て斬罪の刑に処せられ、二十日より三日間、照義門外通行最も頻繁なる広馬(ママ)場の中央に、五尺余の木三本を交叉し、其上に梟首せられ候、小生が此事を聞知したるは二十三日の午前にして、即三日間の日限は既に経過致候へ共、前夜よりの大雪にて、万一取払無之、其儘内棄可有之かと存じ、写真機を携へ倉皇現場へ馳付候処、最早首級は取下し、筵にて包み縄を纏ひあり候へ共、流石は放漫なる朝鮮人のことゝて、番人とて無之、其儘雪中に打棄て有之候、小生も空手に帰るは誠に遺憾千万の次第なれば、現場へ居合せたる五、六人の韓人に向ひ、昨日の如く木を交叉して首級を載せ呉なば金銭を与へんと申候へ共、己れ一番金儲せんと奮発するものも無之、皆戦慄せるのみにて到底埒明不申候、依て幸に番人なきを以て、小生自ら筵包を解き、三本の木を交叉して、崔の首を上、安の首を下して如図撮影致候、現場には別に梟首の旨意を示したるもの無之、唯巾一寸位の紙切に釘打曲たる如き筆法にて各自の名を記し、其頭髮に結付有之候、斬首の際抵抗したるものか、又故意なるかは存じ不申候へ共、崔の頸辺には数ヶ所の刀痕有之候、或る朝鮮通に尋ね候処、朝鮮は死刑を行ふには未だ錆だらけの鈍刀を用ゆる故、大概十数回に非ざれば身首所を異にするに至らざる由、実に聞く毎に膚に粟を生じ申候、崔安の容貌は確かに党中の領袖たる価値有之様被見受候

東学指導者崔在浩、安教善の兩名は、一八九五年一月一九日に法務衙門にて斬罪に処せられ、その首級が二〇日より三日間、照義門(南大門と西大門の間にある城門)外の広場に曝された。村上がそのことを知ったのは一月二三日の午前中であつた。三日間の日限は過ぎていたが、村上は写真機を携えて現場へ馳せつけた。首級はすでに取り下ろされて、筵に包まれて縄をかけられていた。村上は現場に居合わせた朝鮮人五、六人に昨日のように木を交叉して首をかけてくれたら金を与えると誘ったが、皆戦慄するのみでやろうとしない。しかたがないから自分で筵を解き、三本の木を交叉して崔の首を上、安の首を下に下げて撮影した、という。

従つて、村上が撮影したのは、斬刑に処せられた崔在浩と安教善の首級が、照義門外の広場に一月二〇日から二二日にかけて曝されていた、そのものではない。三日間が過ぎて、一旦降ろされ、筵に包んで縄をかけてあつたものを、村上がもう一度取り出して木を組み、「昨日の如く」兩名の首をぶら下げて撮影したものである。

「崔・安の容貌は、確かに党中の領袖となる価値が有る様に見受けられた。」というのが、村上天眞の感想であつた。

首級を見る

村上が「崔の首を上、安の首を下」というように、首級の曝され方を知っていたのは、それを実見した人間から聞いたからであろう。実見した人間の残した記録は、今のところ二種類確認できる。ひとつは『大阪毎日新聞』の記事であり、もうひとつは英国王立地理学協会員、バード・ビショップ(Isabella L. Bird Bishop)の著書『コリアとその隣邦』(Korea & Her Neighbours)である。先ず、前者の方から見ていこう。

『大阪毎日新聞』一八九五年二月一日号第二面に、「巨魁の首実見」という小見出しを付けた、次のような記事がある。

東学党の巨魁崔在浩、安教善の二人は、一昨々日斬罪に処せられ、三日間梟首の旨聞えたるを以て、本日梟首の実見を為したり、梟首の場所は、西大門と南大門の中間に在る、昭義門外磐石坊と云ふ処にして、人家稠密通行頻繁なる市街の中央に、番人もなく榜示もなく、所謂遣りっ放しにて、例の三本の小さな木枝を三叉に結び、頭髪を苧縄にて括り、之を下げたり (中略) 安教善は凡庸の相を示すも、崔在浩は隆準にして、眉宇昂り、眠るが如き相貌の外に、怨を九天に訴ふるの容を顕はしたり、我邦の刑法学者之を見ば、善隣の友邦に尚此の惨刑酷罰あるを痛嘆すべし

この記事は『東学農民戦争史料叢書』第二三巻に収録されているが、これが「一月二日 京城 蘇嵐生」という署名入りの「朝鮮通信」の一部であることは記載されていない。「蘇嵐生」が大阪毎日新聞特派員中島司馬之助の筆名であること、中島司馬之助はこのひと月余り後に、村上天真とともに日本領事館の獄舎に全捧準を訪ねることは前述した。

次に後者、ビショップの言葉を聞いてみよう。

The Tong-haks, who had respectfully thrown off allegiance to the King on the ground that he was in the hands of foreigners, and had appointed another sovereign, had been vanquished early in January, and their king's head had been sent to Seoul by a loyal governor. There I saw it in the busiest part of the Peking Road, a bustling market outside the "little West Gate" hanging from a rude arrangement of three sticks like a campkettle stand, with another head below it. Both faces wore a calm, almost dignified, expression.

(*korea & her neighbours* vol.2, p.54, 1898, London)

ビショップは西小門外のにぎやかな市場に東学の首領の首がさらされているのを見た、と書いている。その首は三本の棒をキャンプのやかんかけのようにぞんざいに組み合わせたものに、もうひとつの首とともにつり下げられていた、という。

そして不思議なことに、この文章が書かれている頁には、『めざまし新聞』の「東学党巨魁梟首の図」と全く同じと言ってよい図柄の挿絵「TONG-HAK HEADS」(図6)が掲載されている。これはどういうことであろうか。

ビショップは首を見た日時については書いていない。しかし、その三日後、朝鮮の元日の静けさの中を友人とともに南大門外から東大門外を馬に乗ってたどった、と書いている。一八九五年の陰暦の一月一日は陽歴の一月二五日にあたる。ビショップが「TONG-HAK HEADS」を見たのは、一月二二日であったことがわかる。

ビショップは、一八九四年一月から始めた朝鮮調査に、重量一六ポンド(七・三キログラム)の三脚カメラと、四ポンド(一・八キログラム)のハンドカメラを持ち込み、朝鮮各地を撮影しているが、このときは何らかの事情で自ら撮影することができなかったであろう。そこで、村上天真から写真を得て、自著の図版に使用したのではないだろうか。

『コリアとその隣邦』には、第一巻に二三種、第二巻に「TONG-HAK HEADS」を含む一九種の図版が収録されている。ビショップはこれらの図版について、「著者による序言」の中で、「三つの例外を除いて、私自身が撮影した写真の複製である。」と、明確に述べている。「TONG-HAK HEADS」が三つの例外中の一点であったと考えられる。

実際の現場を見ているビショップが、村上の写真を採用したということは、村上の復元作業がかなり成功していたことを証明する。さらに想像を逞しくすれば、ビショップは撮り損ねた「TONG-HAK HEADS」の撮影を、場所や状況を詳しく伝えた上で、村上天真に依頼したのではないだろうか。

なお、ビショップは、「両者とも穏やかで、威厳があると言ってもよい表情をしていた。」と書いている。これは先に紹介した村上天真の感想とあわせ、斬罪に処せられた崔在浩、安教善の顔が、見るものの心を打つほどの威厳を備えていた事実として記憶されるべきであろう。

二種類の首級写真

『めざまし新聞』の「東学党巨魁梟首の図」と『コリアとその隣邦』の「TONG-HAK HEADS」の共通の典拠となったと考えられる写真が、辛基秀著『韓国併合と独立運動』(労働経済社、一九九五年、東京)に掲載されている。「斬られた東学党「首領」の首」(図7)というタイトルが付けられ、出典が「東本願寺大谷家旧蔵(金龍斗氏所蔵)」と

されている。これこそ村上天真が撮影した写真に違いない。写っているのは、崔在浩と安教善の首級である。なお、故金龍斗氏所蔵の当該写真の所在については未調査である。

さて、『韓国併合と独立運動』に紹介された、村上天真撮影の「斬られた東学党「首領」の首」(図7)と、『東学農民戦争史料叢書』第三〇巻に収録された「農民軍首領の梟示」、その原典である『併合記念朝鮮写真帖』の「東学党首領の梟首」(図8)を比べると、明らかな相違点がある。前者においては、三本の木の交叉点をはさんで、上下に一名ずつの首級がつるされているのに比べ、後者においては、両者とも交叉点の下につるされている。

しかし上にある崔在浩と思われる人物の容貌は、両者とも非常によく似ている。「崔在浩は隆準にして、眉宇昂り、眠るが如き相貌の外に、怨を九天に訴ふるの容を顯はしたり」(崔在浩は鼻が高く、眉のあたりは盛り上がり、眠っているかのようにでありながら、怨みを全宇宙に訴えているようにも見える)という蘇嵐生・中島司馬之助の描写がどちらにもよくあてはまる。

「農民軍首領の梟示」写真について、「東学革命一〇〇周年記念特別展示会」図録においては、「今まで写真の中の主人公を全琫準と表記してきた(黄土岬記念館掲示写真)。しかし諸状況から見て少なくとも全琫準でないことは明らかになった」としている。また、「東学農民戦争民俗展」図録では、「この写真は現在真否の論難が多いが、一九一〇年(明治四三)日本新半島社から刊行された『併合記念朝鮮写真帖』に「農民軍首領の梟示」というタイトルで掲載されているところから見て金開南の梟示に違いない」と書かれている。

前者の全琫準の写真ではないというのは正しいが、後者の「金開南の梟示に違いない」という根拠は全く示されていない。

今のところ、図8の写真については、村上天真より早く、一八九五年一月二〇日から二二日の間に、照義門外に梟示されていた崔在浩、安教善の両名の首級を撮影した人間がいた、と考えるのが妥当ではないだろうか。

写真師村上天真

さて、移送される全琫準、梟示された崔在浩と安教善を撮影した日本人写真師村上天真とは、いったい何者であろうか。

筆者はかつて、村上天真が撮影した明成皇后の写真が暗殺者の手に渡っていたという風説を追及してみたが、確証は得られなかった。しかし、暗殺者の手に王妃の写真があったこと、村上天真が星亨とともに事件直後に日本の軍用船に乗って帰国している事実を明

らかにした（前掲『朝鮮王妃殺害と日本人』三七頁、三三〇頁）。

王妃事件における村上天真のはたした役割については、依然として謎に包まれたままである。

ところが最近、大韓帝国期の皇室写真のいくつかについて、撮影者が村上天真であることが確認されつつある。それは、二〇〇九年三月から六月にかけてソウルで開催された「大韓帝国皇室写真展」で明らかにされた。

一九〇〇年頃の撮影と推定される、洋式軍服を着用した高宗と純宗の写真が、「村上天真」というロゴが刻まれた台紙に貼られた形で発見された。

また、「大正天皇御渡韓御記念写真」と題された写真の裏面に、「当時御用命を拝した村上写真館主謹話」として村上天真の回顧談を掲載した著作の発見によって、村上天真が朝鮮統監伊藤博文から直々に依頼を受け、日本の皇太子（後の大正天皇）の韓国訪問時（一九〇七年一〇月）の写真を撮影していたことも明らかになった。

ここでは、一九〇九年の純宗皇帝の巡幸写真の内、最もよく知られている写真、開城満月台における純宗一行をとらえた写真（図9）もまた村上天真が撮影していることを述べておこう。

この写真は、「北韓御巡狩開城満月台行幸」と題し、統監府が一九一〇年七月に非売品として刊行した『韓国写真帖』に収録された。同書は、同年九月に「元統監府御編纂『日韓合併記念 大日本帝国朝鮮写真帖』」と改題して小川一真出版部から出版された。さらに「北韓御巡狩開城満月台行幸」写真は、同年一二月に新半島社から発売された『併合記念朝鮮写真帖』に「開城満月台へ行啓」と改題して収録され、広く流布した。この改題の意図が、旧大韓帝国皇帝純宗から天皇専用の用語「行幸」を奪うところにあったことは明らかであろう。

高麗王朝の廃墟に伊藤博文と並んで歩く大韓帝国最後の皇帝純宗の姿が、「行幸」という言葉さえ奪われて、滅亡した朝鮮の象徴として、人々の脳裏に記憶されたことであろう。

さて、韓国写真会の会誌として、織居商会写真部が一九〇九年一〇月にソウルで発行した『印画集』第二年第八月号の巻頭に、「特別会員村上天真氏撮影」として掲載されているのが、「北韓行啓（開城満月台）」（図10）である。これは、「北韓御巡狩開城満月台行幸」が、数十人に及ぶ随行者全体をとらえた大判サイズの写真(18×26cm)であるのに対し、一部をトリミングして小形判(10×15cm)にしたものである。統監府編『韓国写真帖』が出る前に、村上自身によって「北韓行啓」と命名されていたことは、注目に値する。

韓国写真会は、写真材料商である織居商会の支援を受け、写真愛好者の会として一九〇八年五月三日にソウルで結成された。毎月一回作品を持ち寄って品評会を行い、優秀作品をコロタイプ印刷した会誌『印画集』を会員に配布した。結成時の会員数は八二名、内三

名の名誉会員（華族）、村上天真を含む四名の特別会員（写真業者）、その他が通常会員となっている。数名の地方居住者、外国人を含むが、ほぼ全員がソウル居住の日本人である（『印画集』第一号所収、会則、会員名簿参照）。併合後、鶏林写真会と改称した。

『印画集』第二年第八月号の「記事」によると、[一九〇九年]八月一日午後八時に南山町京城ホテルにおいて第一六回例会並びに印画品評会が開かれた。この日は織居商会写真部主催の納涼会を兼ねていたので、特別会員村上天真らの出席があった。村上は出品印画数葉に対する批評をおこない、当選者に寄贈の物品を贈与した、という。

当選者とは、同号巻頭の村上の作品に続けて掲載されている第一等から第一〇等までの作品の撮影者のことであり、彼らに村上から贈られた物品とは、寄贈印画として『印画集』に載せられた「北韓行啓（開城満月台）」であったと見て間違いあるまい。

皇太子嘉仁の韓国訪問に引き続き、純宗の巡幸写真もまた村上天真が撮影したことは、村上天真が統監府御用写真師の地位を確立していたことを示している。

おわりに

甲申政変以降、朝鮮人写真師不在の時代に多数の日本人写真師が朝鮮で開業した。その中でも、村上天真（本名幸次郎）は、後に統監府御用写真師の地位に昇り、日本帝国主義の朝鮮侵略に最も寄与した写真師であった。

本稿では、村上天真の朝鮮における活動の初期に、東学指導者の写真撮影があったことを明らかにした。村上天真によって撮影された東学指導者の写真、また大韓帝国期の皇室写真は、撮影された意図を離れ、今日では韓国近代史上の貴重な歴史資料であると言える。

「東学革命一〇〇周年記念特別展示会」図録（全州独立記念館、一九九四）

「東学革命資料・写真展」図録（東学革命記念館、一九九六）

「東学農民戦争民俗展」図録（生活史博物館、一九九四）

『めさまし新聞』は「めざまし新聞」と読むが、当時の日本語表記では濁点はふられなかった。よって新聞名としては当時の表記どおり『めさまし新聞』とする。

イ・ギョンミン「植民地朝鮮の視覚的再現—皇室写真と表象の政治学」、『大韓帝国皇室写真展』（ハンミ写真美術館、二〇〇九・三）所収。同氏『帝国のレンズ』（二〇一〇・三）に再録。

萩本茂編『朝鮮の都市—京城と仁川』（大陸情報社、一九二九年）。

一九〇九年一月から二月にかけておこなわれた純宗の「西道巡幸」については、『統監府文書9』（国史編纂委員会、一九九九年）収録の「韓皇帝陛下西北巡幸計画」によって、その日程、随員、宿割等が知られる。同文書によると、一行は一月二七日午前八時に南大門駅から宮廷列車でソウルを立ち、二月三日午後三時に同所に帰還した。その間、一月二七日と三十一日、二月一日に平壤、二八日と三〇日に新義州、二九日に義州、二月二日に開城に宿泊している。宮廷列車陪乗者名簿中に「平壤からの乗車」として「活動写真師三名」と「写真師二名」の文言があり、宿割り表の内、平壤分には「写真師五」、新義州分には「活動写真師五人、村上写真店員二人」の文言がある。

『印画集』は、故四方博京城帝国大学教授の旧蔵書が、東京経済大学附属図書館に「四方文庫」として一六冊（一九〇八～一九一一年）所蔵されている。また同大学所蔵の「桜井文庫」中にも、「四方文庫」に欠落の多い一九〇九年分一二冊の所蔵がある。

図1 「朝鮮軍を擁護す」 「めざまし新聞」 1898年3月12日第5面



図2 「金車」を題し「大坂毎日新聞」1895年3月12日第3面

金車

此の金車は、大坂毎日新聞の記者が、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。この金車は、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。この金車は、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。

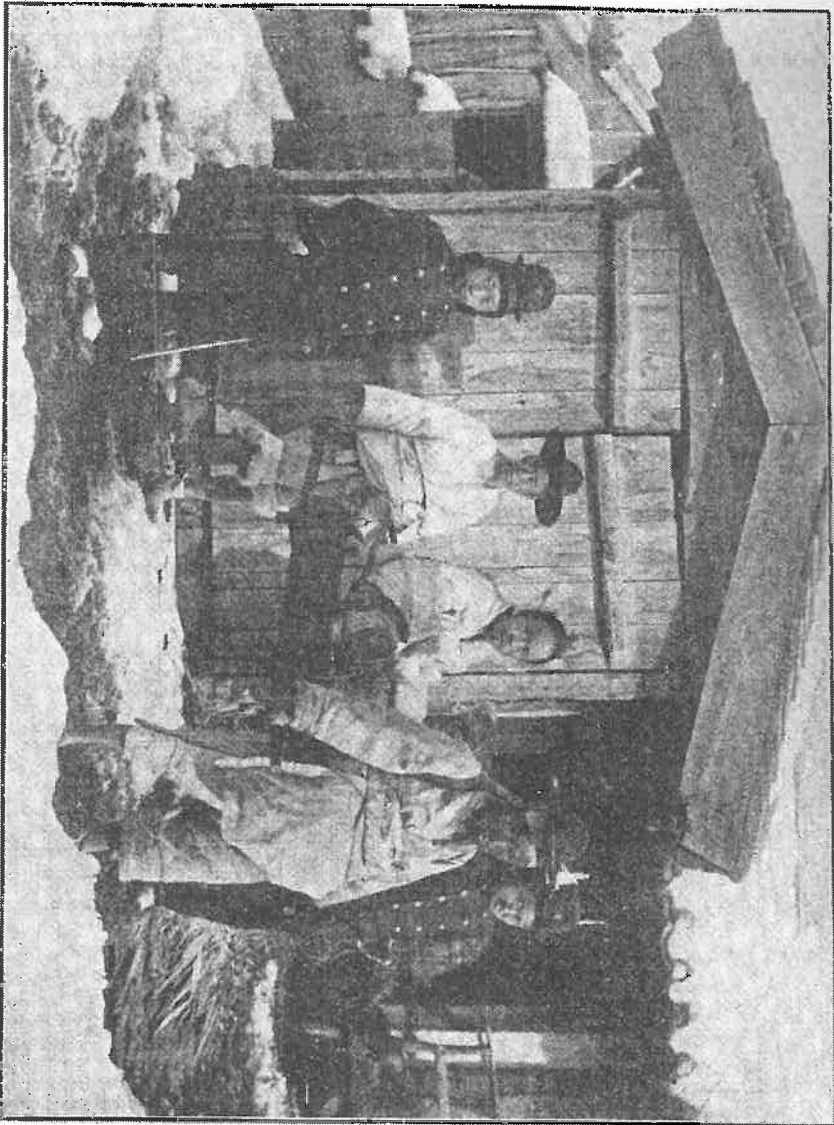
大坂毎日新聞の記者が、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。この金車は、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。この金車は、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。

大坂毎日新聞の記者が、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。この金車は、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。この金車は、大坂の街を歩いているとき、見かけたものを書いたものである。



圖 3 『宣東畫報』 第 14 卷 表紙

图4 | 東字老翁全壽斗及洞際之木 (『浮城圖説』第14卷)



GEORGE LOUIE TOO, CHIEF OF THE TSONG HUI PARTY AND THE FOREIGNERS' COMRA. 清室詳明及斗壽全翁肖像東東

圖5 『めさまし新聞』1895年2月8日号

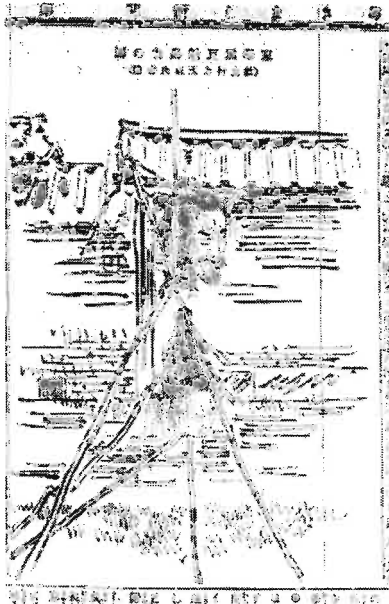


圖7 『韓國併合と獨立運動』11頁

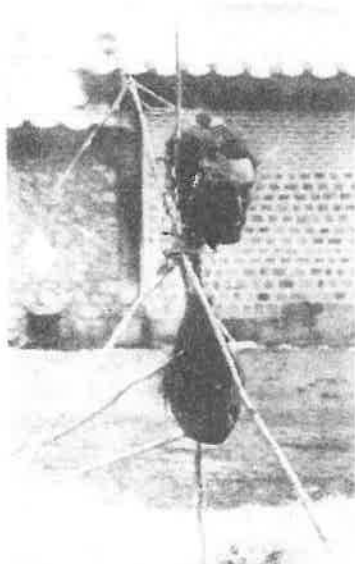


圖7 朝鮮の大統領元「曹錕」の首

圖6 "Korea & Her Neighbours"

31 A TRANSITION STAGE 312

had been sent to Seoul by a loyal governor. There I saw it in the busiest part of the Peking Road, a bustling market outside the "Little West Gate" hanging from a rude arrangement of three sticks like a camp-kettle stand, with another head below it. Both faces wore a calm, almost dignified, expression. Not far off two more heads had been exposed in a sturdier frame, but it had given way, and they lay in the dust of the roadway, much gnawed by dogs at the back. The last agony was witnessed on their faces. A turnip lay beside them, and some small children cut pieces from it and presented them mockingly to the blackened mouths. This brutalising spectacle had existed for a week.



LONG-HEAD ER. DR.

圖8 『併合記念朝鮮写真帖』



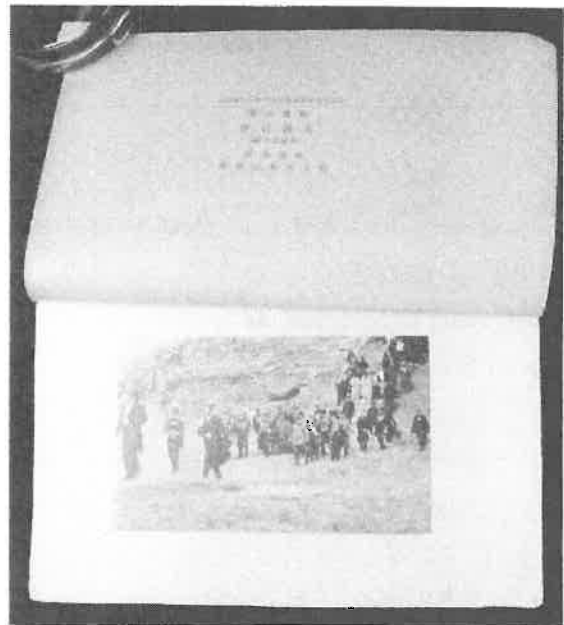
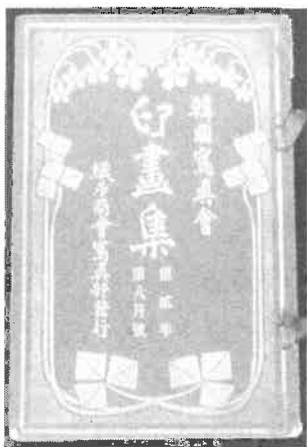
朝鮮大總統元「曹錕」の首

圖9 「北韓遊巡狩開城滿月台行李」(統監府『韓國寫真帖』)



北韓遊巡狩開城滿月台行李
Photograph taken by the Japanese Army in 1905

圖10 「北韓行啓(開城滿月台) 特別會員村上天真氏攝影」



전봉준의 사진과 村上天眞

金文子(나라여자대)

번역 : 박맹수(원광대)

1. 서론
2. 전봉준을 촬영하다
3. 옥중의 전봉준을 방문한 자들
4. 『메사마시 신문』과 『오사카매일신문』
5. 『사진화보』에 실린 전봉준의 사진
6. 『아사히신문』의 기사
7. 수급(首級)을 촬영하다
8. 수급을 보다
9. 두 종류의 수급 사진
10. 사진사 무라카미 텐신
11. 결론

1. 서론

사진은 근대에 들어와 처음으로 출현한 역사자료이다. 19세기 초에 프랑스에서 발명되었다. 그 기술이 조선(朝鮮)에 전해진 것은 1860년대로 알려져 있다. 1880년대 초에는 김용원(金鏞元), 지운영(池運永), 황철(黃鐵) 등 중국과 일본을 왕래하면서 사진술을 습득하여 서울에 사진관을 개설하는 조선인 사진사들도 등장했다. 그렇지만 그들의 사진관은 1884년 갑신정변으로 파괴되어 그 뒤로는 순조롭게 성장할 수가 없었다. 조선인 사진사들이 다시 서울에서 영업활동을 개시한 것은 1907년 8월 김규진(金圭鎭)의 천연당(天然堂) 사진관 개설을 기다리지 않으면 안 되었다.¹⁾

조선인 영업사진사 부재 시대를 메운 것이 일본인 사진사들이었다. 그들은 개항 후 조선에서 일본인 거류민의 유입과 함께 도래하여 사진관을 설립하여 영업활동을 시작했다. 그 중에서도 특히 청일전쟁기에는 많은 중군 카메라맨이 조선으로 몰려왔다.

1) 최인진, 『한국사진사』, 2000년.

그러나 동학농민전쟁에 관련된 사진으로 알려진 것은 많지 않다. 동학혁명 백주년을 기념하여 1996년에 출판된 『동학농민전쟁사료총서』 제30권 속에는 3점의 전시회 도록이 수록되어 있는데, 그것들을 점검해 봐도 청일전쟁 일반의 사진을 제외하면 농민전쟁기에 촬영된 것으로 짐작되는 동학의 역사자료라 할 만한 사진은 「압송당하는 전봉준장군」, 「농민군 수령의 효시(梟示)」, 「최시형」, 「김개남」 등 4점에 지나지 않는다.²⁾

이들 사진이 다른 문헌사료에 뒤떨어지지 않는 역사자료로써 귀중한 것이라는 사실은 모두가 인정할 것이다. 그러나 그 중요성에 상응하는 연구가 이루어져 왔다고는 말하기 어렵다. 특히 「압송당하는 전봉준 장군」에 대해서는 이 사진이 가르쳐 주는 전봉준장군의 풍모에 근거하여 많은 그림이 그려지고 동상 등이 건립되어 왔다. 그러나 이 사진이 정말로 전봉준장군의 모습을 촬영한 것인지 아닌지는 그 누구도 자신할 수 없었다.

필자는 명성황후 사진자료를 조사하는 과정에서 우연히 이 사진이 촬영된 경위가 쓰여진 일본신문기사와, 이 사진이 처음으로 인쇄된 잡지를 확인할 수 있었다. 그 성과는 줄저 『조선왕비살해와 일본인』(고분켄 = 高文研, 2009년 2월, 도쿄)의 제Ⅶ장 「현장으로부터의 도주 - 범부고문 호시 토오루 = 星亨와 사진사 무라카미 텐신」에서 밝혔다.

본고(本稿)에서는 먼저 「압송당하는 전봉준장군」 사진에 대해 촬영자가 일본인 사진사 무라카미 텐신(村上天真)이라는 사실을 밝히고자 한다. 이 부분은 줄저에서 쓴 내용을 되풀이 하는 부분이 많아지긴 하지만 일부 내용은 줄저 간행 뒤에 판명된 사실을 추가했다. 또한 전설(前說)을 정정한 부분도 있다는 점을 미리 밝혀둔다.

다음으로 무라카미 텐신이 촬영한 사진을 토대로 한 신문의 삽화 「동학당 거괴 효수도」에 대해 「농민군 수령의 효시」라는 사진과의 관계와 함께 효수된 인물이 누구의 수급인가에 대해 고찰해 보고자 한다.

끝으로 이들 동학관련 사진의 촬영자 무라카미 텐신이 동학농민전쟁 종결 이후 통감부 어용사진사가 되어 이토 히로부미의 지시 아래 대한제국 황실 사진 촬영에 관여하게 되는 경위에 대해 설명하고자 한다.

2. 전봉준을 촬영하다

도쿄에서 간행되고 있던 『메사마시신문』 391호(1895년 3월 12일) 제5면에 ‘특파사진사 천상천진(天上天真)’이라고 서명된 「경성단신(京城短信)」(3월 2일발)이 게재되어 있다. 그 속에 「전봉준을 촬영하다」라는 소제목이 붙은 기사가 있다.(도-1 참조)³⁾

2) 『동학혁명 100주년 기념 특별전시회 도록』(전주, 동학혁명 100주년기념 특별전 준비위원회, 1994).

『동학혁명자료 · 사진전 도록』(전주, 동학혁명기념관, 1996).

『동학농민전쟁민속전 도록』(짚풀생활사박물관, 1994).

3) 『메사마시신문』은 ‘메자마시신문’이라고 읽지만 당시 일본어 표기에서는 탁점을 달지 않았다. 그래서 신문

무라카미 텐신(村上天真)이 천상천진(天上天真)으로 되어 있고, 전봉준(全捧準)이 ‘全捧準’으로 되어 있으나 이 같은 오자(誤字)는 당시 일본 신문에서는 드물지 않았다.

『메사마시신문』은 『동학농민전쟁사료총서』의 일본신문 조사대상으로부터도 벗어나 있었다. 따라서 「전봉준을 촬영하다」라는 기사 전문을 다음에 소개해둔다.(역사적 가나 사용은 그대로 두었으나 한자는 상용한자로 고치고, 구두점과 탁점 = 濁點을 보충했다. 명백한 오자에 대해서는 처음 나올 때에만 원문 그대로라고 표기했다. 이하 모든 인용사료에 대해서도 동일하게 표기한다.)

일시 전라도지방에서 몹시 창궐했던 동학당(東學黨) 중의 수괴 전봉준(全捧準), 최경선(崔慶善), 손화중(孫化仲)을 비롯한, 그 외 6명은 일본병이 호송해 와서 우리나라 영사(일본영사 : 주)에게 일단 취조를 받은 다음, 지난 27일 법무대신에게 인도되었다. 수괴 전봉준 및 최경선 두 사람은 발에 중상을 입어 신체가 자유롭지 못했기 때문에 영사는 의사를 초치하여 정중하게 치료하도록 했으며, 법무아문으로부터 회송해 온 들 것에 태워 호송했다.

나는 미리 그들에 대한 촬영 건을 미리 영사에게 조회(照會)를 해 두었기 때문에, 즉각 달려가서 그 같은 사실을 봉준 등에게 알렸더니, 그들 얼굴 가득히 희열을 보이면서 들 것 그대로 찍겠는가 라고 물으면서 스스로 명을 내려 일산을 치우게 했다. 그러나 촬영하는 동안에도 다친 곳이 아픈 모습이었다. 듣건대 봉준은 전라도 태인의 일개 농민으로 금년 40세로 평소에 대단히 학문을 좋아하고 공맹(孔孟)의 가르침을 믿었으며, 동학도의 무리에 들어간 것은 지금으로부터 3년 전이었다고 한다.

그는 늘 말하기를, 지금 조선 사람들의 마음은 물 위에 뜬 것 같아 통일되지 못하고 관리들도 회포하기 그지 없어 광정(匡正)되지 못하고 있는데, 동학당의 교지(教旨)는 자기를 바르게 하여 다른 사람에게 비치며, 인민의 협동일치(協同一致)를 주(主)로 하므로 인심을 바꾸고 이폐(吏弊)를 제거하려면 아당(我黨 : 동학당)의 결함을 도모하지 않으면 안 된다고 하였으니, 이것이 그가 동학당에 입당한 초지(初志)이다. (요약) 동학의 수괴 전봉준, 최경선, 손화중 그 외 6명은 일본병이 호송해 왔다. 일본 영사가 취조한 다음 (2월) 27일에 법무대신에게 인도되었다. 전봉준, 최경선 두 사람은 발에 중상을 입고 있었기 때문에 영사는 의사에게 치료하도록 하여 법무아문으로부터 회송해 온 들 것에 태워 호송했다. 나(무라카미 텐신 : 주)는 미리 그들에 대한 촬영 건을 영사에게 조회해 두었기 때문에 즉각 달려가서 그 같은 사실을 봉준 등에게 알렸더니, 그들은 대단히 기뻐하면서 촬영에 응해 주었다. 들을 바에 따르면, 봉준은 전라도 태인의 일개 농민으로 금년 40세, 학문을 좋아하고 공맹의 가

이름은 당시 표기대로 『메사마시신문』으로 표기한다.

르침을 믿었으며, 동학에 들어간 것은 3년 전, 그는 늘 말하기를, 인심을 바꾸고 이계를 제거하기 위해서는 아당(我黨 동학당 ; 주)의 결합을 도모하지 않으면 안된다고 하였다고 한다. 바로 이것이 그가 동학에 입당한 초지(初志)였다.

전봉준의 사진으로써 유일하게 전해져 다수의 책에 게재되어 온 「압송당하는 전봉준장군」이라는 사진은 일본영사관에서 법무아문으로 인도되기 직전에 사진사 무라카미 텐신이 우치다(内田)영사의 허가를 얻어 촬영한 것이었다.

촬영일은 1895년 2월 27일, 촬영장소는 서울의 일본영사관 구내이다.

『경성단신』말미에는 “기자왈(記者曰) 동학당 수괴의 사진 2매는 다음 호로 미룬다”라고 부기되어 있다. 그러나 유감스럽게도 『메사마시신문』392호 이하를 몇 번이나 조사해 봐도 「동학당 수괴의 사진」을 발견할 수 없었다. 그 이유는 다음에 설명하는 바와 같이 경쟁지(競爭紙)에게 선두를 빼앗겨 버렸기 때문일 것이다.

3. 옥중의 전봉준을 방문한 자들

『오사카매일신문』 1895년 3월 12일호 제 3면에는 「압송당하는 전봉준장군」이라는 제목으로 사진과 거의 동일한 구도의 삽화가 게재되어 있는데 그 삽화에는 ‘가마를 탄 자가 바로 전봉준’이라고 쓰여 있다.(도-2 참조)

또한 그 삽화에 첨부된 3월 1일자 ‘소풍생(蘇嵐生)’이라고 서명된 「조선통신」 속에 있는 ‘전봉준을 보다’라는 기사에는 다음과 같이 쓰여 있다.

그저께 사진사 무라카미 분신(村上文眞 - 원문) 및 천우협 거괴로 소문이 난 다나카 지로(田中次郎 - 원문)와 필자 등 세 사람이 영사관 내의 철창에서 신음하는 동학당 대거괴 전봉준을 보았다. (중략) 그는 총검 때문에 발에 봉대를 감고 있었고, 안색과 팔다리도 창백하였으며, 숨도 거칠어 몹시 위독한 병증이었지만 그 기력은 상당히 강건한 듯하였다. 나이 37·8세, 그 용모는 보통사람과 다르지 않았으나 수염이 약간 있고 안광(眼光)은 날카로우며, 눈썹 위에는 겹쳐진 일종의 잔주름이 있어 이마를 횡단하고 있는 모습은 다른 사람에게서는 볼 수 없는 모습이였다. 그는 기꺼이 사진촬영을 하고 그로부터 바로 가마를 타고 다른 공범 2명과 함께 법무아문에 인동하기 위해 영사관을 떠났다. 아! 가석한 명사(名士)여!

2월 27일에 일본영사관으로부터 법무아문에 인도되기 직전의 전봉준을 영사관 옥사로

찾아간 자들은 무라카미 텐신 만이 아니었다. 『오사카매일신문』에 「조선통신」을 써서 송신하고 있던 신문기자 ‘소풍생’과 ‘천우협’의 거괴로 소문이 난 다나카 지로’ 같은 인물도 있었다.

‘소풍생’이란 인물은 오사카매일신문사로부터 1895년 1월에 서울로 파견되어 「조선통신」을 담당하게 된 나카시마 시바노스케(中島司馬之助)란 자이다.⁴⁾ 나카시마는 그 뒤 오래도록 오사카매일신문사 경성지국에 머물렀으며, 1907년에는 신입 동료 나라사키 칸이치(樞崎觀一)의 저서 『한국정미정변사』⁵⁾에 ‘나카시마 아키우라(中島明浦)’라는 이름으로 발문을 썼다. 그 속에서 나카시마는 ‘내가 필을 들고 한성에 머문 지 14(十四)년 (四)는 余의 오식일 듯)’이라고 쓰고 있다.

또 ‘천우협’의 거괴로 소문이 난 다나카 지로(田中次郎)씨가 ‘다나카 지로(田中次郎)’의 오기라는 사실은 쉽게 추측할 수 있다. 기사 속의 (중략)이라고 한 부분에는 다나카와 전봉준이 작년 3월(1894년 3월)에 전라도 동학근거지에서 국사(國事)를 논한 사이였기 때문에 다나카가 전봉준에게 자신의 얼굴을 기억하고 있는가 라고 묻자, 전봉준이 ‘아! 다나카 지로군인가’라고 말했지만, 바로 그 순간 경리(警吏)가 둘을 갈라 놓고 말았다고 쓰여 있다.

‘천우협’이라고 칭하는 일본인 그룹이 동학본부에서 당수 전봉준을 만나 군사회의에 참가하여 조선관병과 싸웠다고 하는 회상기(回想記)를 남기고 있지만, 도저히 그대로 실용할 수 없는 내용이다.

이 때도 전봉준이 정말 ‘다나카 지로 군인가’라고 말했는지 아닌지 의심스럽다. 자신을 부르는 소리에 전봉준이 무언가 말을 걸려는 순간 경리가 둘 사이를 갈라 놓았다는 것인데 나카시마 시바노스케가 각색하여 기사화한 것이 아닐까.

4. 『메사마시 신문』과 『오사카매일신문』

그런데 무라카미는 「전봉준을 촬영하다」라는 기사를 써서 사진 2매를 첨부하여 3월 2일에 메사마시신문사(도쿄시쿄쿄구 야마시타초 18번지) 앞으로 보냈다. 사진현상과 인화에 시간이 걸렸던 것이다.

그렇다면 나카시마 쪽은 어떠했을까. 필자는 줄져에서 아마도 나카시마 자신이 현장에서 그런 스케치를 첨부하여 「전봉준을 보다」라는 기사를 3월 1일에 오사카매일신문사(오사카시 동구오카와초 55번집)로 보냈다 라고 썼다.

그러나 『오사카매일신문』에 게재된 삽화(도-2 참조)는 초심자가 그린 것이라고 생각

4) 『매일신문백년사』 권말 연표, 1972년.

5) 일한서망, 1907년 12월.

되지 않는다. 나카시마의 다른 기사를 봐도 나카시마가 특별히 스케지에 재능을 가진 기자였다고는 생각되지 않는다. 게다가 가마를 들고 있는 인부의 복장주름 등을 볼 때 이 스케치는 사진을 보고 그린 것으로 생각된다. 더욱이 2월 27일 기사를 3월 1일에 보냈다고 하는 것은 사진이 완성되기를 기다리고 있었다고 생각하는 쪽이 자연스럽다. 이상과 같은 이유에서 나카시마는 무라카미로부터 사진을 얻어 기사와 함께 보냈다고 정정하고자 한다.

무라카미가 메자마시신문사에 기사와 사진을 보낸 것이 나카시마보다 하루 늦은 것은 특종사진을 몇 매나 인화하여 판매하는 본업(本業)에 시간을 빼앗겼기 때문일 것이다.

그런데 당시 신문에 사진을 인쇄하는 것은 아직 불가능했다. 그래서 나카시마가 오사카매일신문사에 보낸 전봉준 사진은 화가의 손을 거쳐 그림으로 그려지고, 다시 조각가의 손을 거쳐 목판으로 만들어져 3월 12일자 『오사카매일신문』이 얻었던 것이다. 동일(同日), “동학당 거괴의 사진 2매는 다음호로 미룬다”라고 예고했던 『메자마시신문』쪽은 사진을 그림으로 그려 조각하는 작업을 중지했던 것으로 생각된다.

5. 『사진화보』에 실린 전봉준의 사진

그런데 2개월 뒤인 5월 10일에 발매된 『사진화보』 제14권(도-3 참조)에는 가마에 태워져 호송되는 전봉준의 사진이 신문에서는 아직 없는 최신 사진제판기술을 사용하여 인쇄되어 「동학당 수령 전봉준 및 조선순사」(도-4 참조)라는 제목으로 게재되었다. 별도로 「동학당 거괴」라는 해설문도 붙어있는데 양 쪽 모두 촬영자 무라카미 텐신의 이름은 없다.

『사진화보』는 도쿄의 출판사 춘양당(春陽堂)이 1894년 10월에 창간한 『전국사진화보』(戰國寫眞畫報)를 개제(改題)한 것이다. 청일 휴전조약 조인 후 제 12권(1895년 4월)부터 잡지 이름에서 ‘전국(戰國)’이 빠졌으며, 제 20권(동년 8월)까지 간행되었다. 동지 제 9권(동년 2월)에 이른바 「민비 사진」이 「조선궁녀」라는 제목으로 게재되어 있는 사실은 줄거에서 소개했다.

1895년 2월 27일에 서울의 일본영사관으로부터 법무아문으로 이송되기 직전에 촬영된 전봉준의 사진은 아마도 촬영자 무라카미 텐신 자신에 의해 춘양당에 판매되었을 것이다. 그 사진은 최신 기술로 인쇄되어 『사진화보』 제 14권에 게재되어 널리 유포되었다. 이래 오늘에 이르기까지 전사(轉寫), 트리밍(사진화면에서 불필요한 부분을 제거하고 구도를 조정하는 일 - 주)이 거듭되어 전봉준하면 모두가 떠올리는 사진이 되었으나 출전(出典)이 『사진화보』라는 사실도, 촬영자가 무라카미 텐신이라는 사실도 밝혀진 적이 없었다.

6. 『아사히신문』의 기사

전봉준에 대한 사진촬영에 관해서는 아시히신문 특파원 아오야마 코노미(青山好惠)에 의한 기사도 있다는 사실을 덧붙여 두고자 한다.

동학당 대거괴 전복두는 아직 일본영사관에 구치(拘置)되어 병을 요양하고 있었는데 이제와서는 쾌복(快復)의 전망이 충분히 있기 때문에 오늘 범무아문으로 인도할 것이라 한다. 심판(審判 : 재판 - 주) 일체는 우리 우치다(内田) 경성영사도 배심할 것이라고 한다. 이미 범무아문의 심판에 부쳐진 이상은 사형은 피하지 못할 것이며, 그 용모를 촬영하겠다는 모 사진사의 청에 따라 촬영을 허가하였다. 어떤 사람이 은밀히 전복두에게 말하기를, 일본공사에게 정원(情願)하여 목숨을 구걸하라고 하자 그는 분연히 그 말을 듣지 않고 말하기를, 여기에 이르러 어떻게 비열한 마음을 가질 수 있겠는가 나는 죽음을 기다린지 오래다 라고 했다고 한다.

위 기사는 서울의 아오야마 코노미가 1895년 2월 27일자로 보낸 기사를 『오사카아사히신문』에서는 3월 9일호의 「한산풍운록(韓山風雲錄)」 중에 「전복두」라는 소제목으로, 또 『도쿄아시히신문』에서는 3월 12일호의 「조선시사(朝鮮時事)」(2월 27일)중에 「동학당 대거괴」라는 소제목을 달아 게재하고 있다.

7. 수급(首級)을 촬영하다

그런데 시간을 조금 거슬러 올라 간 『메자마시신문』365호(1895년 2월 8일) 제 5면에 ‘재경성주동(在京城鑄洞) 무라카미 텐신(村上天眞)’이라는 서명이 들어있는 「경성특신」이라는 기사가 게재되어 있고, 거기에는 「동학당 거괴 효수도(사우 무라카미 텐신 씨 기증)」(도-5 참조)가 첨부되어 있다. 이 기사는 서울의 사진사 무라카미 텐신이 도쿄의 메자마시신문사 앞으로 보낸 최초의 편지를 그대로 게재한 것으로 보인다. 계절에 대한 인사에서 시작하여 일본 출발 때 받았던 배려에 대하여 예를 표하고 있고, 도착 보고가 늦어진 데에 대한 사과, 이어서 「동학당 영수의 효수」라는 사진 1매와 그것을 「촬영한 대략(大略)」을 보고하니 신문여백에 게재해 주신다면 다행이겠습니다 라고 쓰여 있다.

‘사우(社友)’라고 되어있지만 사진사 무라카미 텐신은 어디까지나 독립된 경영주체로써 아마도 금전을 받고 메자마시신문사에 사진을 제공하는 관계였던 것으로 추정된다. 무라

카미로부터 보내진 사진은 조각가의 손을 거쳐 목판화 「동학당 거괴 효수도」가 되어 지상에 게재되었다.

무라카미가 쓴 「촬영한 대략(大略)」은 아래와 같다. 「경성특신」 속의 「동학당 영수의 효수」라는 소제목을 단 부분만 그 전문(全文)을 아래와 같이 인용해 둔다.

동학당 영수의 효수

전부터 소문이 있었던 동학당 영수 최재호(崔在浩), 안교선(安教善) 두 명은 지난(1월) 19일 법무아문에서 참죄(斬罪 = 참수 - 주)의 형에 처해져 20일부터 3일간 조의문(照義門) 밖 통행이 가장 빈번한 광마장(廣馬場) 중앙에 5척 정도의 나무 세 그루를 교차하여 그 위에 효수되었습니다. 소생(小生)이 이 일을 들어 안 것은 23일 오전으로써 즉 3일 간의 기한이 이미 경과한 뒤였습니다. 전날 밤부터 큰 눈이 내려 만일 치우지 않았다면 그대로 버려져 있을 것이라고 생각해서 사진기를 휴대하고 서둘러 현장으로 달려갔더니, 벌써 수급은 내려져 명석으로 싸서 새끼로 묶여 있었고, 돌을 던지는 풍습은 방만한 조선인들의 일로써 망보는 사람도 없이 눈 속에 그대로 버려져 있었습니다. 소생도 빈 손으로 돌아가는 것이 유감천만한 일이었기 때문에 현장에 모여 있는 5-6명의 한인(韓人)을 향해 어چه처럼 나무를 교차해서 수급을 걸면 금전을 주겠다고 했지만 돈벌이 하려고 분발하지 않은 채 모두가 전을 할 따름이어서 도저히 어떻게 해볼 도리가 없었습니다. 그래서 다행히 망보는 사람이 없었기 때문에 소생 스스로 명석으로 싸서 풀고 세 개의 나무를 교차해서 최(崔)의 머리를 위 쪽에, 안(安)의 머리를 아래로 하여 그림과 같이 촬영하였습니다.

현장에는 따로 효수의 뜻을 알리는 것도 없이 오직 수건 한 촌(寸) 정도의 종이 조각에 못을 구부려 친 것 같은 필법으로 각자의 이름을 썼고, 그 두발은 묶여 있었습니다. 참수할 당시에 저항을 했는지 아니면 고의(故意)인지는 알 수 없었습니다만, 최(崔)의 목 주변에는 몇 군데의 칼자국이 있었습니다. 어느 조선통(朝鮮通)에게 물었더니 조선은 사형을 집행하는데 아직도 녹 투성이의 둔한 칼을 사용하고 있기 때문에 대개 십여 차례가 아니면 머리와 몸을 따로 하지 못한다고 하여, 실로 듣자니 피부에 전율이 생겼습니다. 최와 안의 용모는 확실히 동학당 중의 영수다운 가치가 있는 것으로 보였습니다.

동학지도자 최재호, 안교선 두 명은 1895년 1월 19일에 법무아문에서 참형에 처해져 그 수급이 20일부터 3일간 조의문(照義門), 남대문과 서대문 사이에 있던 성문) 밖 광장에 효수되었다. 무라카미가 그 사실을 안 것은 1월 23일 오전 중이었다. 3일간의 기한은 지났지만 무라카미는 사진기를 들고 현장으로 달려갔다.

수급은 이미 나무에서 내려져 명석에 사여 새끼로 묶여 있었다. 무라카미는 현장에 있

던 조선인 5-6명에게 어제처럼 나무를 교차하여 수급을 걸쳐 주면 돈을 주겠다고 권유했지만 모두 전율할 뿐 그렇게 하려고 하지 않았다. 그래서 무라카미 스스로 명석을 풀고 세 개의 나무를 교차해서 최(崔)의 머리를 위 쪽에, 안(安)의 머리를 아래 쪽에 걸친 다음 촬영했다고 한다.

따라서 무라카미가 촬영한 사진은 참형에 처해진 최재호와 안교선의 수급이 조의문 밖 광장에 1월 20일부터 22일에 걸쳐 효수되어 있던 그 자체가 아니었다. 3일간의 효수 기간이 지나 일단 나무에서 내려져 명석에 싸여 새끼로 묶여진 수급을 무라카미가 다시 한번 꺼내고 나무를 얹어서 ‘어제처럼’ 두 명의 수급을 축 늘어뜨려 촬영한 것이었다. “최와 안의 용모는 확실히 동학당 중의 영수다운 가치가 있는 것으로 보였습니다”라는 것이 무라카미의 감상이었다.

8. 수급을 보다

무라카미가 “최의 수급을 위 쪽에, 안의 수급을 아래 쪽에”라고 한 것처럼 수급이 효수되어 있는 방법을 알고 있었던 것은 그 광경을 실견(實見)한 인간으로부터 들었기 때문일 것이다. 실견한 인간이 남긴 기록은 현재 두 종류가 확인 가능하다. 하나는 『오사카매일신문』 기사이고, 다른 하나는 영국 왕립지리학회 회원 버드 비숍(Isabella L. Bird Bishop)의 저서 『한국과 그 이웃나라들(Korea & Her Neighbours)』이다. 먼저 전자(前者) 쪽부터 보기로 한다.

『오사카매일신문』 1895년 2월 1일호 제 2면에 「거괴의 목 실견」이라는 소제목을 단 다음과 같은 기사가 있다.

동학당 거괴 최재호, 안교선 두 사람은 그그저께 참형에 처해져 3일간 효수한 다는 말을 들었기 때문에 오늘 효수 광경을 실견했다. 효수 장소는 서대문과 남대문 중간에 있는 (昭義門) 밖 반석방(磐石坊)이라는 곳으로, 인가가 조밀하고 통행이 빈번한 시가 중앙에 망보는 사람도 없이 그리고 방시(榜示)도 없이 이른바 방치된 채로 예(例)의 세 개의 작은 나뭇가지를 삼각으로 교차하여 묶었으며, 두발을 모시로 묶어 내려뜨렸다. (중략) 안교선은 범용(凡庸)한 얼굴을 보였지만 최재호는 융준(隆準)하여 눈썹이 위로 치켜 올라가 잠자는 듯한 모양 외에 원한을 구천(九天)에 호소하는 듯한 모습을 드러내고 있었다. 우리나라 형법학자가 이 광경을 보면 선린의 우방에 아직도 이같은 참혹한 형벌이 있다는 것을 통탄할 것이다.

이 기사는 『동학농민전쟁사료총서』 제 23권에 수록되어 있으나, 이것이 ‘1월 22일 경

설 소풍쟁'이라는 서명이 들어있는 「조선통신」의 일부라는 사실은 기재되어 있지 않다. '소풍쟁'이 오사카매일신문 특과원 나카시마 시바노스케(中島司馬之助)의 필명이라는 사실, 나카시마 시바노스케는 이 일이 있는 지 1개월 뒤에 무라카미 텐신과 함께 일본영사관 옥사로 전봉준을 찾아갔다는 사실 등은 전술(前述)했다.

다음으로 비숍의 말을 들어보도록 한다.

의세에 좌지우지되고 있는 임금과의 충성 관계를 공손하게 끊고 그와 다른 주권을 약속했던 동학(Tong-hak)은 1월초 전멸하여 우두머리의 수급이 충성스러운 관리에 의해 서울로 압송되었다. 나는 그것을 베이징으로 가는 길에서 가장 부산한 거리인 서소문 밖 어느 시장 거리에서 보았다. 마치 야영장에서 쓰는 주전자대처럼 나뭇가지 세 개로 열기설기 묶어놓은 구조물에 두 사람의 수급이 아래로 늘어뜨려져 매달려 있었다. 두 사람 모두 온화하고 엄숙하다고 해도 좋을 만한 표정을 하고 있었다.⁶⁾

비숍은 서소문(西小門) 밖의 변화한 시정에서 동학 수령의 목이 효수되어 있는 광경을 보았다고 쓰고 있다. 그 수급은 세 개의 막대기를 캠프의 주전자걸이처럼 아무렇게나 조립한 것에 또다른 수급과 함께 늘어뜨려져 있었다고 한다.

그리고 불가사의하게도 위 문장이 쓰여 있는 페이지에는 『메사마시신문』의 「동학당 거괴 효수도」와 완전히 같다고 해도 좋을 만한 삽화 「동학의 수급들(TONG-HAK HEADS)」(도-6 참조)이 게재되어 있다. 이것은 과연 어찌된 일일까.

비숍은 수급을 본 날짜에 대해서는 쓰고 있지 않다. 그러나 그 3일 뒤 고요한 조선의 설날에 친구와 함께 남대문 밖에서 동대문 밖으로 말을 타고 찾아갔다고 쓰고 있다. 1895년 음력 1월 1일은 양력 1월 25일에 해당한다. 비숍이 「동학의 수급들」을 본 것은 1월 22일이었던다는 사실을 알 수 있다.

비숍은 1894년 1월부터 시작한 조선 조사에 중량 16폰드(7.3kg)의 삼각 카메라와 4폰드(1.8kg)의 핸드카메라를 가지고 조선 각지를 촬영하고 있었는데, 이 때는 모종의 사정 때문에 비숍 자신이 촬영할 수가 없었던 것 같다. 그래서 무라카미 텐신으로부터 사진을 구해 자기 저서의 도판으로 사용한 것이 아닐까 한다.

그리고 비숍은 “두 사람 모두 고요하고 엄숙하다고 해도 좋을 만한 표정을 하고 있었다”라고 쓰고 있다. 이 같은 내용은 앞에서 소개한 무라카미 텐신의 감상과 함께, 참형에 처해진 최재호와 인교선의 얼굴이 보는 사람의 마음을 울릴 정도의 위엄을 갖추고 있었다는 사실로써 기억해 두어야 할 것이다.

6) Korea & Her Neighbours Vol.2, p.54, 1898, London.

의도가 구 대한제국 황제 순종으로부터 천황 전용의 용어인 ‘행행(行幸)’이라는 말을 빼앗는데 있었다고 하는 것은 명백하다 할 것이다.

고려왕조의 폐허에서 이토 히로부미와 나란히 걷는 대한제국 최후의 황제 순종의 모습이 ‘행행’이라는 말마저 빼앗긴 채, 멸망한 조선의 상징으로써 사람들의 뇌리에 기억되었을 것이다.

그런데 한국사진회 회지(會誌)로 오리이상회(織居商會) 사진부가 1909년 10월에 서울에서 발행한 『인화집(印畵集)』 제 2년 제 8월호 권두에 「특별회원 무라카미 텐신 씨 촬영」이라고 하여 게재되어 있는 사진이 「북한행계(개성 만월대)」(도-10 참조)이다. 이 사진은 「북한순수개성만월대행행」이 수십 명에 이르는 수행자 전체를 찍은 대판(大版) 사이즈 사진(18×26cm)인 데 반해, 일부를 트리밍하여 소형판(10×15cm)으로 한 것이다. 통감부편 『한국사진첩』이 나오기 전에 무라카미 자신에 의해 ‘북한 행계’라고 명명되었다는 사실은 주목할 만하다.

한국사진회는 사진 재료상인 오리이상회의 지원을 받아 사진애호가들의 모임으로써 1908년 5월 3일에 서울에서 결성되었다. 매월 1회 작품을 가져와 품평회를 열어 우수 작품을 콜로타이프(사진 제판의 일종 - 주) 인쇄한 회지 『인회집』을 회원들에게 배포했다. 결성 당시 회원수는 82명, 그 가운데 3명의 명예회원(귀족), 무라카미 텐신을 포함한 4명의 특별회원(사진영업자), 그 외가 통상회원으로 되어 있었다. 수 명의 지방거주자와 외국인도 포함되어 있었지만 거의 전원이 서울 거주 일본인이었다.(『인회집』 제 1호의 회칙 및 회원명부 참조) 병합 이후 계림사진회로 개칭했다.¹⁰⁾

『인회집』 제 2년 제 8월호 「기사(記事)」에 의하면, 1909년 8월 1일 오후 8시에 남산초(南山町) 경성호텔에서 제 16회 예회 및 인화품평회가 열렸다. 이 날은 오리이상회 사진부 주최 납량회(納涼會)를 겸했기 때문에 특별회원 무라카미 텐신 등도 출석했다. 무라카미는 출품된 인화 몇 장에 대한 비평을 한 다음 당선자에게 기증 물품을 증여했다고 한다.

당선자란 동호 권두의 무라카미 작품을 이어 게재되어 있는 1등부터 10등까지의 작품 촬영자를 말하며, 무라카미가 그들에게 증여한 물품이란 기증인화(寄贈印畵)라 하여 『인회집』에 실린 「북한행계(개성만월대)」였다고 봐도 틀림이 없을 것이다.

황태자 요시히토(嘉仁)의 한국 방문에 이어 순종의 순행 사진도 역시 무라카미 텐신이 촬영한 사실은 무라카미 텐신이 통감부 어용사진사의 지위를 확립하고 있었다는 것을 알려준다.

10) 『인회집』은 고(故) 시카타 히로시(四方博) 경성제국대학 교수의 구장서가 도쿄경제대학 부속도서관에 「시카타문고」로 16책(1908~1911년)이 소장되어 있다. 또 동 대학 소장의 「사쿠라이문고(櫻井文庫)」 속에도 「시카타문고」에서 결락(欠落)이 많은 1909년분 12책이 소장되어 있다.

11. 결론

갑신정변 이후 조선인 사진사 부재 시대에 다수의 일본인 사진사가 조선에서 개업했다. 그 중에서도 무라카미 텐신(본명 교지로 = 幸次郎)은 후에 통감부 어용사진사 지위에 올라 일본제국주의의 조선침략에 가장 크게 기여한 사진사였다.

본고에서는 무라카미 텐신이 조선에서 활동하던 초기에 동학지도자 사진촬영을 했다는 사실을 밝혔다. 무라카미 텐신에 의해 촬영된 동학지도자의 사진과 대한제국기의 황실사진은 촬영 의도를 떠나 오늘날에는 한국근대사상 귀중한 역사자료라고 할 수 있을 것이다.

第1部

1. 日本資料에 나타난 日本軍 出兵의 名分과 東學農民軍 鎮壓過程 分析

李離和(전 동학농민혁명기념재단 이사장)

2. 『均菴丈 林東豪氏 略歷』에 나타난 北接農民軍의 移動路와 海月 崔時亨

申榮祐(충북대)

第1部

1. 日本資料에 나타난 日本軍 出兵의 名分과 東學農民軍 鎮壓過程 分析

李離和(전 동학농민혁명기념재단 이사장)

2. 『均菴丈 林東豪氏 略歷』에 나타난 北接農民軍의 移動路와 海月 崔時亨

申榮祐(충북대)

01

日本資料에 나타난 日本軍 出兵의 名分과 東學農民
軍 鎮壓過程 分析

李離和(전 동학농민혁명기념재단 이사장)

日本資料에 나타난 日本軍 出兵의 名分과 東學農民軍 鎮壓過程 分析¹⁾

李離和(전 동학농민혁명기념재단 이사장)

머리말-열강의 각축장

1. 농민전쟁이전 한반도의 정세
 - 1) 한반도의 정세
 - 2) 일본의 한반도 정세인식
2. 천진조약과 조선의 출병문제
 - 1) 일본군 출병의 명분
 - 2) 대륙진출의 공작
3. 일본의 지배권 확보와 농민군 토벌작전
 - 1) 군사지휘권 확보와 회유공작
 - 2) 토벌작전의 진두지휘
4. 대대적인 정토군 환영식
5. 일본의 청일전쟁 승리와 동아시아의 변동

머리말 - 한반도는 열강의 각축장

19세기 중후반기에 들어 동양의 중국 일본 조선 등 삼국은 서세동점의 국제정세 아래에서 요동을 쳤다. 청국(淸國)은 1940년 영국과 벌인 아편 전쟁에서 패전한 뒤 열강에 유린되어 영토를 할양하거나 조차지를 내주었다. 그러면서 구체제를 지키려는 정책을 폈다.

일본은 쇄국정책을 쓰다가 1853년 미국 군함의 위협으로 개항을 하고 통상조약을 맺었다. 일본은 중국이 아편전쟁에서 처절하게 패전한 모습을 보고 통상조약을 맺고 말았던 것이다. 일본에서는 개항한 뒤 존왕양이(尊王攘夷)를 내건 세력이 도쿠가와 바쿠후를

1) 이 논문은 일본어로 쓰인 일본자료를 토대로 작성되었다. 역사문제연구소 동학농민전쟁100주년기념사업추진위원회에서는 동학농민전쟁사료총서를 간행하면서 강창일교수, 고석규교수 등에게 도움을 받아 일본자료를 위 총서 30책에 수록해서 1996년 사운연구소에서 간행했다. 이 논문은 위 수록분 자료에 기초하고 몇 다른 자료를 활용했다. 일본어 전체 자료를 활용하지 못한 한계를 지니고 있다.

이끄는 쇼군(將軍)을 공격했다. 존양양이파는 쇼군을 타도하고 왕정복고를 이룩해 새로운 통치체제를 수립했다. 그 결과 1868년 ‘메이지 유신’이 등장해서 정치체제의 근본적인 개편을 단행했다. 일본에서는 메이지 유신(明治維新) 이후 대륙진출론과 정한론(征韓論)이 대두했는데 이는 한 태(胎)에서 나온 쌍생아(雙生兒)였다.

조선은 프랑스 미국 등 문호 개방을 요구하는 열강에 맞서 배외정책을 폈으나 끝내 일본의 강요에 따라 1876년 한일수호조규(韓日修好條規)를 체결했다. 이에 따라 서울에 일본공사관이 들어서고 일본의 외교관과 상인이 조선으로 진출하는 계기가 되었다. 그 조규의 일환으로 서울을 비롯해 인천 부산 원산 등 3개 항을 개항했으며 일본인들은 개항장을 중심으로 합법적으로 상업 활동을 벌였다. 이들 일본인을 거주민(居留民)이라 불렀다.

뒤이어 프랑스 영국 러시아 독일 미국 등과 통상조약을 맺고 교류를 벌였다. 그리하여 이들 공사관은 서울 정동을 중심으로 들어섰으며 개항장에서 통상의 자유는 물론 종교 선교의 자유도 획득했다. 그러니까 열국의 공사관은 외교만이 아니라 통상, 선교, 여행의 자유를 단계적으로 확대할 수 있었다. 또 이들은 광산개발권 산림벌채권, 전차와 전기와 철도의 부설권 등 이권을 누렸다.

그런데 청국만은 다른 열강과 다른 노선을 추구했다. 곧 조선이 전통적으로 중국의 번속(藩屬) 국가이므로 외교관계가 성립될 수 없다고 우기고 중국공사관을 설치하는 대신 통상업무 관련인 상관(商館)만을 설치했고 그 총지휘자로 원세개를 파견했다. 무역관계를 약정하면서도 조규라 하지 않고 무역장정(貿易章程)이라 했다. 원세개는 종전 내정간섭을 하지 않는 사대외교(事大外交)와는 달리, 식민지 총독처럼 군림하면서 청국이 조선의 종주국으로 행세하면서 조선의 외교권을 대행하려 들었다. 더욱이 1860년 러시아와 국경조약을 맞으면서 두만강의 녹둔도를 조선과 협의도 없이 러시아령으로 넘겨주는 행태를 보였다. 이는 곧 조선의 외교권을 대행한 사례였다. 그 보기로 이홍장이 주선했던 이루어진 1882년의 조미수교조약을 들 수 있다.

1. 한반도는 유럽의 발칸반도

1) 한반도의 정세

이런 단계를 거치면서 한반도는 열강의 각축장이 되어 유럽의 발칸반도라는 비유가 일어나기도 했다. 당시 조선은 한반도의 22만 제곱킬로미터의 영토, 2천만 미만의 인구를 지닌 나라로 근대 산업이 개발되지 않았으나 그 지정학적 위치에 따라 동양 삼국의 중간 지대에 있어서 국제적으로 주목을 받았다. 그런 관계 속에서 일본과 중국의 거주민

이 속속 불어났고 영국 러시아 미국 등 열강의 외교관 선교사 등이 몰려들었다. 동학농민전쟁이 일어나기 직전인 1893년 현재, 일본 거류민은 8,559명, 청 거류민은 서울에만 2,500여 명이 있었으며 미국인은 80여 명이였다. 그 나머지 나라 사람들은 몇 10 명 단 위였다.

한편 통상을 통해 사치품 석유 옷감 등 외국의 신문물이 수입되는 대신, 조선의 쌀 콩 소가죽 금은 등 1차 산품인 식량과 원료가 유출되어 농민생활을 더욱 궁핍하게 했다. 또 농민과 민중은 차츰 외국인을 외경의 눈으로 바라보면서도 반감을 보이는 배외의식이 짙게 깔렸다.

조선에서 전개된 열강의 패권은 초기에는 중국과 일본을 중심으로 전개되었다. 1882년 임오군란이 일어나자, 초기 일본에 기선을 제압당했던 청국은 신속하게 움직였다. 민씨 문벌세력과 결탁해 있던 원세개는 그 막후인물인 흥선대원군을 납치해 친진에 유폐시키고 조선에서 주도권을 잡았다. 또 1884년 갑신정변 때에는 친일 개화파와 끈이 닿았던 일본군을 몰아내고 주도권을 잃지 않았으며 무역 등에서 일본보다 우월적 지위를 확보했다.

청국은 속내로는, 조선은 번속이기에 외교는 물론 내정을 지도한다는 정책을 설정하고 있었지만 표면으로 분명하게 표명하지 않았다. 일본은 조선은 독립국이므로 청국의 간섭을 배제해야 한다는 논리를 폈으며 열강은 조선은 청국이나 일본의 간섭을 배제하고 중립국화해야 한다는 주장을 폈다. 이는 일본은 조선의 청국 지배권을 배제하고 정치적 군사적 경제적 권리를 강화하려는 속셈이었고 열강은 조선의 이권을 차지하려면 청나라나 일본의 기득권을 부정해야한다는 외교정책 때문이었다.

더욱이 중국 한반도 등 동아시아와 아프리카에 진출하려는 제정 러시아는 동남부 시베리아로 진출하려는 국제전략을 세우고 있었다. 동남아시아와 중국에서 식민지와 조차지를 경영하던 영국은 러시아와 국제적 긴장관계에 있었다. 영국은 러시아가 블라지보스트 특에 부동항을 확보하고 남쪽으로 진출하려하자 강력하게 견제하고 나섰다. 영국은 러시아를 견제키 위해 1885년 남해의 거문도를 불법으로 점령하고 병영과 포대를 건설했다. 이에 러시아가 항의했으나 물러나지 않다가 청국의 개입으로 겨우 철수했다. 이때 이해를 같이하는 프랑스도 영국에 동조했으나 독일과 미국은 한발 물러서 있는 꼴이었다. 특히 미국은 한반도에서 정치적 중립을 일찍이 선언하고 나섰다.

2) 일본의 한반도 정세인식

일본은 대륙진출과 정한론을 기본으로 해서 조선의 정치적 동향과 민중의 동태 등을 기초로 해서 정세를 분석했으며 이권의 확보와 상인을 포함한 거류민의 안전을 당면의 문제로 내세웠다.

갑오조선내란시말(甲午內亂始末)에 다음과 같은 논지를 펴고 있다.

독립국이라고는 하나 실체는 없고 단지 겨우 금일의 일루의 명맥만이 간신히 명멸(明滅)의 사이를 이어가고 있다. 무슨 연유이든 실로 조선은 동양에 있어 발칸반도이다. 사방의 이웃이 그 손톱과 이빨을 갈면서 그 고기를 살핀지가 오래되었다고 하지만, 또 어찌 하지도 않는다. 러시아는 결코 조선을 아우를 수 없고, 영국은 감히 조선을 범할 수 없다. 지나(支那, 중국) 또한 조선을 자기나라에 예속시킬 수가 없다. 우리나라 또한 용이하게 조선을 움직이기 어렵다. 이것은 동양의 화평을 유지하기 위해 마땅히 그리하지 않을 수 없는 바의 것이다. 돌아보면 이 나라의 내부 모습을 관찰하니, 각종 불평당의 숨은 세력이 지금은 점차 그 걸음을 내딛어 정부의 기강이 흔들리는 기회를 타서 혁명을 간절히 바라고, 내지(內地) 각지에서 봉기하여 안으로는 간사한 자를 배척하여 충량(忠良)에 힘쓰고 밖으로는 척왜(斥倭) 척양(斥洋)주의를 실행해야 한다는 것을 명분으로 삼고, 행위는 지극히 착실할 것을 뜻으로 하고 망동을 피해 오직 지방 토민의 환심을 사는 것에 노력하여 종래의 중앙 정무의 삼체(澀滯, 일이 잘 나가지 않고 막힘)와 지방정치의 적폐에 의해 계속 조정을 싫어하는 토민은 다투어 이에 응하여 그 세력이 대단히 창궐하였다.²⁾

여기에서는 동양평화를 내세우면서 조선 내부의 사정을 논급하고 있다. 조선 내정의 위기상황은 곧 일본의 역할이 증대되는 것을 의미하기도 한다.

또 위와 같은 책에는 다음과 같이 기록하고 있다.

조선이 망하면 청국이 흡고, 조선이 청국에 속하는 것은 영국이 기뻐하는 바이니, 영국은 실로 러시아의 원수이다. 우리나라 또한 조선과 이와 입술의 관계가 있다. 계림(鷄林, 조선의 별칭)의 들판이 어찌 하여 타인(他人)의 입성을 받아들일 수밖에 없는가? 이것은 실로 동양의 발칸반도와 같은 이유인데, 하나의 작고 약한 나라라고 하지만 천하의 이목이 이곳에 쏟아져 그 성패 여하에 주의하고 있다. 또한 당연하다.³⁾

여기에서는 청나라와 영국과는 달리 일본의 역할을 강조하고 있다. 곧 조선에 내란이 일어나면 일본은 전통적 관계로 보아 하나의 임무가 주어진다라는 의미를 던지고 있다.

이와 달리 일본의 대조선정책을 충실하게 보도하고 여론을 환기하고 있는 신문 등 언론은 더욱 당면의 문제를 부각시키고 있다. 조선에 농민군 봉기가 일어나자 그 과정을

2) 『甲午朝鮮內亂始末』 서론에 나옴. 編者는 익명인 函南逸人으로 되어 있으며 이름을 밝히지 않았다.

3) 위의 책 「朝鮮의 危機」에 나옴.

상세하게 보도하고 주변 정세를 언급하면서 논설과 기사를 통해 개입의 당위성을 부각시키고 있다.

대판조일신문의 게재된 『조선과 인근나라』에는 다음의 내용이 기재되어 있다.

조선에 난이 일어났다. 관군은 이를 평정할 수 없어 원군을 청국에 청했다. 청국의 원군은 이미 인천에 들어왔고 우리나라 또한 병사를 파견하여 제국 공서(公署)와 신민을 보호하려고 한다. 양국은 이미 행문지조(行文知照)를 거쳤다. 그런데 러시아도 또한 출사한다는 설이 있다. 변란이 이와 같고 사태의 파급이 이렇게 크니 우리가 어찌 피아의 정세를 살피어 동방 백년의 대계를 강구하지 않을 수 있으랴.

조선은 동방의 일가에 편재하여 있는데, 땅이 좁고 나라가 약하며 민속이 매우 촌스럽다. 그런데 천하의 이목이 여기에 기울고 있는 이유는 무엇인가. 조선은 서북에 청국과 러시아를 접경에 놓고 있고, 동쪽 바다를 건너서는 우리나라와 상대하고 있다. 러시아는 강병으로 세계에 응시하고 있으며 병탄의 뜻을 과거에서 지금까지도 전혀 쉬지 않고 갖고 있다. 그런데 서구의 야망은 조금이라도 그 틈이 보이면 남하의 뜻이 있다. 손톱의 움직임은 무기가 되고 그러므로 조선은 실로 그 먹이가 된다. 조선이 망하면 청국이 어렵게 되며 그렇기 때문에 청국이 이를 비호하는 뜻이 있다. 조선은 급히 청국에 속할 것이다. 영국은 이를 기뻐할 것인데, 영국은 러시아와 원수이다. 조선은 우리와는 입술과 이 같은 사이이다. 어찌 다른 탄식 소리를 용납하겠는가. 이로써 4국의 인근국은 서로 그 살을 지켜 일부러 다른 욕구를 마음대로 하게 하지 않으니, 천하의 이목이 이를 주시하는 까닭은 여기에 있다. 조선은 작다고는 하지만, 그 관계성을 볼 때 매우 크다.⁴⁾

여기에서는 조선과 일본의 특수 관계를 말하면서 영국과 러시아를 청국보다 침략세력으로 규정하고 있다.

이어 더욱이 러시아의 원대한 계획을 말하면서 “러시아 공사 베베르 씨는 지난 해 도한(渡韓)한 첫 날 연회 석상에서 민씨에 대해 중용하며 말하길, 한국의 땅이 개척하는데 어려움이 있음을 명분으로 내 나라의 힘으로 교각을 바꾸고 고옥(膏沃)의 땅으로 만드는 것에 기한을 기하기 위해 함경·평안북도 일대의 땅을 나눠 대여 받고자 한다 했다.”고 보도하면서 그 의도를 부각시키고 있기도 한다.⁵⁾

그러면서 열강이 조선에 접근한 실상을 전하면서 위기감을 고조시키고 있다. 곧 인천항에 중국 미국 영국 러시아 군함의 정박 사실을 전하면서 다음과 같이 논평을 내고 있

4) 『大版朝日新聞』 양력 1894년 6월 10일. 이하 양력으로 표기할 것임. 당시 언론은 정부의 통제를 받아 정부 발표를 그대로 옮기는 수준임. 이를 어긴 二六新報는 폐간조치를 당했다.

5) 『大版朝日新聞』 1894년 6월 12일.

다.

동양의 대국을 유지하는 것은 이러하다

조선 사건이 일어나자 어떤 제안자는 즉시 러시아와 청국이 동맹하여 영국에 대항할 것이라고 하지만, 이것은 대세에 통하지 않는 것일 뿐이다. 청국과 러시아는 접경의 나라로 이해가 왕왕 서로 상반되며 동양 문제를 처리하는 것이 용이하지 않은 사정이 있다. 청국의 정부를 친한 것으로 따지면 그것은 영국의 것이 안 되는가. 그렇지만 영국은 동양에 관계한 것이 오래됐고 청국의 정부에 가담해 조선의 내사에 간섭하는 것은 안 할 것이다. 북새통에 거문인지 뭇지 자기 사정에 맞게 그 땅을 점령하는 정도로 극대화할 것이다. 러시아라고 하면 즉시 다른 나라를 병탄하려는 것으로 속단하여, 청국 정부가 어떠한 야심을 품고 있어도 러시아에 대해서는 승낙하지 않는다. 애당초 싸울 것이라고 상상하는 자도 있다. 그렇지만 러시아는 원대한 뜻을 품었고 이것을 실행하는 것은 시기상조다. 생각건대 큰 동양의 일이 된 계기는 시베리아 철도가 생긴 이후의 일이다. 그 때문에 러시아도 청국의 조선 정략에 대항해 병력을 이용해서라도 이를 막으려고 할 정도로 결심은 없을 것이다. 이는 또한 분쟁 간의 조금 경역을 넓히려는 가. 아니면 하나의 좋은 항구라도 취하려고 하는 것에 지나지 않을까라고 생각된다. 과연 그렇다면 오늘에 있는 조선의 독립을 부식(扶植)하는 것은 과연 누가 맡을 것인가. 청국과 대항하여 동양의 대국을 유지하는 것도 과연 우리의 일인가.⁶⁾

여기에서는 영국 청국 러시아의 사정을 말하면서 러시아의 이권개입과 진출에 대해 논급하고 이어 일본의 역할을 말하고 있다. 이상이 대체로 본 일본의 언론과 논객들의 논평들이다.

2. 천진조약과 조선의 출병

1) 일본군 출병의 명분

다음으로 중국 일본 두 나라 출병의 배경과 그 명분을 알아보기로 한다.

갑신정변 시기 청군이 일본군과 군사 대결을 벌이면서 일본 군인의 살상, 일본공사관의 피해 등이 일어났다. 일본은 이로 해서 조선에서 한 발 밀려났다. 그리하여 갑신정변의 배상문제를 들고 나왔다. 일본은 청국에 대해 전면 전쟁을 불사한다고 압박했고 청국

6) 『大版朝日新聞』 1894년 6월 13일.

은 복잡한 내정과 열강과 대치하면서 전면전을 수행할 수 없는 처지였다. 그리하여 북양 대신(北洋大臣) 이홍장(李鴻章)은 일본총리대신 이토오 히로부미(伊藤博文)에게 굴복해 보상금 합의를 보았다.

1885년에 체결한 천진조약은 표면으로는 청일조약이지만 한 마디로 말해 조선에 대한 패권싸움을 위한 장치였다. 그런데 그 조항 중 3조에, “조선에 변란이 일어나 출병할 적에는 어느 한나라가 상대국에게 통고하기로(知照出兵) 한다”는 내용이 들어갔다. 이 내용은 이토오 히로부미가 주장해 삽입되었는데 청이 조선 정책에 대해 일방적 간섭을 배제하려는 공작이었다. 겉보기에는 하찮은 장치 같지만 내용으로는 조선의 일방적 군사행동을 견제하는 것이었다.

그 뒤에도 일본은 이 조약에도 불구하고 조선의 패권경쟁에서 밀려나고 있었다. 일본은 군사력의 증강을 통해 호시탐탐, 반전의 기회를 노리고 있었다. 1892-3년 사이 마침내 조선에 사건이 터졌다. 동학교도들이 광화문에서 교조신원과 척양척왜를 주장하면서 먼저 서울 외국공사관에 벽보를 붙여, 돌아가라고 외치기도 하고 보은에서 대대적 집회를 갖기도 했다.

이 시기 일본 내각과 외무성에서는 일본공사관과 거류민 보호를 명분으로 내걸고 출병을 논의하고 육군과 해군은 행동으로 옮기려는 공작을 꾸렸다. 내각총리대신 등에게 보낸 이 관련 의 현지 보고를 보면 다음과 같다.

조선정부와 국민이 점점 증가하는 동학당 군대로 인해 염려스러운 상황에 처해 있어, 일본인 보호를 위한 정책을 찾고 있습니다. 문제는 그들이 비상시에 함대들을 방어를 위한 목적으로 라이플 100자루와 함께 들어왔다는 것입니다. 중국의 두 함대는 며칠 전에 도착하였습니다. 유의하십시오. 그러나, 이는 현 단계에 그리 큰 위협의 우려는 없습니다.7)

또 다음날 기사에는 서울주재 오이시 마사미(大石正己) 변리공사의 보고를 다음과 같이 알리고 있다.

동학당의 세력이 점점 증장(增張)되기 때문에, 조선 관민(官民) 모두가 매우 불안한 모습입니다. 뜻하지 않은 일로 우리 신민(臣民, 일본인) 보호를 위해 군함을 인천에 파견하고, 아울러 그들의 자위(自衛)에 쓸 수 있도록 소총 100정을 보내주기를 바랍니다. 중국 함대 두 척은 며칠 전에 도착하였습니다. 앞에서 이렇게 언급했지만 현재 위급한 상황은 아니라는 점을 알아주었으면 합니다.

7) 『日本外交史料館文書』 1893년 4월 15일.

여기에서는 군함을 파견할 것과 자위를 위해 소총을 보내달라고 요청한 것이다. 오이시는 이어 다음과 같은 의견을 외무대신 무츠 무네미츠(陸奥宗光)에게 알리고 있다.

만약 그들이 일단 결렬(決裂) 상태를 보인다면, 조선정부의 능력으로는 도저히 동학당을 진압하기 어렵습니다. 그러므로 재류(在留) 외국인을 보호할 수 있는지는 경험에 비추어 오히려 어려울 것입니다. 현재 경성에 체류 중인 일본인은 약 700여 명으로, 대부분 당장이라도 참화(慘禍)를 만날 우려가 있습니다. 게다가 경비함 1척이 인천에 정박 중이지만 소형이어서 승선 인원도 소수입니다. 유사시에 충분히 이들을 보호할 수 있을 지 없을 지 매우 어려운 일로 보입니다. 이번에 특별히 군함 한 대를 증파하는 일은 가장 필요한 시기로 생각되므로 서둘러 파견될 수 있도록 전적으로 상의해서 이루어질 수 있기를 희망합니다.

각 국 군함이 속속 인천항으로 출입하는 것으로 보아도 모두 본 건에 우려를 보일 것으로 사료됩니다. 하찮은 관직에 있으면서 쉽게 동학당의 움직임에 대해 관찰을 할 때에는 그들이 주장하는 것처럼 재류 외국인을 축출해야 한다는 것은 자신들의 목적을 관철시키기 위한 수단에 불과하며, 이를 실제로 결행할 만한 용기는 아마 갖고 있지 않을 것입니다. 만약 만일에 하나라도 사건이 발생하여 보호를 하지 못함으로써 17년 전의 행적을 재현하는 일이 일어나 후회하는 일이 없도록 하려면, 미천한 관직의 직책상 만일의 준비를 해두어야 할 필요가 있다고 봅니다.⁸⁾

여기에서는 조선군이 동학당을 진압할 수 없는 상태를 말하고 미리 대비하지 않으면 갑신정변 당시의 실패를 우려하고 있다. 이때의 출병은 표면으로 보면 단순하게 공사관 또는 거류민 보호만을 내세우고 있다. 1893년 보은집회와 원평집회의 동학농민군 집결에 대해 신속하게 대비하고 있는 모습이다. 실제로는 두 집회가 전투를 벌이지 않고 해산한 탓으로 이 계획은 중지되었던 것이다.

다음 1894년 봄 동학농민전쟁이 고부 무장을 중심으로 전개되자 일본과 민씨의 밀정 또는 정보원들이 현지에 침투해 실제 상황을 민첩하게 보고했다. 이들 속에서도 일본 기자 상인 유학생의 활약이 눈부셨다.

이 정보들은 서울에 주재하는 일본공사관으로 신속하게 전달되었고 이어 일본의 내각과 군 첩보기관에 전달되었다. 더욱이 농민군의 세력이 전라도를 휩쓸고 전라감영을 압박하고 충청도 경상도 등 전국적으로 확대될 조짐을 보이는 시기, 일본의 대책은 신속하게 수립되었다.

8) 『日本外交史料館文書』 1893년 4월 10일.

지난 밤에도 전보가 온 동학당의 창궐에 대해 또한 전문에 의하면, 이번 조선의 내란은 지금까지 각지에 봉기한 것과 달리, 군기도 정비되어 있는 모습이다. 또한 500년 마다 혁명이 있다고 하는 예언을 믿고 뇌동하는 자가 지금은 5~6만에 이르니, 조선 현재의 관군으로는 도저히 진압하기 어려워 관군으로 정복할 수 없다. 계속 패배하면 난민은 더욱이 세력을 증가하여 그들의 목적인 국왕 축의 간신, 즉 민씨 일가를 멸하고 서양세력과 일본 세력의 축멸을 실제로 이룰지 모른다. 그렇게 되면 우리 정부로서도 만일의 변에 대비하기 위해 먼저 군함 오시마(大島) 외에 야마토(大和)를 파견해도 이것은 단순한 시위에 머무른다. 난민이 일본인 거류지에 침입한다면 1만 여 거류민을 보호하기 위해 4~5척의 군함으로는 충분하지 않다. 사정에 의하면 육군을 파견하지 않을 수 없을 것이다. 그리고 이 육군 파견은 천진조약(天津條約)에 의해 청국정부와 교섭하지 않으면 안 된다. 그렇다면 사정이 번거롭고 더욱 군함 몇 척을 보내 육전대를 조직하여 거류지를 경비하는 편이 편리하다고 말할 수 있다.⁹⁾

여기에서는 동학농민군의 규모와 위세를 종전과는 다르다는 점을 말하고 해군 육전대를 이용해 거류민을 보호한다는 계획이었다.

이때 오오토리 공사(大島公使)가 현안문제를 상의하기 위해 급거 귀국했다. 이 때 조선의 형세를 다음과 같이 보고했다.

작년 12월 개성부(開城府) 내외에 수 천의 농민이 일시에 봉기해 관리를 구타하고 가옥을 훼손시켰으며, 남대문(南大門)에서 그 세력을 당할 수 없었다고 한다. 격문이 있었는데 그 여러 항목에는 난의 목적을 썼다고 한다. 그 중에서는 ‘일본접생자가훼사(日本接生者家毀事)’라고 되어 있는 내용이 있었다고 한다. 개성부에 체재하고 있는 우리나라 사람 수 명은 겨우 인천으로 도망해 귀국했다. 개성부를 지켜 일이 진정됐다고는 하지만, 장단부(長湍府)의 폭동, 평양의 민란, 또는 함경도의 장진부(長津府), 평안도의 맹산(孟山), 충청도의 강경(江景) 등 도처에서 불온의 기색이 있다. 1894년 2월 개성부에서 1 명의 우리나라 사람이 살해당했다. 또한 부산 근해에서는 2 명의 어부가 죽임을 당했다. 또는 각지의 화약이 홀연히 분실되거나, 보초병들이 도망한다고 한다. 또는 태묘(太廟)에 화약이 있어 국왕 대신을 일격에 분쇄하겠다고 하는 이야기도 있다. 공사가 귀국한 날에 동학당 3,000여 명이 전라도 고부(古阜)에서 일어나 부사를 시작으로 관리 30여 명을 죽이고 바로 경성에 올라가려 하는 세력이 있다고 한다. 이 추세를 보니, 한국 정부의 박약이 거의 극에 달하고 있음을 알 수 있다. 그리고 작은 난이라도 간과할 수 없는 도화선임을 알 수

9) 『日本外交史料館文書』 1894년 5월 23일.

있다.¹⁰⁾

동학농민군이 본격적으로 봉기하기 전의 민란 형태를 두고 반일적 행동을 한다는 것, 고부의 동학농민군이 서울로 올라가려는 행동목표를 두었다는 점을 말하고 있다. 또 츠쿠시 함(筑紫艦)은 홍계훈이 이끄는 관군을 따라 군산(群山)을 향해 출발하였고 오시마 함(大島艦)은 현 상황에서 더 이상의 군함은 필요 없다는 해군대신의 명령에 따라 귀국 길에 올랐다.

또 현재 류큐(琉球) 지방 회항 중인 상비함대(常備艦隊)에도 서둘러 부산으로 회항하도록 해당 장관(長官)에게 전보로 명령을 내렸다.¹¹⁾

또 일본공사관에서는 민요(民擄)에서 재류자(在留者) 보호에 관한 건(件)의 승인을 요청하는 문서를 다음과 같이 보냈다.

이번에 조선국 남부지방에서 발생한 갑작스런 민요(民擄)에 관해서는 오늘 날짜 공신(公信) 제57호를 통해 말씀드린 대로, 형세의 변화는 앞으로 일에 따라 중요하나 헤아리기가 어렵습니다. 또한 이번 민요를 계기로 현 정부 당정자(當政者)의 시정(施政)을 달가워하지 않는 불평당(不平黨) 무리들이 이곳 경성에서 폭발하는 일이 없을 것으로 보장할 수 없으며, 혹은 대원군(大院君)으로 하여금 꺾기하게 할 경우도 있을지도 모릅니다. 조선정부에서도 이미 같은 우려를 하고 있습니다.

이러한 사건이 폭발하면 이곳 경성의 일은 토붕와해(土崩瓦解)의 상황이 나타날 것이며, 이러한 경우 당연히 경성에 있는 일본인 보호를 당 정부만 의존하는 것으로 만족할 수 없습니다. 사전에 보호를 위한 방도를 강구하는 것이 현재필요하다고 서로 인정하기에 이르렀습니다. 이러한 상황도 있으며 사정이 절박해지는 경우에는 이곳에 주재하는 임시대리공사와 협의하여 즉시 인천에 정박하고 있는 제국군함(帝國軍艦)의 수병(水兵)을 상륙시켜 입경(入京)하도록 하고자 합니다.¹²⁾

일본의 이런 일련의 조치와는 달리 조선이 진행시키는 외병 청원에 대해서는 그 반대의 논리를 펴고 있다.

난민의 기염이 용이하지 않으므로 한국 정부는 이를 깊이 우려해 외병의 힘을 빌려 진압하려는 뜻이 있었는데 이렇게 돼서는 자주자호(自主自護)의 큰 뜻에 역행하는 것이고 외국 간섭의 단서를 초래하며 또한 일본과 청국, 양측

10) 『日本外交史料館文書』 1894년 5월 23일.

11) 『日本外交史料館文書』 1894년 5월 23일.

12) 『日本外交史料館文書』 1894년 6월 3일.

의 병사들을 빌려도 현재 조약이 어떤지. 만약 이를 어기고 돌아보지 않을 수 있는가. 양국 싸움의 발단은 급격히 열려지고 팔도를 들어 일청 교전의 장이 되기에 이를지도 모른다. 한국이 무사히 10년을 지내온 것에 하나는 조약이 있기에 가능했다. 이를 무시하고 함부로 외병 청원을 주장하는 것은 너무 생각이 없는 것이라고, 단연 이를 배척하게 될 것이다.¹³⁾

언론을 통해 조선 조정에서 벌이는 청군의 파견을 반대한다는 논지를 펴고 있는데 첫째 자주역의 역행, 둘째 전쟁의 유발에 초점이 맞추어져 있다.

한편 외병차입을 반대하는 여론이 들끓었는데 <외병 차입의 망의(妄議)>라는 논설을 보면 이리하다.

동학당의 폭거진압을 위해 파견한 관병은 연전연패하여 한 번도 공을 세울 적이 없다. 초토사는 원군을 하루라도 빨리 일을 재촉하였다. 사졸은 날이 지남에 따라 적에게 투항하고, 양식은 계속 배급이 안 됨을 호소하는데, 적병은 대단히 창궐하여 곧 경성에라도 침입하려고 한다고 보고하는 자가 있어 경성이 위급하고, 저녁에 공격한다는 자도 있어, 여하히 한정 내에서는 많은 속물의 간담을 서늘하게 하였다. 여기에 이르러서인지, 외병 차입의 의논은 일찍이 조정의 내부에서는 일어났다. 영국에서 빌릴 것인가, 러시아에서 빌릴 것인가, 장차 중국에서 빌릴 것인가, 일본에서 빌릴 것인가의 연구는 시작하였다. 그러나 내란을 진정하는데 외병을 차입하는 것은 이미 자주자호(自主自護)의 본지(本旨)에 어긋날 뿐 아니라, 마침내 외국간섭의 단초를 열게 되고, 그 후의 근심을 말하지 않을 수 없고, 차라리 근기(近畿)의 병사를 다하여 정토군을 증발(增發)시키기로. 결국은 이 같은 경직(硬直)된 주장이 승리하였기 때문에 외병차입의 망의는 일시 중지하는 모습이 되었지만, 형세는 날로 잘못되어 결과는 드디어 한정으로 하여금 청국에 출병을 의뢰하지 않을 수 없게 하기에 이른 것은 말할 필요도 없다.¹⁴⁾

또 출병을 반대하는 이런 논지도 있다.

특히 지금은 이미 우리정부가 이웃나라를 위해 출병(出兵)하여 급히 나가, 조선의 국민으로 하여금 우리 제국의 높은 뜻에 따르게 하고, 그리하여 구원(舊怨)을 버리게 하려고 하는데 어찌 소홀히 하겠는가? 그렇지만 또 뒤집어 생각해 보면 원래 우리나라의 정책이 조선에서 실패한 것은 중국과의 교섭에 기인하는 것이다. 그런데 지금 이 좋은 기회도 또한 중국정부와 분요(紛擾)가

13) 『大版朝日新聞』 1894년 6월 1일

14) 『內亂實記』의 朝鮮事件에 나옴. 岡田庄兵衛 編.

일어나는 일이 없을는지?15)

또 러시아출병을 반대하는 논지도 펴고 있다.

청국이 조선국을 향하여 출병함과 동시에 러시아 또한 동국을 향하여 출병하였다는 소문이 있으나 러시아가 과연 조선에 군대를 했다고 하면 그 병사는 반드시 블라디보스톡항 근처에 둔채하고 있는 육국일 것이다. 블라디보스톡항 근처에 둔채하고 있는 러시아 군병의 수는 1만 5, 6천 이하가 아니다. 또 동항에 정박한 함대는 상비함대 12척으로 조직되어 있고 그 외 의용함대 6척이 있어, 이상 18척의 군함은 항상 동항 근해에 출몰하여 갑자기 일이 있을 때는 바로 집합할 수 있는데, 이번에 러시아가 조선에 출병했다고 하면 이 블라디보스톡 근처에 주둔해 있는 육군 군대 중에서 파견한 것이라고 러시아의 형세에 정통한 사람은 말하였다.16)

러시아의 극동함대와 육군의 파견을 우려하고 있는 것이다.

2) 대륙진출의 공작

어쨌든 여러 논의를 거친 끝에 마침내 일본군은 출병을 단행했다.

요미우리(讀賣)신문이 육군성의 유히(允許)를 얻어 게재한 것을 보면, “동학당의 위세는 점점 창궐하여 조선 정부의 힘이 능히 이를 진압할 수 없는 상황에 이르러서 조선에 있는 일본 공사관, 영사관 및 국민보호를 위해 군대를 파견하였다. 따라서 우리 정부는 앞의 출병을 중국정부에 지조(知照)하였다. 중국 정부로부터도 조선정부에 지조가 있었다. 그리하여 파견된 군대는 제4, 5사단병으로 조직된 혼성여단으로 6월 9일 히로시마(廣島)현 우시나(宇品)항에서 운송선으로 출발하였다”고 보도했다.17)

또 이 무렵 조일신문에는 「보호인가 진정인가」라는 논설을 게재했다.

조선의 화기(禍機)가 한번 파열하여 지금은 도천(滔天)의 세력이 되었다. 서쪽의 근린 청국은 접양의 땅인데 이를 도외시 하지 못하고 이미 1,500 명의 병사를 보내어 여기에 머물게 하고 있다. 이것은 말할 것까지도 없는 폭민정토(暴民征討)를 위한 것이다. 이렇기 때문에 우리나라에서도 벌써 두 손 놓고 좌시할 수 없는 것이다. 당국자의 방략은 모른다. 우리가 보는 바로는 정치

15) 『內亂實記』의 朝鮮事件에 나옴. 岡田庄兵衛 編.

16) 『內亂實記』의 朝鮮事件에 나옴. 岡田庄兵衛 編.

17) 『讀賣新聞』 1894년 6월 9일.

상·무역상 관계가 두터운 그들이 이처럼 조선의 요란도 하늘에 부는 바람이라고 간과하지 않는다면, 당연히 다소의 병사를 보낼 것이다. 과연 병사를 안 보낼 것인가. 무엇으로 주 목표로 해야 하나. 거류인민의 보호는 물론이다. 한쪽에서는 보호에 머물 것인가. 또는 이르기를 조선이 우리와 대단한 교의가 있다. 이번에 일을 잘 진척시켜서 반란을 진정시키는 것에 무슨 상관이 있겠는가 하고 말하는데, 그렇다면 만약 출병할 경우에 시의에 따라 정벌할 수도 있을 것이다. 단순히 거류지 수호에 머무는 것이 아닌가. 그 상황의 일은 지금부터 언급하는 것이 필요 없겠지만, 이것 또한 전혀 쓸데없는 일은 아닐 것이다.¹⁸⁾

단순하게 거류민 보호만이 아니라는 점을 강조하고 있는 것이다.

한편 조선 조정의 사정은 복잡하게 돌아갔다. 집권세력의 중심인물인 민영준은 정보를 수집해 분석한 결과, 지방 친군영(親軍營)의 군대와 중앙 군대로는 농민군을 막을 수 없다고 판단했다. 그리하여 사적으로 원세개에 접근해 지원군 파견을 요청했고 이어 의정부와 고종에게도 청병 요구의 불가피성을 설득했다. 한편으로는 원세개가 청군 출동을 민영준에게 은밀하게 공작했다고도 한다.(『조선폭동실기』 등 일본 정보분석가들의 판단) 게다가 초토사 홍계훈이 이끄는 장위영병이 장성전투에서 패전하고 전주 감영을 농민군에게 점령당한 뒤 현지의 실정을 전달하면서 청군 파견을 요청하기도 했다. 그리해 의정부가 동의해 고종의 재가를 받았다.

그 결과 마침내 청군 파견이 결정되었다. 이홍장은 천진조약에 따라 조선 출병을 일본에 통고했고 이홍장과 원세개의 지시를 받은 청군의 지휘부인 정여창(丁汝昌) 섭지초(葉志超) 섭사성(聶士成) 등은 군함을 이끌고 인천 앞바다로 향했고 이어 아산에 상륙했다.(戚其章의 『갑오전쟁사』 등) 일본도 짜인 각본대로 천진조약의 '지조 출병'을 구실로 내각의 결의를 신속하게 거쳐 군함을 부산항과 인천항으로 파견했다.(『일본외무성의교사료 관문서』 등) 당시 인천항 월미도 앞에 정박한 군함의 수를 보면 청 군함 3척, 일 군함 8척 외에 프랑스 러시아 미국 영국의 군함 각 1척 등 모두 15척이었다. 일본 군함이 압도적으로 많았다.

이런 정세를 파악한 열강들, 곧 영국 프랑스 미국 독일은 발해만 입구의 군항인 지부(芝罘, 오늘날의 연대)와 일본의 나가사키항에서 정박하고 있는 군함들을 출동시켰던 것이다. 특히 러시아에서는 시베리아의 부동항인 블라지보스트르크에서 정박 중인 군함을 동해로 파견해 원산 앞바다를 순양했는데 상륙작전을 할 듯이 행동을 취하고 있었다. 이들 군함 출동의 구실은 모두 표면으로는 거류민 보호라 했는데 실상은 달랐다. 앞에서 말한

18) 『大阪朝日新聞』 1894년 6월 8일.

대로 당시 미국은 거류민 80여 명, 영국은 수병 25명 등 몇 십명 단위의 적은 숫자였다. 다시 검토해 보면, 일본의 출병 이유는 총괄해서 첫째 거류민을 보호한다는 것, 둘째 조선 독립국을 인정하고 조선 독립을 위해서라는 것, 셋째 조선 내정을 개혁한다는 것, 넷째 청국의 패권을 견제하고 동양평화를 위해서라는 데에 초점이 두어졌다.(函南逸人편의 『갑오조선내란시말』 등) 일본 정부는 그 동안 “세계의 눈이 동아시아 일주에 모여 있다 … 일거 일동이 동아의 대세에 지대한 영향을 미친다”라는 따위의 일본의 국익과 결부시켜 여론을 환기시켜 왔다. 위의 출병 조건은 표면에 내건 하나의 구실이었고 실제로는 침략적 의도를 가졌던 것이다.

3. 일본의 지배권 확보와 농민군 토벌작전

1) 군사지휘권 확보와 분열공작

전주에서 동학농민군이 후퇴해 집강소 활동으로 들어가자, 조선 정부에서는 청일 두 나라의 출병 조건이 사라졌다고 해 출병 중지를 요청했다. 또 전주를 점령하고 있던 농민군들도 이런 정세를 파악하고 전주성에서 후퇴해 출병의 조건을 해소하려 했다.

이런 상황에서 일본은 다시 다음과 같은 현실관을 보이고 있었다.

오랜 논객의 이야기로, 동야문제도 바야흐로 실제 해석될 시기에 도달했다고 한다. 조선의 사변은 내란일 뿐이다. 폭민의 함부로 날뛰는 것만 웅방정예(雄邦精銳)의 병사로 응한다면, 마른 초목이 부러지는 것과 같이 될 것이다. 그러나 폭민의 미약하다고 해서 작은 일이라고 생각하는 것은 물건식에 이를 것이다. 청국의 조정이 대병을 보내어 국경에 들어온 그 뜻이 어찌 동학당의 진압을 위해서만 그치겠는가. 오합지졸의 폭도를 정벌하기에는 1~2개의 대대로 충분할 것이다. 수천, 혹은 1만 여 명의 대군으로 하는 것은 오히려 소를 잡는 칼로 닭을 베는 것과 같지 않은가. 이홍장의 지혜가 줄계(拙計)에서 나오지 않는 것을 아나니, 청국 조정의 뜻은 이번 기회에 편승해 크게 원하는 것을 얻도록 하는 것에 있는 것이니, 조선의 큰 근심은 동학당에 있는 것이 아니라 다른 곳에 있나니 그 독립이 실로 위험에 처해 있는 것이다. 이른바 존망의 갈림길이 오늘날에 있다. 그리고 조선의 지세는 동양의 관쇄(關鎖)이다. 먼저 이를 쥐는 자가 우위의 지위에 선다. 이와 밀접한 관계에 있는 자가 환시(環視)하여 이를 맡을 것인가. 보고 또 보아 조선의 독립이 잃게 되는 것을 좌시할 것인가. 조선의 멸망으로 동양의 평화를 유지하기에 해가 있다고 하는 자도 수수방관하지 않을 것이다. 이번 청국 출사의 경우에 따라서는 동

아 대란의 단초가 되는 것도 또한 아직 모른다. 러시아 병사는 이미 국경을 넘었다고 전해지지 않는다. 물론 러시아의 형세가 지금 잠식의 뜻을 왕성이 하고 있다고도 할 수 없다고는 하지만, 어쨌든 이번의 변은 일이 작지 않을 것이다. 다년간 품은 화기의 끝이 파열한 사태이다. 어찌 가벼울 수 있을까. 조선으로 동양의 발칸 반도로 삼는다는 것이 오늘에서야 증명됐다고 할 수 있겠다.¹⁹⁾

여기에서는 조선의 독립과 동양의 평화를 논하고 있다. 일본은 조선을 청나라의 간섭으로부터 벗어나는 전략을 추구해 왔다. 또 동양의 평화를 주장해 왔다. 이 두 가지는 조선을 중립국으로 만들어 열강의 간섭을 통제해 일본의 지배권을 강화하자는 것이었고 동양평화론을 통해 러시아 등 열강의 입김을 배제하려는 음모였다.

그런데 일본은 대본영의 방침에 따라 엉뚱하게도 육전대를 상륙시켜 이해 6월 경복궁을 강점하고 이어 홍선대원군을 추대하고 개화정권을 출범시켰다. 쿠타타를 단행한 것이다. 개화정권은 일본의 사주에 따라 신속하게 이른바 갑오개혁을 단행해 조선의 내정개혁을 실현시켰고 동학농민군이 요구하는 개혁 곧 양반 특권을 배제하는 신분제 철폐, 조세의 금납제로 부정행위의 방지, 부정으로 얼룩진 과거제의 철폐 등을 단행했다.

또 개화정권은 일본이 요구하는 전신가설 등 당면의 이권을 넘겨주었으며 심지어 군사 지휘권마저 인계했고 전쟁 수행 중의 양곡 등 물자의 공급을 약속했다. 서울을 비우고 있던 청군이 손쓸 새도 없이 신속하게 진행되었다.

일본군 지휘본부는 용산에 기지를 두고 각지로 출동했는데 인천항 앞바다에 정박하던 일본 군함은 선전포고도 없이 청국 군함을 공격해 침몰시켰다. 아산일대에 상륙한 청국군과 전투를 몇 차례 벌여 일방적 승리를 기록했다. 청국군 패잔병은 공주 청주 등지를 전진하기도 했고 남쪽으로 분산하기도 했는데 주력부대는 북상했다. 일본군은 북상하는 청국군을 추격하다가 증파된 청군을 평양에서 대회전을 벌여 결정적으로 승리했다. 증파된 청국군은 평양에서 패전했고 일본군은 계속 추격해 압록강을 넘었고 발해만 일대와 황해의 위해(威海) 앞바다에서 벌인 전투에서도 승리했다. 남하한 패잔 청국군은 충청도 일대에서 약탈을 일삼기도 하고 농민군에 끼어들기도 했다.

동학농민군은 전주에서 후퇴한 뒤 집강소 활동을 전개했다. 7-8개월 동안 집강소 활동을 벌이면서 반봉건 청산에 나섰다. 다른 지역에서도 집강소 활동을 부분적으로 전개했다. 더욱이 일본군이 경복궁을 점령하고 개화정권을 수립하는 정세를 보고 반일감정이 더욱 고조되었다. 동학농민군은 보은집회와 원평집회 이후 척왜양창의기(斥倭洋倡義旗)를 내걸었으나 그 구체적 행동계획은 1차 봉기 단계에서는 분명하게 표현되지 않았다.

이 시기, 일본의 공작대가 전봉준을 방문해서 조선의 개혁과 동양평화를 역설하는 일

19) 『大阪朝日新聞』1894년 6월 9일자 “동아문제”.

이 있었다. 일본의 낭인들(자신들은 俠客이라 불렀다) 천우협(天佑俠)이라 부르는 이들 14명은 일본에서 공작대를 결성하고 부산을 거쳐 조선에 상륙했다. 일본군 장교출신인 다나카 시로(田中侍郎), 승려출신인 다케다 한시(武田範之) 등이 인솔한 이들은 집강소 활동을 벌이면서 임실에 머물고 있는 전봉준을 방문했다. 그들은 전봉준에게 조선 개혁을 위해 돕겠다는 뜻을 나타냈으나 전봉준은 정중하게 거절했다. 전봉준이 다시 전주로 와서 집강소를 지휘하고 있을 때 이들은 다시 방문해서 거듭 돕겠다는 뜻을 전했으나 다시 거절했다.(『동아선각지사기전』 등)

또 일본 육군 군사(軍司)대위 출신인 우미우라 아츠미(海浦篤彌) 등 3명의 공작 패거리들이 전봉준을 만나러 충청도 보은과 전라도의 금구 원평을 거쳐 능주로 내려갔다. 전봉준은 당시 집강소 조직을 독려하려 전주에서 나와 원평을 거쳐 남도로 내려가 능주에 주재하고 있었다. 일본 공작 패거리들은 전봉준을 향해, 조선의 내정 개혁에 힘을 보내겠다는 것, 조선 독립을 방해하는 청군을 물리치는 데 협조하겠다는 것 따위를 제의했다. 전봉준은 다시 정중하게 거절했다.²⁰⁾

아무튼 이들은 전봉준의 설득에 실패하고 서울로 잠입하기도 하고 아산만의 일본군에 접근해 청군의 이동 통로와 지형 등 군사 정보를 전달하기도 하고 황해도로 진출해 첩보활동을 벌이기도 했다. 또 전봉준이 체포되어 서울 일본영사관 감옥에 갇혀 있을 때 다나카 시로(田中侍郎)은 죄수로 가장해 전봉준의 회유에 나서기도 하였고 다케다 한시(武田範之)는 장문의 편지를 사형선고를 받은 전봉준에게 보내 회유공작을 벌이기도 했다.(대동국남의 <이용구의 생애> 등)

하지만 이들은 개인 또는 사설의 공작대였다. 그래서 사사로이 공작금을 마련하기도 하고 창원의 일본인 경영의 광산에서 화약을 탈취하기도 했다. 또 민비시해사건에도 끼어들어 한 역할을 하기도 했다. 이들을 일본에서는 선각자 지사 의사라 불렀다.(『東亞先覺志士記傳』 등에 나옴)

말을 돌려, 동학농민군 특히 전봉준이 이끄는 남접 계열은 집강소 기간 양곡과 무기를 확보하고 농민군 훈련을 거듭한 끝에 이해 9월 2차 봉기에 나섰다. 2차봉기에서는 분명하게 침략자 일본에 대한 전면적 항거와 일본의 하수인인 개화정권의 타도를 내걸었다. 일본군의 토벌작전은 군사지휘권을 거머쥐고 개화정부의 지원을 받아 치밀하게 전개되었다.

2) 토벌작전의 지휘

일본 토벌군의 진로를 간단하게 요약해보자. 처음에는 용산에 주둔한 독립 18대대를 투입했다가 곧이어 19대대로 교체했다. 미나미 지로(南次郎)이 지휘하는 19대대는 남진

20) 『東學黨視察日記』에 나옴. 필자는 海浦篤彌이며 『日本人』 18호(1895년)에 게재.

의 진로를 3부대로 편성했다.

이들 일본군은 모든 조선의 중앙군 곧 신식훈련을 받고 신식 총으로 무장한 교도중대, 경리청, 통어영 장위영 등의 부대를 각 중대와 소대에 배속시켰다. 또 이해 9월 조선정부에서 토벌군의 총지휘로 순무영(巡撫營)을 발족시켜 좌선봉장 이규태, 우선봉장 이두황을 임명하고 일본군과 협력해 토벌전에 나서게 했을 때 이들의 작전 지휘권도 행사했다.

서로 진군부대는 천안을 거쳐 공주로 진하면면서 이규태를 데리고 다녔고, 중로 진군부대는 평택을 거쳐 청주로 진군하면서 중간에 서로군과 협력하게 했다. 동로 진군부대는 경기를 벗어나 충주로 진군하면서 현지 조선의 협력을 얻게 했다. 정토군(征討軍)의 총 지휘자는 일본군 소좌인 미나미 쇼시로(南次四郎)이었다.

이들 삼로군 외에 시시각각 변하는 작전에 따르게 했는데 황해도 해주 일대에 1개 중대, 제천에서 강원도 일대에 1개 중대, 부산에서 해군 육전대를 통영을 거쳐 진주 하동으로 진출하게 했다. 각 부산에서 서울에 14개 병참부를 두고 군대를 주둔시켜 전선을 가설해 보호하고 지역 소요에 출동시켰다.

외교사료관소장문서의 자료에 나타난 동학당 초토기의 내용을 요약하면 다음과 같다. 종군기자가 작성한 것이다.

동학당 토벌의 계획은, 후비 보병(後備步兵) 〇〇대 제19대대는 동학당 정토의 명령을 받아, 1894년 11월 12일 용산 창사(廠舍)를 출발해, 이노우에(井上) 공사 이토(伊藤) 인천 병참사령관(仁川兵站司令官)의 훈령에 의해 3곳으로 분산하여 전진했다. 즉 제1중대는 동쪽으로 충주(忠州)·가흥(可興)을 지나 대구(大邱)에 통하는 도로이다. 제2중대 및 대대 본부는 가운데 길로 죽산(竹山)·청주(淸州)를 지나 황간(黃岡)에 통하는 도로를 취해 점차 동학도를 전라도의 서남쪽으로 몰았고 이를 초멸하려는 계획이 있었다. 그리고 서로분진대는 공주 진주를 거쳐 전라도 아래 지역으로 진격했다.

이 종군기자의 기록에는 장흥전투 사실이 누락되어 있다. 어쨌든 정부군과 관계되는 사실을 덧붙여 요약하면 다음과 같다.

일본 정토군(征討軍)의 작전 계획은 조선의 요로를 완전 장악해 농민군의 활동 진로를 차단하고 농민군 연합을 가로막는 데에 있었다. 따라서 경상도와 충청도 농민군이 강원도 산악지대로 진출하는 길을 막고 황해도 농민군과 평안도 농민군 연합을 막으며 부산 대구의 통로를 석권해 농민군을 남해 쪽으로 밀어나며 마지막 경기도와 충청도, 경상도, 전라도로 몰려오는 농민군을 남해안으로 몰아내 섬멸한다는 것이다. 농민군이 섬으로 들어갈 경우, 도가니에 들어간 쥐를 색출해 완전 소탕한다는 것이다.

이런 속에서 우선봉 이두황은 보성 순천에서 장흥으로 진군하면 순천 농민군의 합류를 막았으며 좌선봉 이규태는 무안 영암 등지에서 배상옥 농민군의 장흥진출을 막았다. 부산 주둔의 일본군은 섬진강에서 부산으로 귀환했으나 군함 쓰쿠바(筑波號) 등 2척의

군함은 인천에서 이동해 남해로 진출하면서 여수 좌수영을 지원했고 이어 이들 육전대가 상륙하거나 섬을 순회하면서 농민군 색출에 나섰다.

미나미가 지휘하는 일본군은 철저하게 장흥작전을 수행하면서 나주 초토영에 별도의 지휘부를 설치하고 농민군 지도자의 체포와 신병 확보와 심문을 맡았다가 중죄인을 가려 서울로 압송하는 역할을 했다.

4. 대대적인 정토군 환영식

하지만 아직도 하나 빼놓을 없는 남은 이야기가 남아 있다.

아무튼 장흥전투와 북실전투가 끝난 뒤 2월 중순, 일본군의 원대 귀환령을 내렸다. 다시 설명하면 정토군 제19대대의 제1중대와 장위영병 2중대로 구성된 동로분진대, 제19대대의 제2중대와 제18대대의 일부 부대와 교도중대 및 19대대의 본대로 만들어진 서로 분진대, 제19대대의 제3중대와 장위영병 300명으로 구성된 중로 분진대, 그리고 황해도에 출동했던 일본군 등, 이들 일본군과 조선군 전원이 군부대신 조희연(趙義淵)의 환영을 받으면서 2월 28일(양력) 오후 4시가 넘는 시각, 용산 만리창 들판에 정렬했다. 눈이 훑날리고 있었다. 모인 장병은 2천여 명이 되었다.

군무협판 권재홍은 지휘관 미나미 소좌에게, “이웃 나라의 친분으로 이 오한의 날씨에 험준한 산곡을 지나 많은 고난을 거쳐 우리나라를 위해 동학당 비도를 초토하고 우리나라의 치안을 보존하며 우리 백성을 도탄의 고통 속에서 구하니 짐은 깊이 그 높은 뜻을 찬탄하고 위로의 말을 전한다”라고 적혀 있는 임금의 유시를 전달하자 미나미는 이를 전군을 향해 봉독하고 나서 “대조선국 대군주 폐하는 특별히 불초 등이 동학당 토벌의 공을 이르시어 개선함을 기뻐하시고 거룩한 칙어를 주시니 일동은 모두 황송하기 그지 없습니다”라는 답사를 했다. 미나미의 선창으로 모든 군인들이 “대군주 폐하만세”와 “대일본 황제폐하만세”를 삼창했다. 다음날 오후 고종은 일본군 장교 35명과 용산수비대장 경성수비대장 인천병참사령관 용산병참사령관 등 주둔 일본군 장교를 경복궁으로 초대해 잔치를 베풀고 정토의 실상을 들었다. 이노우에 일본공사도 동행했다. 연회 자리에는 왕태자를 비롯해 총리 그리고 여러 대신들이 배석했다. 고종은 먼저 일본 장교들의 전공을 낱낱이 듣고 치하를 했으며 다음으로 조선군 장교를 격려했다. 다음으로 참석자 모두 대군주 폐하 만세를 삼창하고 나자, 내무대신 박영효가 일어나 잔을 들고 다음과 같은 환영사를 했다.

제군은 어디까지나 자국의 일을 보는 듯 우리나라를 위해 전력을 다해 주었다. 이에 진심으로 감사를 드린다. 특별히 여러분의 덕분으로 국가와 국민의

일대 우환인 동학의 대내란을 진정시킨 것은 성심을 다해 국가를 위해 한 일로 만강의 사의를 표한다.²¹⁾

다시 만세 삼창이 울려 퍼졌고 질펀한 요리와 맛있는 술로 여흥을 즐겼다. 이들은 선물 꾸러미를 들고 나와 다시 본영에서 환영 잔치를 벌였다. 또 미나미 소좌와 황해도 정토를 지휘한 나카야마 중위, 스즈키 소위 등이 의정부에서 대신들과 협판들과 고위 관리 및 외국 고문관을 모아놓고 특별한 전말을 알려주는 자리도 베풀었다. 이들은 연달아 초대에 참석하기도 하면서 대대적인 환영과 푸짐한 선물을 받았다.

이럴 때 동학농민군과 그 가족들은 수성군 민포군에게 죽임을 당하거나 산골이나 섬으로 도망쳐 기아에 허덕이거나 재산을 빼앗기는 처참한 신세가 되고 있었다.

그러니 개화정권의 정토군 환영 행사는 누구를 위한 것인가? 일본군의 승리를 축하하는가, 고종과 조선의 안녕을 위한 것인가? 이를 통해 우리는 민족적 모순과 갈등을 새삼 떠올리게 된다.

5. 일본군의 청일전쟁 승리와 동아시아의 변동

한편 청일전쟁의 승리를 확신한 일본은 내친 김에 군사를 중국 남쪽 바다에 투입해 대만(臺灣)과 팽호(澎湖)열도에 군사행동을 감행했다. 일본군은 신속하게 두 지역을 석권했다. 앞뒤로 완전하게 숨통을 끊어놓으려는 작전이었다. 1895년 3월에 들어 휴전이 성립되었다.

그러면 군사적 우월을 확인했는데도 왜 북경 등 중국 본토에 상륙하지 않고 휴전을 하고 강화를 서둘렀는가? 당시 중국은 두 가지 현상이 일어나고 있었다. 하나는 국내문제 혁명운동이 일어나는 조짐이 팽배했다. 이 혁명운동이 일어나게 되면 봉건왕조는 타도되고 강력한 민국(民國)이 태동되어 강력한 정부가 들어서서 역사적 코스를 밝게 된다. 열강은 이를 두려워했다.

국제문제로는 열강이 일본이 연전연승하는 모습을 보고 청국이 와해하는 결과를 우려했다. 게다가 일본의 일방적 승리로 끝나면 열강은 중국 침략에 장애가 온다고 판단했다. 중국이 더 약해지면 침략에는 손쉬울지 모르겠으나 “아시아의 헌병”을 자처하는 영국은 오히려 일본에 주도권을 내주게 된다고 보았던 것이다.

이런 국제문제를 소홀하게 다루지 않은 일본은 북경상륙을 중지시킬 수밖에 없었다. 일본군은 청일전쟁을 승리로 장식한 뒤 전쟁 배상에 나섰다. 치욕의 패배를 겪은 이홍장

21) 『大版朝日新聞』 1895년 3월 15일. 이 관련 기사는 다른 경우와는 달리 여러 조항으로 나누어 상세하게 다루고 있다.

은 풀이 죽은 모습을 하고 1895년 3월경 일본의 시모노세키로 갔다. 대청국의 총리대신 이요 노정치가인 그는 이토 히로부미의 위세 앞에 한 마리의 양순한 원숭이에 지나지 않았다. 이해 4월 17일에는 강화조약이 성립되었고 이어 이해 8월 1일에는 시모노세키(馬關)조약의 조인이 이루어졌다. 이 조약의 요지는 다음과 같다.

- 1) 조선의 지배권을 확립한다
- 2) 요동반도와 대만과 핑호제도를 분할한다
- 3) 배상금은 2억냥(일본 화폐 3억엔)으로 한다
- 4) 일본에게 다른 열강과 동등한 특권을 인정한다

이를 다시 요약해 설명하면 청나라는 조선의 독립을 인정하고 일본은 조선에 대해 정치 군사 경제의 지배권을 강화하려는 것이다.²²⁾(주 21

일본은 경복궁 쿠데타를 통해 괴뢰정부인 개화정권을 탄생시켜 내정간섭을 확보하고 동학농민군을 토벌해 군사적으로 실질적 지배를 강화했다. 이어 청일전쟁을 도발해 약 7개월 동안 전쟁을 벌인 끝에 조선에서 청의 종주국 주장을 배제하고 덤으로 세 지역의 땅을 확보했다. 따라서 일본군이 명치유신 이후 조선을 향한 정한론(征韓論)을 펴고 청을 겨냥한 동양평화론을 주장해 왔는데 일거에 이를 실현시킨 것이다.

하지만 열강은 2단계로 이를 국제문제로 등장시켰다. 이를 지켜본 러시아 프랑스 독일은 일본을 향해 국제법을 위반했다는 따위로 일본을 비난하고 나섰다. 특히 영국 러시아 독일은 직접적으로 간섭하고 나왔다. 마침내 영국 프랑스 독일은 일본에 강요해 예의 동양평화를 들고 나와서 요동의 할양을 방해했으며 러시아는 더욱 강경해 요동의 반환을 요구하고 나섰다. 일본은 더 버티지 못하고 요동을 반환하는 조치를 단행했다.

한편 전봉준은 1895년 2월 20일(양 3월 16일) 법무아문에서 심문을 받으면서 “나는 죽음을 각오하고 있다. 그러나 내가 죽은 뒤 8도는 다시 한 사람의 의사가 나와 나의 뜻을 이어 우리 국가를 멀리 일본의 병탄아래 놓이지 않게 할 수 있을지, 없을지 생각이 이에 미치면 죽어도 눈을 감을 수 없다”고 결연히 말했다.²³⁾

아무튼 일본은 국제적으로는 분쟁의 꼬투리를 연출했으나 조선의 국내문제에는 실질적 지배를 시도했다. 열강의 간섭을 지켜본 고종과 왕비는 새로운 설계를 모색했다. 친러파를 동원해 러시아의 남진정책을 간파하고 접근케 했던 것이다. 이를 두고 벼랑 끝 외교라 부른다. 일본은 이를 간파하고 외교관과 낭인패와 친일파를 동원해 1895년 8월 왕비를 살해했다. 민비살해사건은 국내와 국외문제로 떠올랐다.

일제는 러일전쟁을 승리로 이끌고 나서 대한제국을 반식민지로 만들었으며 끝내 1910년 완전 식민지로 지배했다.

22) 『日本外交史料館文書』 1895년 8월 1일.

23) 『大阪 朝日新聞』 95년 3월 17일자, 동학농민전쟁사료총서 22책.

02

『均菴丈 林東豪氏 略歷』에 나타난 北接農民軍의 移動路와 海月 崔時亨

申榮祐(충북대)

『均菴丈 林東豪氏 略歷』에 나타난 北接農民軍의 移動路와 海月 崔時亨

申榮祐(충북대)

1. 머리말
2. 京畿道 北接農民軍의 忠州 黃山 집결
3. 황산 北接農民軍의 보은 이동 과정
4. 北接農民軍의 指揮部 구성과 公州 · 文義 出陣
 - 1) 북접농민군의 공주 우금치 · 원평 · 태인 전투
 - 2) 북접농민군의 문의 · 지명 전투
5. 海月 崔時亨의 移動과 복실 전투
 - 1) 최시형의 피신과 충청도 귀환
 - 2) 보은 복실전투와 음성 되자니전투
6. 맺는 말

1. 머리말

북접농민군의 통령 손병희가 영동과 황간에 분산 주둔하고 있던 대규모 부대를 출발시킨 날은 1894년 10월 23일이었다. 동학교주 최시형이 기포령¹⁾을 내린 직후 집결하기 시작했던 북접농민군은 약 한 달만에 보은 옥천 영동 일대에서 떠나 동학 교단의 근거지였던 충청도 동남부에는 무장한 세력 집단이 존재하지 않았다.

최시형이 9월 18일 내린 기포령은 동학 대도소가 있던 보은 장내리로 “각포의 도인을 招集”하라는 것²⁾이었다. ‘초집’하라는 말은 당시의 상황을 고려하면 무장봉기하라는 지시였다. 실제로 남접농민군의 영향을 받던 지역이 아닌 충청도와 경상도 그리고 경기도와 강원도 및 황해도 각지의 동학 조직은 이때부터 무장봉기의 소용돌이에 급속히 들어가고 있었다.✓

1) 음력. 양력은 10월 17일.

2) 『天道敎書』 布德 35年. “9월 18일에 神師 道人 慘殺의 報를 聞하시고 將次 天階에 叫冤코자 하사 통유 문으로 각포 도인을 招集하니”.

동학농민혁명 연구에서 북접농민군의 결성과 활동 사실을 밝히려는 구체적인 연구는 아직까지 시도되지 않았다. 그것은 무엇보다 자료의 부족이 원인이었다. 북접농민군에 관한 자료는 발굴되지 않았고, 진압군측의 자료는 남접농민군 관련 사실에 집중되었다. 동학사 관련 자료에서도 동학 교단과 북접농민군의 활동상에 관한 내용은 일부만 전해 주고 있다. 그런 까닭에 북접농민군의 구성과 활동, 특히 대규모로 집결해서 편제를 갖추고 이동했던 과정에 관해서는 잘 모를 수밖에 없었다.

다행히 최근 북접농민군의 결성과 이동로를 확인할 수 있는 均菴 林東豪의 기록이 발굴되었다. 『均菴丈 林東豪氏 略歷』이란 제목을 붙인 이 자료는 북접농민군의 이동로를 날짜별로 전해주고 있다. 이 글은 이 자료에 나타난 북접농민군의 이동로와 활동을 검토하고, 동시에 기포령 이후의 최시형의 행적을 알아보기 위해서 작성하는 것이다.

입동호는 여주 능서면 신지리 출신으로 林學善에게 전교받아 1893년 4월 20일 동학에 입도한 인물이었다. 이천 소양산의 작은 절에서 한달 여 동안 연성공부를 하고 執綱으로 활동하다가 다음해 敎長 직임을 맡고 8월에는 하루 밤에 700명까지 입도시키기도 하였다. 기포령 이후에는 북접농민군으로 여러 차례 전투에 참여한 후 마지막까지 교주 최시형을 추근으로 수행하였다.

이 글은 먼저 북접농민군의 결성 과정을 확인한 후 실제로 전투에 참여한 내용에 중점을 두고 살펴보려고 한다. 북접농민군은 2대로 나누어 손병희가 이끄는 1대는 공주 우금치 전투에 참여하였고, 다른 1대는 문의 일대에서 활동하였다. 공주로 간 북접농민군은 우금치 전투 후 원평과 태인 등지에서 치열한 전투를 벌인 다음 충청도 출발지로 회군을 하였고, 문의 지명 증약 양산 등지에서 일본군 후비보병 제19대대의 중로군과 전투를 벌였다.

『均菴丈 林東豪氏 略歷』은 북접농민군의 우금치전투 참여와 행군에 대해 회상록 형태로 전하고 있는데 이는 종래 자료 부족 때문에 확인하지 못했던 몇 가지 문제를 파악하는 단서가 될 수 있는 것이다. 기포령 이후 최시형에 관한 행적도 일부를 확인할 수 있게 될 것이다.

이 글은 기포령 이후 북접농민군을 결성되고 활동한 주요 과정의 재구성하는 방식으로 작성하려고 한다. 전투과정 등은 사료 인용 방식으로 소개하게 될 것이다. 앞으로 이를 토대로 동학교단과 북접농민군에 관한 여러 논점의 검토가 이루어질 수 있을 것으로 생각한다.

2. 京畿道 北接農民軍의 忠州 黃山 집결

해월 최시형이 기포령³⁾을 내린 날은 9월 18일⁴⁾이었다. 기포령은 무장봉기해서 보은으

로 집결하라는 내용⁵⁾으로서 그 직후인 9월 20일 경상도 상주와 선산이 동학농민군에게 점거되었다. 9월 24일에는 충청도 청주를 공격해서 청주목사와 충청병사가 구원을 요청하는 급보를 정부와 감영 등에 보내 청주성에는 경군과 일본군이 급파되었다.⁶⁾ 동학농민군이 경상도의 대읍인 상주와 선산 읍성에 들어가고, 충청병영이 있는 청주성 점거를 시도한 것은 놀라운 일이었다.

충청도와 경상도의 동학 조직에는 전봉준 등 남접농민군 지도자들이 영향을 미치지 못했다. 그러나 전라도 이외의 동학 조직도 1894년 여름에는 무장봉기를 준비해왔다. 그래서 기포령을 내린 즉시 봉기를 할 수 있었다. 경기도와 충청도 북서부 그리고 강원도의 동학농민군은 9월 20일을 전후해서 충청도 황산에 집결하였다. 이때 충의포의 거점인 황산에 모인 사람들이 북접농민군의 중심을 이루게 되는 것이다.

동학농민군이 각 지역에서 무장봉기를 준비해왔던 것은 6월 21일 일본군의 경복궁 침범으로 인한 나라의 위기 때문이었다. 당시 국내 세력 가운데 일본군과 맞서 싸울 의지와 힘이 있는 세력은 동학뿐이었다. 7월과 8월에 들어오면 동학 조직은 많은 사람들을 입도시켜서 세력을 키우고 무장을 강화해왔다.⁷⁾

경기도에서도 8월이 되면 서울 접경 군현까지 동학의 주요 지도자들이 부각되었다. 양근은 辛載俊, 지평은 全泰悅과 李在淵, 광주는 李鍾勳과 廉世煥이 세력이 키워나갔다. 양지는 高在棠, 여주는 洪秉箕 辛壽集 林學善, 利川은 金奎錫 全昌鎭 李根豊이 고위지도자였다.⁸⁾

동학에 입도를 권유하던 사람들은 강조한 것은 동학이 時運을 맞이한 큰 道라는 것이었다. 서울 인근에 살던 사람들은 도성에서 벌어지는 여러 변란들을 그때마다 전해 듣고 있었다. 나라가 위기라는 것을 잘 알고 있었지만 이에 대한 대처는 달랐다. 큰 도라고 생각한 동학에 입도해서 일본을 물리치려고 하는 사람들과 이를 각각의 소리라고 하면서 동조를 하지 않는 사람들이었다.

양수리 건너편 한강가에 있는 양근의 남종면에는 도자기를 구워 서울의 관부에 공급하는 분원⁹⁾이 설치되어 있었다. 이 분원의 貢人(池圭植)은 서울을 출입하며 사옹원과 운

3) 『侍天教宗釋史』 是月十八日“師聞教徒慘殺之報 將欲叫怨於天陞 伸師冤救生命 而招集各包教頭 於是各處教徒之來 詣于青山丈席者十餘萬人” 기포령의 목적과 내용을 전해주는 이 기록은 일제강점기의 상황에 교도들의 참살에 대한 항쟁과 교조신원이 목적이었다고 밝히고 있으나 이 시기 각 지역에서 확인되는 동학 조직의 1차 봉기목적은 일본세력을 축출하는 것이었다.

4) 이 글에서 날짜는 음력을 쓴다. 일본 자료의 양력날짜도 음력으로 통일하였다.

5) 『양로우선봉일기』 10월 21일자. “當日卯刻呈來巡撫營召募官孟英在移文內 --- 匪徒出沒之情跡一竝探知則厥之爲魁者皆爲遽聚於報恩等地”.

6) 참고, 「1894년 東學農民軍의 淸州城 점거 시도」 『충북사학』 13집; <<日省錄>> 高宗 三十一年 甲午 九月 二十八日. “議政府啓言 卽接忠淸監司朴齊純騰報 則枚舉兵使李長會所報 今月二十四日 匪類數萬 來犯城下 兵使親冒拒戰 殺賊數十 賊始退散云 而湖匪聲氣連絡 以若監兵營之力 無以堵禦 爲辭矣”.

7) 동학농민군이 무장봉기를 준비하고 재기하는 과정은 참고, 『동학농민군의 재기』(국사편찬위원회편, 『한국사 39 제국주의의 침투와 동학농민전쟁』 421~447) 참고.

8) 『天道教書』.

현궁 등에 도자기를 직접 전해주는 일을 하였다. 여러 관부의 고위관료들과도 업무상 수시로 만나는 사이였다. 그런데 그런 사정을 잘 알면서도 지동식에게 동학에 입도하라는 강력한 권유¹⁰⁾를 할 정도였다.

한강을 경계로 서울의 남부와 가장 넓게 인접한 (광주에서도 동학 세력이 크게 증대되었다. 이종훈과 염세환 같은 지도자가 조직을 확대한 결과였다. 광주에 동학 세력이 퍼졌다는 것은 서울에 동학이 들어갈 수 있는 근거지를 마련했다고 볼 수 있는 것이다. 한 예로, 대왕면 심곡리에 살던 (南宮樓¹¹⁾)은 동학에 들어가서 적극 활동하였는데 그가 살던 심곡리¹²⁾는 중대면 송파에서 탄천을 건너 일원리와 세곡리를 지나면 바로 나타나는 마을이었다. 서울 도성과는 말 그대로 지척인 곳까지 동학도들이 활동하고 있었다.

경기도에 동학이 포교가 시작된 시기는 1880년대 말이었다. 지평 등 동부 일대는 강원도에 온 사람들이 포교하였고, 남부 일대는 충청도 지역에서 포교하였다.¹³⁾ 1890년대 초에는 각 군현에 중심을 이룬만한 지도자들이 활약하기에 이르렀다.¹⁴⁾

1893년 봄에 열린 보은 장내리 집회에 참가한 동학도들은 여러 군현에 걸쳐 있었다. 수원, 용인, 양주, 여주, 안산, 이천, 안성, 죽산, 광주의 동학도들과 함께 서울로 들어가는 나루가 있는 송파 동학도들도 참여하였다. 이들 군현에서 1894년 여름에 동학 교세가 급속히 확대되었던 것이다.¹⁵⁾

9) 현 광주시 남중면 분원리.

- 10) 『國譯 荷齋日記』 二, 서울시사편찬위, 1894년 8월 22일. 楊根 分院의 貢人 池圭植은 이 날짜 일기에서 “오후에 정래경(鄭來卿)이 나를 이끌고 내곡 김 감찰 댁으로 갔다. 주인이 나에게 말하기를 “우리 동학 역시 큰 도이다. 지금 시운을 우리가 처음 접하여 전도하는 것이니 당신도 도에 들어오는 것이 어떻겠는가?”라고 하여 내가 말하기를 “선생 말씀은 대단히 감사합니다. 다만 다시 생각해 보겠습니다.”라고 하고 조금 앉아 있다가 돌아왔다.”고 쓰고 있다. 동학의 주장에 동의하지 않는 그는 이날 지은 시에 “어이하여 외세가 침략해 와서 서로 퍽박하는데/ 너와 내가 어찌 각각의 소리를 낸단 말인가”라고 했다.
- 11) 南宮樓(1866~1902)은 북접농민군에 참가하여 보은으로 남하한 뒤 공주전투와 북실전투에도 참여했다고 후손들이 추정하는데 그의 손자가 정보통신부 장관과 국회의원 그리고 국회의원사무총장을 역임한 (南宮楮)(1938~2009)씨이다.(표영삼, 「경기지역 동학혁명운동」, 『교사교리연구』 10, 2005) 남궁경의 부인 풍양 조씨(1866~1967)는 손자에게 조부가 동학에 들어가서 활동한 사실을 전해주었다고 한다.(남궁석씨 증언) 이 증언은 북접농민군의 구성과 행군로 등을 검토하면 사실일 가능성이 많다.
- 12) 현 성남시 수정구 심곡동.
- 13) 오랜 동안 천도교 상주선도사로 활동하며 동학 연구에 전념하던 표영삼 선생 증언. 위의 「경기지역 동학혁명운동」 참고.
- 14) 1893년 3월의 보은 장내리집회에는 경기도 여러 군현에서 참가한 인원이 약 4,000명이나 되었다. 『聚語』 (『東學農民戰爭史料叢書』 2 수록, 54~57)
- 15) 표영삼 선생은 『天道敎創建錄』, 『韓順會管內淵源錄』, 『東學關聯判決文集』 등을 토대로 경기도 지역의 입도자 123명과 입도한 해(연도 기록이 없는 사람은 1894년 이전)를 다음과 같이 정리하고 있다. (『동학』 3 원고본, 제3절 7월부터 항일전, 2. 경기지역서도 봉기) 驪州 洪秉箕 1892년, 林淳灝 1893년, 朴源均 1894년, 李順化 1894년, 辛明甫 1894년, 宋奭鎮 1894년, 林東豪 1893년(표영삼 선생의 원고에는 1892년으로 되어 있으나 『임동호 약력』에 따라 수정), 林性春 1894년, 林學已 1893년, 李貞教 1893년, 李良汝 1893년, 金鍾泰 1893년, 鄭福伊 1894년. 利川 李容九 1890년, 權重天 1894년 金龍植 1894년 金永夏 1893년, 閔泳祚 1893년, 金孟欽 1893년. 林性鳳, 黃河成, 金鍾泰, 閔性鎬, 閔泳祚, 許溟, 洪淳德, 金龍植, 劉明熙, 金明鉉, 金大濟, 金泳夏, 宋奭鎮, 金孟欽, 安鎮國, 林云先, 李貞教, 林性春, 林仲先, 林明漢, 權鍾錫, 李良汝, 朴秉俊, 安根秀, 朴秉元. 高在學(高應海). 廣州 韓權會 1892년, 韓九會 1892년, 洪鍾秀 1892년, 李鍾勳 1893년, 金正潤

『均菴丈 林東豪氏 略歷』 16)에는 이 시기에 동학의 교세가 확대되던 모습을, 다음과 같이, 전하고 있다.

同三十四年 癸巳 四月 二十日에 入教하다.(傳教人 林學善) 同年 五月에 來往 六十里되던 利川 소양山 小刹에 晝耕하면서 夜間에 來往하면서 鍊性工夫 月餘를 하다. 同年에 執綱 教職으로 視務 從事하다. 同 三十五年에 教長職으로 視務하다. 同年 八月에 一夜에 七百人까지 傳教하다.

임동호는 보은 장내리 집회가 한창이던 1893년 4월 입학선의 전교를 받아 동학에 입도하였다. 그리고 한달 여 동안 낮에는 수계면 신지리¹⁷⁾에서 농사를 짓고 야간에 이천 소양산의 작은 절을 왕래하면서 연성공부를 하였다. 바로 그해 집강으로 동학 조직의 일을 맡았고, 다음해인 1894년에는 교장으로 활동했는데 8월에는 “하루 밤에 700명까지 전교했다”고 한다.

“하루 밤에 700명까지 전교했다”는 것은 많은 사람이 마당에 가득 서서 입도 의식을 갖는 이른바 마당 포덕을 말하는 말이다. 25세의 임동호가 이처럼 많은 사람을 입도시켰다는 것은 아닌 것으로 보인다. 그가 속한 동학 접 조직에 농민들이 대거 입도해온 상황을 표현한 말이지만 이 상황은 8월 이후 경기도의 여러 군현도 삼남지역과 닮음이 없었던 사정을 보여주고 있다.

서울 주변에서 동학도들의 활동이 활발하게 되자 일본의 정보망에도 이 사실이 탐지되었다. 일본군이 육상으로 북상해서 도성으로 들어갈 때 마지막 병참 지원을 받는 기지가 송파에 있었는데 여기에서도 동학도들이 모인다는 소문이 돌았던 것이다. 일본공사관에서는 공사관 소속 일본 순사를 보내서 그 소문을 확인하도록 했다.¹⁸⁾

1894년. 延淳達, 延甲辰, 金文達. 朴仁學, 李永五, 金基淵, 金富萬, 金桂甫, 李正雨, 韓權會, 韓九會, 金教贊, 金日熙, 金晶熙, 金教善, 白永根, 金慶熙, 金連益, 洪在吉, 洪鍾秀, 金教福, 金正潤, 南宮樓, 黃敬達, 黃秀景, 崔顯模, 洪淳亨, 金教永, 李龍震, 金教成, 崔龍雲. 振威(平澤) 盧秉奎 1894년, 李敏益 1889년. 李承摩 1890년, 李圭成 1891년, 李麟秀, 高文枉, 安領植, 張仁秀, 朴仁勳. 始興 辛在元 1894년, 金永淳 1893년. 水原 李鉉植 1892년, 羅岷 1889년, 羅天綱 1889년, 洪在範, 洪鍾珪, 李秉仁, 丁朱亨, 金昌植, 丁大成, 尹教興, 朴宗遠, 朴容華, 朴容駿, 朴容日, 朴寅遠, 朴商益, 林仲模, 金學教, 宋亨浩, 李圭植, 崔基連, 李元善, 張基煥, 張泳寬, 張漢秀, 禹顯時, 金濟乙, 尹教興, 崔鎮協, 韓世教. 仁川 安季植 1891년.

16) 이하 『林東豪 略歷』으로 표기하고, 근거를 밝히지 않은 인용문은 이 자료에서 인용한 것이다.

17) 新池里는 驪州牧 首界面 新池洞인데 1914년 행정구역 개편으로 陵西面 新池里로 이름이 바뀌었다.

18) 『주한일본공사관기록』 1. “復命書 1894년 9월 26일, 송파 지방에 동학당이 모이고 있다는 풍설이 있으므로 사실 여부를 정탐하라는 명령을 받고 그날로 그 곳에 출장하여 정탐하였습니다. 그곳에는 물론 그 근방 마을에도 동학당이 모이고 있는 사실이 전혀 없었다고 합니다. 하기가 몇 사람을 목격하기는 하였으나 그들이 동학당이라고 단정하기란 쉬운 일이 아닙니다. 혹 몇 사람의 黨人이 들어왔었는지도 알 수 없는 일입니다. 이곳에는 兵站司令部도 설치되어 있고, 더욱이 일본 군대의 통행도 잦으므로 많은 인원의 동학당이 모이는 일은 결코 없을 것입니다. 그렇지만 충청 지방에 가면 동학당이 공공연하게 각처에 모여서 재물을 약탈한다고 합니다. 실제로 5, 6일 전에도 이곳 사람이 말에 짐을 싣고 堤川에 가다가 짐을 빼앗겼다고 합니다. 앞에서 말한 바와 같이 京城으로부터 동쪽으로 10리 이내의 곳에서는 동학당이 공공연하

일본 순사들의 복명서를 보면 송파 지역의 동학도들에 대한 확인은 하지 못하고 있었다. 동학도들의 활동이 은밀했던가, 일본순사들에 대한 반감 때문에 정보를 제공하지 않았던 것이 아닌가 한다.

경상도 고성부사를 지낸 오횡목이 교체되어 임지인 고성에서 서울로 오면서 기록한 『고성총쇄록』 9월 16일자에는, 다음과 같이, 경기도 죽산과 용인 일대의 동학 조직의 활동을 전해주는 기록이 있다.¹⁹⁾

문밖 거리에서 남녀가 글 읽는 소리가 들렸다. 이(사과)가 말하기를 “저들은 어찌해 거리에서 글을 읽습니까?” 내가 웃으면서 말하기를 “그대는 참으로 별세상에서 왔군요. 내가 고성에서 여기에 이르기까지 오는 동안 등짐 진 사람이나, 머리에 이고 가는 사람이나, 밭을 가는 사람이나, 나무하는 사람이 입을 벌리고 끊임없이 하는 소리가 모두 이 소리이니 이른바 동학 주문입니다. 처음에는 매우 의아하고 괴이했으나 오래 들어보니 이제는 자연스러운 소리 같습니다.”

고성에서 경기도에 이르는 동안 만나는 사람마다 동학주문을 암송하고 있다는 증언²⁰⁾은 1894년 경상도와 충청도의 실상을 보여주는 말인 동시에 경기도 남부 일대도 같은 상황이었다는 증언이었다. 오횡목이 지나온 길은 고성 → 진해 → 밀양 → 대구 → 선산 → 상주 → 함창 → 문경 → 연풍 → 충주 → 죽산 → 용인이었다. 그러나 공공연히 동학도들이 길거리에서 주문을 암송하는 곳은 죽산 경까지이다. 오횡목이 숙소로 정한 碑立街店의 주인이 “여기가 이 소리가 끝나는 경계입니다. 여기에서 올라가면 백암지역인데 혹 이 소리가 있다가 또 그 위로 올라가면 없다”고 말했다. 이처럼 동학도들은 서울 가까이에서는 내놓고 동학 주문을 암송하는 등 활동하지는 못하고 있었던 것이다.

동학도들은 일본군의 경복궁 침범 이후 일본세력 축출을 제1 목표로 내세우고 있었다. 이 때문에 동학농민군은 스스로를 의병이라고 칭하였고,²¹⁾ 이 명분으로 지방관에게도 합

계 모여 있는 일은 없습니다. 더욱이 이번에 봉기한 동학당은 순수한 동학당이 아니며, 목적도 없는 한가 무뢰한들이 동학당의 이름을 빌어 금전을 약탈한 데 지나지 않습니다. 그러므로 경성을 침입해서 큰일을 저지르는 등의 일은 결코 없을 것이라고 합니다. 위와 같이 탐지했으므로 이를 復命합니다. 1894년 9월 27일 巡查 渡邊鷹次郎 巡查 太田芳太郎 巡查 弘瀬高衛” 이 복명서는 음력 8월 27일자로 작성된 것으로서 송파에 동학당이 모인다는 풍설을 공사관 순사들이 조사하고 사실이 아니라고 하였지만 송파에서 불과 얼마 떨어지지 않은 지역까지 동학도들의 활동이 성행했던 것을 보면 사실을 탐지하지 못했던 것이 아닌가 생각된다.

19) 『고성총쇄록』 갑오 9월 16일자.

20) 필자는 경상도와 충청도의 동학 유적지를 답사하면서 동학 주문에 대해서 전해들을 수 있었다. 1930년대까지 천도교가 세력을 갖고 있었던 지역에서는 ‘侍天主造化定 永世不忘萬事知’ ‘至氣今至願爲大降’하는 암송 소리는 어린이들이 늘 듣던 소리였고, 60년이 지난 뒤에도 이 주문을 기억해서 말해주는 사람이 많았다.

21) 『日省錄』 9월 26일자. “近日匪徒滋擾是無前之變抗拒君命而稱曰義兵是可忍也孰不可忍也當此民志靡定之時

류를 요구하였다. 이러한 보고가 각처에서 올라가자 조정에서는 “동학도들이 왕명에 항거하면서 의병을 칭하고 있는 전례 없는 변고”라고 하였다.

양반을 비롯한 각계각층의 사람들에게 힘을 합해서 의병에 나서기를 요청한 것은 효과가 있었다. 반일 분위기 속에서 민심이 요동친 것이다. 양반가의 젊은이들과 향리 신분들도 동학에 들어가서 활동하는 경우가 있었다.

동학에 사람들이 많이 들어와서 봉기를 준비하게 되자 새로운 문제가 일어났다. 무장 봉기를 위해서는 무기와 군량을 확보해야 했는데 어느 것도 쉬운 문제가 아니었다. 무기는 민가에 있는 화승총과 칼 창을 거둬서 사용했지만 충분하지 않았다. 지방 군현에 무기가 있는 곳은 관아의 무기고였다. 무장 봉기에 들어가기 전에는 관아를 점거해서 무기를 빼내올 수 없었다.

동학의 접 조직은 무장한 동학농민군이 모이는 거점이었다. 여러 사람이 오랜 시간 같이 지내기 때문에 식량을 확보해야 했다. 처음에는 접주 등 동학 지도자들이나 부유한 동학도들이 부담을 하는 경우가 있었으나 감당할 수가 없었다.²²⁾ 결국 부유한 지주와 부농들에게 軍需錢과 軍需米를 요구해서 충당해야 했다. 강제로 돈과 곡식을 거둬가게 되자 양반과 부농지주들이 불만을 크게 갖게 되었다. 그들에게는 경복궁을 점거한 일본군은 제2의 적이었고 당장 집에 들이닥쳐서 돈과 곡식을 빼앗아가는 동학농민군이 눈앞의 적이었다.

양반유생들은 명분을 내세웠다. 동학은 사교에 불과했고, 동학농민군이 재물을 약탈하는 것은 화적과 다름없는 행위였다. 일본세력을 축출하자는 동학농민군의 협력 요청은 거부되었다. 그것은 朝家에서 하는 일이고, 동학이 나설 일이 아니라고 미루었다.

결국 양반유생과 부농지주들은 일본군과 싸우기보다 동학농민군을 적대하는 것이 더 급한 문제가 되었다. 동학농민군과 협력하기보다 동학농민군을 제어하기 위해 나서게 되었다. 민보군의 결성을 협의하기에 이른 것이다. 여기에는 지방관과 향리들이 적극 협조하였다.²³⁾

경기도에서 가장 먼저 민보군을 결성한 지역은 지평이었다. 민보군을 조직한 인물은 전 감역 孟英在였는데 그는 金伯先²⁴⁾ 등 ‘용력이 비상한’ 참모를 끌어들여서 포수들을 민보군의 주축으로 삼았다.

又有何挾雜奸細之徒偽造文蹟申通匪類種種入聞極爲痛心”

22) 동학농민군 지도자들의 후손들은 동학을 했던 선조가 “재산을 동학에 모두 떨어 넣어 그 후부터 가난하게 살고 있다”고 증언하고 있다. 충청도와 경상도 지역의 여러 사례에서 나오는 증언이다. 有無相資의 한 결과로 보인다.

23) 졸고, 「1894년 영남 예천의 농민군과 보수집강소」 『동방학지』 44집, 1984; 졸고, 「1894년 영남 상주의 농민군과 소모영」 『동방학지』 51집 52집, 1886; 박준성, 「1894년 강원도 농민군의 활동과 반농민군의 대응」 (동학농민혁명기념사업회편, 『동학농민혁명의 지역적 전개와 사회변동』, 새길, 1995. 수록).

24) 『大韓民國 獨立有功者 功勳錄』 제1권, 金伯先(國家報勳處, 1986년, 517~521); 宋相燾, 『騎驢隨筆』. “金伯先者 砥平人也 爲人魁梧有氣節驍勇 力能超屋 家勢寒微 雖不學 而能曉大義 不拘小節 甲午東匪猖獗 舉國搶攘 砥平尤甚 百先與鄉人孟英宰討平之 英宰以功 得宰砥平 蓋百先之功居多”.

지평민보군의 砲軍은 강력하였다. 동학농민군의 중심은 일반 농민들이었기 때문에 포군을 상대하는 것은 역부족이었다. 맹영재의 포군은 경기도 동남부 일대의 동학농민군에게 최대의 위협이 되었다. 동학농민군이 각 군현의 관아만 상대하였을 때는 제약을 받지 않았으나 맹영재의 민보군이 나서자 사정이 달라졌다. 급속히 세력이 위축되고 활동이 끊어졌다.

동학 교단이 기포령을 내려서 본격적으로 활동을 시작하던 시점에 지평민보군이 여주로 내려왔다. 『林東豪 略歷』은 그 상황을 다음과 같이 표현하였다.

同年 九月 二十二日에 孟監役 爲名人이 捕軍 四百餘名 帶率하고 東道人을 銃殺하면서 本里에 侵略함으로 陰城 無極市로 一般 道人 數萬名이 集會함에 參加하여 十餘日 留하다

지평민보군이 여주 수계면 신지리까지 들어왔다는 것이다. 신지리는 대접주 임학선의 근거지²⁵⁾로서 여주 동학의 거점 역할을 한 곳이었다. 민보군이 들이닥치자 여기에 모여 있던 동학농민군들은 급히 충청도로 피하지 않을 수 없었다.

여주의 동학농민군이 몰려간 충청도 땅은 충주 외서촌의 황산²⁶⁾이었다. 『林東豪 略歷』에서 음성 무극이라고 한 것은 지방제도 개편으로 충주 외서촌의 면들이 음성으로 편입된 뒤에 기록했기 때문이다.²⁷⁾ 황산은 忠義大接主²⁸⁾ 손병희의 예하에 있던 李容九²⁹⁾의 근거지였는데 이때 충의포에서 집결지로 정했던 곳이다. 이용구는 경상도 상주 출신으로 동학에 들어간 후 충주 외서촌으로 가서 포교활동에 전력하여 세력을 키웠다.

충주에서 일본군과 싸우기 위해 동학농민군이 대규모로 집결한다는 것은 결코 가벼운 일이 아니었다. 충주 사람들은 청일전쟁에서 패배한 청군이 황급히 강원도 지역을 향해서 행군해간 모습을 직접 목격한 바 있었다. 곧이어 7월 하순에 일본군 5사단 주력부대가 대규모로 북상하는 광경을 직접 목격한 지역이기도 했다.³⁰⁾ 안보와 하담 그리고 장호

25) 2007년 가을 여주 답사 중 신지리에서 임학선의 무덤을 확인하였다.

26) 현, 삼성면 능산리, 부군면 폐합시 능산리 황산 신대와 삼진리 일부를 합한 마을이다. 중부고속국도 상행 음성 휴게소의 동쪽 야산 건너편에 위치한 곳이다.

27) 현재의 음성군 삼성면 황산. 충주 외서촌은 1914년 3월 1일자 조선총독부의 부령 제111호(1913.12.29 공포)에 의한 부군면의 폐합으로 충주군 소이면, 금왕면, 생극면, 대소면, 맹동면, 삼성면, 감곡면이 음성군에 편입된다.

28) 1893년 봄 장내리 집회시 충주 황산의 이용구를 예하에 두고 세력을 키운 손병희는 忠義大接主, 청주가 주무대였던 손천민은 淸義大接主로 임명된다.

29) 이용구(1868~1912)는 본명이 大有이고 祥玉이란 이름도 사용했다. 宋秉峻과 함께 一進會를 이끌고 천도교를 떠나 시천교를 만들고 이른바 '한일합방 건의서'를 통감에게 제출한 민족반역자로 알려진 인물이다. 1890년 동학에 들어가서 교주 해월 崔時亨에게 배워서 孫秉熙와 함께 최시형의 高弟가 되었다고 하는데 동학의 위계상 이용구는 청의대접주 손병희의 아래에 있었다. 북접농민군의 편성에서도 통령 손병희 아래 선봉으로 나오는데 이용구는 만 26세였고 손병희는 만 33세였다.

30) 『錦藩集略』에 나오는 일본군 북상 인원은 다음과 같다. 7월 19 - 20일 : 1,100명; 21일 - 22일 : 1,100~

원 등지에서 직접 인부로 동원되어 일본군의 실상을 접해본 사람도 무려 2,000명 가까이 되었다.³¹⁾

충주 일대의 동학농민군은 서울에서 일본군이 경복궁을 점거하고, 경군을 기습해서 무장을 해제시킨 사건은 잘 알고 있었다. 물론 청일전쟁이 일어나고 일본군이 청군을 일거에 패배시킨 일도 패산한 청군을 보고 알고 있었다. 더구나 충주 읍내와 충주 가흥 그리고 연풍 안보에는 일본군 병참부³²⁾와 전신소가 설치되었고, 이 시설을 지키는 경비병이 주둔하였다. 봉기를 하면 바로 일본군과 맞부딪치는 위험에 처할 수 있었다.

실제로 충주 병참부에서 파견한 일본군이 9월 16일 丹月驛에서 동학 지도자 3명을 체포하였다. 최대로 동학농민군이 피해를 입은 것은 17일 밤 청풍 부근에서 일어난 일이었다. 일본군은 동학 지도자 1명을 격살하고 4명을 붙잡아갔는데 그 와중에 약 30명의 동학농민군이 학살당하였다. 그리고 이들이 휴대한 ‘洋鎗 2,000개와 화약 등’을 빼앗겼다. 전쟁 준비를 위해서 온갖 노력을 다해서 모아온 무기를 탈취당한 것이다.³³⁾

그럼에도 동학농민군은 일본군과 싸우기 위해 황산에 집결하였다. 황산 집결은 몇 가지 배경이 있었다. 첫째가 동학교단이 기포령을 내린 이후 보은까지 함께 출발하기 위한 장소에 모일 필요가 있었다. 둘째는 기포령 이후 활발해진 동학농민군의 활동을 견제하기 위한 관아와 민보군이 무력행동에 나서게 된 점이다. 셋째는 일본군의 병참망이 연결된 연풍 안보와 충주 가흥 그리고 이천 일대에서 일본군이 대응하고 나선 것이다. 동학농민군은 세력을 키워서 이를 막아야 했다.

경기도와 충청도 북부지역의 동학농민군은 기포 직후부터 급박한 상황에 몰리게 되었다. 경기도에서 위력을 가진 맹영재의 지평민보군이 여주 일대까지 동학농민군의 근거지

1,200명; 24일 1,000명 기마 70여필; 25일 1,000여명 기마 100필; 26일 100명. 약 4,400명과 기마 170여필이 충주를 지나갔다. 충주에는 일본군을 맞이하기 위해 장위영의 초관과 좌우포청의 포교 2명이 머물러 있었다. “충주목사 閔泳綺의 보고 내용에, “7월 18일 일본육군 2등군리 濱名寬祐가 장위영 초관 1명, 좌우포청의 포교 각 1명과 함께 부산항에서부터 올라온 10,000여 명의 대군을 영접하기 위하여 충주에 와서” 머무르고 있다고 하였다. 1893년 12월의 일본군 전시편제에서 사단 인원이 18,492명으로 나와 있는데(遊就館圖錄) 1만명은 원산으로 상륙시킨 인원을 제외한 5사단의 주력이었다. 『주한일본공사관기록』 3권, 八. 和文電報往復控 追加 (49) [野津師團長 安堡 도착] 에서는 8월 12일(음력 7월 12일)

31) 『주한일본공사관기록』 3권, 八. 和文電報往復控 追加 (64) [慶尙·忠淸·京畿地方에서의 人夫 조달의 件] “慶尙南道에 있는 多富驛·海平·洛東·台封·聞慶, 忠淸道에 있는 安堡·忠州·河潭·長湖院, 京畿道에 있는 利川·昆池岩·鳥峴·松坡鎭에서 人夫 500명씩을 조달하여 沿道の 우리 군대에게 공급하도록 전보로 당국에서 각 지방관에게 명령하도록 담판하기 바람.” 이 계획대로 인부가 동원되었다면 연풍 안보, 충주 읍내, 충주 하담에서 2,000명이 일본군의 군수물자를 운반하는 경험을 하게 된다.

32) 각 병참부는 소좌 계급을 사령관으로 배치했는데 安堡는 森戶少佐, 河潭은 大供少佐를 임명했고, 可興은 소좌가 아닌 福富 大尉를 임명했다.

33) 『주한일본공사관기록』 1권, 四. 東學黨에 關한 件 附巡査派遣의 件 - (16) [忠州附近地方의 匪徒擊退]. “전날 忠淸道の 忠州 부근지방에서 匪徒들이 떼지어 봉기하여 그 기세가 장차 우리 兵站支部를 습격할 태세이므로, 이달 14일 忠州支部의 수비병을 파견하여 막도록 하였습니다. 그리하여 丹月에서 匪魁 3명을 체포하였고 15일 밤에는 淸風 부근에서 匪魁 1명을 격살하였으며 匪徒 4명도 포획하였습니다. 이 날 사망한 匪類는 약 30명입니다. 그들이 휴대한 洋鎗 2,000개와 화약 등도 탈취하여 모두 소각하였습니다. 우리는 上等兵 1명만 상처를 입었을 뿐입니다.”

를 기습하였고, 경기도의 이천 병참부와 충청도 충주의 가흥병참부에서 일본군이 순회하며 선제 공격하였다. 이천에서는 병참부의 일본군이 동학농민군 30여명을 붙잡아갔는데³⁴⁾ 이중 10명이 총살되었다. 가흥병참부에서도 동학농민군 동태를 살피러 병력을 파견하였다.

따라서 한 지역에 대규모로 집결해서 이에 대응해야 했다. 황산에 몰려온 사람들은 충청도 북동부 일대와 경기도 남동부의 동학농민군뿐 아니었다. 강원도의 여러 지역에서 봉기한 동학농민군이 합세하였다. 원주의 동학 조직은 여주와 연결되어 있었고 관동포에 소속한 많은 사람들이 가세하였다. 그러나 성두환 등 청풍에 근거지를 둔 관동포에 속한 사람들은 예천공방전에서 패배한 8월 말 이후 흩어져서 함께 참가하지 못하였다.

『天道教書』에 기록된 강원도 남서부와 충주의 동학 지도자 중에 許文叔이 나오지 않는다.³⁵⁾ 허문숙은 충주 용수포에 집결한 동학농민군 지도자로서 진천 광혜원에 집결한 동학농민군 지도자 신재련과 대립한 인물이었다. 신재련은 죽산 읍내에 그 내용을 방으로 써서 내붙여서 알렸는데 기포령 이후에도 노선 갈등을 벌이고 있었던 것이 확인되는 유일한 사례였다.

그러한 내용은 將臣인 扈衛副將 申正熙까지 파악하고 있었던 듯하다. 포도대장으로 동학도들을 기찰해왔던 신정희는 9월 21일 장위영병을 거느리고 죽산부사로 부임하는 李斗璜에게 충주와 진천의 동학농민군 동정에 관한 정보를 전해주고 있다.³⁶⁾

신재련이 이때 죽산읍에 방을 붙이거나 이두황에게 했던 행동은 이해하기가 어렵다. 동학농민군 진압 임무를 맡은 관군 지휘관에게, 다음과 같은, 글을 보내서 허문숙과 이른바 남접을 매도했던 것이다.³⁷⁾

이른바 호남과 호서 道儒들이 南接이라 하면서, 倡義를 외치고, 사람을 끌어 들여 무리를 모으고, 말과 무기를 거두며, 평민을 침략하고, 道員을 살해하는 일이 끝이 없습니다. 그 바람이 경기도까지 불어 들어와, 신입 道儒들이 도의 대체를 모르고 약간의 일에도 빛을 받아내고 남의 무덤을 파헤쳐 원한을 갚고 있습니다. 이런 일을 그치지 않는다면, 도가 장차 없어질 것입니다. 그래서 이에 朝飭을 받들고 스승의 교훈을 이어받아, 목숨 보전이 어려운 형벌을 면하지 못할 위험 지경에 깊이 들어간 자들을 갖가지로 타일러서 그치게 하여 안팎 4개 郡 접의 무리들은 경기도로 돌아가게 하였습니다.³⁸⁾

34) 『兩湖右先鋒日記』 1894년 9월 27일자. “李參議有書云 自利川日本兵站所捉得東徒與賊黨三十人拘囚矣五人 遽失其餘二十餘人中魁首十人砲放”.

殺之其餘自放云“

35) 『天道教書』 第二編 海月神師. “江原道 原州 李和卿 林淳化, 橫城 尹冕鎬, 洪川 沈相賢 吳昌燮, 忠清道 忠州 洪在吉 李容九 辛在蓮”.

36) 『兩湖右先鋒日記』 1894년 9월 21일자. “二十一日晴 卯時發程中路遇申將臣探得忠鎮兩邑賊勢”.

37) 『兩湖右先鋒日記』 1894년 9월 25일자.

38) 이 글은 다음과 같이 이어진다. “각처에 방을 붙이고 사망 먼 데까지 널리 알려 悖逆 무리를 끊어 금지

신재련은 남접이 아닌 것을 먼저 밝히고 있다. 그리고 남접이 충청도뿐 아니라 경기도 까지 들어온 사실을 전하면서 이들이 세력을 확대하고 무장을 해서 동학도를 살해하고 있다고 하였다. 자신은 조정의 타이름과 스승의 교훈을 받들어서 이를 막고 경기도 4개 군현의 동학도들을 돌려보냈다고 하였다.

이두황이 탐문해서 알아본 바에 의하면, 허문숙은 徐章玉과 같은 幼學黨이고, 신재련은 東學黨인데 각각 충주 용수포와 진천 광혜원에 응거하면서 며칠 안에 접전할 태세라는 것이다.³⁹⁾ 이를 기회로 본 이두황은 효유문을 비밀히 보내서 ‘광혜원에 모인 사람 중 1천명을 뽑아 관군에 속하게 하고 나머지는 귀가해서 추수하도록 하라’고 하였다. 그러나 이는 이두황이 거느린 장위영병을 죽산에 머물게 해서 시간을 벌기 위한 기만책이 아닌가 한다.

우선 이 시기는 남접과 북접의 노선 차이와 갈등이 있었다고 하지만⁴⁰⁾ 이미 동학 교단이 기포령을 내려서 전국에서 봉기에 들어간 이후였다. 더구나 이두황의 장위영병은 진압을 위해 파견된 선발대였고 일본군도 죽산에 들어와 있는데 그 앞에서 서로 접전한다는 것은 자멸하는 행위로서 일어나기 어려운 일이었다. 9월 24일에는 청주성이 공격을 받아 무심천을 경계로 대치상태에 들어가 있었고⁴¹⁾, 25일에는 경기도 음죽 관아가 전거되어 무기를 탈취되었다. 청주의 구원병을 요청에 따라 정부에서는 안성과 죽산에 파견된 경군 각 부대를 즉각 청주로 행군하라고 명령을 내렸다.

다음은 9월 27일에도 신재련은 허문숙의 민보당 때문에 봉기한 것이라고 이두황에게

한 것은 삼강오륜을 밝히려 한 것이고 輔國安民의 계책이었습니다. 그러나 뜻밖에 진천에 사는 허문숙이 民傑라 칭하고, 도당들을 불러 모으고, 무기를 거두어들이고, 남의 집을 불사르고, 재물을 탈취하고, 인명을 살육하고 있으니, 그 화를 입는 것은 오직 道人들 뿐입니다. 이 때문에 충주 등지의 도유들이 지난번 黃山에 일제히 모였습니다. 그렇지만 道法에 서로 살육을 할 수 없기에, 堡人을 불러 和好로써 달래고 약조를 정하여 해산하고 돌아갔습니다. 그럼에도 아! 저 죽대 없고 사리에 어긋난 부류들이 미처 발길을 돌리지 못하여 살육이 지난날보다 더욱 심합니다. 西村 같은 데는 골목에 온전한 집이 없고 집에는 사는 사람이 없을 지경입니다. 자연히 피난하는 도원들이 무리를 이루어 각처에 都會하고 있는데, 그것은 가히 옹어지려는 새둥지의 알과 수레자국 권 물에 있는 붕어와 같은 처지라고 이를 만합니다. 이제 곧 농사가 바야흐로 무성하여 사방의 들에 곡식이 누렇게 익을 터인데, 수확할 사람이 없는 것은 이 모두 許黨 때문입니다. 생각이 여기에 미치니, 어찌 한심스럽지 않겠습니까? 지금 삼가 엄한 下教를 받들때, 감히 황공하여 계획을 바꾸지 못하였습니다. 가만히 생각하건대, 허당은 뿌리가 먼 사방까지 뻗어있어 八域의 도인들이 일시에 들고일어나 각처에 모여 있고 그 숫자를 헤아리기 어렵습니다. 그러니 비록 저희들 한 곳의 집회를 파할지라도, 허당의 교만하고 사나움은 갈수록 더욱 심할 것입니다. 삼가 바라건대, 허당을 토벌하여 없앤다면 억만 도인들이 각기 흩어져 귀순할 것입니다.”

39) 위 자료, 9월 24일자.

40) 『甲午東學亂』, “鎭川 龍水洞 許文許와 趙百熙等이 또한 士兵 五百餘名을 募集하여 東學黨을 撲滅한다 聲言하고 遠近 各處에 檄文을 發하여” 權炳德의 이 회상록에 의하면 이 시기에 서장악 계열과 갈등이 있었던 것은 분명하지만 결판이 날 때까지 서로 싸우거나 진압군에게 상대방을 넘겨거나 한 상황은 아니었다.

41) 『羅巖隨錄』 第四冊 220, 新式節目 甲午九月. “即接忠清監司 朴齊純騰報, 則枚舉兵使 李長會所報, 今月二十四日, 匪徒數萬, 來犯城下, 兵使親冒拒戰, 殺賊數十, 賊始退散云”; 줄고, 「1894년 東學農民軍의 淸州城 점거 시도」 『충북사학』 13집.

다시 편지를 보내서 판단을 흐리게 하였는데 바로 그 이틀 후인 29일 ‘안성과 이천 동도 수만명’이 읍내를 둘러싸고 관아에 들어와 무기를 남김없이 탈취해갔다. 다음날인 30일에 또 편지를 보내서 허문숙의 괴산 관아 점거, 그리고 맹영재의 여주 등지의 순회와 李永從의 안성 양지 동학농민군 침략을 비난하고 있는데 이는 기만책이 아니면 있을 수 없는 일이었다.

경기도와 충청도 북서부 그리고 강원도의 남동부에서 온 동학농민군은 충주 황산과 진천 광혜원에 집결한 뒤 두 길로 남하하게 된다. 황산에서 집결한 동학농민군의 동정은 『林東豪 略歷』에 나온다. 황산은 수많은 동학농민군이 주둔하기에는 넓은 곳이 아니었다.

『忠州量案』에 나오는 황산은 작은 마을이었다. 황산 마을(초가 6채)과 따로 기재된 黃山店(초가 6채)을 합해도 초가 12채⁴²⁾만 있는 마을이었고, 앞들과 이어진 목동들까지 합해도 9.3정보밖에 안 되는 곳이었다. 인근 여러 마을에 분산해서 숙박한다고 해도 가을철 밤이 되어 노숙하기도 쉽지 않았다. 무극 장터는 물산이 집산되는 곳으로서 수많은 사람이 집회를 열기에 적합한 곳이었다.⁴³⁾

황산에 집결한 동학농민군의 최고지도자는 누구였을까? 이를 전해주는 기록이 權炳德의 『甲午東學亂』에 나온다.

李鍾勳、李容九는 各處에 頭領을 連絡하여 이어나니 洪秉箕、辛壽集、林學善은 驪州에서 / 洪在吉、辛載淵은 忠州에서 / 任命準、鄭璟洙는 安城에서 / 高在堂은 陽智에서 / 李根豐、全奎錫、全日鎭은 利川에서 / 辛載淵은 楊根에서 / 金泰悅、李在淵은 砥平에서 / 廉世煥은 廣州에서 / 李和卿、林淳灝는 原州에서 / 尹冕鎬는 橫城에서 / 沈相賢、吳昌燮은 洪川에서 이어나서 모도 忠州 黃山으로 會集하니 合衆이 數十萬人에 達하고

광주에서 활약하던 대접주 이종훈과 황산을 근거지로 둔 이용구가 연락해서 경기도 여주·안성·양지·이천·양근·지평·광주와 강원도 원주·횡성·홍천 그리고 충청도 충주에서 봉기한 동학지도자들이 무장봉기한 동학농민군을 이끌고 황산에 모였다고 한다.

『천도교회사초고』에 의하면 황산에 집결한 지도자들은 광주의 이종훈, 황산의 이용구, 충주의 洪在吉과 辛載淵, 안성의 任命準, 鄭璟洙, 양지의 高在堂, 여주의 洪秉箕, 辛壽集, 원주의 林學善, 李和卿, 林淳灝, 이천의 金奎錫, 全日鎭, 李根豐, 양근의 辛載俊, 지평의 金泰悅, 李在淵, 광주의 廉世煥, 횡성의 尹冕鎬, 홍천의 沈相賢, 吳昌燮 등이라고 하였다.⁴⁴⁾

42) 『충주양안』에 의하면 황산마을에는 초가 3칸 9호, 초가 4칸 1호, 초가 5칸 1호, 초가 6칸 1호가 있었다.

43) 동학농민군은 대규모 집결지를 장터로 정하는 경우가 있었다. 광혜원의 동학농민군은 구만리로 주둔지를 이전했는데 구만리는 덕산 읍내장터를 말한다.

충의대접주 손병희가 직접 황산에 있었다는 자료는 확인할 수 없었다. 여러 명의 대접주가 한 자리에 모여 있었기 때문에 중요한 문제들은 협의해서 결정했을 것이다. 그렇지만 이들 중에서도 대규모 동학농민군 동원을 가능하게 영향력을 행사한 이종훈과 황산에서 이들에게 숙식 지원을 말아야 했던 이용구의 역할이 컸을 것이다.

황산의 동학농민군이 집결지에서 수행했던 가장 중요한 일이 관아의 무기를 접수하는 것과 군량을 확보하는 것이었다. 충주 일대는 많은 사람들이 모여서 전쟁준비를 하느라고 요란하였다.⁴⁵⁾ 이 시기에 음죽과 진천에 이어서 제천과 청안 관아의 무기가 탈취되었다.⁴⁶⁾ 관아가 동학농민군에게 점거되고 무기를 탈취당하면 해당 지방관을 파출하고 처벌하는 것이 당연한 것이었으나 상황이 급박해지자 제천 현감은 직무를 계속 맡도록 하였다.⁴⁷⁾

황산 집결지에서 군사역량 강화에 힘을 기울이고 있던 시기에 연풍 일대의 동학농민군은 안보병참부를 공격해서 일본군과 전투에서 최대의 전과를 올렸다. 9월 28일 새벽 6시 3천명의 동학농민군이 안보병참부를 기습했는데 사망을 둘러싸고 여러 장소에 화공을 하며 격렬히 공격하였다. 일본군 주둔병이 38명이나 있었으나 고전을 하였고, 전신선도 끊겨서 직접 보고하지 못하고 문경병참부의 데와(出羽) 소좌가 대신 전하고 있다.⁴⁸⁾

이 사건은 일본 정부에서도 매우 중시하였다. 「日本外務省外交史料館所藏文書」에는 이노우에 공사가 무츠 무네미츠(陸奥 宗光) 외무대신에게 즉각 보고하는 영문 기록이 있다.⁴⁹⁾

The following telegram received from count 井上 dispatch the following is

- 44) 『天道教會史草稿』. 자료에 따라 일부가 다르지만 많은 사람이 참여한 까닭에 각기 쓰는 사람이 아닌대로 일부만 기록했을 수가 있다.
- 45) 『沙亭日記』 1894년 10월 14일. 충주 巨谷面 上沙亭에 살던 유생 金永植(1849~1924)은 평안도를 유람하고 돌아오는 길에 충주의 사정을 듣고 다음과 같이 간략하게 기록하였다. “삼남에서 동학의 무리가 크게 노략질을 하고 있는데 충주가 특히 심하다고 하여 매우 놀랐다.” 보은으로 행군하기 전에 군량 등을 모으던 충주 사정에 관한 기록이다.
- 46) 『日省錄』 1894년 10월 2일자. “議政府啓言即伏見京畿監司 申獻九狀本啓下者則枚舉陰竹縣監 金鍾遠牒報匪徒周匝官舍軍器奪去爲辭矣該倭固當勘處而此時曠官極涉疏虞請特令戴罪舉行允之又啓言即伏見忠清監司 朴齊純狀本啓下者則清安縣監 洪鍾益以軍器見失於匪徒事論勘矣固當如法而湖邑守宰之勘處間曠務極涉疏虞請特令戴罪舉行允之”; 『羅巖隨錄』 第四冊 220, 新式節目 甲午九月. “陰竹縣監 金鍾遠, 清安縣監 洪鍾益, 俱以軍器之見奪匪徒”.
- 47) 『日省錄』 1894년 10월 1일자. “忠清兵使 李長會以堤川縣監金建漢 軍物失守啓請罷黜 教以堤川縣監金建漢段 時值延命躬不在官宜 有參恕姑令戴罪舉行” 이후 각 군현에서 무기를 빼앗긴 지방관들은 속출하자 ‘軍器見失罪’라는 죄명을 그대로 지닌 채 근무하도록 했다.
- 48) 「日本外務省外交史料館所藏文書」(1) 韓國東學黨蜂起一件 121) 1894.10.26 [東學黨ノ我安封兵站部襲撃]. “十月二十六日[印] 大臣閱 參謀本部 兒玉少將宛 川上中將 今朝六時頃東學黨二千人余安封兵站支部ヲ襲ヒ四方ヲ圍ミ 諸所ニ火ヲ放チ激シク攻撃ス守備兵三十八名ニテ苦戰ノ末漸ク擊退シ今尙追擊中ナリ賊ノ爲ニ電信ヲ切ラレ兵站監ヘ報告出來ズ故ニ直接ニ報告ス 聞慶 出羽少佐”.
- 49) 앞 자료, 10월 28일자.

for 總理大臣 安保兵站部 was burnt down 十月 二五日 during the night by 東學黨, interruption of our telegraphic communication might have been caused by the event. 東學黨 is gradually assembling in large numbers in the neighbourhood of 忠州, there being some 20,000 at 西倉 in about 4里 east of 忠州 and numbers of them at 報恩, they are reported to attack 忠州 in a few days.

이것은 일본군이 조선을 북상하는 병참망과 군용전신망을 설치한 후 처음있는 일이었다. 동학농민군의 공격으로 병참부가 불에 타고 전신이 단절되어 청국의 군대와 전투를 벌이고 있던 일본군에게는 중대한 문제가 아닐 수 없었다. 이 영문 보고에는 충주 일대의 동학농민군에 관해 파악한 상세한 정보가 기록되고 있다.

황산에는 오래 주둔할 수 없었다. 집결지는 서울로 가는 결정을 할 경우 가장 빠르게 북상할 거점이었지만 그럴 상황이 아니었다. 또 농민들로 구성된 무장대로서 직접 전투를 치를 경우 결과에 대한 자신감도 없었다.

『林東豪 略歷』의 필자인 임동호는 여주 일대에서 집결해서 대접주 임학선이 지휘하는 조직에 소속되어 활동하는데 이 자료에서 소개하는 북접농민군의 행군로는 임학선의 동선을 나타내는 것이다.

3. 황산 北接農民軍의 보은 이동 과정

황산에 집결하고 있던 시기에 정부는 동학농민군을 진압하기 위한 임시 지휘부인 兩湖都巡撫營을 설치하고 신경회를 都巡撫使에 임명하였다. 순무영은 경군 각 병영을 동원한 진압군을 파견하였다. 이 진압군은 일본군 후비보병제19대대장 미나미 코시로(南小四郎) 소좌의 지휘를 받도록 했다.⁵⁰⁾ 실제로 전국 각지를 순회하며 동학농민군을 진압하는 최고지휘관은 미나미 소좌였던 것이다.

황산에 집결한 대군은 죽산에 머물러 있던 이두황의 장위영병뿐 아니라 남하하는 일본군과 맞부딪쳐야 했다. 일본군이 1차 공격목표로 정한 대상은 충청도에 집결한 동학농민군이었다.

東學黨을 정벌하는 일에 대해서는 이미 仁川에서 의논한 바 있습니다. 貴官이

50) 강효숙의 「자료소개 - 제19대대장 南小西郎의 경력서」 『역사연구』 19호에 의하면, 미나미 소좌는 京軍 3개대대, 교도중대와 충청 전라 양도의 관군 전원을 지휘했다고 했다. 미나미 가전문서를 소개한 이 글에는 미나미 소좌의 이름을 南小西郎으로 표기했으나, 『주한일본공사관기록』에는 南小四郎으로 나오고 이 노우에 카츠오(井上勝生) 교수가 2008년 11월 17일 충북대 중원문화연구소의 학술발표회에서 공개한 미나미 문서의 사진본에도 南小四郎으로 확인되는 것을 보면, 誤記인 것으로 보인다.

요구한 2개 中隊도 이미 도착했습니다. 그리고 조선 정부도 드디어 우리 士官이 훈련시킨 敎導中隊를 파견하기로 결정하여, 오늘 증으로 식량 1개월분의 준비를 마치고 내일 출발시킬 예정입니다. 그 부대에는 京城守備隊로부터 白木 中尉, 宮本 少尉 외에 下士官 및 병졸 몇 명과 그밖에 巡査 몇 명을 따르게 한다는 약속이 있으므로, 다른 조선군대와는 달리 다소 쓸모가 있으리라 생각합니다. 따라서 그전부터 귀관이 계획한 대로 이 기회에 우리의 군대를 출동시켜 한꺼번에 동학당을 剿滅했으면 합니다. 그런데 요사이 보고된 바에 의하면, 동학당의 많은 인원이 忠淸道 槐山·忠州·淸州 부근 지방에 있는 것으로 추측됩니다. 만일 이들을 한 방면에서 공격하면 반드시 다른 방향으로 도피할 염려가 있습니다. 그러므로 이들을 초멸하고자 한다면, 한쪽은 竹山·청주·충주 방면에서 진격하고 다른 한쪽은 鎭川·청주 방면에서 공격해서 결국 포위 공격하는 방법을 취하는 것이 바람직하다고 생각합니다.⁵¹⁾

동학당 진압을 위해 派遣隊長에게 내리는 훈령

1. 동학당은 현재 忠淸道 忠州·槐山 및 淸州 地方에 모여 있으며, 그 밖의 동학당은 全羅道·충청도 각지에 출몰한다는 보고가 있으니, 그 근거지를 찾아내어 이를 剿絶하라.⁵²⁾

10월 10일자⁵³⁾ 이 지시에는 포위해서 괴멸시키는 방법을 취하라고 명령하고 있다. 황산과 구만리의 주둔지에 오래 머물러 있으면 일본군과 장위영병의 예봉을 피할 수 없었다. 10월 2일에는 송과병참부에서 일본군 21명이 죽산에 도착하였다.⁵⁴⁾

황산에서 ‘十餘日 留’한 동학농민군은 드디어 출진을 결정했다. 먼저 구만리에 있던 신재련이 이끌던 동학농민군이 황산의 집결지에 합류를 했다.⁵⁵⁾ 10월 6일 보은을 목표로 남하하는 동학농민군 대군의 첫 점거 목표는 괴산 관아였다. 괴산 관아를 점거하기 위해서는 靑川에 집결해있던 동학농민군을 올라오는 문제를 협의했다. 청천에는 괴산과 청주 등지의 동학도들이 모여있었던 것이 아닌가 한다.

51) 『주한일본공사관기록』 1권, 四. 東學黨에 關한 件 附巡査派遣의 件 一, [忠淸北道 東學黨 征討方略 指示].

52) 위 자료, [後備步兵 第19大隊 運營上의 訓令과 日程表] > 1) [後備步兵 第19大隊에 關한 件] 에 나오는 이 훈령은 첫 번째 항목이 충주 괴산의 동학농민군과 당시 청주성을 공격하고 있던 손천민이 이끄는 동학농민군을 공격하라는 것이었다.

53) 양력 11월 7일. 일본군 자료는 양력으로 표기되어 있음.

54) 『兩湖右先鋒日記』 1894년 10월 2일자.

55) 위 자료, 10월 7일자. “小將들이 어제 영을 받들어 군사를 이끌고 광혜원으로 갔는데, 날이 어두워져 계속 진진하기가 어려웠습니다. --- 동학 무리의 형편을 몰래 알아보니, ‘며칠 전 구만리에 있던 자들은 충주 무극장터로 옮겨갔다’고 하였습니다. 그리하여 날이 새기를 기다렸다가 군대를 재촉하여 그곳으로 가 보았더니, 과연 비도 수만 명이 주둔해 있었습니다. 하지만 일본군에게 쫓기기 때문에 지금은 떠나서 괴산 땅 100여리 밖에 있다고 하므로, 즉시 되돌려 진으로 돌아왔습니다.”

괴산 관아를 점거하려는 목적은 두 가지였다. 하나는 괴산 관아에서 동학농민군을 적대하고 접주를 체포 처형한 일을 징치하는 것이고, 둘은 무기와 식량을 탈취하는 것이었다.

괴산 관아는 동학 세상이 된 8월에 무기와 군량 확보를 위해 괴산에서 활동하던 동학농민군에게 대항하였다. 관아까지 들어와서 무기를 가져가려고 시도하자 관속들이 이를 금지하고 접주 白昌壽·禹顯觀를 체포해서 처형하였다.⁵⁶⁾ 그러자 황산과 청천집결군이 보음으로 행군하기 전에 괴산 관아를 들이치려고 한 것이었다.

그 소문은 가흥병참부의 일본군에도 들어갔다. 그래서 이미 10월 2일 일본군 27명이 하라타(原田常八) 소위의 지휘 아래 괴산에 가서 정세를 탐색하고 있었다. 다음날 아침까지 별일이 없자 동학농민군 근거지인 당동으로 척후병을 파견했으나 읍내에서 15리 떨어진 해재에서 대규모 동학농민군과 조우하여 전투가 벌어졌다. 『林東豪 略歷』에는 간략히 기술했으나 일본군의 전투보고와 조사보고는 상세하다.

同年 十月에 槐山으로 出陣하던 道中 愛재라던 洞里에서 日兵 三十餘人을 銃殺하고 同郡 邑에서 宿泊하고

11월 2일(음력 10월 5일) 괴산 지방에서 동학당이 봉기해서 괴산군수를 공격하려 한다는 보고가 있었다. 그러므로 같은 날 오전 10시 4분 충주를 출발, 오후 7시 30분 괴산에 도착하여 그곳의 정세를 탐색했더니 그날 밤은 이렇다 할 만한 일이 없었다. 다음 날 3일 오전 8시부터 一等軍曹 田島武臣·上等兵 宇佐美久次郎 2명에게 조선인 복장을 시켜 척후병으로 唐洞쪽으로 가게 했더니, 괴산으로부터 15리인 곳에서 적을 만났다고 급보해 왔다. 그래서 原田 少尉가 부하 병졸을 이끌고 그곳으로 출장, 장교 이하 27명을 둘로 나누어 하나는 原田 少尉가 지휘하여 정면을 맡고, 또 하나는 田島 軍曹가 지휘하여 좌측을 우회하여 중간부를 쳤다. 적 진영은 흩어져 갈피를 잡을 수 없게 되었다. 쌍방이 모두 좋은 성과를 올렸지만 아무래도 동학도의 인원이 3만 정도나 되어 도저히 지탱할 수 없었다. 특히 우리의 탄약이 금방 고갈되려 하므로, 노획한 물품에 불을 지르고 일시 괴산으로 철수하려 하였다. 그러나 동학도가 전투를 벌임과 동시에 셋길로 괴산에 들어와 불을 질러 연기와 불길의 충천하였다. 적은 무리가 많은 것을 의지하여 괴산을 지키고 우리 부대는 사면을 적에게 둘러싸였지만 한 쪽의 血路를 열어 같은 날 4일 오후 3시 15분 충주까지 철수하였다.⁵⁷⁾

56) 『巡撫先鋒陣騰錄』 제3, 1894년 11월 15일.

57) 『駐韓日本公使館記錄』 1권, 六. 東學黨征討關係에 關한 諸報告 (14) [忠清道 東學黨 討伐狀況 및 戰況報告寫本 送付].

10월 초 6일에 이르러 동도배 수만 명이 양쪽 길로 나누어 경내에 어지럽게 들어왔습니다. 때마침 일본 병사 25인이 지나가고 있었는데 북쪽에서 온 동도들은 일본 병사를 보고 대적하였고, 남쪽에서 온 동도들은 읍의 사람들이 나와서 대적하니 --- 남쪽 싸움이 불리하고 북쪽도 또한 패하여 일본 병사 1명이 죽고 읍의 관속 및 부락민 중에 죽은 자가 11명입니다. 창에 맞고 총에 맞은 중상자는 30여명이며, 읍내 5개 동의 민가가 불에 탔는데 탄 집들은 모두 500여 호입니다. 관아의 각 건물도 모두 부서지고 오직 客舍만 우뚝 혼자 남았습니다. 무가·집기·문부 등이 모두 불에 탔고, 환곡 40석·공전 8천여 金을 잃었습니다.⁵⁸⁾

전투가 시작된 애제는 “북상면 아성리로서 작은 재가 있으므로 아재, 애재 또는 아성이라 하였는데 1914년 행정구역 폐합에 따라” 소수면에 편입해서 아성리라는 행정명칭을 붙였다.⁵⁹⁾

이 괴산전투는 드물게 동학농민군이 일본군을 격퇴한 전투였다. 무극에서 직접 내려온 동학농민군에게 밀린 일본군은 보은 방면에서 들어온 동학농민군에게 포위되자 간신이 혈로를 찾아 탈출에 성공하였다. 일본군 병사 한 사람이 죽고 하라다 소위와 3명이 부상⁶⁰⁾을 입었으며, 괴산 관아에 두었던 군장은 모두 불에 타버렸다.

하지만 동학농민군의 피해는 막심하였다. 괴산전투 상황을 조사하기 위해 급파된 일본군 후비보병 제6연대 6중대장 야마무라(山村忠正) 대위가 仰岩面에 사는 林命根을 체포하여 심문해서 알아낸 사실을 보면 적어도 100여명이 희생당한 것을 알 수 있고, 하라다 소위는 200명이 전사한 것으로 전과보고를 하고 있다.⁶¹⁾ 동학농민군의 수는 정확하게 알 수는 없지만 무극 방면에서 애재를 거쳐 들어간 수가 ‘2만여 명’이고 정반대의 방향인 보은 방면에서 읍내로 들어온 수가 ‘3만여 명’이라고 했다.

괴산 읍내는 호된 피해를 입었다. 동학농민군이 불을 질러 관아는 물론 민가도 대화재로 인해 500여 호나 타버린 것이다.⁶²⁾ 정부에서 긴급히 민가 재건축을 위한 비용 지출을 결정한 것을 보면 그 참혹함을 알 수 있다.⁶³⁾ 괴산 읍내가 불에 탄 것은 관아에서 徐某

58) 『巡撫先鋒陣騰錄』 제3, 1894년 11월 15일.

59) 괴산군 소수면 지명유래. 군청 홈페이지 소수면 지명유래 참고.

60) 즉사자는 上等兵 酒向芳五郎, 부상자 少尉 原田常八, 一等兵 井上柱次郎, 上等兵 伊藤庄作, 一等兵 宮島寅吉이다.

61) 위 자료, 별지 1. 일본군은 괴산전투 후 충주 괴산 단양 청풍 일대를 순회하며 동학농민군의 근거지를 제압했다. 『羅巖隨錄』九月. “望後 右道東人 四會雲集 尙州 善山 開寧三邑 一齊陷城 至二十八日 倭人往攻 東人葉散星奔 假如東人萬名 而倭人之數十或三四十 發砲揮散 又忠州 丹陽 永春及堤川東人 皆爲倭人所逐 東人之初 秉義斥倭 而不此之爲 徒貪貨財 觸處逢敗 至此之甚 吁其可哀也已”.

62) 500호나 불에 탄 것은 경상도의 성주와 하동, 그리고 전라도 금산과 함께 가장 큰 피해였다. 이 때문에 정부는 긴급히 피해를 복구하도록 했다. 『고종실록』 1894년 10월 29일자. “충청 감사의 장계를 보니, 괴산군에서 비적들의 소요를 혹심하게 겪어 불에 탄 민가가 무려 500여 호나 된다고 한다. --- 공납 중에서 돈 1만 냥을 道臣으로 하여금 획급하게 하여 진휼하는 뜻을 보이도록 하라.”

접주를 타살하였는데 분노한 그의 13세 아들이 읍내 점거시 보복했기 때문이었다.⁶⁴⁾

동학농민군은 괴산에서 1박을 했다. 그 다음날인 10월 7일 행군을 해서 화양동계곡을 거치는 길을 선택하여 청천까지 가서 다시 숙박을 하였다. 청주는 손천민의 정의포가 중심이 되어 읍성을 공격했으나 청주병영의 병대에게 패해서 호된 보복을 받았던 까닭에 청주로 가는 길은 피하였다.

8일에는 보은 경내에 들어가 산내면 대바위⁶⁵⁾에서 숙박하였다. 이 일정과 숙박지는 여주의 임학선 포가 행군한 과정을 보여주는 것이다. ‘수만명’의 행군은 매우 긴 행렬을 이루고 몇 가지 노선으로 나누어 행진해야 했으며, 숙식을 할 때에도 여러 마을에 분산할 수밖에 없었고 심지어 많은 사람이 노숙을 해야 했다. 임학선 포가 선발대에서 후발대에 이르는 긴 행진대열의 어느 위치에 있었는지 기록하지는 않았으나 이 행군과정은 보은에 모인 동학농민군의 활동상을 그대로 전해주는 것이다.

9일에는 짧은 거리에 있는 보은 장내리로 들어가게 된다.

翌日에 行軍하여 淸州 淸川市에서 宿泊하고 翌日에 行陣하여 報恩 大바위 洞里에서 宿泊하고 翌日에 同郡 長安洞里에서 宿泊하였는데 捕軍 竝하여 百餘萬人이 되어 十餘日을 留하였고 糧米는 一時 飯米가 三百五十石에 超過되다.

동학농민군에 관한 기록 중 가장 유의해야 하는 문제는 인원의 수를 표현한 것이다. 진압군측은 물론 동학농민군 참여자들도 많은 수는 근거가 분명치 않게 ‘수천’ ‘수만’으로 쓰고 있다. 여기서는 장내리에 집결한 사람의 수를 ‘百餘萬人’이라고 했는데 이는 과장된 수이다.⁶⁶⁾

한 끼에 밥 지을 쌀이 350석이라고 했는데 10여일을 머무르는 동안 소비된 쌀은 적지 않은 것이었다. 10일을 먼저 계산해서 하루에 두 끼씩 먹었다고 해도 7,000석이 되고, ‘여일’을 4일만 잡아도 쌀이 2,800석이 더 소용되어 이를 합하면 9,800석이 필요했을 것이다. 방아로 쪼은 쌀을 이런 규모로 매일 제공하는 일도 쉬운 것이 아니었다. 더우기 장내리에는 다른 지역에서 미리 와 있던 사람들이나 뒤이어 경상도나 충청도 서부 등에서 도착한 사람들이 있었다. 이들의 밥쌀까지 합하면 그 양은 매우 많았을 것이다.

황산 집결지에서 무기와 함께 군량을 모으기 위해 노력한 것은 바로 이 때문이었다.

63) 『고종실록』 1894년 12월 20일자. 겨울이 목전에 닥친 시기에 “변란을 겪은 백성들이 제때에 집을 짓고 안착할 수 있게” 조세 면제를 해주고 500호를 5칸 기준으로 집을 짓도록 공사비를 지급하는 것을 결정하였다.

64) 『天道教會史草稿』. 『侍天教宗繹史』 “翌日由槐山發 徐接主 失名 被捉 爲郡民之擊殺 其子十三歲兒 欲瀕父讐 放火郡內 官廳民舍盡爲灰燼”.

65) 현재는 보은군 보은읍 학림리 북쪽의 자연마을.

66) 『林東豪 略歷』에서 북접농민군과 관군 일본군의 수 및 전과 등을 기록한 통계는 과장된 것을 전제로 검토해야 한다.

또 부농 지주들에게 강제로 헌납 받거나 관아에 모아둔 稅穀까지 가져간 것은 이런 정도의 필요 때문이었다. 그러나 앞으로도 ‘수만’에 이르는 동학농민군이 장기간 활동할 것을 예상하면 군량의 소요는 훨씬 더 많이 필요하였다.

장내리 대도소는 대구모로 집결한 동학농민군을 통제하는 본부가 되었다. 그런데 『林東濠 略歷』은 장내리 대도소에 관한 중요한 정보를, 다음과 같이, 전해주고 있다.

同年 三月分에 八道 道人이 協力하여 全鮮 大都所를 前記 長安洞里에 長八間 廣六間 建坪으로 全羅道 木工匠을 高聘하여 三個月餘에 竣工되고 事務取扱은 義菴 先聖師가 主務하시고 八道道人의 帖紙出給을 全部 取扱하시다. 旗號는 斥洋斥倭 彰義旗라 書하여 揭揚하다. 其時에 海月神師宅은 靑山문바위 洞里에 居住하시다.

대도소는 1894년 3월에 8도의 동학도들이 협력해서 장내리에 세웠다는 것이다. 대도소는 1893년 봄부터 설치되었지만 이전에는 장내리의 민가를 빌려서 사용하였고, 이제 새 건물로 신축했다고 하였다.

다음은 대도소가 길이 8칸과 폭 6칸의 커다란 기와집이었다는 것이다. 8칸 겹집은 당시 드문 큰 집이었다. 67) 대도소의 건축은 전라도 목공장을 초빙해서 3개월 여만에 지었다고 했다.

그리고 대도소의 사무취급과 전국의 동학도들에게 접주 접사 등 첩지를 내어주는 등의 일을 총의대접주 손병희가 맡아서 했다는 것이다. 교세가 커지고 교단이 할 일이 많아지게 되자 실무역량이 있는 지도자가 전면으로 나설 필요가 있었다. 기포령 이후에는 장내리로 찾아오는 동학도들이 급증했는데 교주 최시형은 관아의 기찰을 피해서 청산 문바위에서 나오지 않고 만나는 사람을 제한하고 있었다. 대신 장내리에서 각종 사무를 책임진 인물이 손병희였다.

대도소에는 커다란 깃발을 세웠다고 하는데 깃발에는 ‘斥洋斥倭 倡義’의 의지를 밝히고 있었다. 그것은 1893년 장내리집회 때와 같은 모습이었다.

장내리는 옥녀봉 아래 남서향 경사진 곳에 위치한 큰 마을이었다. 마을 앞에는 척박한 밭이 펼쳐진 넓은 공한지가 있었고 이곳이 동학농민군이 집결한 곳으로서 초막들이 가득 지어져 있었다. 동학농민군이 주둔 막사로 활용했던 초막들이었다. 이두황의 『양호우 선봉일기』에는 장내리에 관한 기술이 있다. 68)

67) 대한제국 시기에 작성된 『忠州量案』의 통계를 보면, 당시 충주의 민가 중 기와집의 비율은 5%에 불과했다. 초가집은 2칸이 26%, 3칸이 46%, 4칸은 11.6%. 5칸이 8.1%였다. 6칸 이상은 7%에 지나지 않았다. 충주 38개면의 기와집 중 10칸 이상은 40채 정도뿐이었다.(줄고, 「대한제국기 충북 충주의 주거 사정」 『역사와 실학』 집, 2010.) 잔업인 보은 장내리의 대도소가 정면 8칸 겹집이었다면 마치 公廡와 같은 외양을 가진 집으로서 이것은 동학 교단이 교세 확대에 자신감을 가지고 영구건물로 신축했던 것을 알 수 있다.

마을 형상을 보면 산천이 험악하고 동네 앞으로 넓게 농토가 펼쳐져 있는데 200여 호의 집들이 즐비하게 늘어섰다고 했다. 그리고 주산 아래 있는 한 채의 커다란 집이 최시형의 있는 곳이고, 동네 앞 공한지에는 초막 400여 채가 지어져 있었다고 했다.

수만을 헤아리는 동학농민군이 여기에서만 머물러서 있을 수 없었다. 인근 개안리 황곡리 장계리 선원리 등지로 흩어져서 잠을 자기도 했지만 감당할 수가 없었다. 그래서 결국 영동과 황간으로 이동하기로 하였다.

其後에 行陣하여 同郡 尺岩市에 宿泊하고 翌日에 同郡 邑에서 宿泊하고 翌日에 永同郡 밀골洞里에서 宿泊하다. 同里 李判書라 하던 사람의게 冬衣 上下衣 一千件을 換着하다. 翌日에 永同邑에서 宿泊하고 六七日間 留하다. 其後에 沃川邑에 宿泊하다.

영동과 황간에서도 대규모 부대가 주둔하는 시설을 급히 만들 수 없었다. 임동호의 행군 일정에는 여기저기 떠돌며 숙박하는 것을 볼 수 있다. 보은 월암 장터로 갔다가 읍을 거친 후 영동으로 이동하여 밀골⁶⁹⁾ 동리로 갔다. 거기에서 이판서 댁에서 겨울옷 상하의 1천벌을 받아 바꾸어 입고 있다. 이판서는 공조판서를 역임한 후 경상감사를 지내면서 부정행위로 막대한 재물을 모은 李容直이었다.⁷⁰⁾ 강제로 두툼한 솜옷을 지어 바치도록 해서 겨울 전투에 대비하였다. 그리고 영동읍에서 6, 7일간 머무른다.

이 시기에 보은 청산 영동 황간 옥천 5군현은 외지에서 대규모로 집결한 동학농민군이 출진준비를 하는 과정으로 떠돌썩하였다. 출진 준비의 핵심은 무장 강화와 군량 확보였다. 무기 마련은 민간에서 거두기도 했지만 관아의 무기를 탈취하는 것이 가장 효과적이었다. 군량은 막대한 양이 필요했기 때문에 부농 지주에게 강제로 거둬들일 수밖에 없었다. 이 때문에 관아가 점거되어 무기를 탈취당했고, 군량과 군수전을 헌납받기 위해 각 마을을 순회하던 동학농민군은, 화적과 다름이 없는 존재로 인식되었으며, 부농 지주

68) 『양호우선봉일기』 10월 14일자, 15일자 「순무영 군무아문 첩보」, 16일자 「충청감사 보고」.

69) 龍山面 소재지 동남쪽으로 3.5km 떨어진 곳에 위치한 마을. 동은 황간 回浦里 서는 용산면 栗里와 新項里 남은 영동읍 禮田里 북은 용산면 九村里 栢子田里에 접해 있고 금강 상류 松川이 舞仙峯 아래로 마을을 감싸고 흐르는 아름다운 마을이다. 북이면으로 星山에서 왔다하여 별골(星谷)로 불렸고 舞仙峯 밑이라 하여 밀골, 밀골로 부르다가 1914년 행정구역 폐합에 따라 용산면 山底里에 편입되었다.

70) 이용직은 1850년(철종 1) 증광시에 급제해서 공조판서와 의정부 좌참찬을 지내고 1893년 경상감사가 되었다. 그러나 경상도 지역의 동학농민혁명 뒷처리를 맡은 李重夏의 장제로 처벌을 받게 된다. 그 내용은 『고종실록』 1894년 12월 27일자 기사에 나와 있다. “방금 嶺南慰撫使 李重夏의 狀本을 보니, 관리들의 정사를 잘하고 못한 데 대하여 열거하였습니다. 경상 전 감사 李容直은 순전히 백성을 괴롭히는 것만 일삼아서 그 해독이 만백성에게 미쳤는데 탐오한 돈이 47만 6,356兩 6錢 9분입니다.” 그에 대한 평가는 『매천야록』 다음 기록으로 알 수 있다. “李容直은 100만 냥을 상납하고 경상감사로 임명되었다. 그는 忠愍公 李健命의 祀孫으로 永同縣에서 살고 있었다. 그는 무력으로 백성들을 괴롭혀 그 피해는 인근 道民에게까지 미쳤다. 그는 호서의 갑부가 된 후 정도에 넘는 사치와 음행을 자행하여 거실은 대궐과 같고 첩은 10여 명이나 되었다.”

들은 눈앞의 적으로 생각하게 되었다.

경상도 접경지역의 사정도 영동 일대와 다르지 않았다. 김산은 기포령 직후 각처의 접주들이 봉기를 해서 출진 준비를 하였다. 마을을 횡행하며 곡식과 말, 그리고 칼과 창을 거둬들였고 대가를 지불하지 않고 모두 빼앗아갔다. 봉기에 참여하지 않는 사람은 강제로 따르게 해서 많은 사람이 脅從하였다. “힘이 있는 사람은 앞장을 서고 글을 아는 사람은 서기로 들인다.”고 하였다.⁷¹⁾

황간과 영동 그리고 옥천의 동학도들이 일제히 추풍령을 넘어와서 활동했는데 지례의 동학도들이 이들을 따랐다고 한다. 그리고 지례에는 그 무리에 들지 않은 사람이 드물 정도였으며 지례현감이 막으려고 했지만 관속조차 그 무리에 많이 들어가서 보고도 모른 채하였다.⁷²⁾ 이들 중에는 성주 금산 황간 영동에서 읍내를 점거할 때 참여한 사람도 있었다.⁷³⁾ 영동포에 속해서 여러 군현을 다니면서 무장활동을 한 사람도 있었던 것이다.

상주소모사 鄭宜默은 민보군을 결성을 시작하기도 전에 영동과 황간에 집결한 동학농민군에 관한 소문 때문에 혼란을 겪고 있었다. 경내의 양반들이 소모영 구성에 참여하기를 꺼렸다. 마치 상주로 넘어올 것이라고 우려한 때문이었다. 정탐원을 파견해서 보고를 받았으나 엇갈리는 내용으로 판단이 어려웠다.⁷⁴⁾ 이 보고에는 사실을 전하는 것도 있었다. 23일부터 옥천을 거쳐 공주로 행했다는 보고는 중요한 정보였다.

보은에서 봉기했던 권병덕은 당시의 전국 사정을 다음과 같이 전한다.

朝鮮八道에 咸鏡道 以外에 어느 곳 할 것 업시 東學에 世上이 되었다. 이와 갓치 四方에 별때갓치 이러나니 官吏의 惡政과 兩班의 壓迫을 맞든 平民들은 勿論이오 京鄕間에 挾雜輩와 殺人強盜者까지라도 東學에 投入하야 것침업시 勢力을 불렀스니 그때 現像이야推側할 수 잇슬 것이다

함경도 이외의 전국 각 지역은 동학 세상이 되었다는 것이다. 그리고 범법자를 비롯한 온갖 사람들이 가세해와 거침없이 세력을 불렀다. 보은 영동 등 남부 여러 군현은 지방관이나 향리들이 동학농민군의 힘에 눌려서 동학에서 주는 직책을 맡아야 곤경을 모면할

71) 『世藏年錄』. “橫行閭里 執穀執馬 收刃收創 氣焰益高 雖一兩錢一尺布 皆奪去 不肯入道者 使之強項脅從 脅從者許多 大乎省察曰 急急網取俗子以來也 有力者將立前站 有文者將入書記云云”.

72) 『甲午以後日記』. “時則黃澗永同沃川之徒 齊發而嶺嶺 與近地之黨符同 知禮之民 不入其黨者亦幾稀 雖有官令之招丁防禦 令不得行 湖西之徒 突入官庭 逼迫官長 官屬 亦多其黨 視若不知 其何以禁止”.

73) 『別啓』 乙未 正月 初十日 別報. “知禮縣監李宰夏牒呈內 本縣南面民人等 洞捉匪類四漢 而就中金在德 金成奉 李洪伊等股 昨年八月 率黨入邑 作梗官門 討財村里 又參於星州錦山黃澗永同作變者”.

74) 『소모일기』 10월 21일자. “비도들이 흩어져서 통일된 지휘체계가 없다고도 하고, 黃澗과 永同 지역에 주둔하고 있다고도 하며, 혹은 起包하여 곡식을 거둔다는 소식이 들려왔다”; 22일자. “황간과 영동지역에서 비도들 중에 진을 치고 있는 자가 몇 만명인지 알 수 없다.”; 25일자. “황간과 영동의 여러 적들이 23일부터 沃川을 넘어 公州로 향하고 있다고 하였으며, 또 어떤 보고는 知禮로 들어갔다가 淸州로 내려갔다고 하였다.”

수 있었다. 영동에서는 행세깨나 하는 사람들이 모두 동학에 들어가서 활동했다고 한다.

4. 北接農民軍의 指揮部 구성과 公州 · 文義 出陣

1) 북접농민군의 공주 우금치 · 원평 · 태인전투

청산 문암리의 최시형의 처소에서 교단의 고위지도자들이 출진을 위한 모임을 가졌다. 각지에서 집결한 대접주들이 참석한 자리에서 최시형은 ‘앉아있으면 죽고 움직이면 산다’고 당시의 상황을 설명하고 ‘대군을 이끌고 공주를 향해 출진한 전봉준과 만나서 함께 싸우라’는 취지를 말했다.⁷⁵⁾ 영동 황간에 집결한 북접농민군의 출진을 결정한 것이었다.

북접농민군은 대군을 둘로 나누었다. 하나는 공주 점령을 목표로 전봉준의 남접농민군과 합세하기 위해 출진하는 부대였고, 다른 하나는 충청도 보은 일대에서 진압군을 막아내기 위한 부대였다.⁷⁶⁾ 『甲午東學亂』에는 이에 관해 명확히 기술하였다.

東學軍이 二隊로 分하여 一隊는 永同 沃川으로부터 公州로 進하여 全琫準과 相合케 하고 一隊는 懷德郡 芝明場에 至하여 淸州鎭衛隊兵과 交戰하여 官軍이 敗하고 東學軍이 論山으로 退屯하여 四處에 東學軍이 合하여 公州로 進하니

공주로 출진하는 북접농민군의 지휘부도 정했다. 전군을 지휘하는統領은 손병희가 맡고 행군 대열에서는 中軍에 섰다. 선봉은 정경수, 좌익은 이종훈, 우익은 이용구, 중군은 손병희, 후진은 전규석이 맡았다.⁷⁷⁾

75) 『侍天教宗釋史』 第二編下 第十一章 甲午教厄, “是時 孫秉熙李容九 自報恩帳內 揮動各包 進向于青山丈席 師引見各包教頭 而諭之曰 吾教人之指嫌 差過三個月 則自爾寢息矣 現今多數教徒 坐則死 動則生 仄聞全琫準 率教徒數萬 方向公州云 君等須往會全琫準 諭止其暴舉 革心改圖 則天意可回 師冤可伸 生命可保 各自勉旃” 여기서 전봉준에게 ‘폭거를 중지하고 마음을 바꾸도록 하라’ 취지의 말은 급박했던 상황과 맞지 않는다. 시천교 측이 작성한 자료는 일본과 관련된 기록에서 적절하지 않은 내용이 종종 보인다. 사료비판을 거쳐야 할 부분이다.

76) 위 자료. “於是 門徒皆應命發行 吳一尙 姜建會一派 轉向懷德地 孫秉熙 李容九 先率徒衆 約與琫準會于恩津之論山”.

77) 『甲午東學亂』. “이때에 京畿、忠淸、慶尙、江原 四道 各郡의 東學軍이 聲氣를 相應하여 或數千 或數萬이 到處에 이어나서 報恩帳內로 會集하니 海月先生이 各包頭領을 召見하고 慰安하여 가로대 이것도 또한 天時라 하고 大統領旗號를 親書하여 孫秉熙를 賜하고 鄭璟洙包로 하여금 先鋒을 삼고 全奎錫包로 하여금 後軍을 삼고 李鍾勳包로 하여금 左翼을 삼고 李容九包로 하여금 右翼을 삼고 孫秉熙가 中軍이 되야 各包를 指揮하니 衆이 六十餘萬人이였다” 이 회상기는 직접 북접농민군 지도자로 봉기에 참여했던 權秉憲이 경험과 전문, 그리고 목격담을 토대로 작성된 것인데 교단과 관련한 증언에는 중요한 내용이 많이 담겨 있다.

이 편제는 통령만 제외하고 황산집결군을 보은으로 이동시킬 때 지휘했던 지도자들이 선봉을 포함한 전후좌우 모든 부서를 장악했다. 이것은 북접농민군 주력이 황산집결군을 토대로 조직된 것을 의미한다. 충의포에 속했던 이용구를 빼면 모두 경기도 출신들이다. 선봉인 정경수는 안성포, 좌익인 이봉훈은 광주포, 후진인 전규석은 이천포였다. 군사조직의 역량은 전투 경험이 중요한 자산이 되는데 황산집결군이 괴산에서 일본군과 정면 대결을 벌여서 승리한 것이 그 지도자와 포를 주요 부서에 배치한 배경이 되었을 수도 있다.

북접농민군은 경기, 충청, 경상, 강원도의 동학 조직에서 동원한 사람들로 구성되었다. 그런데 지휘부가 경기도와 충주의 포를 위주로 편성되었다면 이 지역에서 참여한 수가 많았고, 경상도와 강원도의 참여자는 비중이 작았을 것으로 생각된다. 관동포도 참여하였지만 청풍의 성두환과 예천의 최맹순 등은 예천전투의 패배로 참가하지 못했고, 강원도의 여러 조직은 맹영재의 민보군에게 견제를 받은 위에 일본군이 강원도로 들어가서 길을 막아 후속 가세가 불가능했다. 선산포 상공포 등 경상도 상주 김산 등지의 동학 조직도 참여하였지만 경기도 조직과 같이 강력했던 조직은 아니었던 듯하다. 즉 민보군이 나 일본군과 전투를 벌여서 패산했던 포들은 피해가 컸을 뿐만 아니라 사기가 떨어져서 조직적인 기포가 불가능했던 것이다.⁷⁸⁾

옥천을 거쳐 공주로 출발한 때는 23일을 전후한 시기였다. 대규모 부대를 일시에 움직인 것이 아니라 시차를 두었던 것 같다. 『林東濠 略歷』에 의하면, 손병희가 이끄는 북접농민군 지휘부는 출발하기 전에 논산의 전봉준과 연락을 해서 공주 공격을 협의하였다.

其時에 全奉準이 論山에서 軍器를 多數 收集하여 留陣하고 沃川 聖師 本陣으로 通知하되 公州營을 攻擊할 터이니 同北門 外에 埋伏하얏다가 官軍을 擊破하라 하얏슴으로 義菴聖師 松菴 李鍾勳 林學先 李容九 鄭知澤 諸人이 捕軍 六七萬人을 引率하고 同 北門外에 埋伏하다. 其時에 前日 約과 如히 全軍이 官軍과 應戰하여 四日間 擊戰에 本陣도 共同挑戰하다가 日暮를 當하여 勝負를 未決하고 도로 兩陣에서 密通하여 論山으로 退陣하여 全軍과 비로소 合陣하고 糶米 六萬石 彈藥을 多數 取合하고 十餘日을 留하다.

북접농민군은 약속에 따라 공주 서쪽의 30여리 떨어진 長尺面 大橋⁷⁹⁾로 진출하였다. 경천으로 북상한 전봉준의 남접농민군과 양쪽에서 협공하는 형태를 취한 것인데 이 사실은 관군의 보고에도 그대로 나오고 있다.⁸⁰⁾

78) 『討匪大略』 『召募日記』 『臨瀛討匪小錄』 『東匪討論』 등의 진압기록에는 상주와 강릉 등지의 동학농민군이 패산한 이후 급속히 기세가 저하되어서 공세를 취하지 못했던 사정이 나온다.

79) 현재의 장기면 한다리.

북접농민군이 포진한 모습은 장관이었다.⁸¹⁾ “동네 뒤의 작은 산기슭 숲에 의지하여 진을 친 사람들이 수천 명이었으며, 넓은 들판에 깃발을 꽂고 둘러 있는 사람이 죽히 수만 명이였다.” 효포에 진을 쳤던 경리청 부영관 겸 안성군수 洪運燮은 정면 공격을 시도하였다. “몰래 배후에서 먼저 숲에 있는 적들을 습격하고 조금 뒤에 총을 쏘면서 산을 내려가 넓은 들판의 적들과 서로 마주쳤다. 그 숲과 산기슭을 빼앗으려 서로 총을 쏘면서 만나절을 대치”하였다. 북접농민군이 이와 같이 천을 전투⁸²⁾에 나섰으나 경군에게는 밀리지 않을 수 없었다. 무기의 열세 때문이었다. 그래서 점점 뒤로 물러나 산을 넘고 고개를 넘는 것을 경리청 병정들이 “45리를 뒤쫓아 가서 만나절을 서로 싸웠”다. 그러나 “날은 저물고 병사는 피곤하”여 싸움을 멈추고 흥운섭은 경리청 병대를 이끌고 공주목으로 돌아갔다.

『林東豪 略歷』은 북접농민군 전 부대가 관군과 4일 간 격전을 벌인 후 날이 저물어서 승부를 결정하지 않고 논산으로 퇴진하였다고 했다. 4일 간이라고 한 것은 대교에서 진을 친 후 전투를 벌이고 이동했을 때까지의 기간을 말한 것으로 보인다. 북접농민군 지도자는 손병희 손천민 이중훈 임학선 이용구 등이었다. 청의대접주 손천민도 대교전투에 참여하였다.

북접농민군이 논산에서 전봉준의 남접농민군과 만난 것은 이 대교전투 직후였다. 合陣을 설명하는 기록에는 경험담이 들어있다. “糧米 六萬石 彈藥을多數 取습”했다는 내용이다. 군량 확보를 위한 맹렬한 활동을 직접 수행하거나 목격하고, 또 ‘수만 명’이 소비하는 막대한 양의 군량을 운반해온 과정을 본 기록자는 무엇보다 남북접농민군이 군량을 합쳤다는 것을 먼저 표현하였다.

공주성을 공격하겠다는 목표를 널리 알리고 논산에서 대군이 모인 뒤에도 10여일 머무른 것은 커다란 실수였다. 관군과 일본군이 대처할 수 있는 시간을 벌여준 것이기 때문이다. 모리오 마사이치(森尾雅一)대위가 지휘하는 후비보병 제19대대의 서로군과 장위

80) 『巡撫先鋒陣騰錄』 1894년 10월 25일자. “(23일 二更)湖南賊 전봉준이 4만명을 이끌고 남쪽으로 거리가 30리 되는 경천에서 노략질을 하면서 공주목을 향하려 한다고 말했다” “沃川包 동도 수만 명은 동쪽으로 거리가 30여 리 되는 大橋에 모여 주둔하고 있다가 전봉준과 합세하려고 한다.” 여기서 옥천포라고 한 것은 옥천에서 온 동학도라는 뜻인 것 같고, 그 인원을 보면 북접농민군 주력으로 보아야 한다.

81) 위 자료. “새벽닭이 울기를 기다려 즉시 출발하여 진영을 25리 뒤로 물리고 壽村에서 아침밥을 먹고 대교 뒷길을 따라 20리를 진군하여 멀리 바라보니 동네 뒤의 작은 기슭에 숲에 의지하여 진을 친 자들이 수천 명이었으며, 넓은 들판에 깃발을 꽂고 둘러 있는 자가 죽히 수만 명이 되었습니다. 그러므로 몰래 배후에서 먼저 숲에 있는 적들을 습격하고 조금 있다가 포를 쏘면서 산을 내려가 넓은 들판의 적들과 서로 마주쳤습니다. 그 숲과 기슭을 빼앗으려 서로 포를 쏘면서 만나절을 대치하여 죽인 자가 20여 명이고 사로잡은 자가 6놈이었습니다. 그런 뒤에 점점 해산하여 산을 넘고 고개를 넘어 달아나기에 병사가 45리를 뒤쫓아 가서 만나절을 서로 싸웠습니다. 그런데 날은 저물고 병사는 피곤하여 하나하나 토벌하고 싶었지만 진퇴양난이었기 때문에 榜을 써 붙여서 백성을 안심시키고, 적들이 버리고 간 약간의 물건들을 주워 모았습니다. 곧 군대를 돌려 다시 수춘에 도착하였는데 길에서 명령을 받고는 돌아와 공주목에 부대를 머물게 했습니다.”

82) 朴孟洙, 『東學農民戰爭과 公州戰鬪』 『百濟文化』 23. 우금치전투의 전초전으로 대교전투를 주목한 것은 이 논문이다.

영을 제외한 경군 각 부대가 공주로 들어왔다. 즉 선봉장 이규태가 이끄는 통위영을 비롯해서 안성군수 홍운섭이 이끈 경리청 우1소대, 영관 구상조가 이끈 경리청 좌1소대, 대관 백락완이 이끄는 경리청 좌2소대, 서산군수 성하영이 이끄는 경리청 중 2소대가 공주 방어의 요지를 선점하고 있었다.

남접농민군과 북접농민군은 공격 지점을 분담하였다. 남접군은 노성에서 공주산성으로 들어가고, 북접군은 이인에서 서쪽으로 공주를 공격하기로 했다.

다시 公州로 行陣하던데 全은 魯城으로 向하여 公州山城으로 入하고 本陣 여러분은 이인에서 守備하는 官軍을 擊破하고 同 山中에서 宿泊하고 翌日 未明에 西으로 公州로 攻擊하여 들어간 中 小蓋峰 작은 峰 二處를 占領하고 全은 東으로 公州山城 攻入하였는데 官軍은 小蓋大峰에 留陣하여 互相 攻擊하던 中 잠깐 호軍하다가 失敗하여 鏡川 川에 退陣하여 잇고 全은 그저 應戰하면서 本陣으로 通知하되 反擊하라 하였으나 反軍치 안코 一日을 留陣하던 中 全軍이 退陣하여 도로 論山으로 留陣하다.

북접군은 이인에서 접근하여 작은 봉우리 두 곳을 점령하고 공주로 들어가려고 시도 하였으나 결국 실패하고 만다.⁸³⁾ 우금치전투에 참여한 남북접군의 기세는 대단하였다. 정면에서 공격해 가장 치열한 전투가 벌어진 11월 9일 진압군의 기록⁸⁴⁾에 처절한 상황이 드러난다. “몇 만 명되는 비류의 무리가 40~50리를 연이어 에워싸서 길이 있으면 빼앗고 높은 봉우리는 다투어 차지하여 동쪽에서 소리 지르다가 서쪽으로 달아나고 왼쪽에서 번쩍 하다가 오른쪽에서 튀어나오면서 깃발을 흔들고 북을 치며 죽을 각오로 먼저 산에 올라”왔지만, “사시(10시) 쯤부터 비로소 총을 쏘아 섬멸하였는데, 일본 병사가 앞의 봉우리 위에 진을 일렬로 벌리고 있다가 한꺼번에 포를 수십 차례 쏘아서 적을 많이 섬멸하자 감히 가까이 침범하지 못하였지만 아직도 적병은 많고 우리 군사는 적은 형세”였으며 “미시(2시) 쯤에 이르러서도 격퇴하지 못”할 정도였다. 하지만 결국 우세한 무기를 가진 일본군과 관군의 화력을 이겨내지 못하고 수많은 희생자를 남긴 채 논산으로 후퇴하였다.

礪山으로 가서 同郡 三里에 集合하여 一日을 留하며 全의 執穀 九千石을 同里에서 犒軍하고 翌日에 益山으로 들어가 二日을 留하다가 도로 三里로 나와서 前記 執穀 九千石 中 殘穀을 各各携帶하고 其夜에 全州城中으로 下去하여 三日을 留하다가 다시금 遠坪 장터에 가서 三日을 留하다가 翌日 未明에 官

83) 『侍天教宗釋史』 第二編下 第十一章 甲午教厄. “李容九至公州之利仁驛、與京營兵、戰于玉女峰、京兵敗走、容九遂進至鳳凰山、卽郡後鎮山 京兵與日兵、從山上放丸、教徒冒死前進、兩軍肉薄血戰十餘合、容九中丸脛穿、因以日迫力窮、一時潰散、更集於論山浦、在魯城郡南二十里 又爲官軍所敗、轉向全州郡”.

84) 『巡撫先鋒陣膽錄』, 1894년 11월 10일.

軍 數千名과 激戰하야 敗戰을 當하고 太仁邑으로 入속겨가서 三日을 留하다가 追激 官軍과 또 激戰하야 敗하야 古阜 白山으로 가서 井邑을 지나 長城 齋齋를 너머가다가 海月 神師의 敬通을 남무에 걸어노흔 것을 孫松菴丈이 먼저 發見하였던데

북접군은 여산 삼리로 내려가서 재집결하고 하루를 보내며 남접군이 모아놓은 군량으로 호케를 하였다. 그러나 급히 후퇴해야 했던 까닭에 애를 써서 모아놓은 군량은 대부분 버려두고 가야했다. 이를 아까워했던 북접군은 다음날 익산으로 가서 이틀을 지낸 후 다시 여산 삼리로 다시 와 군량을 풀어 개인휴대를 하고 전주성으로 갔다. 전주성에서는 3일을 지냈다.

일본군과 경군은 후퇴하는 남북접농민군을 바로 추격해오지 못했다. 소수의 일본군은 독자적으로 추격할 수 없었고, 우금치전투처럼 경군 부대를 앞세우려고 했으나 선봉 李圭泰가 거부하였다. 정부에서 지휘권을 넘겨준 후비보병 제19대대장 미나미 소좌가 아니면 따르지 못하겠다고 한 것이다.⁸⁵⁾ 그런 와중에 남북접농민군은 후퇴할 수 있는 시간을 얻게 되었다.⁸⁶⁾ 일본군 서로군 본대가 충청감사 박제순의 독촉에 의해 공주에 들어온 날은 10월 24일(양 11월 21)일이다. 일본군과 공주 우금치에서 전투를 벌인 날은 그 14일 뒤인 11월 8일(양 12월 4일)과 9일(양 5일)이었다. 일본군은 우금치전투가 그친 후 5일 동안 공주에 머물러 있었고, 공주를 출발해서 논산에 와서 전투를 벌인 날이 11월 15일(12월 11일)이었다.

북접농민군은 추격군이 오기 전에 전주로 가서 논산전투에는 참여하지 않았다. 전주성에 들어가서 3일을 머물던 남북접농민군은 23일 다시 후퇴하게 된다. 재집결한 곳이 금구 원평이었다. 김덕명 포가 위치한 원평은 보은 장내리집회가 열릴 때 전라도의 동학도들이 모여서 집회를 열었던 장소로서 원평장은 인근의 물산이 집중되었던 곳인 동시에 교통의 요지였다. 또 앞으로는 원평천이 흘러서 많은 사람들이 일시에 물을 사용할 수 있었다.

원평에서 머물고 있던 3일째인 11월 25일에 일본군과 경군이 기습해왔다. 이때 공격한 일본군은 공주에서 맞서 싸운 서로군이 아니었다. 대대본부와 함께 청주를 거쳐 문의와 증악에서 전투를 하고 금산을 지나 연산 고산전투를 치른 증로군에 속했던 일본군이였다.⁸⁷⁾ 여기에 배속되었던 교도중대가 앞장을 섰다.

교도중대장 李軫鎬가 보고한 문서에 전투 장면은 다음과 같이 나온다.⁸⁸⁾

85) 『주한일본공사관기록』 1권, 五. 東學黨에 關한 件 附巡查派遣의 件 二 (30) [東學徒鎮定에 關한 諸報告 및 意見其中] 일본군은 巡撫營 先鋒 이규태가 지휘에 따르지 않자 매우 싫어했는데 심지어 열렬히 동학당에 가담한 사람이라고 비난하고 있다.

86) 『주한일본공사관기록』 6권, 二. 各地東學黨 征討에 關한 諸報告 (3) [各地 戰鬪詳報 및 東學黨征討策 實施報告書 送付의 件].

87) 위자료.

이달 24일 미시 경에 파송한 隊官 崔永學이 교도병 1대 및 일본병 1대와 진군하여 금구읍에 이르러 밤을 지냈습니다. 그리고 25일 묘시 경에 행군하여 나아가서 곧 院坪에 도착하니 적도 수만 명이 한 번 나팔소리가 나자 陣을 三面으로 벌리고 品자 모양을 형성했습니다. 천 步의 거리를 두고 손시부터 신시에 이르기까지 서로 총을 쏘며 싸웠는데 포성이 우뢰 같고, 탄환이 비 오듯 날아 오았습니다. 적은 산 위에 있었고 우리 군대는 들에 있었으며 사방 주위에서 함성이 진동하고 불꽃과 연기가 안개를 이루어 원근 분별이 어려웠습니다. 그러나 대관 崔永學이 칼을 뽑아 적을 향해 앞장서서 산에 올라가 지휘하였고, 호령 하나로 隊를 東西로 나누어 한꺼번에 힘을 써서 다투어 먼저 올라가 찌르거나 목을 베어서 죽인 적이 37명이었습니다. 남은 무리는 사방으로 흩어지고 각자 도망하였는데 산세가 가파르고 험하였으며 해는 이미 저물어 가고, 게다가 적도의 행색이 모여 있으면 동학인지 알 수 있지만, 흩어져 있으면 농민과 비슷하기 때문에 일일이 추격하여 죽일 수 없었습니다. 빼앗은 軍物은 회룡총 10자루와 조총 60자루·납탄 7섬·화약 5괘짜·자포 10좌·刀劍 200자루·쌀 500섬·돈 3,000냥·면포 10동·소 2마리·말 11필·쇠가죽⁸⁹⁾ 10장·호피 1령입니다. 모두 일본 大隊陣에 귀속시켰고, 그 나머지 활, 화살, 부서진 총, 가죽 갑옷, 긴요하지 않은 물건은 모두 불태워버렸습니다. 우리 병사와 일본 병사는 한 명도 죽거나 부상당한 사람이 없었습니다. 그리고 이날 유시 경에 군대를 금구읍으로 회군하였습니다”라고 하였습니다.

이 원평전투에 북접농민군이 참여했다는 구체적인 증거는 『林東濠 略歷』에서 처음 나오는 것이다. ‘결전 끝에 패전했다’는 것과 ‘태인으로 쫓겨갔다’는 표현에는 직접 전투와 행군에 참여한 사람의 경험이 생생하게 드러난다. 원평전투에서 약 9시(巽時)부터 4시(申時)까지 7시간 동안 일본군과 경군의 공격을 막아낸 것을 보면 필사적으로 싸운 사실을 알 수 있다.

일본군과 교도중대는 전주에서 원평으로 들어오는 길로 접근해서 원평천 건너 구미란 뒷산을 가득 메운 남북접농민군 진영을 공격했다.⁹⁰⁾ 그리 높지 않은 야산은 삼면에서 品자 형태⁹¹⁾로 모인 사람들이 공격군에 대항하였으나 우세한 무기를 가지고 정면 공격해

88) 『巡撫使呈報牒』, 78, 1894년 11월 26일. 이 전투 보고는 다음 기록들에 전제된다. 『甲午實記』 12월 5일; 『순무선봉진등록』 제4, 11월 30일.

89) 원평전투의 노획물로 나온 것이 鍊牛皮인데 이는 야외에서 쇠가죽에 쌀과 물을 붓고 아래서 불을 때서 취사를 했다는 전문을 사실로 확인해주는 증거가 된다.

90) 모악향토문화연구회의 崔淳植(1933~2008) 회장 증언. 구미란에 주소를 둔 최회장은 원평집회와 김덕명 대접주 그리고 전봉준과 서당교육, 원평전투에 관한 많은 조사를 해서 연구자들에게 그 성과를 전해주었다. 이 증언은 여러 차례 원평을 답사했을 때 전해준 내용이다.

91) 공격군의 시야에서 구미란 마을을 보면 산줄기 중간에 움푹 들어간 곳에 위치해 있다. 우익에는 원평 장터 옆의 야산에 일대가 진을 쳤고, 좌익에는 동남향 산기슭에 일대가 진을 쳐서, 구미란마을 뒷산과 합하

오는 기세에 눌러서 37명의 희생자를 남기고 후퇴하지 않을 수 없었다.

전투가 벌어진 지역은 참혹하였다. 순무선봉장 이규태의 보고 문서⁹²⁾에는 “원평 장터의 가게와 여염집이 잇달아 40여 집이 불에 탔고, 비류가 저장해둔 곡식 몇 백 섬과 민가의 물건이 모조리 불에 타서 보기에 극히 근심스럽고 참담”한 지경이었다.

남북접농민군은 태인으로 후퇴하였다. 북접농민군은 행군 목적지를 정하지 못했고 급히 추격하는 진압군을 피해 보조를 맞다. 그래서 이웃 고을 태인으로 가는 남접농민군을 따라갔다. 전봉준은 산봉우리에 포진하여 평지에서 이루어질 공격을 막으려는 계획을 세웠다. 공주 우금치에서는 고지를 공격하다가 막대한 희생을 치루었는데 이제는 반대로 태인 읍내의 주산인 城煌山과 閑加山 그리고 道理山과 같은 고지에 올라가 진을 친 것이다.

원평에서 공격해온 일본군과 교도중대 병력은 태인으로 추격하지 않고 금구읍으로 들어갔다. 그래서 남북접농민군은 태인읍에서 3일 간 대비할 수 있었다. 태인의 남북접농민군이 공격받은 날은 27일이었다. 공격군은 다른 부대였다. 원평 공격군은 후원하도록 일본군과 장위영 병대가 원평과 태인으로 뒤따라왔는데⁹³⁾ 이 부대가 고지를 향해 공격해온 것이다. 다음은 그 전투보고서를 줄인 것이다.⁹⁴⁾

26일 본 진영의 좌부영관 이두황의 명령으로 --- 전라 감영을 출발하여 금구읍의 숙소에 도착하였습니다. 이튿날 새벽에 행군하여 태인 경계에 도착하니 이때는 사시였습니다. 적의 형세를 살피니 東魁 全琫準·金文行·劉孔萬·文行敏 등 4명이 8,000여 명을 이끌고 태인읍 주산인 城煌山과 閑加山, 道理山에 둔 췌하였습니다. --- 적들은 경군 도착을 알고 천보총을 한꺼번에 발사하며 --- 그 기세가 대단했습니다. 적이 있는 곳은 모두 높은 산 요해처이고 그 밖에는 모두 평평하고 넓은 들판이었습니다. 우리 군사는 230명이고 일본병사는 40명이었는데, 대관 윤희영, 교장 이경진·홍선경이 거느린 병사 90명과 일본병사 20명은 적이 있는 산 서쪽 길로 공격하였고, 대관 이규식, 교장 오순영·장세복·양기영이 거느린 병사 140명은 일본병사 20명과 함께 동쪽 길을 따라 대응하여 공격하기로 정한 다음 --- 일제히 함성을 지르며 산을 올라 급히 공격하자, 적도는 머리와 꼬리 구분없이 비로소 물러나 흩어졌습니다. 적들이 진을 쳤던 산을 빼앗고 건너편을 보니 전후 산의 적들이 성황산 (적)과 합해서 계속 회룡총을 발사하고 나팔을 크게 부니 탄환이 비 오듯 했습니다.

면 品字 형태로 보인다.

92) 『순무선봉진등록』, 제4, 11월 30일.

93) 『양호우선봉일기』 11월 25일. “當夜因日士官知委 分隊官一員教長二員兵丁一百名 派送金溝院坪地”; 11월 26일. “又分隊官一員教長一員兵丁一百四十名 派送金溝泰仁等地” 우선봉 이두황은 전주성에 머물러 있었고, 장위영 병대를 나누어 일본군 장교의 지휘 아래 원평과 태인으로 가도록 했다.

94) 『순무선봉진등록』 12월 2일.

그래서 --- 군사를 집합시켜 다시 네 갈래로 길을 나누어 급히 산에 오르면서 한꺼번에 총을 쏘며 계속 공격하니 --- 적들은 --- 사방으로 흩어져 각자 도주하였습니다. 우리 군대는 네 길로 나누어 동서로 20리까지 쫓아가니 마침내 생포한 자가 50여 명이고, 총에 맞아 죽은 자가 40여 명이었습니다.

산 위를 선점했어도 일본군과 경군이 정면으로 치고 올라오자 이를 막아낼 수 없었다. 태인전투는 대군을 이루었던 남북접농민군이 사방으로 흩어지는 결과를 가져왔다. 다행이 대오를 잃지 않은 북접농민군은 '古阜 白山으로 가서 井邑을 지나 長城 (갈재)로 후퇴하였다.⁹⁵⁾ 고부 백산은 추격을 피해서 일방적으로 밀려간 것이다.⁹⁶⁾ 백산에서 북접농민군 지도부는 본거지 회군을 결정한 것으로 보인다. 행군로는 이때부터 충청도로 가는 길을 찾고 있는 것을 알 수 있다. 그러나 회군길을 찾는 것은 쉽지 않았다. 북상을 하게 되면 전주와 공주로 가는 길을 택해야 하는데 일본군과 경군이 있는 지역을 거쳐야 했다. 그래서 장성으로 돌아가서 협준한 산줄기를 타고 충청도로 가는 길을 찾았다.

2) 북접농민군의 문의 · 지명전투

영동과 황간 그리고 보은과 옥천 일대에 주둔했던 북접농민군이 공주 출진군이 빠져나갔지만 충청도에도 대규모 병력이 남아서 활동하고 있었다. 충청도 지역의 방어를 맡은 북접농민군은 회덕의 姜健會과 문의의 吳一相이 이끌었다. 부서편제가 갖춰져 있었겠지만 그 편제나 지휘부에 속한 인물에 관해서는 어느 기록에도 나오지 않는다. 공주로 출진한 손병희의 지휘부가 황산집결군의 지도부를 중심으로 구성되었는데 그것은 경기도와 강원도 그리고 충주에서 온 사람들이 공주 출진군의 중심세력이었기 때문이었다. 충청도의 북접농민군은 주로 회덕 문의 등지에서 활동하던 조직으로 구성되었을 가능성이 많다.

회덕을 비롯해 문의 회덕 회인 보은 청산 옥천 일대의 동학 조직은 강대하였다. 호서 선무사 鄭敬源도 한 군현에 '巨魁'가 두 명씩 활동하였다고 파악⁹⁷⁾한 지역이었다. 이들은 충청도 남동부의 지형도 잘 알고 또 각 군현의 동학조직은 물론 주민들도 잘 알고 있었기 때문에 동학의 근거지를 향해 내려오는 진압군을 막기 위한 방어군에 편제되었을 것

95) 북접농민군의 전라도 내 행군로는 동학 관련 역사기록에 비슷하게 나온다. 『天道教書』 “孫秉熙以下諸包 1 至公州하야全琿準等으로相遇하야官軍 2 對터부러交戰하다가敗하야南으로向할새論山礪山益山全州金溝泰仁井邑古阜長城淳昌等諸郡을經하야任實郡葛潭市에至하다”

96) 『순무선봉진등록』 11월 30일. “비류들이 다시 진을 치고 井邑 등지로 전진한다'고 합니다. 이 때문에 그 다음 날 29일 진시 경 일본군 각 부대와 더불어 한꺼번에 출발하여 30리를 가서 井邑縣 前店에 도착했습니다. 그러나 비류는 이미 도망하여 끝내 자취가 없었기 때문에 20리를 더 전진해서 정읍현 中興里에 도착하여 유숙하였으며, 일본병사는 川原站에서 나누어 주둔하였습니다.”

97) 『주한일본공사관기록』 1, 五 東學黨에 관한 附巡查派遣의 件 二, 忠淸道東學黨巨魁人名錄.

이다.

강건회는 10월 3일 청주병영에서 공주 일대를 순회시킨 병대 73명을 한발에서 만나 화공으로 전멸시킨 회덕농민군의 지도자였다.⁹⁸⁾ 한발전투 후 열흘만에 강건회가 공주 출진군을 제외한 북접농민군을 지휘하게 되었다.

동학 교단은 보은 장내리의 대도소와 청산 문암리의 최시형 거처를 중심으로 운영되었다. 전국 각 지역의 동학조직이 교단에 연락하는 사무는 대도소에서 관장하였다. 교단을 찾아오는 동학도들은 대도소에서 사람을 만나고 업무에 관한 협의를 하고 있었다. 대접주 등 고위지도자들은 문암리의 최시형의 거처를 찾아가서 모임을 갖고 교단의 중요한 방침을 결정하였다. 이 소문도 퍼져나가 최시형이 문암리에 살고 있다는 것도 널리 알려졌다.

따라서 당시 동학의 본거지인 보은일대를 제압하고 동학의 지도자들을 체포하는 것이 진압군의 당면 목표가 되었다. 문경병참부의 出羽 소좌는 문경부사가 탐지한 충청도 지역의 동학 지도자들의 명단을 전해듣고 동학농민군 진압을 책임진 남부병참감 伊藤 중좌에게 즉각 보고하였다.⁹⁹⁾ 이 보고에는 최시형이 “지금은 靑山 文巖里에 살고 있는데 읍내와의 거리는 10리”이고 “賊黨들은 그 수가 각기 수만 명으로, 그들은 軍器를 탈취하였을 뿐만 아니라 社倉의 還穀도 다 먹고 백성들의 糧穀을 執置하여 군량으로 삼았다.”고 하였다. 기포령 직후의 충청도 사정을 상세히 정탐한 내용이었다.

보은 일대의 동학근거지는 관군과 민보군 그리고 일본군이 번갈아 기습을 받았다. 기습의 첫째 목적은 교주 최시형을 붙잡으려는 것이었다. 다음은 동학 지도자들을 체포하고, 근거지를 초토화하려는 것이었다.

첫 번째 공격은 청주성 구원병으로 온 장위영 병대가 보은 장내리를 초토화하는 것으로 시작되었다. 장위영 부영관 이두황은 충청병영의 반격으로 공방전에서 승리한 이후인 10월 12일 청주성으로 들어갔다. 청주성에서 병사 이장희, 경리청 영관으로 안성군수를 겸하고 있는 성하영 등과 논의하였다.¹⁰⁰⁾ 그 결과 동학 교단의 대도소가 있는 보은 장내리를 들이치기로 했다.

10월 13일 장위영과 경리청 그리고 진남영의 병대가 장내리로 가기 위해서 함께 청주성을 출발하였다. 장위영 병대의 수는 1천명에 우마 60필, 그리고 자원해서 따라온 보부상 20명까지 합세한 대부대였다. 경리청 병대는 미원에서 머무르도록 하고 진남영 병대만 같이 보은으로 갔다. 진남영 병대는 보은읍에 들어가도록 하고, 장위영 병대만 계속 행군해서 장내리에 도착하였다. 장내리에 있던 북접농민군은 이미 3일전인 11일에 영동

98) 줄고, 「1894년 東學農民軍의 淸州城 점거 시도」 『충북사학』 13집; 淸州慕忠會편, 『慕忠祠』, 1991.

99) 『주한일본공사관기록』 1, 五. 東學黨에 關한 件 附巡查派遣의 件 二 (3) 報恩東學黨에 關한 報告.

100) 『양호우선봉일기』 10월 12일, 16일. “三營이 회합하여 의논해서 결정하기를, 보은 장내리에 있는 동도 근거리 소굴을 먼저 소탕하기로 하였습니다.” 3영은 장위영과 경리청 그리고 충청병영을 의미하는 진남영이다.

과 황간으로 이동을 하였고, 관군이 온다는 소식 때문인지 장내리는 비어 있었다. 이 두 황은 200여호의 민가와 400여채의 초막을 불살라버렸다.

그런 뒤 북접농민군이 주둔하고 있던 영동과 황간으로는 가지 않았다. 당연히 불과 얼마 떨어져 있지 않은 청산 문암리의 최시형 처소에 가야 했지만 가지 않았다. 충청감사가 보낸 공주 구원 요청에 따라 방향을 회인으로 돌린 것이다. 이 때문에 북접농민군은 경군과 맞부딪치지 않을 수 있었다.

다음으로 일본군 후비보병 제19대대 중로군이 10월 24일 청주로 들어온 것이다.¹⁰¹⁾ 충청병사 이장희는 대대장 미나미 소좌에게 “4~5일 전부터 동학도가 이 마을 저 마을에 출몰해서 약탈하며 바야흐로 문의현을 함락시킬 기세”라면서 출병을 요청하였다. 25일 이른 아침 정찰대를 보내서 그 사실을 확인하자 밤 12시 청주성을 나와 문의로 향했다. “본부와 제3중대, 교도중대 및 진남영병 약간”까지 포함한 가능한 모든 병력을 동원한 것이었다.

바로 이 문의의 동학도들이 강건회가 지휘하는 북접농민군 대군이였다. 문의의 북접농민군은 미나미 소좌가 보기에 전투 역량을 갖추고 있었다. 지명은 “마을 전체가 계곡사이에 있어서 전후좌우가 모두 산이며 10리쯤 떨어진 곳에 험준한 언덕이 있었다. 작전상 가장 유리하고 동시에 가장 위험한 곳”이었다. 일본군이 치룬 전투과정에 대한 묘사도 상세하다.¹⁰²⁾

至明이라는 마을은 산과 산 사이에 있으며 개천을 그 사이에 끼고 있어서 東學徒는 마치 배수진을 치고 있는 모양새를 하고 있었다. 사방을 둘러싼 산 위에는 東學徒로 하였다. 그 수는 300명쯤 될 것이다. 이보다 앞서, 전부터 牙山의 패잔병 50여 명이 東學徒 속에 들어가서 작전 기타 일에 대해 지휘하고 있다고 들었다. 그래서 이 사변이 일어난 초기부터 긴가 민가 의심하였다. 왜냐하면 東學徒들은 모두 백의를 입었는데, 그 적군 중에 韓兵과 같은 복장을 한 자 수십 명을 보았기 때문이다. 끝내 적을 추격해서 增若 부근으로 격퇴시키고 다시 모든 부대를 文義로 철수시켰으며, 前哨를 언덕에 배치하여 지키게 하였다. 또한 적이 增若의 방면으로 도주했으므로 그를 추격하게 하기 위해 바로 새벽 3~4시쯤 1개 枝隊를 떠나게 하였다. 혹시 패잔병들이 새어나가서 淸州에 모이면 공교롭게도 우리의 배후를 차단할 염려가 있었기 때문이며 만일 東學徒가 우리의 배후를 차단하지 않는다면 본대와 합류시킬 생각에서였다.

강건회와 오일상이 지휘한 북접농민군은 미나미 소좌가 1만 2000명이 넘는 것으로 추

101) 졸고, 「1894년 東學農民軍의 淸州城 점거 시도」 『충북사학』 13집.

102) 『주한일본공사관기록』 6, 二. 各地東學黨 征討에 관한 諸報告 (2) 東學黨 征討略記.

산¹⁰³)한 바와 같이 수도 매우 많았다. 또 검은 색 담호를 입은 것과 같은 사람들도 수십 명이 확인되었는데 이들은 관속들이 아니었나 한다. 담호는 아래가 길고 소매가 없는 조끼형의 군복으로서 북점농민군 속에는 관속들이 들어와 있는 것으로 보인다.

그러나 강을 사이에 두고 건너편 산봉우리를 향해 총을 쏘는 형태의 전투에서 우수한 무기로 무장했을 뿐 아니라 훈련이 된 일본군을 당해낼 수 없었다. 7명이 쓰러지자 증약 방면으로 물러서고 말았다. 일본군과 관군을 상대로 정면 충돌하지 않은 강건희의 지휘 결정은 적절한 것이었다. 전투력을 그대로 보존한 채 후퇴할 수 있었던 것이다.

문의에서 방어하던 북점농민군의 무장은 상대적으로 잘 갖춰져 있었다. 미나미 소좌는 문의의 북점농민군에게 관심을 갖고 “면밀히 정탐해보았더니”, 다음과 같이, 창 칼 활 등 재래무기와 화승총뿐 아니라 레밍턴과 같은 신식소총도 80정이나 갖고 있던 것을 알게 되었다.

우리 부대는 물론 그 당시 충분한 전투준비를 갖추고 있었지만, 적군도 충분한 준비를 갖추고 있었던 것 같다. 왜냐하면 취사장 같은 것도 있었고 또 그 부근에는 지뢰까지 매설되어 있었기 때문이다. 東學徒는 아주 구식인 화승총을 갖고 있는데 불과할 것이라고 예상했었는데, 면밀히 정탐해보았더니 꽤 많이 후장총을 가지고 있었으며 또 탄환과 화약 같은 것도 상당히 갖고 있었다. 레밍턴총 80정을 갖게 된 것은 모두 관리들의 총을 탈취한 것 같았다. 그렇지만 이 사실을 관리들에게 물어보면 단 한 번도 빼앗긴 일이 없다고 한다. 그러나 이는 단지 변명에 지나지 않는 것 같다. 또 龍山을 출발하기 전에 들은 바에 의하면 東學徒가 대포를 갖고 있다고 하였다. 그런데 至明에서 전투가 벌어졌을 때 산 위에서 한두 발 대포소리 같은 울림이 들렸으나 그것이 과연 대포소리인지 또한 소총을 일제 사격한 것인지 뒤에 수색하였으나 끝내 분명하지 않았다. 마침내 적을 擧若 부근까지 퇴각시켰으며, 그날 밤은 산 위에 前哨를 배치하여 경계하고 다음 날 출발할 계획이었다.

대규모 북점농민군을 위한 취사장은 문의에서 처음 확인되는 것이다. 더욱이 대포도 보유한 듯 전투 중에 대포소리와 같은 울림도 있었다고 말하고 있다. 북점농민군의 무장강화를 위한 노력을 보여주는 것이다. 더 흥미 있는 무기는 지뢰의 존재였다. 진압군이 공격해 들어오는 길목에 지뢰를 설치했다고 한다. 실제로 일본군 한 병사가 추격에 나섰다 지뢰에 부상을 입었다.¹⁰⁴⁾

103) 『주한일본공사관기록』 1, 六, 東學黨征討關係에 關한 諸報告 (8) 文義附近 戰鬥詳報. “오전 11시 30분 전위소대가 至明(至明江) 북쪽 강기슭에 도착했을 때, 남쪽 강기슭에는 많은 적도가 모여서(一萬二三千) 시끄럽기 그지없었다. 이때 우리 첩병이 강을 사이에 두고 사격을 시작했고 전위 소대원을 첩병 왼쪽으로 증가시켰다. 11시 45분 1개 소대를 전위의 첩병선으로 증가시켰다. 오전 12시 왼쪽 방향으로 2개 분대의 척후를 내보내 적도의 배후를 치게 했기 때문에 적도는 懷德과 周安 방향으로 흩어져 물러갔다.”

문의의 북접농민군이 강력한 무장을 갖춘 대규모 세력인 것을 확인한 미나미 소좌는 ‘곤혹스러웠다’고 훗날 토로했다. 공주의 형세가 극도로 위협해진 상황에서 즉각 적을 앞에 두고 공주로 갈 수 없었기 때문이었다. 서로군으로 서해안을 타고 내려가던 2중대가 공주에서 “東學徒가 진격해 와서 거의 포위된 꼴이 되었다. 당장 어찌 될지 알 수 없는 위태로운 상태에 빠져있으니 어떻게 하면 좋은가?”라고 구원요청을 보내왔다. 그렇지만 이 북접농민군을 그대로 두고 공주에 가면 후방이 위협해지는 까닭¹⁰⁵⁾에 공주 방향으로 연기까지 행군했다가 “오직 성을 사수하라. 한 발짝이라도 성밖으로 나와 싸우는 것을 허락하지 않는다.”는 명령을 전달하고 다시 증악과 옥천 지역으로 방향을 바꾸었다.

문의의 북접농민군은 공주 우금치전투를 외곽에서 도와준 최대 지원세력이었다.¹⁰⁶⁾ 이들은 일본군 후비보병 제19대대 본부와 중로군 그리고 경군 중 전투력을 갖춘 교도중대가 공주로 가는 것을 문의에서 막을 수 있었다. 그 결과 동학의 본거지였던 청주 이남의 충청도 지역을 방어하려던 북접농민군은 일정한 전공을 세우게 되었다.¹⁰⁷⁾ 일본군은 대대병력 가운데 동로군과 중로군을 제외한 서로군 1개중대만 공주 우금치전투에 참여하였다.

하지만 온전하게 후퇴했던 문의의 북접농민군은 10월 29일 추격군과 增若에서 조우하여 다시 일전을 벌이게 되었다.¹⁰⁸⁾ 증악에서 1만 이상의 병력을 재집결시킨 후 크고 작은 깃발 50여개를 들고 북쪽으로 행군하였다. 증악에서 북쪽으로 바로 가면 회덕에 이르게 되는데 회덕을 목적지로 삼았거나 아니면 큰 전투 없이 물러난 지명으로 다시 돌아가려고 한 것이 아닌가 한다.

이 대열이 한창 행군하고 있는데 주안방면으로 파견된 일본군 소위 미야모토 다케타로(宮本竹太郎)¹⁰⁹⁾ 지대 및 교도중대 1개소대와 마주친 것이다. 일본군 지대와 교도중대 병력은 양쪽 산에 나누어 사격을 가하면서 전진하였다. 북접농민군은 여러 사람이 쓰러졌지만 맹렬히 반격하였다.

104) 위 자료, 文義附近 戰鬪詳報. 이때 부상한 우에노(上野三藏) 일등병은 후비보병 제18대대 소속으로 19대대에 배속되어 따라다녔던 병사였다. 18대대 소속은 ‘중위·소위 2명, 下士卒 약간명과 약간의 순사’였다. (강효숙, 「자료소개 - 제19대대장 南小四郎의 경력서」, 『역사연구』 19호, 255).

105) 미나미 소좌는 “公州와 文義 사이에는 산악과 구릉이 사이를 막고 있으며 게다가 東學徒 중에서도 난폭자인 吳一相의 무리가 이 사이에 잠복해 있을지도 모르겠”다고 했는데 문의의 오일상 대접주가 가장 활동이 왕성한 지도자로 파악하고 있었다. 교도중대에서도 전투보고를 순무영에 보냈는데 그 내용은 상세한 전투경과가 없이 지원을 요청하는 것이 중심을 이룬다. (『巡撫先鋒陣障錄』 第二, 1894년 11월 5일).

106) 이와 비견되는 역할을 한 지원세력은 내포지역에서 홍주성 전투에 참여한 동학농민군이였다.

107) 『侍天教宗釋史』 第二編下 第十一章 甲午教厄. “前派懷德之教徒 遇清州兵於知名場堡 在懷德郡 彼此交仗 殺傷過當” 동학 관련 역사기록에서는 지명전투를 청주병과 싸운 것으로 알고 있었다.

108) 『주한일본공사관기록』 1, 六. 東學黨征討關係에 關한 諸報告 (11) 增若附近 戰鬪詳報.

109) 미야모토 다케타로(宮本竹太郎)소위는 을미사변 때 경복궁을 난입해서 건청궁으로 들어가 명성황후를 시해한 당사자이다. (金文子, 『朝鮮王妃殺害と日本人』, 高文研, 2009) 후비보병 제18대대소속으로 19대대에 배속되었던 소위가 이 미야모토 소위인 것으로 보인다. 미야모토 소위는 시라기(白木誠太郎) 중위와 함께 이두황의 장위병 병대를 지휘하도록 파견(『고종시대사』 3집, 1894년 10월 10일)되었으나 이때는 19대대장 미나미의 지휘 아래 동학농민군 진압에 참여하고 있었다.

그러나 적의 우익군은 산을 타고 文義 방면으로 행진하고 그들의 본군과 좌익군은 우리 군대를 향해 일제히 급사격을 해왔다. 여기서 韓兵은 겁을 먹고 퇴각했다. 적은 이에 힘을 얻어 이 산 저 산에서, “적군은 적다. 포위하라.”고 큰 소리를 지르며 더욱더 북진해 왔다. 그래서 일본군으로 이를 막게 했다. 적은 성급히 지명을 건너 문의로 갔다. 문의 현민 태반도 역시 이에 가담한 것 같았다. 我兵 韓兵을 至明에서 모아 문의로 철수했다.

1만 병력은 위력이 있었다. 우익에 있던 북접농민군은 산을 넘어 문의쪽으로 가고, 본군과 좌익군은 맹렬히 사격하자 겁에 질린 교도소대는 후퇴하였다. 결국 증약전투에서 미야모토 다케타로 소위의 일본군 지대와 교도중대 1개소대는 패산하였다. 이 전투보고서는 간략하게 작성되었는데 북접농민군이 우세한 수로 일본군을 압도했던 것은 기록하지 않았다. 그리고는 북접농민군이 문의 방향으로 갔다고 하면서 “文義縣民 태반도 역시 이에 가담한 것 같았다”거나 일본군과 교도소대를 “至明에서 모아 문의로 철수했다”고 쓰고 있다. 증약에서 지명까지는 상당한 거리였는데 지명까지 가서야 비로소 병력을 수습했다고 하는 것을 보면 질서 없이 퇴각한 것으로 보인다. ‘적도’ 30여명 전사에 탄약 소비는 1,432발이었다고 전투보고서에 쓴 것을 보면 마구 총을 쏘고 허겁지겁 피했던 것 같다. 미나미 소좌는 “적도가 수만 명이어서 탄약이 결핍하여 일시 문의현으로 물러나게 되었다고 하였다.¹¹⁰⁾

공주로 가는 것을 포기한 미나미 소좌는 회덕 옥천 청산 영동 일대의 동학 근거지로 병력을 파견하기로 하였다. 그래서 11월 1일 미즈하라(水原) 중위의 지대는 회덕으로 보내고, 모리오 대위의 지대는 옥천과 금산으로 가게 했고, 이시쿠로 미츠마사(石黒光正) 대위에게 교도중대 1소대를 부속시켜서 주안 방향으로 출발시켰다. 진남병에게는 영동으로 가게 했고, 11월 5일에는 다시 시라기 세타로(白木誠太郎) 중위에게는 중로군 2개분대와 교도중대 1소대와 함께 옥천 청산 영동을 돌도록 했다.

여러 지역으로 나누어 파견한 지대는 북접농민군 집결지를 찾아내 전투를 벌이게 되었다. 시라기 중위의 지대는 청산(石城村)에서 산위에 있는 100여명이 두세 발 총을 쏘아 온 것에 대응해서 일제 사격을 해서 바로 퇴각하도록 했다. 여기서 청산에서 온 사람에게 청산에는 지금 북접농민군이 꼭 차 있다는 정보를 얻었다.¹¹¹⁾

다음날 시라기 중위의 지대는 청산으로 갔으나 전날 정보와는 다르게 아무도 찾지 못해서 영동으로 직행했다. 11월 8일 영동에서는 현감의 정보에 따라 양산촌에 가게 되었다. 그렇지만 양산촌의 북접농민군은 금산과 옥천 방향으로 퇴각했다는 말을 들었다. 그래서 양산촌에서 숙박하기로 했는데 밤 10시에 기습을 받았다.¹¹²⁾

110) 강효숙, 「자료소개 - 제19대대장 南小四郎의 경력서」 『역사연구』 19호, 257.

111) 『주한일본공사관기록』 1, 六. 東學黨征討關係에 關한 諸報告 (20) 石城附近 戰鬪詳報.

오후 10시 서쪽(금산현 방향)으로부터 적도 1,000명 이상이 마을 보초선을 향하여 습격해 왔다. 즉시 대원의 집합을 명령하고 어둠을 타서 적이 보초선까지 잠입하도록 하였다. 적도는 이 마을로부터 약 200m 앞에 있는 민가에 불을 질렀기 때문에 적도들의 소재가 분명해져서 각 대원에게 신속하게 사격을 시켰다. 적도는 이 맹렬한 사격을 두려워하며 11시 30분 모두 금산현 방향으로 퇴각하였다.

남북접을 막론하고 동학농민군이 야간 공격을 하는 경우는 드물었는데 양산에서는 밤 10시에 기습을 시도하였다. 무기의 열세를 보완할 수 있는 고역이었지만 훈련을 받지 않은 약점이 그대로 드러나 패배하고 말았다. 민가에 불을 지르며 공격해서 소재를 알려주었기 때문에 사격 표적이 되었던 것이다. 교도중대에서도 석성과 양산전투 보고를 올렸으나 그 내용은 간략하다.¹¹³⁾

양산전투 이후 11월 9일부터 일본군 중로군은 금산으로 넘어가서 전라도 지역의 남접농민군을 상대로 공세를 취하게 된다.

5. 海月 崔時亨의 移動과 복실 전투

1) 최시형의 피신과 충청도 귀환

북접농민군이 공주로 출진하기 이전부터 청산 문암리에 있던 동학 교주 최시형은 대도소와 교주를 노리는 진압군의 목표가 되었다. 이두황이 지휘한 장위영 병대가 보은 장내리를 파괴하고 불살랐을 때는 아직 북접농민군이 영동과 황간을 비롯한 주변 군현에서 주둔하던 시기였다. 따라서 이두황은 대규모 북접농민군 주둔지를 정면 공격하기를 꺼렸고,¹¹⁴⁾ 바로 그때 충청병사와 충청감사의 시급한 공주 구원 요청이 들어오자 10월 14일 행군 방향을 돌려서 회인과 연기로 갔다.

후비보병 제19대대가 증파되어 진압에 관한 훈령¹¹⁵⁾을 내릴 때 남부병참감 이토(伊藤

112) 『주한일본공사관기록』 1, 七. 各地東學黨征討에 관한 諸報告 (2) 梁山附近 戰鬥詳報.

113) 『순무선봉진동록』 제4, 1894년 11월 22일. “교도 중대장이 보고합니다. 이달 초 5일에 파견한 대관 李謙濟가 병사 1대를 거느리고 각 읍으로 나가서 청산 石城里에 도착하여 저 무리 수만 명과 한 바탕 접전하여 40여 명을 죽였습니다. 그리고 초 8일에 금산으로 회군할 때에 옥천의 梁山 장터에 도착하였으며, 천 명인지 알 수 없는 저들 무리를 만나 50여 명을 사살하였습니다.”

114) 이두황은 진압군으로서는 1,000명이라는 많은 병력을 거느렸고, 죽산부사에 부임하여 지방관이라는 배경과 여러 군현에서 軍費와 軍糧을 지원받으면서도 강력한 동학농민군과 맞서려고 하지 않아 순무영에서 전과가 없다고 비난받아왔다.

祐義) 중좌가 전달한 정보의 첫 번째 항목이 “동학당 괴수 崔時亨은 충청도 報恩에 있으며 崔法憲이라 불리며 東學敎의 主魁이다. 동학교를 신봉하는 사람 가운데서는 첫째가는 교주라고 한다.”는 것이었다. 또 “특히 청주·보은·청산 지방은 엄밀히 수색”하라는 지침도 내리고 있다. 이에 따라 미나미 소좌는 청산 일대를 철저히 수색하게 된다. 10월 12일에는 문경부사가 최시형의 거처가 청산 문암리라는 것을 정탐하여 문경의 일본병참부에서 전해주고 있다.

최시형은 관헌의 추적을 피해서 30년 이상 피신생활을 해왔지만 이때부터 계속해서 위기를 맞게 된다. 청산 일대는 북접농민군이 가득 있었기 때문에 관아에서 문암리의 최시형 거처에 들어가 수색한다는 것은 생각할 수 없었고, 오히려 이방 등 향리들도 동학에 협조해야 했다.

그런데 일본군이 진압에 나서자 상황이 달라지게 되었다. 장내리를 처음 들이친 일본군은 후비보병 제19대대에 속했지만 군용철도 부설을 위해 파견된 기술자들을 호위하던 이른바 군로실측대의 호위병이었다. 이를 지휘한 구와하라 에이지로(桑原榮次郎) 소위의 이른바 전투보고서는 다음과 같다.

1. 12월 2일(음력 11월 9일) 軍路實測隊와 함께 洛東을 출발하여 尙州 粟溪를 경유, 4일 靑山으로 향하였다.
2. 이보다 먼저 尙州에서 그 곳 牧使가 확인한 바에 의하면, 靑山縣 文岩邑은 東徒의 소굴로서 수괴 崔法軒이 숨어 있었다. 그래서 같은 날 오후 2시 청산에 도착하자 즉시 1개 분대의 척후를 문암읍으로 파견하였다. 오후 7시경 척후의 보고에 의하면, 문암읍은 청산에서 서남으로 10리쯤 되는 곳이고 戶數는 80여 호인데, 邑民 모두가 가재도구를 산 속에 버리고 허둥지둥 달아났다고 하였다. 더구나 척후는 동도 3명을 잡고 수괴의 서류 약간을 수집하여 돌아왔다. 포로의 말에 따르면, 최법헌은 이날 12시 지나 도주했다고 한다.
3. 위의 보고에 따라 밤에는 그들이 읍으로 돌아올 것을 예상하여, 다음날 오전 1시 2개분대로 군로실측대의 호위를 맡기고 나머지 2개 분대를 이끌고 그 읍을 향해 세 방향으로 진입하였다. 오전 3시 마을 어귀에 이르렀을 때, 동학도 약 100명가량이 우리 군대를 향해 사격해 왔다. 小官은 공격하기 편하게 하기 위해서 이 읍에 불을 지르고 응전하였다. 얼마 안 가서 동학도는 무너져 달아났다.
4. 지역민의 말에 따르면, 수괴와 賊徒들은 이 읍 서남쪽에 있는 이웃 마을을 향해 도주했다고 하였다. 그래서 같은 달 5일 오전 10시를 지나서부터 그 마을을 향해 갔으나 賊이 잠복한 흔적이 없었다. 동쪽 산 위에는 많은 동학도가 있었지만, 우리의 목적이 토벌에 있는 것이 아니므로 같은 날 오후 1시 청산

115) 『주한일본공사관기록』 5, 五. 機密諸方往 二 (10) 東學黨 鎮壓을 위한 第19大隊 파견에 따른 訓令

으로 돌아왔다.

11월 9일 최시형은 불과 몇 시간 전에 문암리를 떠나서 기습해온 일본군을 피해서 체포를 모면할 수 있었다.¹¹⁶⁾ 이때부터 최시형은 여러 지역을 떠돌며 진압군을 피하고 있다.

16일에는 순무영 별군관 최일환이 청산을 기습하였다.¹¹⁷⁾

양호순무영 별군관 최일환이 보고합니다. 비류의 거괴를 수색하여 체포하기 위해 명령을 받들고 의병 35인을 거느리고서 11월 16일에 靑山 朱城面 松峴에 도착하였는데 뜻하지 않게 비도 20~30명이 각기 총과 창을 가지고 松林의 석벽 사이에서 갑자기 나와 위협하였습니다.

그리하여 우리 군대가 적의 형세를 규찰해보니 적의 무리 가운데 있는 깃발에는 ‘大先生伸冤旗’라고 쓰여 있었습니다. 또 旂를 흔들며 ‘대장’이라 부르고, ‘기마’라 부르면서 요란하게 호령하니, 우리 군은 통탄한 마음을 가눌 수가 없어 일시에 힘을 합하여 모두 총을 쏘아 먼저 몇 놈을 죽이자 곧 흩어 무너지듯 하는 형세라고 말할 만한 상황이 되었습니다. 이때를 틈타 흩어져서 잇달아 수십 명을 죽였고, 저 이른바 ‘대장’이라고 하는 朴富萬도 역시 총살하였습니다. 9놈을 생포하여 어디서 왔는지 엄하게 물으니 답하는 내용에 ‘10월 25일 공주 효포에서 패한 비적’이라고 하며, 또 法軒의 소재처를 물으니 ‘목천·직산 등지에 숨었다’라고 합니다.

체포된 동학도에게 최시형의 소재처를 심문하자 목천 직산이라고 거짓으로 말하고 있다. 이미 이때는 공주 효포까지 갔다가 대교전투에 참가한 사람들 중 청산에 돌아온 사람이 있었다. 최시형은 은밀히 잠행하기 때문에 이들이 그 소재를 알았는지 모르지만 그 행방을 바르게 알려주지 않았다고 한다.

다음으로 최시형의 거처를 기습한 진압군이 상주 소모영의 유격장 金甌中이었다. 상주 경내를 순회하며 상주성을 점거했던 동학농민군 가담자를 색출하던 김석중은 도의 경계를 넘어 보은과 영동 그리고 청산 일대를 다니며 최시형의 거처를 수색하였다.¹¹⁸⁾

11월 19일 야밤에 보은 帳內後洞을 기습한 것을 시작으로 27일에는 청산과 보은의 4개 동을 순회하며 최시형이 왕래하던 곳을 기습하였다. 12월 3일에는 상주소모영 探細人 박정호가 야간에 몰래 와서 최시형이 5, 6일 전에 옥천과 영동 고관리 등지에서 은신해 있었다고 전하였다. 다음 날 高寬里로 들어가자 이미 최시형은 4, 5일 전에 다른 곳으로

116) 이때 간발의 차이로 최시형을 놓친 구와하라 소위는 김개남이 지휘하는 남원의 동학농민군 대군을 청주에서 기습해서 패퇴시켰고, 뒤에 북실까지 북점농민군 대군을 추적해서 기습하게 된다.

117) 『先鋒陣呈報牒』, 1984년 11월 24일, 兩湖巡撫營府軍官崔日煥爲牒報.

118) 『討匪大略』.

갔다는 말을 들었다.

그러나 동학의 역사 기록 『天道敎書』에 의하면 최시형은 11월 중순에 전라도 임실로 피신해 있었다.¹¹⁹⁾

十三日에 神師 | 湖南으로 行하실새 任實郡 李炳春家에서 九日을 留宿하시다가 更히 同郡 烏項里 趙錫然家에로 하아 留連하시더니 一日은 神師 | 曰 吾 | 異機를 見하였노니 道人을 還하야 葛潭市에 往見하라 하시다 是時에 孫秉熙 | 果然 當途하거늘 迎接而歸하야 神師所에 拜謁케 되니 時는 十一月 十九日이러라 是時에 各包 道人의 作弊가 有함을 聞하시고 深憂하사 都禁察로 하여금 其淵源을 叩問하야 禁止케 하시다

十一月晦間에 神師 | 永同郡龍山市에至하시니官軍이前進을 防하는지라 神師 | 孫秉熙로더부러松田에入하사前進의計를相議하실새 神師 | 曰諸人이萬一天을信하거든반든이一心으로前進하라하신대諸人이告天出去하니一人로傷한바無하더라 是時에俗人이道衆이라憑藉하고橫暴하는者 | 甚衆하야人의家産을勅奪하는者 | 多하니衆心이怨怒하야州郡百姓이立義竝起하야道衆을攻擊하니道衆이多傷하다

임실은 동학의 교세가 매우 성하면서 오래된 동학도가 있는 지역이기 때문에 거처를 구하는 것은 어렵지 않았다. 전주와 남원 사이에 있는 산간지역인 임실은 남북접농민군과 진압군 사이에 각처에서 치열한 전투가 벌어지는 시기에 동학 교주의 은거지로는 쉽게 생각할 수 없는 곳이기도 하였다. 여기서 최시형은 북접농민군과 연락을 해서 만나게 된다. 그 과정을 『林東豪 略歷』은 상세히 표현하고 있다.

井邑을 지나 長城 峽¹²⁰⁾를 너머가다가 海月 神師의 敬通을 남무에 걸어노흔 것을 孫松菴丈이 먼저 發見하였는데 --- 松菴丈은 그 길로 바로 선진으로 떠났다. 日時년 同年 十一月 晦日이더라. 그러나 聖師께서 松菴丈 出發을 딸아 林學善氏와 相議하고 後陣으로 窺出發하야 茂州¹²¹⁾를 지나서 一晝夜에

119) 『天道敎書』 第二編 海月神師. 13일에 가서 9일을 유숙한 뒤의 날자가 11월 19일이라고 했는데 이 일수는 틀리지만 북접농민군의 후퇴길과 연계해서 보면 11월 중순부터 임실에 있었다는 것은 확인된다.

120) 표영삼 선생은 동학기록에 나오는 이 부분에 대해 의의를 제기한다. 실제 답사를 통해 확인한 결과 장성 갈재가 아니라 정읍 내장산의 가을재가 맞다는 주장이다. "익일 태인, 정읍 등지에서 다시 취합하니 도중이 수십만이라, 장성군 노령(갈재)을 유하여 유진하고 익일에 순창군을 경하여 임실 갈담으로 행진하니 도중이 피곤함을 불감하더라"고 하였다. 아마도 정읍 내장산 가을재(秋嶺)를 넘어 순창 복흥(福興)을 거쳐 쌍치, 산내, 임실 갈담으로 가지 않았을까 싶다. 내장산 가을재를 갈재로 알고 장성 갈재로 갔다고 착각한 것은 아닌지 모르겠다." (표영삼, 「손병희 통령과 동학혁명」; 표영삼, 「남원지역 동학농민혁명운동」 『동학연구』 5, 1999).

121) 무주는 잘못된 기재된 것이다. 『林東豪 略歷』의 轉聞 기록은 불확실한 것이 나온다. 고위 지도자들만 알

百十里를 行하야 任實¹²²에 宿泊하고 翌日에 同郡 李炳春氏 宅 近處에 와서 宿泊하고 其夜에 聖師 松菴及諸人이 李炳春氏 宅에 가서 海月神師를 拜謁하고 곳곳이고 떠나 十里를 와서 茂州地境에서 錦山及 各郡 聯合한 多數한 民步를 만나 一時 未滿에 擊退식히고 其日에 同郡 安城장터에 와서 二日을 留하고

북접농민군이 11월 30일 장성 갈재를 넘어가다가 나무에 걸어놓은 敬通을 발견하고 최시형의 거처를 알았다는 것이다. 그래서 임실로 가서 교주 최시형을 만나게 된다. 그리고 북접 농민군은 임실과 장수 그리고 무주 등 관군과 일본군 등 추적군과 조우하지 않는 노선을 찾아서 전라도 동쪽의 험준한 산길로 북상하였다.¹²²⁾

長水에서는 읍내로 들어가서 관아를 점거하였다. 이 사실은 무주 등 인근 군현은 물론 경상도 안의와 거창 등지에 전해져서 놀라게 하였다. 경상감사는 감영의 군대를 접경 군현에 파견해서 경상도로 넘어오는 것을 막으려고 하였다.

북접농민군의 수는 4~5천 명을 헤아렸다. 이런 세력을 막으려고 금산과 무주 등 여러 군현의 민보군이 설천에 모여 있었다. 그렇지만 수도 많고 무장이 잘 되어 있으며, 전투 경험도 쌓여있는 북접농민군을 민보군이 맞서 상대할 수는 없었다. 설천의 민보군을 쉽게 격퇴한 북접농민군은 무주읍을 점거하였다. 이 소식은 또다시 인근 군현을 놀라게 하였다. 추풍령으로 이어지는 김산에서 방어책을 세우기에 분주하였다. 그러나 북접농민군은 무주를 지나 충청도 지역으로 들어갔다.

충청도 영동에서 하루밤을 숙박한 뒤에는 대오를 2대로 나누었다.

翌日에 永同邑을 지나 同郡 미력땅이에서 宿泊하고 翌日에 二隊로 分하야 一隊는 靑山¹²³⁾ 龍山장터로 가서 留陣하고 一隊는 黃間 民步를 討伐하고 靑山장터로 가서 合陣하야 三日을 留陣하던 ---

果若 密通과 如히 前日 冬服 上下衣 一千件 換着 需應하던 龍山場터 東南間 水石리에 居하던 李判書의 子 李監使 爲人이 民步 五百名을 引率하고 水石이 (靑山)목을 侵入하던 것을 該목 守備軍에게 擊退을 當하야 全部 死亡하다.

이 때 다시 2대로 북접농민군 주력을 나누어서 황간과 청산 읍내를 점거하였다. 이 기록으로 충청도에 들어와서 2개의 대열로 나누어 활동하는 것을 확인할 수 있다. 읍내와

수 있는 내용이 불명확하게 기술된 것도 있고, 뒤늦게 들은 이야기나 다른 기록에서 본 것도 나오는 것 같다. 이러한 부분에 대해서는 사료 비판이 요구된다.

122) 졸고, 「1894년 영남 상주의 농민군과 소모영」 『동방학지』 51-52집.

123) 용산은 청산이 아니라 영동에 속해 있었음.

관아 점거는 두 가지 이유 때문이었다. 첫째는 전라도에서 오래 동안 군수물자의 공급이 없이 행군해온 까닭에 읍내의 물자와 무기를 취하려고 한 것이었고, 둘째는 북접농민군이 이 일대에서 빠져나간 후 결성된 민보군과 관아에 대한 반격을 기도한 것이었다.

민보군은 옥천과 황간 등지에서 결성되었다. 먼저 대항하고 나선 것은 황간 민보군이었는데 이제 여러 차례 전투를 겪어 실전 경험한 풍부한 북접농민군은 이들을 가볍게 물리쳤다. 그리고 한 겨울에 장기간 행군한 피로를 덜기 위해 영동의 용산 장터에 가서 3일을 주둔하였다.

그러나 충청도로 귀환한 북접농민군을 맞이한 것은 추격군이었다. 추격군은 삼면에서 접근하여 원거리에서 포위하는 형태였다. 첫째는 충청 감사 朴齊純의 명을 받은 경리청과 진남영 병대들이 앞길을 막고 있었다. 여기에 朴正彬이 중심이 된 옥천 민보군이 가세하였다. 둘째는 상주 소모영 유격병이 상주 방면에서 접근하였다. 경상도 상주로 북접농민군이 방향을 돌리는 것을 막기 위해 원정을 온 것이었다. 셋째는 문암리의 최시형 처소를 기습하고, 청주성에서 김개남 부대를 후방에서 기습 퇴각시킨 구와하라 소위의 군로실측대 호위병이 김산 방면에서 북상하고 있었던 것이다. 여기에는 낙동과 태봉병참부의 주둔병도 가세하였다. 넷째는 경상 감영에서 파견한 남영병 150여명과 김산 소모영의 隨員 金鷹斗가 인솔한 선산포군 150명, 개령포군 95명, 인동포군 100명, 성주포군 10명이 올라오고 있었다.

먼저 용산으로 접근해서 공격해온 것은 경리청과 진남영 병대였다. 경리청과 진남영 병대의 수는 적지 않았다. 경리청 병대는 隊官 金命煥과 參謀官 李潤徹 그리고 敎長 鄭在元이 거느린 70명이었다. 진남영 병대는 180명이 용산에 왔는데 이 수는 청주성 방위에 필요한 병력을 제외한 가동할 수 있는 최대의 병력이었다. 박정빈이 거느린 옥천 민보군의 수를 합한다면 450명이나 되는 수였다.

第三日되던 大戰이 有하다던 날에 果若 龍山장터 北便으로던 宣軍及 靑山沃川 兩軍 民步 數千名이 合勢하여 달려오고 南으로던 奉化 兵丁四五十人과 日兵 八百名이 入窺쳐들어움을 當하고 西으로던 前日부터 捕軍을 날려오던 軍兵이 追入함에 當하여 海月神師께서 扶杖하시고 命敎하시되 여러 道人과 捕軍이 一切로 北向四拜하고 合天人意 師하고 돌리밀면 한 사람도 傷치 안코 또던 철 한 개도 맞지 안이하리라 하시고

용산 장터에서 맞붙은 북접농민군과 경리청 진남영 병대와 12월 11일과 12일 이틀 간 치열한 격전을 벌였다. 경리청에서 보고한 전투 내용은 다음과 같다.¹²⁴⁾

124) 『순무선봉진동록』 제5, 1894년 12월 20일.

금영순상의 지휘에 따라 대관 김명환과 참모관 이운철, 교장 정재원이 병사 70명을 거느리고 이달 초 8일에 괴수를 토벌하고 체포하기 위해 보은·청산 등지로 출발하였습니다. 그런데 대관 김명환의 보고 내용에, “초 9일 회덕에서 머물러 지냈고, 초 10일에는 옥천에 머무르면서 비류가 영동 용산 장터에 모여 있다는 소식을 들었습니다. 11일 청산으로 군대가 행군할 때에 청주의 병사 180명과 청산에서 만나 靑山邑에서 진영을 합하고 머물러 지냈습니다. 12일 새벽에 군대를 출동하여 영동 용산 장터로 출발해가니 적들의 형세가 평강하여 숫자가 수만 명에 이르렀습니다. 서로 맞서서 접전하여 비류 5~60명을 총살한 뒤에 이어서 적을 더 추격하다가 탄환이 떨어져 군대를 돌려 산으로 올라갔습니다. 그러자 적군의 형세가 더욱 강성하여 사면에서 에워싸는데 형편상 부득이 회군할 때에 순무영의 참모관 이운철과 본영의 좌소대 병사 金昌云 1명, 진남영의 병사 1명이 총을 맞고 죽었으나 시신은 끝내 찾아내지 못했습니다. 군대를 점검하니 좌소대 병사 李基俊·金億石·金太山 3명도 낙오되어 생사를 알 수 없었으나 청산읍으로 회군했습니다.

용산의 북접농민군은 장터 서쪽에 있는 고지를 선점하여 유리한 위치에서 대적하였다. 북쪽에서 공격해온 경리청과 진남영 병대는 멀리서 총을 쏘며 도전을 하였으나 고지에서 반격하는 것을 막지 못하고 결국 후퇴하고 말았다. 청산읍까지 갔으나 북접농민군이 매우 강력했던 것을 목격한 까닭에 청주쪽으로 멀리 물러나게 되었다. 이 전투에는 상주 유격병도 가세했으나 북접농민군에게 밀려서 후퇴하였다.¹²⁵⁾

2) 보은 북실전투¹²⁶⁾와 음성 되자니전투

북접농민군은 용산 장터에서 올라가 청산 읍내를 점거하였다.¹²⁷⁾ 그리고 다시 길을 나누어 1대는 원남을 거쳐 보은 읍내까지 북상하였고, 다른 1대는 관기쪽으로 가서 장내리로 올라갔다.

神師를 모시고 靑山문바위 神師宅 門前을 當한 즉 神師宅은 火燒已盡되었던 데 神師께서 小不回顧하시고 顏色이 若如히 經過하시

이 행군 과정에서 참담한 광경을 목격하였다. 최시형의 거처였던 문암리는 불에 타서

125) 『討匪大略』 1894년 12월 13일.

126) 졸고, 「東學農民戰爭期 報恩 일대와 북실戰鬪」 『報恩 鍾谷 東學遺蹟』, 충북대학교서문화연구소, 1993.

127) 『討匪大略』 12월 15일. “細作이 보고하기를, “적의 무리가 청산에 주둔해 있고, 거과는 동헌에 유숙하며, 나머지는 모두 각 관청 건물에 모여 있습니다”라고 하였다.”

황폐하게 변하였다. 일본군이 기습해서 태워버린 것이었다.¹²⁸⁾ 장내리의 모습은 더욱 심했다. 대도소 건물은 물론 200여호의 큰 마을은 불에 타서 사라지고 황폐한 잔해만 남아 있었다. 북접농민군이 주둔했던 400여 채의 초막도 화재 잔해로만 남았다. 분노한 북접농민군은 보은 읍내에 들어가서 관아를 부수는 등 분풀이를 하였다.

이날 2대로 나누었던 북접농민군은 북실마을에 함께 들어가서 겨울밤을 보내기로 하였다. 이때 눈이 매우 많이 쌓여서 행군을 하기도 어려웠다. 최시형은 신발을 단단히 하고 장거리 행군을 위해 행장을 잘 단속하라는 命敎를 내렸다.

북실은 남쪽 입구만 제외하고 산으로 둘러싸여 분지와 같은 지형에 12개 마을로 이루어진 곳이다. 안에도 작은 야산이 분지 형태로 있었다. 각 마을에 분산해서 저녁을 먹고 너른 들판에 불을 피워놓고 흩어져서 쉬고 있는 중 갑자기 총소리가 들렸다. 가장 먼저 기습당한 곳은 최시형 손병희 등 지도부가 저녁을 먹었던 金召村家였다. 『林東豪 略歷』은 북실전투를 다음과 같이 간략히 기술하였다.

다시 翌日 夕後에 行軍하여 報恩 북실로 와서 夕飯을 먹고 其夜에 繼續하여 夜飯을 지어 먹고 신발 단단히 하고 行裝單束하라던 神師의 命敎가 기시다. 不過 半時間內에 神師기신 洞里案山에서 放銃(속새, 회선 各等)함으로 本捕軍이 應戰 一時間餘에 神師께서 그 洞리에 數三丈되던 藩籬를 超出하여 나오셔서 命敎하시되 官軍은 小數이고 我軍은 大數이니 勿爲戰鬥하고 但以放砲로 對應하다가 明日에 攻擊하라 하심으로 依敎以行이라가 翼未時에 官軍이 先抗함을 딸아 應戰 半日에 居之半이나 逃走하고 對應者 不過 幾百名 中 東西에서 別안간 多數 民步及兵丁이 擊入함으로 神師께서 命令하시되 東便을 무질너 치라 하심으로 압을 헤치고 뒤를 막으면서 처나가 俗離山으로 直入하여

12월 17일과 18일 양일 간 벌어진 북실전투의 공격 주역은 일본군과 상주 소모영 유격병대였다. 일본군은 미야케(三宅武義) 대위가 인솔한 대구병참부 13명과 台峰 병참부 소속 8명, 伊勢川 軍曹가 인솔하고 온 낙동병참부의 1개분대 그리고 구와하라 소위가 지휘하는 군로실측대 호위병 16명이 합세하여 모두 47명이었다.

유격장 김석중은 일본군과 만나서 함께 북실까지 추적해왔다. 그러나 전투상황에 직면하자 공격의 지휘권은 일본군에게 넘어갔다. 일본군 중 미야케 대위가 가장 계급이 높았지만 실전 경험이 많은 구와하라 소위가 지휘를 맡았다.

유격병대는 각각 50명씩을 미야케 대위와 구와하라 소위에게 배속시켰다. 3대로 나눈 공격군은 17일 밤 북실로 야습해 들어갔다. 북접농민군 진중에서는 커다란 혼란이 벌어졌다. 점차 북쪽으로 밀려 다라니 뒷산에 올라간 후 공격군의 수가 적은 것을 알게 된

128) 문암리에서 최시형이 거처했던 집의 뒤쪽 경사진 곳에는 불에 탄 서까래가 90년대 초까지 남아있었다.

농민군은 반격해 나왔다. 『林東豪 略歷』의 기록 내용은 간략하지만 이 지역에서 전해지는 이야기들과 일치하는 것이 많다. 공격군이 소수인 것을 알고 밝은 날에 대응하였다는 것과 낮은 지역에 모여있다가 공격을 받아 많은 수가 희생했으며 동쪽 산위를 넘어서 피신했다는 등의 것들이다. 그런데 여기서는 최시형이 “官軍은 小數이고 我軍은 大數이니 勿爲戰鬪하고 但以放砲로 對應하다가 明日에 攻擊하라.”고 했다고 하며, 또 “東便을 무질너 치라.”고 하였다. 복실전투에서 주요 대응책을 최시형이 명령했다는 것이다.

구와하라 소위가 작성한 전투보고서를 보면 전투 양상을 파악할 수 있는데 그 주요 부분은 다음과 같다.¹²⁹⁾

같은 날 오후 12시 30분 이곳을 출발, 三宅 大尉와 尙州 韓兵 240명은 왼쪽 큰길을 행진하고 小官은 부하 14명과 伊勢川 軍曹 1개 분대를 이끌고 오른쪽 산길을 행진하였다. 이날 밤은 눈이 많이 내리고 추위가 뼈골을 쭈셔 걷기에도 곤란하였다. 거의 5리 넘게 행진해 갔을 때, 전방에 불길이 오르고 있는 것이 보였다. 점점 가까이 가서 한 지방민을 만나 물어보니, 바로 東學徒의 짓이라 하였다. 그래서 즉각 앞으로 전진하여 鐘谷 남쪽 高地(鐘谷에서 약 80m 떨어진 곳)를 점령하였더니 東學徒 약 1만 명이 모닥불을 피워놓고 각기 몸을 녹이고 있었으며 조금도 방비하고 있는 것 같지 않았다. 상황이 이러했으므로 이 부근 바람불이로부터 진군해 오는 三宅 大尉에게 使者를 달려가게 하여 함께 공격에 착수하도록 통첩해놓고, 散開하여 약 세 번 일제사격을 가해 그들의 정신을 교란하게 한 다음 돌입하였다. 그러자 그들은 허둥지둥 당황하여 마을 밖으로 무너져 달아났다. 약 1,000m를 추격하여 要地를 택해 점령하였다. 이때가 오전 3시였다. 三宅 大尉도 와서 會同했다. 잠시 지나 그들이 또 몇 번 역습해 왔으므로 마침내 전투를 계속하면서 밤을 새웠다.

13일 오전 7시경, 다시 공격하기 위해 약 500m를 전진하여 鐘谷 북쪽 高地를 점령하였다. 이렇게 되어 전선배치는 완성되었고 그들도 高地를 점령하여 내려다보면서 우리와 맞섰으며 그 기세가 매우 사나웠다. 싸움이 한창 벌어졌을 때, 東學徒가 우리의 양측으로 나와 우리를 포위하는 꼴이 되었을 뿐만 아니라, 중앙으로 돌격해 와 오만하기가 그지없었다. 오전 8시 小官은 그들을 가까이 다가오게 하여 공격하려고 앞으로 약 200m 전진, 잠시 동안 완만한 사격을 하다가 패주를 가장하여 본래 있던 高地로 돌아왔다. 그러자 그들은 함성을 지르며 돌격해왔다. 가까운 자는 거의 80m 거리 안에까지 왔다. 그래서 급히 사격을 가했더니, 오전 9시쯤에 이르러 東學徒의 제1선이 조금 취약해졌다. 이 기회를 틈타 우리 군대가 全線에서 돌격을 감행하였다. 東學徒는 지탱하지 못하고 두 길로 나누어 동북쪽으로 무너져 달아났다. 약 2,000m를 추

129) 『주한일본공사관기록』 6. 二. 各地東學黨 征討에 관한 諸報告 (4) 鍾谷附近 戰鬪詳報.

격하여 모두 소탕하였다. 이 때가 오전 10시였다.

고지의 북접농민군과 북실 마을의 공격군이 한동안 대치상태에 있었다. 일본군은 다라니 앞 야산에서 뒷산 요해처에 은신하여 대적하는 북접농민군을 향해 사격을 가하였다. 완강히 지키던 북접농민군은 기만책에 넘어가 힘을 잃게 되었는데, 흰옷으로 변장한 유격병을 우군으로 오인하고 접근하다가 여러 사람이 매복병에게 피살된 것이었다. 그러자 전의를 상실하여 후퇴를 하기 시작했다.

상주소모영 유격장 김석중의 진중일기인 『토비대략』은 더 세밀하지만 유격병의 전과를 강조하는 내용으로 기술하였다. 전투 장면을 묘사한 기술은 다음과 같다.¹³⁰⁾

이날 새벽에 보니 적도는 산 위에 늘어서서 이미 포위하는 형세를 이루었다. 이에 미야케씨가 오른쪽 산 아래 엎드려 위로 공격하고, 구와하라씨는 왼쪽 산 아래 엎드려 위로 공격하며, 나는 가운데 길의 텅 비어 있는 땅을 끼고 마주하여 공격하였다. 사시가 되자 적의 세력이 점점 거세져 도륙하겠다고 소리 소리쳤다. 대개 적은 우리 군사가 매우 적은 것을 보고 평탄한 곳을 밟고 아래쪽을 삼키려고 한 것이다. 공격하며 40~50보 나가기를 수십 번이나 하였다. 이에 50명을 세 부대로 나누어 풍점·장내·장암의 요충로에 군사가 있는 것처럼 연기를 피우고 총을 쏘아 귀로를 차단하였다. 또 10명에게 합쳐서 한 적에게 쏘게 하니 적은 소리를 듣고 넘어졌으나 오히려 악을 쓰며 싸웠고 시신을 밟은 채 계속 총을 쏘았다.

유격장 김석중의 『토비대략』과 소모사 정의목의 『소모일기』 그리고 상주소모영의 『소모사실』에 각기 나오는 기록 중 북접농민군의 실상과 전투 결과를 알려주는 중요한 몇 구절이 있다.

첫째는 체포한 북접농민군 파수꾼을 심문한 것으로서 그 내용은 소모영에서 의정부와 순무영에 보낸 보고서에 자세히 들어 있다. 파수꾼은 “본래 안성포 관동포인데 한달 전부터 호남에서 여러 차례 전투를 해서 17차에 이르렀다.”는 것이다.¹³¹⁾ 경기도와 강원도에서 황산에 집결했던 북접농민군 주력이 북실에 행군해 왔다는 것이었다.^v

북실마을에서 북접농민군은 오랜 행군 끝에 하루밤을 보내며 잠시 휴식을 취하고 있었다가 기습을 받아 허둥지둥 피신하였다.¹³²⁾

130) 『討匪大略』 12월 18일.

131) 『召募事實』 (坤), 甲午十二月二十一日 報議政府西湖都巡撫營. “又聞其自何來此之由則本以安城包關東包月前屢戰于湖南至爲十七次本月初六日入茂朱破雪川月田兩處義兵陷永同奪黃澗軍器進據永同地龍山市”.

132) 『討匪大略』 12월 18일.

일제히 총을 쏘며 세 길로 진공하자 적도는 막 집을 꾸리고 있었다. 각지에서 약탈한 재물을 군수품으로 삼아 술과 고기가 낭자하며, 밥과 떡을 배불리 먹고 혹은 편히 자다가 혹은 잔을 가득 채우고 앉았다가 갑자기 총성을 들으니 말에 안장을 엮지 못하고 사람은 관도 쓰지 못한 채, 무기와 군수품을 버리고 동쪽으로 뛰어가고 서쪽으로 달아나 문득 남은 것은 하나의 빈 마을이었다.

이틀 간 벌어진 북실전투에서 전사한 북접농민군의 수는 매우 많았다. 우금치전투를 제외한 곳에서 이처럼 하루밤에 많은 사람이 희생된 곳은 찾기 어려울 정도였다.

김석중은 “爲亂砲所斃者 二千二百餘人 夜戰所殺 爲三百九十三人”으로 『討匪大略』에 기록하였다. 『소모일기』에는 희생자의 수가 차이가 나지만 그 상황을 다음과 같이 기록하였다.¹³³⁾

총에 맞아 즉사한 자들이 전후하여 모두 395명이었으며 그밖에 뒷 골짜기의 시내와 숲 속에서 죽은 자들이 골짜기와 계곡을 가득 메웠는데, 이들은 서로 뒤엉켜 있어서 그 숫자가 몇 백 명이나 되는지 알 수 없었습니다.

노획물은 상당히 많았다. 그러나 대부분 일본군이 가져가고 있는데 이는 북실전투의 주역이 누구였는지 말해주는 증거가 된다.

마을에 들어간 뒤에 적도들의 군수물자를 획득하였는데, 牛馬 100여 필과 洋銃·藥丸 및 상당수의 什物 등 이루 셀 수가 없었습니다. 그러나 모두 일본인들이 가져가고 우리 군대가 얻은 것은 단지 우마 12필·還刀 15자루·철창 42개·기치 10면·나팔 1쌍 뿐이었습니다.

공격군의 피해는 매우 가벼워서 상주 유격병은 부상병조차 없었고, 상주 유격병에 가세했던 함창병과 용궁병 한 명씩 부상했을 따름이다. 일본군은 구와하라 소위만 북부에 가벼운 부상을 입었다.

북실전투는 거듭된 패배와 오랜 행군으로 말미암아 극도로 무기력한 상태에 있던 북접농민군이 일본군과 상주 유격병에게 일방적으로 학살당한 사건이었다. 이 때문에 ‘수만 병력’으로 알려졌던 북접농민군은 그 세력을 잃게 되었다.

최시형은 북실에서 빠져나와 속리산을 거쳐 상주로 갔다. 이때는 북접농민군의 수가 많이 줄어있었지만 일정한 행군 대열을 이루고 있었다. 그래서 다시 충청도로 들어가서 화양동에서 하루밤을 지내고 진천으로 갔다. 진천 구만리 장터를 지나는데 관군이 따라와 후군이 격퇴하였다고 한다. 아직 소수의 관군은 물리칠 수 있는 힘이 있었다.

133) 『소모일기』 12월 19일.

俗離山으로 直入하여 慶北 尙州地方에 到達하여 午飯을 먹고 尙州 新興寺에서 神師를 모시고 잠깐 몸을 녹이고 회양동으로 와서 宿泊하고 翌日에 行軍하여 九井 별우물 지나 鎭川 방공로 와서 宿泊하고 翌日에 行軍하여 同郡 九萬里 장터를 지나자 맞참 官兵百五十名이 사쫓쳐옴으로 後軍이 無難이 擊退하고

그러나 다시 되자니에서 일본군과 부딪치게 된다.『林東豪 略歷』은 최시형의 결정에 의해 정면 돌파를 시도한 것을 다음과 같이 기록하였다.

忠州 되자니 洞里에서 夕飯을 먹고 其夜에 곳 떠나 同郡 사창니 와서 朝飯 먹고 日兵 數千이 同郡 無極里에 왔다던 報告를 듣고 聖師께서 軍中에 말씀하시되 長湖院及其他地域에 官軍이 多數 守備한다하니 그것을 擊破하라느냐 근냥 避하여 가라느냐 하심에 官軍을 擊退시키고 平安이 밤을 지냄이 족케타 하고 無極里를 擊入하던 중 洞口에 騎兵五六人이 나왔다가 도로 回入함으로 捕軍이 뒤를 쫓쳐 限 十里地境 되자니 近處에서 官軍 數千名이 埋伏하였다가 突出하여 互相戰투하다가 北便에서 官軍이 圍入함으로 形勢가 不利하여 因爲 四散奔走하여 鎭川 廣峴으로 갔다가 도로 回程하여 忠州 방개울로 와서 본즉

충청도는 일본군과 관군이 추적하여 이를 피할 수가 없었다. 이 때문에 무극 되자니에서는 12월 24일 어쩔 수 없이 정면 공격하기에 이르렀다. 그러나 여기에 있던 진압군은 일본군이었고,¹³⁴⁾ 다시 여러 사람이 희생된 채 급히 피신을 하게 된다.

지난 19일발 福富 大尉의 筆記보고에 따르면 13일 可興으로부터 파견한 정찰대는 17일 長湖院과 陰城 사이에서 제18대대 石森 中隊의 支隊와 만났음. 때 마침 賊徒 수백 명이 내습해 오므로 같이 협력해서 이를 맞아 싸워 적도 수십 명을 죽이고 우리 병사는 1명이 부상했음. 적도는 사망으로 흩어져 달아났음

되자니전투 이후 북적농민군은 형체가 없이 사라졌다. 뿔뿔이 흩어져 생존을 위해 숨기에 급급했다. 대접주들의 집은 보복 방화로 타버렸고, 최시형도 경기도 이천과 충청도 충주, 강원도 횡성 등지를 다니며 추적을 피하였다.

134) 『주한일본공사관기록』 6, 一. 東學黨에 관한 件 附巡查派遣의 件 二 (20) 長湖院 陰城 간 來襲東徒 迎擊 보고.

6. 맺는 말

새 자료 『均菴丈 林東豪氏 略歷』은 북접농민군의 결성과 활동에 대해서 여러 가지 새로운 사실을 알려주고 있다. 북접농민군으로 활동한 오랜 뒤에 회상기 형식으로 담담하게 기술한 것이기 때문에 착오로 보이는 것도 나오고 있다. 또 전해들은 이야기를 옮긴 것도 드러나서 사실 여부를 다른 자료와 비교해서 검토할 것도 있다. 제목이나 일부 표현을 보면 이 글은 제3자가 정리해서 쓴 것으로 보인다. 그로 인한 오류도 나올 수 있을 것이다.

그러나 이 자료는 직접 북접농민군으로 활동하면서 경기도의 상황과 황산집결에 관한 배경을 처음으로 생생하게 알려주는 자료로서 가치가 있다. 매일 행군한 방향과 숙영지, 그리고 여러 전투에 관한 주요 상황을 북접농민군의 시각에서 기록한 유일한 것이기도 하다.

보은 장내리의 대도소 건물을 1894년 3월에 팔도의 동학도가 협력해서 지었다는 것은 이 자료에서만 나온다. ‘長八間 廣六間 建坪으로 전라도 木工匠’을 초빙해서 건축했다는 사실도 처음 보는 것이다. 보은 장내리 일대를 여러 차례 답사하며 조사했을 때도 전혀 듣지 못했던 사실이다.

영동과 황간에 주둔했던 북접농민군을 2대로 나누어서 1대는 공주 논산으로 가서 전투와 남접농민군과 합세를 한 과정은 이 자료를 통해서 잘 알 수 있게 된다. 하지만 다른 1대가 문의와 증약 등지에서 일본군과 치열하게 싸운 사실은 기록하지 않았다. 북접농민군의 일원으로 참가해서 전반적인 파악은 하고 있지 못했기 때문이다.

이 자료를 통해 북접농민군이 대교전투, 우금치전투, 원평전투, 태인전투에 참여한 사실은 명백해졌다. 종래 동학 관련 역사기록에서 확인할 수 없었던 사실들을 알 수 있게 되었다.¹³⁵⁾

기포령 이후 최시형의 행적은 어느 기록에도 잘 나오지 않아서 확인을 하지 못했던 부분이었다. 이 자료는 임실에서 북접농민군과 만난 다음 행군과 전투에서 최시형이 일정한 역할을 한 것을 소개하고 있다.¹³⁶⁾

북접농민군은 경기도 강원도 충청도에서 기포한 세력을 주축으로 결성하였다. 일본군이 경복궁을 침범한 이후 초래된 나라의 위기를 극복하기 위해 동학교단은 직접 무장봉기한 세력으로 일본군을 축출하려고 시도하였다. 가을 재봉기에서는 동학교단도 일정한 역할을 했던 것이다. 결국 무기의 열세와 훈련 받지 못한 민간군대의 취약성 때문에 일

135) 앞으로는 동학 교단은 동학농민혁명에 기여한 바가 없었다는 오해는 하지 않게 될 것으로 생각한다.

136) 북접농민군에 대한 평가와 운영에 대한 최시형의 생각은 충분히 정리하지 못했지만 그에 관한 연구는 뒷날을 기약한다.

방적으로 패배를 당하였다.

북접농민군으로 활동한 사람들은 고향은 물론 집안에서조차 거의 잊혀졌다. 극히 일부만 집안에서 그 사실을 전하고 있을 뿐이다. 여주에서 어느 분이 보은군청을 찾아와서 북실전투에서 돌아가셨다는 선대의 사적에 관해 물었다고 한다. 그 내용을 전해들은 필자는 상세한 설명을 해줄 수가 없었다. 이 글이 일부나마 선대의 사적을 전해주는 이야기가 되기를 바란다.

토론문

토론 : 조재곤(동국대)

토론문

조재곤(동국대)

* 학술적 의미가 매우 큰 심포지엄에 초대해 주셔서 감사합니다. 새로운 내용을 많이 배웠습니다. 학계 대 선배님이신 이이화, 신영우 선생님 두 분의 연구발표문을 읽고 생각나는 점을 두서없이 적어 보았습니다.

1. 일본 자료에 나타난 일본군 출병의 명분과 동학농민군 진압과정에 대한 분석(이이화)

1) 동학농민전쟁을 이해하고 그 내용을 심화시키기 위하여 일본자료의 중요성은 일국사적 시각을 벗어나 자료와 시각의 다양화. 즉, 청일전쟁, 갑오개혁 등과 관련하여 복합적 입장에서 농민전쟁을 파악할 수 있다는 데 있다고 할 수 있다. 그런데 현재까지 파악된 자료로서 밝힐 수 있는 것은 무엇인가? 또한 자료의 문제점은 어디에 있는가? 등등을 살피는 것이 무엇보다도 급무라 아니할 수 없다. 일본자료의 이용에 눈을 돌려 농민전쟁 연구와 한국근대사 연구의 외연을 확대하는데 있어 이 논문이 가지는 연구사적 의미는 크다고 보인다.

2) 동학농민군 활동과 관련하여 현재 우리가 연구에서 활용하고 있는 일본자료는 참모본부 자료, 공사관 자료, 외무성 자료, 신문 자료, 잡지 자료, 전기 자료 등이다. 이 중 참모본부 자료는 청일전쟁과 농민군 정찰과 토벌, 공사관 자료는 청일전쟁과 농민군 토벌 및 조선정책 전반을, 외무성 자료는 조선 '보호국화' 및 일본의 대륙진출과 관련한 대청, 대조선 외교정책사 혹은 전쟁사 중심이고, 신문 자료는 보도경쟁을 통한 판매부수 증대 경쟁과 관련하여 자료가 기술되는 것도 적지 않다. 그러나 여타 자료에 비해 생동감있고, 일본인의 잠입취제나 전봉준 취조와 같은 특정 부분에서는 매우 구체성을 띠는 것이 많다. 잡지 자료는 잡지를 만드는 단체의 성격을 크게 부각시켰고(예: 『일청교전록』, 『일본인』), 전기 자료는 개인의 외교활동 및 중군활동과 관련된 내용을 부각시켰다.

3) 대체로 일본자료는 청일전쟁과 관련된 자료가 많다. 농민전쟁에 관해서는 대체로 부분적으로 언급하고 있다. 이 자료들은 국제정세와 우리의 농민전쟁의 함수관계를 이해하는데 중요하다. 그러나 농민군 내부의 활동에 대한 구체성은 비교적 약하다 할 수 있다. 농민전쟁과 관련된 경우는 일본인 탐문자의 집강소 방문, 2차 봉기이후 농민군 진압

과정에 집중되고 있다.

특히 일본자료의 중요 논점은 크게 ① 전봉준 접건과 관련한 소위 ‘2차봉기 추동설’, ② 위기의식 조성과 전쟁권유의 사례, ③ 자료의 과장, 허위성과 과대망상, ④ (소위 ‘조선의 문명진보’를 명분으로) 일본의 국익과 관련한 내용, ⑤ 일본의 전쟁수행 참고자료로 활용토록 하는 사례, ⑥ 자국 내부의 모순을 조선의 현 상황과 농민전쟁에 전가시키는 경우 등으로 분류할 수 있을 것이다.

4) 논점 상 이같은 문제점이 있지만, 1894년 당시 청일전쟁과 농민전쟁을 파악하는데 일본자료들은 전봉준과 관련한 기록, 농민군의 활동, 혹은 그들 활동과 관련한 삽화, 집강소의 실상 등등을 밝혀낼 수 있었으며, 기존 우리 측 자료에서 해결하지 못한 농민군 활동의 현장감을 일부 찾아볼 수 있다는 장점도 있다. 그러나 일본인들이 생산한 자료는 물론 엄밀한 자료비판이 있어야 할 것이고, 이를 전제로 당시의 정황을 우리측 자료와 연결시켜 과학적으로 비교검토 한다면 현재보다 훨씬 많은 내용을 걸러낼 수 있을 듯하다(예컨대 특정 지방 농민군의 규모, 지도자의 명단, 지역구성원과의 갈등 관계 등등). 앞으로 보다 많은 자료 발굴과 이를 통한 정밀분석, 및 연구의 대중화 작업이 필요할 것이다.

2. 『균암장 임동호씨 약력』에 나타난 북접농민군의 이동로와 해월 최시형(신영우)

1) 충청도(특히 충북) 지역은 최시형, 손병희 등을 중심으로 한 북접 농민군 지도부의 중심무대로 알려져 왔을 뿐, 동학농민전쟁에서 이 지역의 전투참여에 관해서는 그간 소홀히 다루어져 왔던 것이 현실이다. 따라서 이 분야 연구도 필자의 주장처럼 대체로 전라도 중심으로 이루어져 왔었고, 북접과 이 지역은 주목의 대상이 아니었기에 자료의 발굴 분석과 연구 또한 충분하다고 할 수 없다.

2) 그러나 본 발표문의 주요 분석 대상인 『균암장 임동호씨 약력』은 종래의 역사적 기록에서 확인할 수 없었던 북접농민군의 결성과 활동상의 다양한 면목과 기포령 이후 최시형의 활동상의 많은 부분을 여타 자료와 비교분석을 거쳐 새롭게 복원해 낼 수 있다는 점에서 큰 의미가 있다고 생각된다. 이는 필자가 결론에서 강조했던 것과 같이 북접농민군의 전투상황을 북접농민군의 시각에서 보여주는 핵심자료라 할 것이다.

3) 이 발표문을 통해 우리는 북접농민군의 황산 집결과 보은, 우금치로의 이동과정과

전투, 보은 북실로의 후퇴와 이후 각종 전투에 대한 내용을 시간별로 파악할 수 있다. 특히 ① 북접농민군의 안보 주둔 일본 병참부 습격, 전신선 절단, 방화, ② 괴산에서의 일병 30여 명 총살, ③ 손병희의 북접농민군이 논산의 전봉준과 연락해서 공주 공격을 협의한 사실, ④ 원평전투에 북접농민군 참여, ⑤ 증약전투에서 일본군 부대 격퇴 등이 새로운 사실로 이해될 수 있다. 이 자료를 토대로 한 이상의 실증적 분석을 토대로, ‘동학교단이 동학농민혁명에 기여한 바가 없었다는 오해는 하지 않게 될 것’이라는 필자의 문제제기처럼 여러 논점의 검토가 이루어질 수 있을 것이라는 점에서도 중요한 논점을 마련할 수 있을 것으로 보인다.

4) 이 점에 토론자도 전적으로 동감하지만 그러나 먼저 왜 그간 연구자들이 북접의 2차 농민전쟁 참여에 주목하지 않았던가 하는 점에 대한 필자의 의견을 듣고 싶다. 발표자는 주 75)에서 최시형이 영동, 황간의 북접농민군에게 출전명령을 하면서 전봉준에게 “폭거를 중지하고 마음을 바꾸도록 하라”는 취지의 『시천교종역사』 자료를 예를 들어 상황과 맞지 않는 사료비판을 거쳐야 할 부분이라 하였는데, 이러한 이해방식은 현재까지는 일반적인 것이 아닌가 한다. 즉, 일차적으로는 자료의 부족이 중요한 것이겠지만, 연구자들의 인식 전환이 없었던 점, 예컨대 전라도 중심의 시각에서만 비롯된 것인가 아니면 천도교 내부에서도 그간 이를 축소하려는 분위기가 지배적이지는 않았던가 하는 것이다.

두 번째로, 북접 지도부와 개별 포의 이해 문제는 어떻게 설명될 수 있겠는가 하는 점이다. 모두 동일한 입장만은 아니지 않을까 한다. 왜냐하면 동학교인이라 할지라도 교단의 영향을 덜 받고, 따라서 다른 개별적 입장을 가진 사람들도 적지 않았을 것이기 때문이다. 이와 관련해서 필자는 주 40)에서 2차 봉기 무렵 남접과 북접의 노선차이와 같듯이 그리 큰 것은 아니었다고 주장하는데, 이에 대한 구체적인 정황설명이 부연되었으면 한다.

셋째, 이 글의 문제의식과 결론을 통해 반향과 충격이 클 것으로 생각되는 바, 이 분야의 개별연구가 부족한 상황에서 논지전개가 쉽지 않았을 것임에도 불구하고 이를 확증하기 위해서는 충분한 연구사 비판이 요구된다. 따라서 서지사항, 자료의 성격과 정합성, 임동호 개인의 상세한 약력과 농민군에서 그가 차지하는 위치 등등 원 자료 설명이 선행되어야 하지 않을까 한다. 발표자 역시 주 121)에서 임동호 약력 중 전문 기록은 고위지도자들만 알 수 있는 내용의 불명확한 기술, 뒤늦게 들은 이야기, 다른 기록에서 본 것 등일 것으로 이러한 부분에 대한 엄밀한 사료비판이 요구된다는 점을 지적하였다. 예컨대, 오지영 저술 『동학사』의 예처럼 논란과 시비가 계속될 소지가 있기 때문이다.

5) 이 발표문은 그간 호남 농민군에 비해 상대적으로 덜 주목을 받았고 비교적 온건

한 입장을 취하였다고 평가되던 북접 교단지도부와 호서 농민군의 활동과 역할을 새로운 자료발굴과 새로운 시각에서 전면적으로 분석한 논문으로, 접근방식과 연구 결론은 향후 이 분야 연구에 길잡이 역할을 할 것이며 동학농민전쟁 연구의 지평확대에 기여할 만한 연구사적 의의가 큰 것이라 판단된다.

* 이상 이이화, 신영우 선생님의 발표문에 대한 간략한 토론을 마치겠습니다. 고맙습니다.

第2部

3. 雲揚號 事件부터 清日戰爭까지

- 雲揚艦長 井上良馨의 <艦隊指揮御中> 報告書와 大木營 參謀 東條英教의 <隔壁聽談>을 소개한다-

中塚明(나라여자대)

4. 東學農民軍을 鎮壓한 日本軍隊의 歷史史料

- 東京, 四國, 山口를 찾아서 -

井上勝生(훗카이도대)

第2部

3. 雲揚號 事件부터 清日戰爭까지

- 雲揚艦長 井上良馨의 <艦隊指揮御中> 報告書와 大本營 參謀 東條英教의 <隔壁聽談>을 소개한다-

中塚明(나라여자대)

4. 東學農民軍을 鎮壓한 日本軍隊의 歷史史料

- 東京, 四國, 山口를 찾아서 -

井上勝生(훗카이도대)

03

1. 雲揚號 事件부터 清日戰爭까지

- 雲揚艦長 井上良馨의 <艦隊指揮御中> 報告書와 大本營 參謀 東條英教의 <隔壁聽談>을 소개한다-

中塚明(나라여자대)

雲揚號事件から清日戦争まで

- 雲揚艦長井上良馨の〈艦隊指揮御中〉報告書と大本營參謀東條英教の〈隔壁聽談〉を紹介する -

中塚明(奈良女子大学)

◎史料1 雲揚艦長井上良馨の〈艦隊指揮御中〉報告書

2002年12月に鈴木淳が東京大学文学部史学会『史学雑誌』第111編第12号に「「雲揚」艦長井上良馨の明治8年9月29日付け 江華島事件報告書」と題する史料を紹介した。

紹介の主眼は、雲揚号事件についての日本政府の公式報告書（1875年10月8日付）は書き直されたものであり、井上良馨はながさきに帰港した直後、同年9月29日付で詳細な報告書を書いていたことを明らかにし、その全文を紹介することにあつた。

と同時に、雲揚号事件の前、雲揚が1875年6月12日から7月1日まで朝鮮の東海岸を偵察した後、〈艦隊指揮御中〉とした井上良馨の押印のある報告書の末尾の部分も紹介した。私はこの報告書には、雲揚号事件を引き起こした意図を明確に読み取ることができる記述があるのに注目した。これら史料の原文は防衛省防衛研究所図書館に所蔵されていて、閲覧することができる。

私が注目した〈艦隊指揮御中〉報告書の末尾の部分を紹介する（句読点を補ったほかは原文通りである）。

……。將タ此国（朝鮮-中塚）ハ我国ニ於テ要用ノ地ナリ。然ルニ若シ如斯非礼ナル時ハ底到必他国ヨリシテコレヲ攻ルナラン。他国ヨリコレヲ攻ル時ハ前文中如述、一朝ニシテ其有トナス事必セリ。此国若他国ノ有トナル時ハ我国更ニ伸頭ノ時アラズ。惟り苦心ニ止ルノミ。將ニ此国ヲ以テ我有トナス時ハ益々国礎ヲ強クシ世界ニ飛雄スルノ 楷弟（階梯-中塚）ナリ。嗚呼、国ノ強弱此ノ一挙ニアル思ハザルベケンヤ。此度ハ之レヲ攻ルノ名議充分アリ。実ニ好機械（機會-中塚）ナリ。且此節国内ニ一揆起リ其他内患アルヨシ（詳細別紙ニアリ-割注）。彼是天之レヲ我ニ賜ウ時ナリ。若シ賜機ヲ外シ不討トキハ後來悔ル事有ン乎ト疑フ。只恐ル我国ノ人、彼ノ国ハ強盛ニシテ攻ル事不容易ト思ワレルナラント。決テ強盛ニアラズ。我親ク目撃スルニ東海岸ニ於テハ兵備更ニナシ。西海岸ニ者少々アリト云トイヘドモ元ヨリ古來ノ筒ニテ、是レヲ以テ意トスルニ不足。又兵ノ弱ナル事ハ前文ニ徴ヲ上ケテ述ルカ如ク、其他国内ノ事情ヲ探ルニ政施苛刻ニシテ人民大ニ苦ミ、甚タ上ヲ怨望スト。是レ夫レーツトシテ恐ル、所ナシ。決テ強盛ニアラザル事必セリ。且我国ト里程モ近ク、隨テ諸事運送ノ便モヨロシク、故ニ昨年臺灣ノ事件ヨリ却テ事手輕ニシテ、入費モ又少ナ

カレント目算ス。何卒前件ノ好機械（機會-中塚）深ク御洞察被下、是非早々御出兵ナラン事ヲ希望ス。因テ当艦此後ノ進退伺トシテ同三十日令時十五分釜山出艦、七月一日午後一時五十五分長崎へ着艦、惟タ日夜出兵ノ御指令ヲ待ノミ。前文之通是迄之始末親ク目撃スル所ノ件々彼是御参考ノ為御届旁申出候也。

長崎碇泊

八年

雲揚艦長

第七月

井上海軍少佐（印）

艦隊指揮

御中

この文書の宛て先は、「中艦隊指揮官、伊東祐磨（海軍少将）」である。鈴木淳の解説に従えば、「江華島事件当時の中艦隊指揮官は当時の日本海軍唯一の艦隊指揮官で、乱暴に言えば後の連合艦隊司令長官にあたり、また、伊東は後の鎮守府にあたる唯一の提督府の提督をも兼ねていたから、後の軍令部長にも比すべき軍令系のトップであった」。

日本海軍はまだ揺籃期にあった。にもかかわらず「日本は朝鮮を領有すべし、今、攻撃の好機」と主張する雲揚艦長の意見にもとづいて雲揚を朝鮮の西海岸に派遣し、その結果、引き起こされたのが雲揚号事件（江華島事件）である。この史料は、雲揚号事件が35年後の「韓国併合」に至る日本の軍事行動の第一歩であることを示している。艦長井上良馨は「韓国併合」の翌年、1911年10月、軍人の最高位である元帥に昇進している。

◎史料2 日清戦争当時の大本営参謀東條英教の〈隔壁聴談〉

1894年6月2日、日本政府は混成一旅団の朝鮮への出兵を決定、参謀本部は6月5日、広島第五師団に動員令を発し、同日、天皇が戦争を指導する最高の司令部である大本営を設置した。東條英教は、大本営の事実上のトップの地位を占めた陸軍上席参謀兼兵站總監陸軍中将川上操六に抜擢され、陸軍少佐で大本営の参謀となった。当時39歳、日本陸軍の少壮幹部の一人である。

日清戦争後は陸軍大学校教官・参謀本部の第4部長を兼ね、日清戦争史編纂の責任者となったが、1899年5月11日、川上操六が死去し有力な後ろ盾を失った。1901年5月、少将に昇進すると同時に姫路の歩兵第八旅団長に転出、再び参謀本部にもどることはなかった。

〈隔壁聴談〉は、最近、防衛省防衛研究所図書館に所蔵されていることが確認された。私も通読することができた（また泉章四郎著・訳の『東條英教「日本の戦争論」』を読

む』が刊行され、同書で〈隔壁聴談〉の前編が現代語に翻訳されている。文藝春秋企画出版部、2010年）。

〈隔壁聴談〉の書誌的な研究は今後の課題である。防衛研究所図書館所蔵の〈隔壁聴談〉の「例言」は「門外生識」とあり、その後に「中将 東條英教」とペン書きがあるだけである。しかし、インターネットで「東條英教」を検索すれば〈隔壁聴談〉についての解説があり、息子で太平洋戦争突入時の日本国首相であった東條英機が保存していたという〈隔壁聴談〉の写真も見ることができる。

私がここで紹介するのは、〈隔壁聴談〉の、日清戦争開戦時の「朝鮮駐在 日本公使 大鳥圭介」の行動に関わる記述である。句読点のみ補って、関係部分を一部省略しながら原文通り紹介する。

…（前略）…、公使ハ其ノ職責上憂慮セサルヲ得サル一事アリ。即チ旅団南下シテ清兵ト衝突スルニ適當ノ辞ヲ得ン事是レ也。以為ラク、之ヲ得ンカ為メニハ暫ク行軍演習等ニ托シ、已ニ清兵ト衝突セル後ハ天下ニ向ツテ、彼レ我レニ加ヘタリト公言スルモ敢ヘテ不可ナル（ニ脱カ）非サレ共、列国ノ感情ヲ顧ミル時ハ好ンテ取ルヘキノ策ニ非ス。唯、最モ穩当ニシテ我レノ責任ヲ免カル可キハ、朝鮮政府ヲシテ清兵ノ撃退ヲ我レニ依頼セシムルニ如カス。之ヲ依頼セシムルノ術ハ兵力ヲ以テ彼ノ政府ヲ脅カスヨリ便ナルハナシ。而シテ我カ兵力ヲ用ヒンニハ先ツ彼レノ答弁ニ惑フヘキ難問ヲ提起シ、短日ヲ期シテ其ノ決答ヲ求メ、彼レ若シ不満足ナル回答ヲナスカ、又ハ之ニ答ヘサルノ機ヲ俟ツテ之ヲ行フニ如クハナシト。是ニ於テ公使ハ…（中略）…七月二十日二個ノ痛切ナル要求ヲ韓廷ニ提出シ、二十二日ヲ限リテ決答ノ期限ト為セリ、即チ其ノ一ハ韓国ノ独立ト抵触スル清国トノ諸条約ヲ廢棄スヘシト求メ、其ノニハ清国カ属邦保護ヲ辞トシテ兵ヲ朝鮮ニ出シタルハ則チ其ノ独立ヲ侵害セルモノナルカ故ニ速カニ之ヲ疆土ノ外ニ撃退スヘシト迫ルナリ。蓋シ公使ハ曩キニ韓廷カ朝鮮ハ自主ノ国ナリト曰ヘル言質ヲ捉へ、恧ル難事ヲ選ヒテ要求シタルナリ。

公使ハ右ノ術策ヲ決行スルト同時ニ人ヲ旅団長ノ許ニ馳セ詳ニ之ヲ告ケテ、暫ク旅団南進ノ猶予ヲ求メ、韓廷若シ我カ要求ヲ聴カスンハ直ニ一大隊ノ兵ヲ進メテ王宮ヲ圍ミ、彼レ尚ホ屈セサレハ則チ全力ヲ尽シテ之ヲ威嚇セン事ヲ請ヘリ。旅団長之ヲ諾シ其ノ出発ヲ緩ウセリ。但シ一大隊ヲ進ムルノ手續ハ旅団長ノ議ニ依リテ之ヲ省略シ、直ニ全旅団ヲ進ムル事ニ改メタリ。…（中略）…

七月二十三日味爽我カ混成旅団進ンテ王城ノ諸門ヲ扼シ、衝突ハ韓兵トノ間ニ起レリ。

…（後略）…

（〈隔壁聴談〉

三六丁～三八丁）

日清戦争での日本軍の最初の武力行使が朝鮮の王宮、景福宮の占領、国王を事実上の日本軍の擒にすることであったことは、すでに明らかにされている（中塚明『歴史の偽造をただす』1997年、高文研、『現代日本の歴史認識』2007年、同）。この〈隔壁聴談〉の記述をあえてこの学会で紹介するのは、日本政府・軍が朝鮮の王宮を占領する意図が、少しもためらいなく、きわめて赤裸々に語られているからである。日清開戦の口実がこのように謀略に満ちたものであったことは、日清戦争全体、さらに言えば、近代日本の朝鮮・中国侵略の歴史全体を論じる際にも留意されるべきことがらであろうと私は考える。

■紹介する史料の口語訳

◎史料1

……。また朝鮮はわが国にとっても必要な土地です。ところが、このように朝鮮が非礼な時はかならずほかの国が攻めてくるでしょう。他の国が朝鮮を攻めるときは、まえに述べましたように、わずかの日数で占領してしまうに決まっています。朝鮮をもし他国が領有するときは、日本は発展できません。ただ苦しむだけです。間違いなく朝鮮を日本が領有するときはますます日本は国の基礎が強くなり、世界に飛雄する第一歩になります。日本の強弱は、朝鮮を日本が領地として自分のものにするかどうか、そのことにかかっていると考えないわけにはいきません。この度は朝鮮を攻めるのに正当な理由は充分にあります。実に好いチャンスです。そのうえ朝鮮ではいま国内では一揆（農民騒擾）が起こり、国が乱れているようです（詳細は別紙に書きました）。これは天がわれわれに与えてくれたチャンスです。もしこの天が与えたチャンスをはずしてしまい朝鮮を討たないときは、後々悔やむことになるかもしれません。ただ、私が恐れるのは、日本人には朝鮮は強い国で攻めるのに容易ではないと思われているのではないかということです。決して強い国ではありません。私がいずから実際に見てきたところですが、東海岸では軍備は少しもありません。西海岸には少々あると言いますが、もとより古い大砲でこれを気にかける必要はありません。また兵士が弱いのはいろいろ事実をあげて申し上げた通りです。そのほか朝鮮国内の事情を探ってみますに、政治がひどくて人民は大いに苦しんでおり、支配者を怨んでいるようです。このようになにひとつ恐れることはありません。決して強いことには確かです。その上、わが国と距離も近くて、したがって万事運送の便のよろしい。だから昨年台湾出兵の事件より、かえってことは手軽で、必要な経費も少ないだろうと見られます。どうか右に述べましたような朝鮮国内が乱れている、このチャンスを深く見抜いていただいて、ぜひ早々にご出兵になることを希望します。今後、本艦（雲揚艦）がどう

動けばよいか、お伺いするために、六月三〇日零時一五分釜山を出て、七月一日午後一時五五分長崎に帰ってきました。ただ夜も昼もいつも出兵のご指令を待つだけです。これまで書きましたように、親しく目撃してきたことをご参考までにお届け申します。

◎史料2

…（前略）（龍山に陣取っていた日本軍がいよいよ清国軍を攻撃するために南進することになると）…、大鳥公使はその職責上、心配なことが一つあった。それは旅団が南下して清国兵と武力衝突するのに適当な口実を手に入れることである。いろいろ考えてみたが、この口実を得るためには、しばらく行軍とか演習などと言って日本軍を南下させ、清国兵と衝突した後は、世界に向かって、清国兵がわが軍に攻撃をしてきたのだと、吹聴するのも、あえてやってはならないことでもないが、しかし、諸外国がどう思うかを考えたとき、好んでとるべき手段ではない。ただ、もっとも無理なく、日本が責任を免れるには、朝鮮政府から清国兵の撃退を日本に依頼させるのがもっともよいやり方だ。（しかし、こんな依頼を朝鮮政府がすんなりとするはずはないので）朝鮮政府からこの依頼をさせるには、日本軍の兵力をもって朝鮮政府をおどかすよりほかに方法はない。そして日本軍の兵力を用いるには、まず、朝鮮政府に向かって答えるのに困るような難問を提起し、しかも短い日限で確答を求め、朝鮮政府が不満足な回答をしたり、なにも答えないようなら、そのときをまって日本軍の兵力で朝鮮政府を脅かす、こういうやり方をして、清国軍攻撃の口実を手に入れるのが最良の策である…（中略）…。そこで公使は7月20日、二つの厳しい要求を朝鮮政府に提出し、22日を回答の最終期限とした。その要求の第一は、韓国の独立を損なうような清国との諸条約を廃棄せよ、第二は清国が属邦保護を口実にして軍隊を朝鮮に出したのは朝鮮の独立を侵害するものであるから速やかに清国軍を朝鮮の国境外に撃退せよと迫るものであった。思うに大鳥公使は先に朝鮮政府が朝鮮は自主の国であると言ったのを一つの証拠とし、こういう難題を選んで要求したのである。大鳥公使は朝鮮政府に向かって右のたくらみを決行すると同時に、使者を旅団長のもとに送って詳しくことの顛末を告げ、しばらく旅団の南下を延期することを求め、朝鮮政府がもし、わが要求をきかなければ直ちに一大隊の兵を進めて王宮を囲み、朝鮮政府がなお屈しなければ、旅団全部の力で朝鮮政府を威嚇することを求めた。旅団長はこの申し入れを承諾し、出発を遅らせることにした。但し一大隊ではじめるのではなく、直ちに全旅団を王宮に進めることに改めた…（中略）…

7月23日未明、日本軍混成旅団がソウルに入り王宮の諸門を押さえ、衝突が朝鮮兵士との間に起こった。…（後略）…

印字樓寫字印

〇

明八

孟春
靈楊

朝鮮迴航記事

139

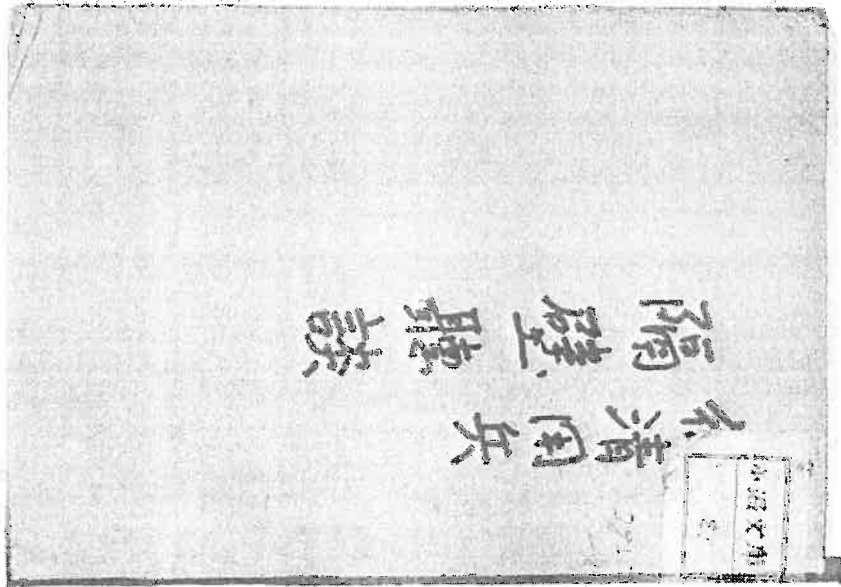


際報小書

此國ハ禁言年本不問化ノ習俗ニシテ突顯忌
 ナリ故ニ理ヲ以責ムトモ羞キテ唯々吾攻ム
 ニ力ナク將々此國ハ救國ニ於テ要角ノ地ナリ然
 此ニ若シ如斯非權ニテ時ハ尙到必他國ヨリシ
 ヲコシ攻ムナラシ他國ヨリシヲ攻ム時ハ前々
 中如近一朝ニシテ其有トナヌ事必モリ此國差
 世國ノ有トナシ時ハ我國更伸頭ノ時ナラヌ
 惟リ苦心ニ止ルニ時ニ此國ヲ以救有トナシ大時

存シト鸚呼此國ヤ及覆無信シテ失禮ナ
 事言語ニ絶ヘテ其正辱我國優ヲ存シ
 ルニシテ及此度ハ我敵變更革ノ僕ニ察シ
 密シ言語謙傍ニ傍ノ處到相接ヲ拒ム至ル
 相接ヲ拒ムトキハ則我國ヲ存スルノ理ナリ如
 此失禮ノ國ヲ其後差置クトキハ我國威ヲ大
 國威下ラシメ他國ノ侮議ヲ免ルニ無節ナ
 故是非ハ計々ナルヲ不得必覆推考スルニ

際報小書



雲揚號 事件부터 清日戰爭까지

- 雲揚艦長 이노우에 요시카(井上良馨)의 <艦隊指揮御中> 報告書와 大本營 參謀 도조 히데노리(東條英教)의 <隔壁聽談>을 소개한다-

中塚明(나라여자대)

번역 : 박맹수(원광대)

1. 사료 - 1 : 운양함장 이노우에 요시카의 『함대지휘어중』 보고서

2002년 12월에 스즈키 준(鈴木淳)이 도쿄대학 문학부 사학회 『사학잡지(史學雜誌)』 제 111편 12호에 「운양(雲揚)함장 이노우에 요시카의 메이지(明治) 8년 = 1875년 9월 29일자 강화도사건 보고서」라는 제목의 사료를 소개했다.

소개의 주안점은 운양호사건에 대한 일본정부의 공식보고서(1875년 10월 8일자)는 고쳐 쓴 것이며, 이노우에 요시카는 나가사키(長崎)에 귀향한 직후 동년(同年) 9월 29일자로 상세한 보고서를 작성했었다는 사실을 밝히고, 그 보고서 전문을 소개하는 것이었다.

또한 그와 함께 운양호사건 전에 운양함이 1875년 6월 12일부터 7월 1일까지 조선(朝鮮)의 동해안을 정찰한 다음에, 『함대지휘어중(艦隊指揮御中)』이라는 이노우에 요시카의 압인(押印)이 찍혀 있는 보고서 말미 부분도 소개했다.

필자는 이 보고서에서 운양호사건을 일으킨 의도를 명확하게 읽어낼 수 있는 기술(記述)이 들어있다는 점에 주목했다. 이 사료 원문은 일본 방위성 방위연구소 도서관에 소장되어 있으며 열람이 가능하다. 필자가 주목했던 『함대지휘어중』 보고서 말미 부분을 소개한다.(구두점을 찍은 것 외는 원문 그대로이다.)

또한 이 나라(조선 - 나카츠키)는 우리나라(일본)에게 있어서도 필요한 땅입니다. 그렇지만 이처럼 조선이 비례(非禮)의 때에는 반드시 다른 나라가 공격해 올 것입니다. 다른 나라가 조선을 공격할 때는 앞에서 설명드린 바와 같이 며칠 안으로 점령되어 버릴 것은 이미 정해져 있습니다. 만일 다른 나라가 영유(領有)할 때는 일본은 발전할 수 없습니다. 다만 괴로움을 당할 뿐입니다. 틀림없이 일본이 조선을 영유하게 될 때는 일본은 점점 나라의 기초가 단단해져 세계로 응비하는 제 1보가 될 것입니다. 일본의 강약(強弱)은 일본이 조선을 영지(領地 ; 식민주-주)로써 제 것으로 삼느냐 못 삼느냐에 달려있다고 생각하지 않으면 안 됩니다.

지금은 조선을 공격할 정당한 이유가 충분히 있습니다. 실로 좋은 찬스입니다. 게다가 지금 조선 국내에서는 일규(一揆 ; 민란)가 일어나 나라가 어지러운 듯합니다. (상세한 내용은 별지에 썼습니다.) 이것은 하늘이 우리 일본에게 준 기회입니다. 만일 하늘이 준

기회를 놓쳐 조선을 치지 않을 때는 장차 후회하게 될 지 모릅니다.

다만 제가 염려하는 것은 일본인들이 조선은 강한 나라여서 용이하게 공격할 수 없다고 생각하지 않을까 하는 점입니다. 제가 직접 실제로 목격한 바로는 동해안에는 군비(軍備)가 조금도 없었습니다. 서해안에는 조금 있기는 합니다만 원래부터 낡고 오랜 대포(大砲)들이어서 그것에 신경쓸 필요는 없습니다. 또한 병사들도 약하다는 것은 여러 사실을 들어 말씀드린 바와 같습니다. 그 외 조선 국내의 사정을 정탐해보니 정치가 가혹해서 인민(人民)이 크게 고통을 겪고 있으며, 지배자를 원망하고 있는 것 같습니다. 이처럼 무엇 하나 두려워할 만한 것은 없습니다. 조선이 결코 강하지 않은 것은 틀림없습니다.

더욱이 조선은 우리나라와 거리도 가까워서 운송편도 좋습니다. 그러므로 작년(1874년-주) 타이완 출병사건 보다 오히려 더 손쉬울 것이며 필요 경비도 적게 들 것으로 보입니다.

아무쪼록 위에서 설명 드린 바와 같이 조선 국내가 어지러운 이번 찬스를 깊이 살피서 반드시 서둘러 출병(出兵)할 것을 희망합니다. 금후 본 함(운양함)이 어떻게 움직이는 것이 좋을지 여쭙기 위해 6월 30일 0시 15분 부산을 출항하여 7월 1일 오후 1시 55분에 나가사키로 돌아왔습니다. 그저 밤낮으로 출병지령만 기다릴 따름입니다. 지금까지 쓴 것처럼 몸소 목격한 사실을 참고하시도록 보고 올립니다.

나가사키 정박
운양함장
이노우에 해군소좌(인)

메이지 8년 7월
함대지휘어중

이 문서의 수신처는 ‘중함대지휘관(中艦隊指揮官) 이토 스케로(伊藤祐磨, 해군소장)’이다. 스즈키 준의 해설에 의하면, “강화도사건 당시 중함대지휘관은 일본 해군 유일의 함대지휘관으로써 거칠게 말하자면 후일의 연합함대 사령장관에 해당하며, 또 이토(伊藤)는 후일의 진수부(鎭守府)에 해당하는 단 하나뿐인 제독부(提督府)의 제독을 겸하고 있었기 때문에 후일의 군령부장(軍令部長)에 비견할 만한 군령계(軍令系)의 톱이었다.”

1875년 당시 일본 해군은 아직 요람기였다. 그럼에도 불구하고 “일본이 조선을 영유하기 위해서는, 지금이 공격의 호기”라고 주장하는 운양함장의 의견에 바탕하여 운양함을 조선 서해안에 파견하고, 그 결과 일어난 사건이 바로 운양호사건(강화도사건)이다. 이 사료는 운양호사건이 35년 뒤의 ‘한국병합’에 이르는 일본 측 군사행동의 제 1보였다는 사실을 보여주고 있다. 함장 이노우에 요시카는 ‘한국병합’ 다음 해인 1911년 10월에 군

인으로서 최고의 자리인 원수(元帥)로 승진하고 있다.

2. 사료 - 2 : 청일전쟁 당시 대본영참모 도조 히데노리의 『격벽청담』

1894년 6월 2일 일본정부가 혼성(混成) 1개 여단의 조선출병을 결정하자, 참모본부는 6월 5일에 히로시마(廣島)의 제 5사단에 대해 동원령을 발령하고, 동일자로 천황이 전쟁을 지도하는 최고사령부인 대본영(大本營)을 설치했다.

도조 히데노리는 대본영의 사실상 톱의 위치를 차지하고 있던 육군 상석참모 겸 병참총감 육군중장 가와카미 소로쿠(川上操六)에게 발탁되어 육군소좌로서 대본영의 참모가 되었다. 당시 39세로 일본 육군의 소장간부의 한 사람이다.

청일전쟁 후에는 육군대학교 교관과 참모본부 제 4부장을 겸하여 일청전사(日清戰史) 편찬 책임자가 되었으나 1899년 5월 11일 가와카미 소로쿠가 사거(死去)하여 유력한 뒷배를 잃었다. 1901년 5월 소장으로 진급함과 동시에 히메지(姫路)의 보병 제 8여단장으로 전출, 두 번 다시 참모본부로 돌아오는 일은 없었다.

『격벽청담(隔壁聽談)』은 최근에 방위성 방위연구소 도서관에 소장되어 있다는 사실이 확인되었다. 필자도 통독할 수 있었다.

(또한 이즈미 아키시로 = 泉章四郎의 『도조 히데노리 「일본의 전쟁론」을 읽는다』가 간행되어, 동서에 『격벽청담』전편이 현대어로 번역되어 있다. 문예춘추 기획출판부, 2010년)

『격벽청담』의 서지적 연구는 금후의 과제이다. 방위연구소 도서관 소장의 『격벽청담』의 '예언(例言)'은 '문외생 식(門外生 識)'이라 되어 있고, 그 뒤에 '중장 도조 히데노리(中將 東條英教)'라는 펜글씨가 있을 뿐이다.

그러나 인터넷에서 '도조 히데노리'를 검색하면 『격벽청담』에 대한 해설이 나오고, 아들이자 태평양전쟁 돌입 시에 일본 수상이었던 도조 히데키(東條英機)가 보존하고 있었다는 『격벽청담』 사진도 볼 수 있다.

필자가 여기에서 소개하는 『격벽청담』 내용은 청일전쟁 개전 당시 '조선주재 일본공사 오토리 케이스케(大鳥圭介)'의 행동에 관한 기술이다. 구두점을 찍고 관계 부분을 일부 생략하면서 원문 그대로 소개한다.

(전략) (용산에 진을 치고 있는 일본군이 드디어 청국군을 공격하기 위해 남진하게 되면)……, 오토리 공사는 그 직책상 걱정스런 일이 하나 있었다. 그것은 여단이 남하하여 청국병과 무력충돌을 하는데 적당한 구실을 손에 넣는 일이었다. 여러 모로 생각해 보았지만 이 굴을 얻기 위해서는 일단은 행군(行軍) 또는 연습(演習)이라 말하고 일본군을 남하시켜 청국병과 충돌한 다음은 세계를 향해 청국병이 우리 군에게 공격해 왔다고 하

는 것도 굳이 해서는 안 되는 일은 아니지만, 그러나 여러 외국(外國)이 어떻게 생각할 것인가를 고려했을 때 기꺼이 취해야 할 수단은 아니다. 단 가장 무리없이 일본이 책임을 모면하기 위해서는 조선정부로부터 청국병 격퇴를 일본에게 의뢰하도록 하는 것이 가장 좋은 방법이다.(그러나 이런 의뢰를 조선정부가 할 리가 없기 때문에) 조선정부로부터 이런 의뢰를 하도록 하는 데에는 일본군 병력으로 조선정부를 위협하는 것 외에는 방법이 없다. 그리고 일본군 병력을 사용하는 데 있어서는 우선 조선정부를 향해 회신하기 곤란한 난문(難問)을 제기하고, 그 위에 짧은 시일 내에 확답하도록 요구하여, 조선정부가 불만족스러운 회답을 하거나 아무런 회답도 하지 않을 듯하면 그 때를 기다려 일본군 병력으로 조선정부를 위협하는, 바로 이런 방법을 취하여 청국군 공격 구실을 손에 넣는 것이 가장 좋은 대책이다. …(중략)… 그리하여 공사는 7월 20일 두 가지 곤란한 요구를 조선정부에 제출하고 22일을 회답 최종 기한으로 삼았다. 그 첫째 요구는 한국의 독립을 손상시키는 청국과의 모든 조약을 폐기할 것, 둘째는 청국이 속방(屬邦)보호를 구실 삼아 조선에 군대를 보낸 것은 조선의 독립을 저해하는 것이기 때문에 속히 청국군을 조선 국경 밖으로 격퇴할 것 등을 압박하는 내용이었다. 생각건대 오토리 공사는 앞서 조선정부가 조선은 자주국이다 라고 말했던 것을 하나의 증거로 삼아 이 같은 난제를 골라 요구했을 것이다. 오토리 공사는 조선정부에 대해 위와 같은 계략을 결행하는 동시에 사자(使者)를 여단장 휘하로 보내 상세한 전말을 알리고, 여단의 남하를 잠시 연기할 것을 요청하고, 조선정부가 만일 우리 요구를 듣지 않으면 즉각 1개 대대의 병력을 진격시켜 왕궁을 포위하고, 그래도 조선정부가 여전히 굽히지 아니하면 여단 전체 병력으로 조선정부를 위협(威嚇)할 것을 요청했다. 여단장은 이 같은 요청을 받아들여 출발을 늦추도록 했다. 단 1개 대대로 시작하지 않고 즉각 전 여단을 왕궁으로 진격시키기로 변경했다.…(중략)…

7월 23일 새벽 일본군 혼성여단이 서울로 들어와 왕궁의 모든 문을 장악하자 조선병사들과 충돌이 일어났다. …(후략)…

(『격벽청담』 36장-38장)

청일전쟁에서 일본군 최초의 무력행사가 조선왕궁, 즉 경복궁을 점령하여 국왕을 사실상 일본군 포로로 삼았다고 하는 사실은 이미 밝혀진 바 있다.(나카즈카 아키라, 『역사의 위조를 밝히다』, 1997년, 고분켄 ; 『현대일본의 역사인식』, 2007, 고분켄)

이 『격벽청담』 기술 내용을 굳이 이번 국제학술대회에서 소개하는 이유는 일본정부와 일본군이 조선왕궁을 점령하고자 하는 의도가 조금의 망설임도 없이 대단히 적나라하게 서술되어 있기 때문이다. 청일 개전(開戰)의 구실이 이렇게 모략으로 가득찬 것이었다는 사실은 청일전쟁 전체, 다시 말하면, 근대 일본의 조선·중국 침략 역사 전체를 논할 때 유의해야 할 사실이라고 필자는 생각한다.

04

東學農民軍을 鎮壓한 日本軍隊의 歷史史料

- 東京, 四國, 山口를 찾아서 -

井上勝生(홋카이도대)

東学農民軍を鎮圧した日本軍隊の歴史史料

- 東京, 四國, 山口 -

井上勝生(北海道大学)

1894年秋から翌年春まで、抗日蜂起した東学農民軍の南部の勢力は、朝鮮半島中南部一帯から全羅南道の西南端に逐われ、包圍殲滅された。殲滅作戦の主軸となったのは、日本から派遣された「後備歩兵独立第19大隊」の3中隊であった。

作戦は、ソウル方面から、公州街道と、清州街道、大邱街道（日本軍兵站路）の三路を、3中隊が南下し、途中、西南方向に展開して、集合した羅州（全羅道）に本拠地を置いて、包圍した農民軍を殺戮した。日本軍の「3路・包圍討滅作戦」である。

農民軍は、「民乱」の勢力であり、東アジアの民衆反乱は、伝統的に「無用の殺傷をしない」などの規律をもっていた。一方、弾圧した日本軍は、近代化した軍隊であり、戦力の違いは大きかった。殲滅作戦は、不法なジェノサイドであった。

日本の研究者、趙景達氏は、農民軍の死者は、少なく見ても3万人であり、5万人に迫ると推計していた。日清戦争で最大の死者を出したのは朝鮮なのであった（朝鮮の死者は、韓国研究者の近年の調査では、もっと多いことが指摘されている）。この朝鮮民衆に対する虐殺の事実は、日本では、ようやく知られ始めたところである。

報告では、第一に、新しい史料の発見によって、殲滅作戦が、かつて日本の兵士たちの出身地であった地域（愛媛県松山市など）で、近年、知られ始めていることについてお話しする。また、第二に、「3路・包圍殲滅作戦」立案のもとになった弾圧3中隊の派遣は、日本政府や日本軍大本営（広島に設置）によって決定され、命令されていたことを指摘する（朝鮮現地の日本軍が立案したものではなかった）。日本政府と大本営の決定と命令、この検証について、日本の防衛省防衛研究所図書館が所蔵している当時の現地部隊の「陣中日誌」や大本営の報告書綴りなどの調査を紹介したい。

また、日本軍の記録には、抗日に蜂起した東学農民軍の動向が、具体的に記録されている。記録を調べると、東学農民軍の抗日蜂起は、従来、言われているよりも、もっと広範に展開しており、もっと強力な脅威を日本軍に与えていたと思われるのである。

一つには、いわゆる北接、忠清道農民軍の蜂起についてである。東学農民軍の主力部隊が全羅道農民軍であることは日本軍の記録にも記されている。しかし、忠清道農民軍も、日本軍の「陣中日誌」などを調べると、日本軍にとって、大きな敵対勢力であったことが明らかになる。昨年、忠北大学での研究会、報恩東学農民軍記念行事でお話したように、もともと、日本軍の「3路・包圍討滅作戦」が日本でつくられたのは、忠清道農民軍の、

安保、可興、忠州などでの日本軍兵站線に対する一斉蜂起が脅威となったからであった。今回の報告では、その「3路・包囲討滅作戦」が始まってからも、有名な激戦、公州戦闘と時を同じくして、文義や、沃川、さらに錦山など、忠清道山岳地帯での東学農民軍の戦いが、抗日蜂起の展開のなかで、重要な役割を果たしていたことをお話する。近年、はじめてその存在が確認され、今年から山口県文書館で保存、公開されている討伐部隊大隊長であった「南小四郎文書」（文書館では「南家文書」として保存されている）の報告書（「東学党征討経歴書」）などから、その事実を確かめることができる。

殲滅作戦の最終局面、羅州に討滅本部を置いた半島西南部での殲滅作戦についても、南小四郎少佐の報告書によれば、「討滅」あるいは「勦滅」命令が、現地でも繰り返し出されていたことを指摘したい。

そして、日本では、東学農民軍討伐作戦を批判する言論が在ったことも報告する。兵士たちが東学農民軍討滅作戦へと出ていった香川県、『香川新報』の連載社説である。これは、昨年の忠北大学での報告でも紹介したが、その後、地元、香川県の研究者の調査によって、この貴重な批判社説の筆者が判明したことを紹介したい。

1. 「弾圧の記憶」—愛媛新聞の特集記事・南小四郎文書の保存・公開

日清戦争で、最大の戦死者を出したのは、朝鮮であった。紹介したように、朝鮮の戦死者は、日本で、日本軍大隊長・南少佐の戦闘報告などから集計して、少なくとも3万、5万に迫ると推計され、韓国の近年の、忠北大学湖西文化研究所のブクシル戦闘の調査では、日本軍戦闘報告を遙かに上まわる戦死者が出たことが報告されている。。

防衛省防衛研究所に保存されている現地部隊の「陣中日誌」の記事には、討伐戦で、弾丸が不足して、「スナイドル銃弾丸、5万発」を下関兵器廠に請求（1894年11月23日「南部兵站監部日誌」）したり、同11月31日、第一次公州戦闘の直後に、中隊長が、東学農民軍の「兵力、強大なり、弾薬を送れ」と、実に「10万発」を請求している記事（レジュメ資料、参照）などが見られる。日本軍の報告では、日本軍の銃撃は、「100発、100中」だったのであり、やはり東学農民軍の戦死者の総計は、きわめて多かったと思われる。

日本軍の東学農民軍殲滅作戦には、日本へ留学した姜孝叔氏が、約4000名の兵士が投入されたことを解明している。「3路・包囲殲滅作戦」の中心になったのは、紹介した「後備歩兵独立第19大隊」であった。

このような大作戦が展開した。しかし、東学農民軍殲滅作戦は、日本では、ようやく知られはじめたばかりというのが実情である。日清戦争のあとに日本軍参謀本部が編纂した『

日清戦史』は、全8巻の歴大な公式戦史であるが、農民軍殲滅作戦は、兵站部組織の変遷を叙述するなかで、わずかに3ページ余で触れられているだけなのである。戦争後の当時から、殲滅作戦の事実は、隠蔽されたと思われる。

作戦は、隠蔽された。東学農民軍との戦闘で戦死した兵士の記録について、軍国主義軍隊の神社であった靖国神社が、1935年に編纂した『靖国忠魂史』は、兵士が、東学農民軍との戦闘で戦死した事実を改変し、事実を隠蔽したのである。会場配付資料で説明する（配布資料、参照）。

戦前・戦中期に、軍国主義の靖国神社は、戦争の戦死者の名前、戦死場所、そして出身地を『靖国忠魂史』に記録していた。この記録から、弾圧の中心となった後備歩兵第19大隊の兵士たちの郷土が判明した（当時の兵士は、徴兵、つまり強制徴募であり、そして部隊は出身県ごとに編成された）（配布資料、参照）。

後備歩兵第19大隊・3中隊の兵士は、四国4県から徴兵された農民たちの混成部隊であった。大隊本部は、愛媛県松山市に置かれていた。四国4県を訪ねて調査し、松山市などで地域の歴史研究者の協力をいただいた。地域では、東学農民軍殲滅作戦の記憶は、まったく抹殺されていた。

当時の四国4県の地方新聞、『海南新聞』（愛媛県）、『香川新報』（香川県）、『徳島日日新聞』（徳島県）、『土陽新聞』（高知県）4紙には、東学農民軍殲滅に徴兵された兵士の関連記事が掲載されていた。朝鮮からの兵士の手紙も多数、見い出された（配付資料、参照）。

兵士は、小作や日雇い、貧農らの貧しい兵士であった（徴兵制が発令されたのは、明治維新後、日清戦争から約20年前であるが、四国では、農民は、この徴兵令に対して、激しい「徴兵令反対一揆」を戦って、厳しく弾圧されていた）。

2004年9月、松山市の歴史研究者、大学研究者などの手で、「東学農民軍と愛媛」という講演会が催され、会場の愛媛県立美術館には、約100名の市民が集まった。講演会に合わせて、地元の新聞、『愛媛新聞』（以前の『海南新聞』を受け継いだ新聞）は、「弾圧の記憶」という2回の特集記事を掲載した。「甲午農民戦争と愛媛」というサブタイトルの記事である（岡山直大記者執筆）。新聞の見出しが、記事のねらいを示している。連載1回目の見出しは、「討滅部隊」、「県人（愛媛県人）も大量虐殺関与」、「向き合うべき冷厳な事実」で、2回目は、「庶民が庶民殺す」、「赤貧の中の従軍、悲哀」、「朝鮮は野蛮」心で正当化」である（配付資料、参照）。

愛媛県の『海南新聞』の記事を手掛かりに、はじめて発見された、東学農民軍殲滅戦で戦死した日本兵の墓も、発見者の地域史研究者、古谷直康さんとともに写した写真が掲載された。朝鮮服を着て農民軍偵察を命じられた日本兵士が、忠清道で戦死したことが墓碑に刻まれている。朝日新聞の愛媛県地方版も、特集連載記事を掲載し、地方メディアの反応

は、目覚ましいものがあった。

史料の発見として、後備歩兵第19大隊の大隊長、南少佐の文書が見出され、今年、2010年4月から県立文書館に所蔵され、公開されることになったことをお話する。大隊長、南小四郎については、韓国の『駐韓日本公使館記録』に、「東学党征討略記」、「各地戦闘詳報」、「東学党征討策実施報告書」が掲載されている、「3路・包囲殲滅作戦」の現地指揮官であった。山口県文書館の尽力があり、子孫も文書を山口県文書館に寄贈された。大隊長の出身地は、山口県の瀬戸内の農村であった。山口県は、陸軍の最大勢力、長州閥の本拠地である。子孫は、市部に引っ越しされていたが、驚くべきことに、南小四郎が作戦中も携帯したと推定される、使い込まれた将校軍用行李が大切に保存され、その中に文書（殲滅作戦関係文書の一部）があった（文書全体の本格的調査は、これからである）。当時の東学二代目教祖、崔時亨の通文、数万の東学農民軍に包囲され救援を求める全羅道羅州府役人の大きな紙に墨書された公文書など、原史料が保存されている。南小四郎が、朝鮮国王に提出した殲滅作戦の報告書（「東学党征討経歴書」）の原稿などもあった。

日本の「弾圧の記憶」も、このように、闇のなかから、すこしずつ、しかし確実に、復活しつつある。

2. 包囲殲滅作戦の立案者—日本政府・大本営

紹介したように、日本軍が「3路・包囲殲滅作戦」を立案するきっかけとなったのは、忠清道東学農民軍の、山岳地帯を活用した抗日蜂起であり、そして、10月下旬の山岳（小白山脈）を越える日本軍兵站守備隊（安保・可興・忠州）に対する一斉蜂起であった。

この蜂起をきっかけとして、朝鮮現地の日本軍部と外交部が、弾圧部隊の派遣を日本広島大本営に要請する。重要なのは、ソウルに駐在する日本公使井上馨が大本営伊藤博文総理大臣へ宛てた、弾圧部隊派遣、そして大本営緊急会議開催を要請する秘密至急電報であった。

大本営緊急会議は開催され、ただちに伊藤博文総理大臣と有栖川参謀総長の3中隊の弾圧部隊派遣連絡電報がソウル日本公使館に届き、仁川の兵站司令部には、大本営の川上操六参謀次長兼兵站総監から、3中隊派遣の連絡電報が送られた。

朝鮮現地の井上馨公使と仁川兵站司令部の派遣要請は、2中隊派遣要請であった。それに対して、派遣を3中隊に拡大したのは、広島大本営であった。大本営の、3中隊派遣作戦によって、朝鮮半島中部と南部の東学農民を殲滅する大包围作戦、「3路・包囲殲滅作戦」が可能になったのである。大本営の決定には、伊藤博文総理大臣が参加し、外務大臣陸奥宗光も関与しており、陸奥外務大臣は、ロシアの介入を懸念して、東学農民軍を朝鮮

半島西南部へ向かって大包围して弾圧することを、伊藤総理大臣に対して申し入れたのである。

「3路・包围殲滅作戦」の立案者が、日本政府と大本営であることについて、昨年の忠北大学と報恩東学農民軍蜂起記念祭での報告につづいて、日本の学術雑誌『思想』「韓国併合」100年を問う、特集号2010年1月号で解明した。ここでは、要点となる、井上馨公使の秘密至急電報を紹介したい（配付資料、参照）。

井上馨駐韓日本公使の伊藤博文総理大臣宛、秘密電信は、防衛省防衛研究所図書館の「戦史編纂準備書類 東学党 全 暴民」という表紙の冊子に、電信原本（謄写版）が綴じられている。

忠清道東学農民軍の蜂起を報じ、東学農民軍蜂起を口実にするイギリス軍の介入を懸念し、結論として、大本営の「評議」開催に、至急、取りかかることを求めている。緊急事態のため、公使でありながら、外務大臣を飛び越して、直に総理大臣に発信したと述べ、総理大臣から（東京に居た）陸奥外務大臣への連絡を求めた。10月27日発信、28日に大本営へ届いた。

要請を受けた大本営からの、3中隊を派遣するという、伊藤博文総理大臣と有栖川参謀総長のソウル駐在井上公使宛電信は、「南部兵站監部 陣中日誌」の10月28日夜の記事に記録されている（井上公使が、電報の着いたことを、仁川兵站司令部に報じた）。川上操六参謀次長兼兵站総監からの仁川兵站司令部（南部兵站監部）宛電信も、同日夕刻に届いたと記録されている。

一方、大本営川上操六の東学農民軍皆殺し命令は、広島から10月27日夜に、仁川兵站司令部の忠清道農民軍一斉蜂起の連絡を受けた後で、井上公使のソウル発、秘密至急電信とは行き違いになって仁川兵站司令部に届いている。この事実は、「ことごとく殺戮せよ」という皆殺し命令が、広島大本営の独自判断で発令されたことを示している。これも、陣中日誌の該当部分を掲げる（配付資料、参照）。

東学農民討滅の専門部隊を朝鮮に派遣することを決定したのは、以上の検討のように、伊藤博文総理大臣をはじめとする日本政府と大本営であった。

3. 東学農民軍蜂起の強さと広がり—忠清道農民軍、文義、沃川、鎭山一带

「3路・包围殲滅作戦」がつくられた事には、忠清道東学農民軍の蜂起が重要な役割をした、これは、すでに述べたとおりである（全羅道東学農民軍以外の東学農民軍の戦闘も重要であることについて、日本軍と東学農民軍の戦闘を、全面的に検討した姜孝叔氏の研究なども指摘しており、同感である）。

ここでは、殲滅作戦が始まった後でも、全羅道東学農民軍が中心となった有名な激戦、公州戦鬪の時期、それと平行して戦われた忠清道東学農民軍の山岳地帯での、文義、沃川、錦山などでの日本軍との戦鬪が、東学農民軍の抗日蜂起が大展開をすることについて、大きな役割を果たしていたと思われることをお話する。

新しく見出された南小四郎文書の朝鮮政府に提出した「東学党征討経歴書」（控え）を読むと、その事が分かる。南少佐のこの報告書は、提出した公文書という性格の故と思われるが、討伐作戦の全貌を、少佐が指揮していた本部中隊の行動に沿って、比較的客観的に叙述している。南少佐が、指揮下の他の中隊に命令を届いたこと、および他の中隊からの報告が来たこと、公使館や仁川兵站司令部からの命令が出たことも、命令の内容が、一部しか記されていないのは残念だが、報告書に、日付にしたがって、丁寧に記されている。従来、韓国で刊行された『駐韓公使館記録』には、南少佐の講演記録「東学党征討略記（大日本南少佐講話）」が掲載されていることが知られていた。しかし、これは、講演（談話）であって、長文で、部分的には具体的だが、東学農民軍を、良民に悪事をする「暴民」をいう一方的な見方しかしていないものである。不公正な、主観的な談話であり、内容も不正確で、史料としては注意が必要なものであった。

今回、新たに見出された、この「東学党征討経歴書」によれば、第一次と第二次の公州戦鬪が、西路で展開している間、11月27日から29日までと、12月4日から7日まで、中央の清州街道を進んだ南少佐の本部中隊は、次のような行動をとっていたことが分かる。整理して、次に掲げる。

「東学党征討経歴書」（南小四郎文書、山口県文書館）から記事を整理

清州街道、本部中隊の行動

- 1894年11月16日 陽智県出発、竹山県着、宿泊。
- 19日 竹山県出発。
- 21日 清州着、宿泊。
- 23日 清州出発、文義県を経て、至明楼にて東学農民軍と遭遇、農民軍は、増若、沃川方向へ退去。追撃の支隊を出す。文義県宿泊。仁川兵站監とソウル日本公使館へ戦況報告。
- 24日 仁川兵站監から東路の東学党討伐隊へ京城守備隊一中隊を増派の電報を受ける。
西路の中隊長森尾大尉から公州城危急、再三来援を求められる。
- 26日 文義県を、公州へ向かうために出発。竜浦村着、宿泊。
前日、周安村方面へ派遣した支隊、東学農民軍数万と激戦。弾薬欠乏、文義県へ退却、危急との報告が来る。

- 27日 竜浦村出発、文義県へ退却、宿泊。
西路の中隊長森尾へ、戦況により、進路を沃川、錦山方向へ変えたと連絡する。
- 30日 文義県出発、増若着、宿泊。
- 12月1日 増若出発、沃川着、宿泊。
- 2日 本隊支隊より青山県に東学農民軍夥多集合の報告届く。
西路森尾大尉へ弾薬と東学農民軍に関する命令を出す。
- 3日 東路中隊長、松木大尉へ東学農民軍捜索に関する命令を出す。
- 4日 本隊支隊へ錦山にて合流、捜索方の命令を出す。
- 5日 沃川郡にて、天皇と皇后の勅語を受ける。
- 6日 部下一同へ申し聞かせ、「感涙」。
沃川郡出発、錦山着、宿泊。
- 7日 西路中隊長森尾大尉へ魯城県・論山県にて東学農民軍包囲作戦に関する命令を出す。
- 8日 本隊支隊に高山県方面へ出発すべき命令を出す。
錦山県出発、珍山県へ
- 9日 連山県着、宿泊。
連山県、人民退去、人夫雇用できず、県監を説諭。
- 10日 連山県出発、魯城県へ向かう。
東学農民軍、四方山上から襲来、応戦、数時。連山県宿泊。
西路中隊長森尾へ東学農民軍包囲作戦に関する命令を出す。
- 11日 連山県出発、魯城県着、宿泊。
- 12日 魯城県出発、恩津県着、宿泊。

この南少佐報告によって、西路軍（第2中隊）で、公州戦闘が激戦となっていた時、南少佐の本部中隊（中路軍・第3中隊）が、西路軍から公州戦闘への救援を、再三、求められたこと、本部中隊は、一度は、公州戦闘に加わるため、文義から公州をめざして出発したこと、しかし、文義や沃川の、忠清道東学農民軍の勢力が強かったために、やむなくふたたび文義へ退却したこと、そして、文義南方の戦況が厳しかったため公州戦闘とは反対の、沃川・錦山へと、南へ転じたことが分かることをお話したい。忠清道東学農民軍の戦闘能力は、高かった。そのため、激戦となった公州戦闘で、日本西路軍は、本部中隊に対してくり返し援軍を要請したにもかかわらず、中路軍の支援なしに、孤立して戦ったのであった。

朝鮮の兵站司令部は、仁川から漁隱洞へと北上し、東学農民軍討伐隊の指揮は、仁川に残った司令官が執ったが、その陣中日誌（「南部兵站監部日誌」）にも、次のように東学

農民軍との戦況が記されている。それは、上のような本部中隊の作戦展開を見るとよく理解できる。これも、抜粋を紹介する。

明治二十七年 (1894)十一月・十二月 「南部兵站監部日誌」

防衛省防衛研究所図書館所蔵 分類：[兵站部・日清戦役陣中日誌・M27-31 176]

11月26日 仁川伊藤中佐より電報

後備第19大隊は、23日文義の東学党を撃退。文義、西南約2里の根拠地紫と攻撃せり、死者7名、生捕り7名など。○紫沮の東学党は、1万34千ばかり。公関付近にも、23万集合、中国兵450人ありと。○中路隊は、26日、公州から西路隊と合流予定

(実際は、中路隊、文義で東学党数万と戦闘のため、合流を止め、文義へ退却、沃川、錦山方面へ転ずる)。

11月28日 仁川伊藤中佐より電報

在洪州赤松少尉の報告によりれば、東学党すこぶる猖獗、日本軍危うきをもって、応援兵派遣を井上公使より協議あり。龍山守備兵2小隊と仁川守備兵一小隊を一中隊とし、応援兵派遣。

11月29日 仁川伊藤中佐より電報

去る21日、余美・海美で、勝戦谷の狭隘を守る東学党45百を破り、余美高地を占領。しかし、東学党は、3万余、四方の高地を占領、死力をもって守る。日本軍、洪州へ退却。

11月31日 仁川伊藤中佐より電報

公州在の西路隊、森尾大尉より、敵の兵力、強大なり、弾薬を送れと申し来たり、弾薬は、ただ今、船にて送付。○スナイドル銃弾丸10万発下関首砲廠へ請求。

12月1日 仁川伊藤中佐より電報

11月28日に文義の後備第19大隊長より報知、○27日に中路隊と合し、公州全面の東学農民軍を包囲するため、燕岐を目指す。周安付近の農民軍あり、左支隊、文義へ退却、故に、また文義へ戻る。○沃川地方の農民軍を勦滅して後、公州地方の農民軍に当たる。○西路隊の報によれば、公州、洪州地方、数万の農民軍、勢いはなほだ猖獗。

12月2日 大邱伊津野少佐より電報

黄澗・錦山地方に東学農民軍集合の報あり、韓兵、黄澗・茂朱地方より当監司へ報告続々届く。東学農民軍、大挙して大邱を襲うとの状況なりと、大邱は危険、釜山から兵を派遣した。

釜山今橋少佐より電報

大邱から東学農民軍、大邱包囲に襲来との報あり、一分隊を大邱に派遣、飛鳥井少佐東学農民軍を兵站線の東へ走らせないう中尉した。○19大隊は、未だ洛東へ達していない。

11月29日東学農民軍数万、洪州を襲撃、日本軍と朝鮮兵およそ2千余人、洪州で撃退、数千人を殺傷。

12月8日 仁川伊藤中佐より電報

仁川より派遣、応援中隊3日午後、洪州に着す、赤松少尉支隊は4日出発、公州の西路中隊は、支隊合流を待って、敬天付近の東学農民軍と戦はんとす。

仁川伊藤中佐より電報

東学党討伐隊の進退につき、井上公使と面談の必要あり、ソウルへ行く許可を求む。

仁川伊藤中佐へ電報

日本軍第一軍参謀長より、伊藤中佐にソウル行きを認可。安保より仁川間に後備19大隊の2中隊を配備、1中隊を遊動予備隊とし、兵站部員を他に転用を希望。

12月11日 仁川伊藤中佐より電報

後備第19大隊の東路中隊は、可興より永春へ進行して南進せず。中路・西路中隊は、公州付近に在って、前進を躊躇し、敏活の運動をせず。井上公使と協議し、あえて前進し、全羅の西南に押し込め討伐をさせる。○これは、大本営川上中將へ報告済み。

各兵站司令官へ命令、訓令

討伐の奏功著しくない、兵站守備隊を守備兵と、専ら討伐に当たる遊動予備隊に分ける。守備兵も差し支えない限り、討伐に当たる。(討伐兵を増強する)。

訓令の第3条

東学党討伐に際し、日本軍を奔命に疲らしむべからず。目下の状況、「(東学農民軍は)やや有力なる軍隊に遭遇する時は潜伏、その所在を隠し、軍隊、その地を去れば、従って又興る、然るにその興るや、その名在って、その実なし、討伐の事、宜しくその実を探り、その実に当たらざる可らず、是れ深く銘心す可き事なりとす」

「東学党征討経歴書」を踏まえて、南少佐の談話記録「東学党征討略記」を読むと、忠清道の山岳部を転戦した本部中隊が、忠清道の山岳で、悪路に苦しみ、惨憺たる行軍を強いられたことがよく分かる。文義から公州へ向かう竜浦村への道、沃川から錦山への直進路、珍山から連山への道、これらは全て山脈越えの道で、日本軍は、膝まで泥に入る山道にさそい込まれ、行軍を阻まれていたのである。山岳を活かしたゲリラ戦を忠清道東学農民軍はとった。

上に掲げた「南部兵站監部日誌」の12月2日条に記されているように、東学農民軍が大邱

を襲撃するという情報も届き、本部中隊は翻弄された。日本軍部隊は、公州戦闘の重要な時期に、公州街道と清州街道に分断されたままであった。朝鮮半島中央部各地で蜂起し、広く展開した東学農民軍全体に、あたかもしっかりとした連絡が在り、意思統一が存在したようにすら見えるのである。

次に東学農民軍との戦闘の最終局面、羅州府を弾圧大隊の根拠地とする殲滅戦の展開する局面について、南少佐「東学党征討経歴書」の記述が一変していることをお話ししたい。

1895年、弾圧大隊が羅州城に入ってから、「東学党征討経歴書」によれば、南小四郎の「討滅命令」、あるいは「勦滅命令」が、乱発されたことが分かる。

1月5日から2月21日までを、抜き出して掲げる。

南少佐「東学党征討経歴書」の抜粋

1月5日) 同五日、羅州城着、舎営、此日、靈巖、康津、長興、宝城、綾州ノ各地ヨリ、賊徒跋扈、人民ヲ殺害スルノミナラス、就中、長興府使ヲ銃殺セシ旨ノ飛報、交々至ル、之レガ討滅ニ関スル部署ヲナス、

1月6日) 同六日、石黒大尉ニ教導中隊ノ二小隊ヲ付シ、長興方面ニ出シ、賊徒勦滅ニ従事セシム

同日) 同支隊(鈴木特務支隊)エ、海岸ニアル賊徒勦滅ニ着手、及ヒ其支隊留陣ス可キ命令ヲ下ス。

1月9日) 仁川伊藤司令官へ、長興・海南ノ残賊勦滅ノ為メ、支隊派遣、巨魁等ヲ捕縛セシ旨、其他賊情等ノ電報ヲ発ス。

1月11日) 石黒支隊エ、海南ノ賊徒、逃走、白木支隊ヲ指揮シ、賊徒ヲ勦滅スルノ命令ヲ下ス。

1月13日) 松木支隊エ、海南地方ノ残賊ヲ勦滅スベシ、石黒支隊、白木支隊、楠野支隊ハ長興南面ノ残賊ヲ勦滅シツ、アリシ事、及ビ給養上ノ件ニ関スル命令ヲ下ス。

同日) 統衛營兵大隊長エ竜堂ヲ経テ、海南ニ至リ、各地ヨリ到ル諸支隊ト合シ、賊徒勦滅ス可キ命令ヲ下ス。

1月14日) 仁川伊藤司令官エ釜山ヨリ一中隊ヲ順天ニ出シアル隊ト協力、賊徒討滅シツ、アル旨ノ電報ヲ発ス。

1月15日) 白木支隊エ海南ニ至リ、松木支隊ト合セ、残賊勦滅ノ命令ヲ下ス。松木支隊エ、海南ニテ、白木支隊ト合セ残賊勦滅ス可キ命令ヲ下ス。

1月19日) 筑波艦長海軍大佐黒崎帯刀エ、沿海、珍島・濟州島等ノ賊徒勦滅方ニ関スル通報ヲナス、松木支隊エ、右水営付近ノ賊徒勦滅方ノ命令ヲ下ス。

1月22日) 松木支隊エ、珍島付近ノ残賊ヲ、速カニ勦滅ス可キ命令ヲ下ス。

1月25日) 釜山守備大隊長、陸軍歩兵少佐今橋知勝エ、鈴木大尉ノ連絡、及ビ賊徒勦滅方ノ通報ヲナス。

2月15日) 石黒大尉エ大屯山ノ賊徒勦滅スヘキ命令ヲ下ス。

2月18日) 水原支隊エ、第三中隊ノ進路、大屯山ノ賊徒勦滅方ノ命令ヲ下ス。

2月21日) 石黒大尉ヨリ大屯山ノ賊徒勦滅セシ報告ヲ受ク。

3月3日) 漢城ニ於テ、国王陛下ニ謁ヲ賜リ、東学党討滅ノ模様ヲ奏上シ、了テ酒肴ヲ賜ハル。

南少佐が、次々と「討滅」、「勦滅」命令を発したことが明らかである。公然とした作戦として「討滅」、つまり「殲滅」（皆殺し）が行われた。南少佐の「東学党征討経歴書」では、1月5日の「討滅ニ関スル部署……」以前の記事には、「討滅」や「勦滅」という言葉が記されていないのである。弾圧作戦が、ここにおいて、より激しく、虐殺の方へ傾いたと思われる。

この、作戦最終局面の、激化した殲滅作戦の意味について、検討してゆく必要がある。

4. 『香川新報』の殲滅作戦批判と、その筆者

『香川新報』は、東学農民軍殲滅作戦を、正面から批判した。その記事についてお話ししたい。また、香川県の石井雍大氏が、この批判記事を執筆した筆者と、その経歴について、事実を明らかにされた。それによれば、筆者は、坂斉道一であり、『香川新報』は、何度も発行停止処分を受けていた。詳しく読めば、連載社説も朝鮮に対する偏見をもっていたことに気付く。一方、これについては、当時の日本の論調と、政府の検閲もあわせて考える必要がある。当日、資料を配布して、これについて紹介したい。

『香川新報』、社説「朝鮮の改革」からの抜粋

朝鮮の一社会に就て、考ふれば、比較上、他の同類よりも気力ある輩なりと云ひ得べく、又、他の同類よりも見識ある徒なりと云ふを得べし……余輩は、反面より之を観察するに於て、東学党中の少なくとも、其領袖たる者共は、朝鮮国民中の先覚者なりと云ひ得べしと信ずるなり。

東学党を討滅するの間には、凡そ幾百千の朝鮮国人を殺さ、る可からざるかは、政治

家の最も注意すべきの点なり。今日まで已に幾百の東徒を殺せり。而して、未だ毫も功を奏せず。今後、更に果して、幾千人を殺さゝるべからざるか。試みに想へ。江西地方の東学党のみを以てするも、其数百万に余まると云ふに非すや。

安んそ、怨みを後世に残さゝるを得ん。百人死すれば、千人怨み、千人斃るれば、万人怨む。嗚呼、安んそ、永く我徳を播くに便ならんや。

東学党、好し平定に帰すると雖も、一般良民の帰服し難きを如何にせん。井上伯たる者、深く鑑みざるべからず。識者たる者、深く鑑みざるべからず。

(以上は、内容検討中の未定稿です)

東學農民軍을 鎮壓한 日本軍隊의 歷史史料

- 東京, 四國, 山口를 찾아서 -

井上勝生(훗카이도대)

1894년 가을부터 다음해 봄까지 항일봉기한 동학농민군의 남부세력은 조선반도 중남부 일대로부터 전라남도 서남단으로 내몰려 포위 섬멸당하였다. 섬멸작전의 주축이 된 것은 일본에서 파견된 '후비보병독립 제 19대대'의 3개 중대였다.

섬멸작전은 서울방면으로부터 공주(公州)가도와 청주(淸州)가도, 대구(大邱)가도(일본 군병참로)의 3로를 3개 중대가 남하하여 도중에 서남 방향으로 전개하여 집합한 나주(전라도)에 본거지를 두고 포위한 농민군을 살육했다. 이 작전이 바로 일본군의 '3로 포위 섬멸작전'이다.

농민군은 '민란'세력으로써 동아시아 민중반란은 전통적으로 '필요 없는 살상을 하지 않는' 등의 규율을 지니고 있었다. 한편, 탄압한 일본군은 근대화된 군대로 농민군과의 전력차이는 대단히 컸다. 섬멸작전은 불법적인 제노사이드였다.

일본의 재일(在日) 연구자 조정달(趙景達)씨는 농민군 사자(死者)는 적게 잡아도 3만 명이며 많게는 5만 명에 육박한다고 추정하고 있다. 청일전쟁에서 최대의 사상자를 낸 나라는 바로 조선이었던 것이다.(조선의 사상자는 최근 한국 연구자의 조사에서 훨씬 더 많다고 지적되고 있다.) 이 같은 조선 민중에 대한 학살 사실은 일본에서는 이제 막 알려지기 시작한 단계에 있다.

이번 보고에서는 첫째, 새로운 사료의 발견을 통해 섬멸작전이 일찍이 일본 병사들의 출신지였던 지역(에히메현 마츠야마지 등)에서 최근에 알려지기 시작했다는 사실에 대해 말하고자 한다. 또한 둘째로 '3로 포위섬멸작전' 입안(立案)의 주체가 된 탄압 3개 중대 파견은 일본정부와 일본군 대본영(히로시마에 설치)에 의해 결정되어 명령되었다는 사실을 지적하고자 한다.(조선 현지의 일본군이 입안한 것이 아니었다.) 일본정부와 대본영의 결정과 명령, 이것에 대한 검증에 대해서는 일본 방위성 방위연구소 도서관이 소장하고 있는 당시의 현지부대의 「진중일지(陣中日誌)」와 대본영 보고서철 등의 조사를 소개한다,

또, 일본군 기록에는 항일 봉기한 동학농민군 동향이 구체적으로 기록되어 있다. 기록을 조사하여 보면, 동학농민군의 항일봉기는 종래 말해지고 있던 것보다도 훨씬 더 광범위하게 전개되고 있었으며, 훨씬 더 강력한 위협을 일본군에게 주고 있었던 것으로 생각된다.

그 첫째가 이른바 북접(北接), 충청도 농민군 봉기에 대한 것이다. 동학농민군 주력부대가 전라도 농민군이었다고 하는 사실은 일본군 기록에도 기록되어 있다. 그러나 충청

도 농민군도 일본군의 「진중일지」등을 조사해 보면 일본군에게 커다란 적대세력이었다는 사실이 명백하다. 작년 충북대학교에서 있었던 연구발표회와, 보은(報恩) 동학농민군 기념행사에서 말했던 바와 같이, 원래 일본군의 ‘3로 포위섬멸작전’이 일본에서 입안된 것은 안보(安保), 가흥(可興), 충주(忠州) 등의 일본군 병참선에 대한 충청도 농민군의 일제 봉기가 위협이 되었기 때문이었다.

이번 보고에서는 그 ‘3로 포위섬멸작전’이 시작되고 나서 벌어졌던 유명한 격전인 공주전투와 시기를 같이 하여 문의(文義)와 옥천(沃川), 금산(錦山) 등 충청도 산악지대의 동학농민군들의 전투가 항일봉기가 전개되는 과정에서 중요한 역할을 수행하고 있었다는 사실을 말하고자 한다.

최근 처음으로 그 존재가 확인되어 금년 5월부터 야마구치현(山口縣) 문서관에서 공개되고 있는 농민군 토벌부대 대대장이었던 「미나미 고시로 문서(南小四郎文書)」(문서관에서는 「미나미가문서 = 南家文書」라는 이름으로 보존되고 있다.)의 보고서(「동학당정토경력서」)등으로부터 그 같은 사실을 확인할 수 있다.

섬멸작전의 최종 국면, 나주에 토벌본부를 둔 반도 서남부에서의 섬멸작전에 대해서도 미나미 고시로 소좌의 보고서에 의하면, ‘토멸’ 또는 ‘초멸’ 명령이 현지에서 반복되고 있었다는 사실을 지적하고자 한다.

그리고 일본에서는 동학농민군 토벌작전을 비판하는 언론이 있었다는 사실도 보고하려 한다. 병사들이 동학농민군 토벌작전에 나가있던 카가와현(香川縣)의 『카가와신보』의 연재사설이 바로 그것이다. 이 사설은 작년 충북대학교에서 있었던 연구발표회에서도 소개했는데, 그 뒤 카가와현 현지 연구자의 조사에 의해 이 귀중한 비판사설을 쓴 필자가 판명된 사실을 소개하고자 한다.

1. ‘탄압의 기억’ - 에히메신문 특집기사, 미나미 고시로 문서의 보존과 공개

청일전쟁에서 최대의 전사자를 낸 나라는 형식적으로는 일본의 교전국(交戰國)이 아니었던 조선이었다. 앞에서 소개한 바와 같이, 조선 측 전사자는 일본군 대대장 미나미(南) 소좌의 전투보고 등을 통해 집계해서 적어도 3만, 많게는 5만에 육박하는 것으로 추정되며, 최근 한국의 충북대학교 호서문화연구소(湖西文化研究所)의 북실전투 조사에서는 일본군 전투보고를 훨씬 상회하는 전사자가 나왔다고 보고되고 있다.

방위성 방위연구소에 보존되어 있는 현지부대의 「진중일지」기사에는 토벌전에서 탄환이 부족하여 ‘스나이더 총 탄환 5만발’을 시모노세키 병기창에 청구(1894년 11월 23일, 남부병참감부일지)하기도 하고, 동년 11월 31일 제 1차 공주전투 직후에 일본군 중대장이 동학농민군의 ‘병력 강대하니 탄환을 보낼 것’이라고 하여 ‘10만발’을 청구한 기사(배

부자료 참조)등을 볼 수 있다. 일본군 보고에는 일본군의 총격은 '100발 100중'이었기 때문에 동학농민군 전사자 통계는 대단히 많았을 것으로 생각된다.

일본군의 동학농민군 섬멸작전에는 약 4천명의 일본군 병사가 투입되었다는 사실을 일본에 유학했던 강효숙(姜孝叔)씨가 해명하고 있다. '3로 포위섬멸작전'의 중심이 된 부대는 앞에 소개한 '후비보병 독립 제 19대대'였다.

이와 같은 대작전이 전개되었다. 그러나 동학농민군 섬멸작전은 일본에서는 이제 막 알려지기 시작한 것이 현재의 실정이다.

청일전쟁 뒤에 일본군 참모본부가 편찬한 『일청전사(日淸戰史)』는 전8권의 방대한 공식전사(公式戰史)이지만, 농민군 섬멸작전은 병참부조직의 변천을 서술하는 가운데 불과 3쪽 정도 언급되어 있을 뿐이다. 청일전쟁 직후부터 섬멸작전에 관한 사실(事實)은 은폐되었던 것으로 보인다.

작전이 은폐된 사실은 동학농민군과의 전투에서 전사한 병사에 관한 기록에 대해, 군국주의 군대의 신사(神社)인 야스쿠니 신사의 『야스쿠니충혼사(靖國忠魂史)』 기사를 부당하게 고친 데서도 알 수 있다. 이 점에 대해서는 배부해 드린 자료를 통해 설명해드리고자 한다.(배부자료 참조)

후비보병 19대대의 3개 중대 병사는 시코쿠(四國) 4개 현에서 징병된 농민들의 혼성부대였다. 대대본부는 에히메현 마츠야마시(松山市)에 설치되어 있었다. 시코쿠 4개 현을 찾아다니며 조사하였으며, 마츠야마시 등 지역 역사연구자의 협력을 받았다. 시코쿠 각 지역에서는 동학농민군 섬멸작전에 대한 기억이 완전히 말살되어 있었다.

1894년 당시 시코쿠 4개 현의 지방신문, 에히메현의 『카이난신문(海南新聞)』, 카가와현의 『카가와신보(香川新報)』, 토쿠시마현의 『토쿠시마일일신문(徳島日日新聞)』, 코치현의 『도요신문(土陽新聞)』 등 4개 신문에는 동학농민군 섬멸을 위해 징병당한 병사들에 대한 관련 기사가 게재되어 있었다. 조선에서 온 병사들의 편지도 다수 찾아냈다.(배부자료 참조)

병사들은 소작(小作)이나 날품팔이, 빈농 등 가난한 병사들이었다.(일본에서 징병제가 발령된 것은 메이지 유신 후 청일전쟁으로부터 약 20년 전이었지만, 시코쿠에서는 이 징병령에 대해 농민들이 격렬한 '징병제 반대 잇키(一揆; 민란)'를 일으켜 가혹한 탄압을 받았다.)

마츠야마시의 역사연구자와 대학연구자 등의 노력으로 「동학농민군과 에히메」라는 강연회가 개최되었다.(2004년 9월 18일, 松山市 縣立美術館) 강연회에 즈음하여 현지 지방신문인 『에히메신문(愛媛新聞)』(1894년 당시의 『카이난신문』의 뒤를 이은 신문)은 「탄압의 기억」이라는 제목으로 2회에 걸친 특집 기사를 게재했다. 「감오농민전쟁과 에히메」라는 부제목이 달린 기사였다.(오카야마 나오다이 = 岡山直大 기자 집필, 2004년 9월 11일과 9월 12일) 신문 제목이 기사가 추구하고자 하는 바를 드러내고 있다. 제 1회 연재의

제목은 「토벌부대」, 「현 사람 = 에히메현 사람도 대량학살 관여」, 「마주 바라보아야 할 냉엄한 현실」이었으며, 2회째는 「서민이 서민을 죽이다」, 「적빈(赤貧) 속의 종군, 비애」, 「조선은 야만」이라고 마음으로 정당화」 등이다.(배부자료 참조)

에히메현 『카이난신문』 기사를 단서로 하여 처음으로 발견된, 동학농민군 섬멸전에서 전사한 일본 병사의 묘도 발견자인 지역사 연구자 후루야 나모야스(古谷直康)씨와 함께 찍은 사진이 연재되었다. 조선옷을 입고 농민군 정찰을 명령 받은 일본 병사가 충청도에서 전사했다는 사실이 묘비에 새겨져 있다. 『아사히신문(朝日新聞)』 지방판도 특집 연재 기사를 게재함으로써(2004년 8월 15일자), 지방 미디어의 반응은 놀라운 바가 있었다.

다음으로 새로운 사료 발견으로써 후비보병 제 19대대 대대장 미나미(南) 소좌 문서가 발견되어 야마구치 현립도서관에 소장되어 공개되기에 이른 경위에 대해서 이야기하고자 한다.

대대장 미나미 고시로(南小四郎)는 한국의 『주한일본공사관기록』에 「동학당 정토약기」, 「각지 전투상보」, 「동학당 정토책 실시보고서」 등에 게재되어 있는 ‘3로 포위섬멸작전’의 조선 현지 지휘관이었다.

야마구치현(山口縣) 문서관의 진력으로 자손이 관련 문서를 문서관에 기증했다. 대대장의 출신지는 야마구치현 세토나이카이(瀬戸内海) 연안의 농촌이었다. 야마구치현은 메이지정부 육군의 최대세력인 초슈벌(長州閥)의 본거지이다. 자손은 남쪽으로 이사했는데, 놀랍게도 미나미 고시로가 작전 중에 휴대했던 것으로 추정된 장교용 군용 고리짜이 소중히 보관되어, 그 속에 섬멸작전 관계문서의 일부가 들어있었다.(문서 전체에 대한 본격적 조사는 이제부터이다.)

당시 동학 2대 교주 최시형이 발한 통문(通文), 수 만의 농민군에 포위되어 구원을 요청하는 전라도 나주부(羅州府) 공형(公兪) 붓글씨로 커다란 종이에 쓴 공문서 등 원사료가 보존되어 있다. 미나미가 조선국왕에게 제출한 섬멸작전 보고서(「동학당 정토경력서」) 원고도 있었다. 일본 측의 ‘탄압의 기억’도 어둠 속으로부터 조금씩, 그러나 확실하게 부활하고 있는 중이다.

2. 포위섬멸작전의 입안자 - 일본정부와 대본영

소개한 바와 같이, 일본군이 ‘3로 포위섬멸작전’을 입안(立案)하는 계기가 된 것은 충청도 동학농민군의 산악지대를 활용한 항일봉기였으며, 또한 10월 하순의 산악(소백산맥)을 넘는 일본군 병참수비대(안보, 가흥, 충주)에 대한 일제봉기였다.

이 봉기를 계기로 조선 현지의 일본군부와 외교부가 탄압부대 파견을 일본 히로시마 대본영에 요청한다. 여기서 중요한 것은 서울에 주재하는 일본공사 이노우에 카오루(井

上馨)가 대본영의 이토 히로부미 앞으로 보낸 탄압부대 파견, 그리고 대본영 긴급회의 개최를 요청하는 비밀 지급(至急) 전보였다.

대본영 긴급회의가 개최되어 즉각 이토 히로부미 총리대신과 아리스카와노미야 타루히토(有栖川宮熾仁) 참모총장 이름의 3개 중대를 파견한다는 연락전보가 서울 일본공사관에 도착하였고, 인천의 병참사령부에는 대본영의 가와카미 소로쿠(川上操六) 참모차장 겸 병참총감으로부터 3개 중대를 파견한다는 연락전보가 도착했다.

그런데 당초 조선 현지의 이노우에 카오루 공사와 인천 병참사령부로부터의 탄압부대 파견 요청은 2개 중대 파견을 요청하는 것이었다. 이에 대해 2개 중대에서 3개 중대 파견으로 확대한 것은 히로시마 대본영이었다. 대본영의 3개 중대 파견작전에 의해 '3로 포위섬멸작전'이 가능해졌던 것이다. 대본영의 결정에는 이토 히로부미 총리대신이 참가하였으며, 외무대신 무츠 무네미츠(陸奥宗光)도 관여했다. 무츠 외무대신은 러시아의 개입을 염려하여 동학농민군을 조선반도 서남부를 향해 대포위하여 탄압할 것을 이토 히로부미 총리대신을 향해 요청했다.

'3로 포위섬멸작전' 입안자가 (조선 현지에 있던 부대가 아니라 - 주) 일본정부와 대본영이었다는 사실에 대해서는 작년 충북대학과 보은 동학농민군봉기 기념제 때 보고한 데 이어, 일본의 학술잡지인 『시소(思想)』의 「한국병합 100년을 묻는다」라는 제목의 특집호인 2010년 1월호에서 해명했다. 따라서 이번 보고에서는 요점 부분인 이노우에 카오루 공사의 비밀 지급전보를 소개하고자 한다.(배부자료 참조)

이노우에 카오루 주한일본공사가 이토 히로부미 총리대신 앞으로 보낸 비밀 전신(電信)은 방위성 방위연구소 도서관에 소장되어 있는 「전사 편찬준비서류 동학당 전(全) 폭민(暴民)」이라는 표지의 책자에 전신원본(등사판)이 수록되어 있다.

충청도 동학농민군 봉기를 알리는 동시에 동학농민군 봉기를 구실로 한 영국군의 개입을 염려하면서, 결론으로써 대본영의 '평의(評議)' 개최에 지급(至急) 착수해 줄 것을 요청하고 있다. 긴급사태라는 명목으로 공사(公使)이면서도 외무대신을 건너뛰어 곧바로 총리대신 앞으로 발신하였다고 하면서, 총리대신이 도쿄에 있는 무츠 외무대신에게 연락해 줄 것을 요청했다. 10월 27일에 발신, 28일에 대본영에 도착했다.

현지로부터 요청을 받은 대본영으로부터, 3개 중대를 파견한다는 이토 히로부미 총리대신과 아리스카와노미야 타루히토 참모총장이 서울의 이노우에 공사 앞으로 보낸 전신은 「남부병참감부 진중일지」 10월 28일 밤 기사에 기록되어 있다.(이노우에 공사가 전보가 도착했다는 사실을 인천 병참사령부에게 알렸다.) 가와카미 소로쿠 참모차장 겸 병참총감으로부터 인천 병참사령부(남부 병참감부) 앞으로 보낸 전신도 같은 날 저녁에 도착했다고 기록되어 있다.

한편, 대본영 가와카미 소로쿠의 동학농민군 전원살육 명령은 히로시마로부터 10월 27일에 인천 병참사령부의 충청도 농민군 일제 봉기 연락을 받은 후에, 이노우에 공사의

서울발 비밀 지급전신과는 방향을 달리하여 인천 병참사령부에 도착하였다. 이러한 사실은 “모조리 살육하라”라는 전원 살육 명령이 히로시마 대본영의 독자 판단에 의해 발령되었다는 것을 알려준다. 이 점에 대해서도 진중일지 해당 부분을 인용한다.(배부자료 참조)

3. 동학농민군 봉기의 강력성광 범위 - 충청도 농민군, 문의, 옥천, 금산 일대

‘3로 포위섬멸작전’이 입안되는 배경에 충청도 동학농민군 봉기가 중요한 역할을 했다는 점은 이미 설명한 대로이다.(전라도 동학농민군 이외의 동학농민군 전투도 중요하다는 사실에 대해서는, 일본군과 동학농민군 간의 전투를 전면적으로 검토한 강효숙 씨의 연구 등에서 지정되고 있는데, 필자도 그 같은 주장에 동감이다.)

여기서는 섬멸작전이 시작된 후에도 전라도 동학농민군이 중심이 된 유명한 공주전투(公州戰鬪)가 전개되던 시기에, 그것과 나란히 충청도 산악지대인 문의(文義), 옥천(沃川), 금산(鎭山) 등의 동학농민군과 일본군과의 전투가 커다란 역할을 수행하고 있었다고 생각하는 바를 말하고자 한다.

새로 발견된 미나미 고시로 문서 가운데 한국 국왕에게 제출한 「동학당 정토 경력서」(사본)을 읽어보면, 그 같은 사실을 알 수 있다. 미나미 소좌의 보고서는 토벌작전의 전모를 자신이 지휘하고 있던 대대 본부중대의 행동에 따라 비교적 객관적으로 서술하고 있다.

미나미 소좌가 자신의 지휘 아래에 있는 다른 중대에게 명령을 내린 사실, 그 다른 중대로부터 보고가 온 사실, 공사관과 인천 병참사령부로부터 명령이 하달된 사실과 그 명령 내용의 일부가 보고서에 기록되어 있다.

종래 한국에서 간행된 『주한일본공사관기록』에는 미나미 소좌의 강연기록 「동학당 정토약기(대일본 미나미 소좌 강좌)」가 게재되어 있다는 사실이 알려져 있었다. 그러나 이 「동학당 정토약기」는 강연 내용으로 장문(長文)이며, 부분적으로는 주체적이지만 동학농민군을 양민(良民)들에게 나쁜 짓을 하는 ‘폭민’이라는 일방적 견해로 본 것에 지나지 않는다. 따라서 불공정한 기술이자 내용도 부정확했다.

새로 발견된 「동학당 정토경력서」에 의하면, 제 1차와 제 2차 공주전투가 서로(西路)에서 전개되고 있는 사이에, 11월 27일부터 29일까지 그리고 12월 4일부터 7일까지 중앙의 청주가도를 남진한 미나미 소좌의 대대 본부중대는 아래와 같은 행동을 취하고 있었음을 알 수 있다. 정리해서 아래에 인용한다.

「동학당 정토 경력서」(미나미 고시로 문서, 야마구치현 문서관)로부터 정리한 기사
- 청주가도의 본부중대의 행동

- 1894년 11월 16일 양지현 출발, 죽산도착 숙박
 19일 죽산현 출발
 21일 청주도착 숙박
 23일 청주출발, 문의현을 거쳐 지명루(至明樓)에서 동학농민군과 조우, 농민군은 증약 옥천 방면으로 퇴거. 추격 지대(支隊)를 내보냄. 문의현 숙박 인천병참감과 서울 일본공사관에 전황보고
- 24일 인천병참감으로부터 동로(東路)의 동학당 토벌대에 경성수비대 1개 중대 증파 전보를 받음
 서로(西路) 중대장 모리오(森尾) 대위로부터 공주성 위급, 재삼(再三) 내원(來援)을 요청받음
- 26일 공주로 향하기 위해 문의현 출발, 용포촌(龍浦村) 도착 숙박, 전날 주안촌(周安村) 방면으로 파견한 지대가 동학농민군 수 만과 격전, 탄약 결핍, 문의현으로 퇴각, 위급하다는 전보가 옴
- 27일 용포촌 출발, 문의현으로 퇴각 숙박
 서로 중대장 모리오에게 전황에 따라 진로를 옥천 금산 방면으로 바꾸었다고 연락함
- 30일 문의현 출발, 증약 도착 숙박
- 12월 1일 증약 출발, 옥천 도착 숙박
 2일 본대 지대(支隊)로부터 청산현에 동학농민군 다수 집합해 있다는 보고가 도착
 서로 모리오 대위에게 탄약과 동학농민군에 관한 명령을 보냄
- 3일 동로 중대장 마즈키(松木) 대위에게 동학농민군 수색 명령을 내림
 4일 본대 지대에게 금산에서 합류하여 수색할 것을 명령함
 5일 옥천군에서 천황과 황후의 칙어를 받음
 6일 부하 일동에게 천황과 황후 칙어 낭독, 감루. 옥천군 출발, 금산 도착 숙박
- 7일 서로 중대장 모리오 대위에게 노선현, 논산현에서 동학농민군 포위작전에 관한 명령 하달
- 8일 본대 지대에게 고산현 방면으로 출발할 것을 명령함
 금산현으로 출발, 진산현으로
- 9일 연산 도착 숙박
 연산현 인민(人民) 퇴거하여 인부 고용 불가능, 현감을 설득
- 10일 연산현 출발, 노성현으로 향함
동학농민군 사방 산상(山上)에서 기습, 수차 응전. 연산현 숙박
 서로 중대장 모리오에게 동학농민군 포위작전에 관한 명령하달
- 11일 연산현 출발, 노성 도착 숙박
 12일 노성현 출발, 은진 도착 숙박

이상의 미나미 소좌 보고서에 의하면, 서로군(西路軍)이 공주전투에서 격전을 벌이고 있을 때 미나미 소좌가 이끄는 본부중대(중로군)가 서로군으로부터 공주전투에 대한 구원을 재삼 요청받았던 사실, 그리하여 본부중대는 한 때 공주전투에 참여하기 위해 문의에서 공주를 향해 출발했으나 문의와 옥천 등 충청도 동학농민군 세력이 강력했기

때문에 어쩔 수 없이 다시 문의로 퇴각했다는 사실, 그리고 문의 남방(南方)의 전황이 격렬했기 때문에 공주 방향과는 반대인 옥천과 금산 등 남쪽으로 방향을 바꿨다는 사실을 알 수 있다는 점을 강조하고자 한다. 충청도 동학농민군의 전투능력은 대단했다. 그 때문에 격전이 벌어진 공주전투에서 일본군 서로군은 거듭거듭 구원을 요청했음에도 불구하고 미나미 소좌가 이끄는 중로군의 지원 없이 고립된 채 전투를 벌였던 것이다.

조선 인천에 있던 병참사령부는 인천에서 황해도 어은동(漁隱洞)으로 북상했기 때문에 동학농민군 토벌대에 대한 지휘는 인천에 남아있던 사령관이 하였는데 그 진중일지(「남부병참감부일지」)에도 다음과 같이 동학농민군과의 전황이 기록되어 있다. 그 내용은 위에 인용한 미나미 소좌의 본부중대 작전전개를 보면 아주 잘 이해 할 수 있다. 「남부병참감부일지」의 전황도 발췌하여 소개한다.

메이지 27년(1894) 11월, 12월 「남부병참감부일지」

(방위성 방위연구소 도서관 소장, 분류 : 병참부 일청전역 진중일지, M 27-31, 176)

11월 26일 인천 이토(伊藤) 중좌로부터 전보

후비 제19대대는 23일에 문의의 동학당을 격퇴. 문의서방 약 20리에 있는 근거지 자저(紫沮)를 공격, 사자(死者) 7명, 생포 7명 등. 자저의 동학당은 1만 3-4천 정도. 공관(公關) 부근에도 2-3만 집합. 중국병 450명 있다고 함.

중로대(中路隊)는 공주에서 서로대와 합류예정.(실제 중로대는 문의에서 동학당 수 만과의 전투 때문에 합류를 중지하고 문의로 퇴각, 옥천과 금산 방면으로 진로를 바꾼다.)

11월 28일 인천 이토 중좌로부터 전보

홍주(洪州)에 있는 아카마츠(赤松) 소위의 보고에 의하면, 동학당이 대단히 창궐하여 일본군이 위태롭다고 하였기에, 이노우에 공사로부터 응원병 파견에 관한 협의가 있었음. 용산 수비대의 2개 소대와 인천 수비병 1개 소대를 1개 중대로 편성하여 응원병 파견함.

11월 29일 인천 이토 중좌로부터 전보

지난 21일 여미(余美)와 해미(海美)에서 승전곡(勝戰谷) 협곡을 지키는 동학당 4-5백을 물리치고 여미고지를 점령함. 그러나 동학당은 3만여명 이나 되어 사방의 고지를 점령하고 사력을 다해 방어함. 일본군은 홍주로 퇴각.

11월 31일 인천 이토 중좌로부터 전보

공주에 있는 서로대의 모리오 대위로부터 ‘적의 병력 강대하니 탄약을 보내 달라’는 요청이 옴. 탄약은 지금 배로 송부함. 스나이더총 탄환 10만발을 시모노세키(下關)

수포창(首砲廠)에 청구함.

12월 1일 인천 이토 중좌로부터 전보

11월 28일에 문의의 후비 제 19대대장으로부터 보고, 27일에 중로대와 합류하여 공주 전면(全面)의 동학농민군을 포위하기 위해, 연기(燕崎)로 향함, 주안(周安) 부근에 농민군이 있어서 왼쪽 지대(支隊) 문의로 퇴각했기 때문에 본대 역시 문의로 퇴각함. 옥천지방의 농민군을 초멸한 뒤 공주지방 농민군 초멸에 임하기로 함. 서로대의 보고에 의하면 공주와 홍주지방의 수만 농민군의 기세가 여전하여 창궐하고 있음.

12월 2일 대구 이즈노(伊津野) 소좌로부터 전보

황간(黃澗) 금산 지방에 동학농민군 집합해 있다는 보고가 있었음. 조선 군대가 황간과 무주 지방에서 해당 감사에게 속속 보고함. 동학농민군 대거 대구를 습격하려고 하는 상황이 되어 대구가 위협하므로 부산에서 군대를 파견했다.

부산 이마바시(今橋) 소좌로부터 전보

대구로부터 동학농민군이 대구를 포위하기 위해 습격하려 한다는 보고가 있어 1개 분대를 대구로 파견함. 아스카이(飛鳥井) 소좌는 동학농민군이 병참선 동쪽으로 도망가지 않도록 하라고 명령했다. 19대대는 아직 낙동(洛東)에 도착하지 아니함.

11월 29일 동학농민군 수 만명이 홍주를 습격하여 일본군과 조선군 약 2천 명이 홍주에서 농민군을 격퇴, 농민군 수천 명이 살상.

12월 8일 인천 이토 중좌로부터 전보

인천에서 파견된 응원 중대는 3일 오후에 홍주에 도착함. 아카마츠 소위가 이끄는 중대는 4일 출발함. 공주의 서로 중대는 지대(支隊)와의 합류를 기다려 경천(敬天) 부근의 동학농민군과 전투를 벌이려 하고 있음.

인천 이토중좌로부터 전보

동학당 토벌대의 진퇴에 대해 이노우에 공사와 면담할 필요가 있어서 서울로 가는 것에 대한 허가를 요청함.

인천 이토중좌에게 보낸 전보

일본군 제 1군 참모장으로부터 이토 중좌에게 서울행을 인가함. 안보(安保)에서 인천 사이에 후비 19대대의 2개 중대를 배치하고, 1개 중대를 유동(遊動) 예비대로 하여, 병참부원을 다른 데 전용할 것을 희망함.

12월 11일 인천 이토중좌로부터 전보

후비 제 19대대의 동로(東路) 중대는 가흥(可興)에서 영춘(永春)으로 진행하여 남진하지 않고 있음. 중로와 서로 중대는 공주 부근에서 머물며 전진을 주저하여 민활한 운동을 하지 못하고 있음. 이노우에 공사와 협의하여 과감히 전진하여 전라도 서남쪽으

로(동학농민군을 - 주) 내몰아 토벌할 것. 이 내용은 대본영 가와카미 중장에게 이미 보고완료.

각 병참사령관에 대한 명령 훈령

(동학농민군) 토벌의 공이 드러나지 않는 병참수비대를 수비병과 오로지 토벌을 전담하는 유동 예비대로 나눌 것. 수비병도 수비에 지장이 없는 한 토벌에 임할 것.(토벌병을 증강한다.)

훈령 제 3조

동학당 토벌에 즈음하여 분주한 명령으로 일본군을 피곤하게 해서는 안된다. 목하의 상황 “(동학농민군은) 조금 유력한 군대와 조우할 때는 잠복하여 그 소재를 숨기며, 군대가 그 땅을 떠나면 따라서 다시 일어난다. 그런데 그 일어나는 바와 그 이름은 있어도 그 실(實)이 없다. 토벌할 때는 그 실을 잘 찾아내서 그 실을 공격하지 않으면 안된다. 이 점을 깊이 명심하도록 하라.”

「동학당 정토경력서」에 근거하여 미나미(南) 소좌의 「동학당정토약기」를 읽으면, 충청도 산악부를 전전하며 싸운 본부중대가 충청도 산악 지대에서 험로에 고생을 하면서 참담한 행군을 강요당하고 있었음을 알 수 있다. 문의에서 공주를 향해 용포촌(龍浦村)으로 가는 길, 옥천에서 금산으로의 직진로, 진산에서 연산으로 가는 길, 이들은 모두 산맥을 넘는 길로써 일본군은 무릎까지 진흙에 빠지는 산길로 빠져들게 되었던 것이다. 충청도 동학농민군은 산악을 활용한 게릴라전을 벌였다.

다음으로 동학농민군과의 전투의 최종국면, 나주부(羅州府)를 탄압부대 근거지로 한 섬멸전 전개 국면에 대해 미나미 소좌의 「동학당정토경력서」 기술이 일변(一變)하고 있는 사실에 대해 설명하고자 한다.

1895년에 탄압부대가 나주성에 입성한 뒤 「동학당 정토경력서」에 의하면, 미나미 고시로의 ‘토벌 명령’ 또는 ‘초토 명령’이 난발되었던 사실을 알 수 있다. 1월 5일부터 2월 21일까지를 발췌하여 인용한다.

미나미 소좌 「동학당 정토경력서」 발췌

- (1월 5일) 동 5일 나주성 도착 사영(舍營), 이 날 영암, 강진, 장흥, 보성, 능주 각지에서 적도(농민군) 발호하여 인민을 살해할 뿐만 아니라, 장흥부사를 총살했다는 소식이 날아듦. 그들을 토멸하기 위한 부서(部署)를 정함.
- (1월 6일) 동 6일 이시쿠로(石熙) 대위에게 교도중대의 2개 소대를 배속시켜 장흥방면으로 가서 적도 초멸에 종사하도록 함.
- (동일) 동 지대(스즈키=鈴木 특무지대)에게 해안에 있는 적도 초멸에 착수하게 하였으며 그 지대 유진(留陣)하도록 명령함
- (1월 9일) 인천 이토 사령관에게 장흥, 해남의 잔적 초멸을 위해 지대 파견하여 거괴등을 포박했다는 내용과 기타 적정에 관한 전보를 발함.
- (1월 11일) 이시쿠로 지대에게 해남의 적도가 도주하니 시라키(白木) 지대를 지휘하여 적도를 초멸하도록 명령을 하달함.
- (1월 13일) 마츠키 지대에게 해남지방의 잔적을 초멸하도록, 이시쿠로 지대, 사라키 지대, _____노 지대는 장흥 방면의 잔적을 초멸하고 있다는 내용 및 급양상의 문제에 관한 명령을 내림.
- (동일) 통위영병 대대장에게 용당(龍堂)을 거쳐 해남에 도착하여 각지에서 도착하는 제(諸) 지대와 합류하여 적도 초멸하도록 하는 내용의 명령을 내림.
- (1월 14일) 인천 이토 사령관에게 부산에서 순천으로 파견한 중대와 협력하여 적도 토멸하고 있는 중이라는 내용의 전보를 발함.
- (1월 15일) 시라키 지대에게 해남에 도착하여 마츠키 지대와 함께 잔적 초멸하도록 명령을 내림. 마츠키 지대에게 해남에서 시라키 지대와 함께 잔적 초멸하도록 명령을 내림.
- (1월 19일) 츠쿠바(筑波) 함장 해군대좌 쿠로오카 타테와키(黒岡帶刀)에게 연해와 진도, 제주도 등의 적도 초멸 방법에 관한 통보를 함. 마츠키 지대에게 우수영 부근의 적도 초멸 방법에 관한 명령을 내림.
- (1월 22일) 마츠키 지대에게 진도 부근의 잔적을 조속히 초멸하도록 명령을 내림.
- (1월 25일) 부산 수비대 대장 육군소좌 이마바시 시리카츠(今橋知勝)에게 스즈키(鈴木) 대위에 대한 연락 및 적도 초멸 방법을 통보함.
- (2월 15일) 이시쿠로 대위에게 대둔산의 적도 초멸하도록 명령을 내림.
- (2월 18일) 미즈하라(水原) 지대에게 제 3중대의 진로에 있는 대둔산 적도 초멸 방법에 대해 명령을 내림.
- (2월 21일) 이시쿠로 대위로부터 대둔산의 적도 초멸했다는 보고를 받음.
- (3월 3일) 한성에서 국왕 폐하를 알현하여 동학당 토멸 상황을 보고하고 술과 안주를 하사받음.

미나미 소좌가 잇따라 ‘토멸’, ‘초멸’ 명령을 내렸다는 사실이 명백하다. 공공연한 작전으로써 토멸, 즉 섬멸(전원살육)이 자행되었다. 이 같은 작전 최종 국면의 공공연한 섬멸작전이 갖는 의미에 대해서 설명하기로 한다.

4. 『카가와신보』의 섬멸작전 비판과 그 필자

『카가와신보』는 동학농민군 섬멸작전을 정면에서 비판했다. 그 기사에 대해 설명하고자 한다. 또 카가와현의 石井雍大씨가 이 비판 기사를 집필한 필자와 그 경력에 대해 밝혀냈다. 이시이(石井)씨에 의하면, 필자는 坂齊道一이며, 『카가와신보』는 몇 번이나 발행 정지 처분을 받았다. 자세히 읽어보면, 연재 사실도 조선에 대한 편견을 가지고 있다. 다른 한편으로 당시의 일본의 논조와 정부의 검열도 함께 고려할 필요가 있다. 관련 자료를 배포하여 이 점에 대해 소개하기로 한다.

『카가와신보』와 사실, 『조선의 개혁』에서 발췌

조선이라는 하나의 사회에 대해 생각해 보면, 비교상 다른 동류(同類)보다도 기력있는 무리라고 할 수 있으며, 또한 다른 동류보다도 견식있는 무리라고 할 수 있다. (중략) 우리들은 반대로 그들을 관찰함에 있어 동학당 중에서 적어도 그 영수되는 자들은 조선 국민중에서 선각자라고 할 수 있다고 믿는다.

동학당을 토멸하는 사이에 몇 백 몇 천의 조선국 사람을 죽이지 않으면 안 되는가의 문제는 정치가가 가장 주의해야 할 점이다. 오늘까지 이미 몇 백의 동도(東徒)를 죽였으나 아직 털끝만한 효과도 없다. 금후 다시 과연 몇 천명을 죽이지 않으면 안 될 것인가. 상상해보라. 강서(江西) 지방의 동학당만도 그 수가 백만 이상이라고 하지 않는가.

어찌할 것인가. 원한을 후세에 남기지 않을 수 없게 되었으니, 백 인이 죽으면 천 인이 원한을 품을 것이며, 천 인이 죽으면 만 인이 원한을 품을 것이다. 오호! 어찌할 것인가. 영원히 우리의 덕(德)을 뿌리는데 도움이 되지 않을 것이다.

동학당이 평정(平定)에 돌아갔다 해도 일반 양민들의 귀복(歸復)은 어려울 것이니 어찌할 것인가. 이노우에(井上) 공사는 깊이 헤아리지 않으면 안 될 것이다. 식자(識者)들은 깊이 살피지 않으면 안 될 것이다.

(2010년 10월 2일 박맹수 번역)

토론문

토론 : 박맹수(원광대)

討論文: 日本の兩先生님 發表에 대하여

박맹수(원광대)

1. 본격적인 토론에 들어가기에 앞서서 '동학농민혁명'(갑오농민전쟁) 또는 한국근대사에 관한 두 분 선생님의 연구성과 개관이 필요하다고 생각한다. 한국 연구자 및 청중들의 이해를 돕기 위해 먼저 나카츠카 아키라(中塚明) 선생님의 연구 중에서 단행본만을 열거하면 다음과 같다.

日清戰爭の研究(1968)
近代日本と朝鮮(1969初版、1994三版)
新訂 蹇蹇錄(1983初版、2007ワイド版2刷)
蹇蹇錄の世界(1992)
近代日本の朝鮮認識(1993)
歴史の偽造をただす(1997)
歴史家の仕事(2000)
これだけは知っておきたい 日本と韓國朝鮮の歴史(2002)
現代日本の歴史認識(2007)
司馬遼太郎の歴史觀(2009)
「坂の上の雲」の歴史認識を問う(共著、2010)

다음으로, 이노우에 카츠오(井上勝生) 선생님의 연구 성과를 열거한다. 이노우에 선생님의 경우는 대부분이 연구 논문이 중심이 되어 있는 것이 특징이다.

東學黨農民軍指導者と推定される頭骨について(1997)
佐藤昌介「植民論」講義ノート-植民學と札幌農學校(1998)
甲午農民戰爭と日本軍(1999)
日本軍による最初の東アジア民衆虐殺(2001)
第2次東學農民戰爭の日本軍、農民大虐殺-兵士の郷土、四國各地を訪ねて(2004)
佐藤昌介「植民論」初期講義ノート(上)-札幌農學校と植民學(2)-(2005)
佐藤昌介「植民論」初期講義ノート(中)-札幌農學校と植民學(3)-(2005)
札幌農學校と植民學の誕生-佐藤昌介を中心に-(2006)
東學農民軍を鎮壓した日本軍隊を探して-遺跡と史料の發見-(2008, 忠北大で發表)

札幌農學校植民學と有島武郎(2009)

忠清道東學農民軍と彈壓日本軍について(2009, 忠北の報恩で發表)

東學農民軍包圍殲滅作戰と日本政府、大本營(2010)

2. 지금도 일본사회에서는 1894-1895년의 역사와 관련한 연구에서는 淸日戰爭 연구가 주류를 이루고 있으며, 청일전쟁과 함께 일어났던 東學農民革命과 그 思想的, 組織的 기반인 東學에 대한 연구는 微弱하다. 이 같은 일본 사회 속에서 나카츠카 교수님은 이미 1960년대부터 일본근대사에 있어 '조선문제'가 차지하는 역사적 중요성'을 인식하시어, 청일전쟁을 전후한 시기의 한일관계의 역사적 진실을 규명하는데 진력해 오셨다. 그 같은 실증적 연구성과가 바로 위에 열거한 저서들이다.

나카츠카 교수님의 연구 성과 중에서도 가장 白眉로 꼽히는 업적은 아마도 1997년에 간행하신『역사의 위조를 밝힌다(歴史の偽造をただす)』일 것이다. 나카츠카 교수님께서 이 책에서 1894년 7월 23일(음력 6월 21일) 未明에 일본군이 불법적으로 조선왕궁=경복궁을 점령한 사건에 관한 1차 사료를 후쿠시마현(福島縣) 현립도서관 사토문고(佐藤文庫)에서 찾아내어, 왕궁점령사건이 사건 당초부터 일본정부 및 군부(대본영)에 의해 치밀하고 조직적으로 왜곡되었음을 밝혀냈다. 뿐만 아니라, 나카츠카 교수님께서 이 같은 일본의 역사왜곡이 일시적, 단발적인 것이 아니라, 1875년 운양호사건부터 1894년 일본군의 왕궁점령사건과 러일전쟁을 거쳐, 천황제 지배하에 있었던 제국주의 일본이 제 2 차 대전에서 패전하기까지 지속되었음을 논증하였다.

한 걸음 더 나아가 나카츠카 교수님께서 근대일본의 역사왜곡을 규명하는데 그치지 아니하고, 종래 대부분의 일본사(日本史) 및 한일관계사(韓日關係史) 연구자들이 경시하거나 무시해 왔던 '조선근대사의 主體性(自主性)'에 주목함으로써 제국주의 일본의 침략에 맞서 강력한 저항을 펼쳤던 조선 민중들의 항일투쟁에 대해 높은 평가를 내리고 있다.

그 뿐만이 아니다. 나카츠카 교수님께서 “역사는 발로 쓰는 것”이라는 신념하에 팔순을 바라보시는 연세임에도 역사의 현장을 직접 답사하여 ‘현장 속에서 살아 숨 쉬는 살아있는 역사’를 대중에게 전달하기 위해 노력하고 계신 줄로 안다. 예를 들면, 나카츠카 교수님은 2002년에 한국의 동학농민혁명 전적지 답사를 시작하신 이래, 2006년부터 금년까지 매년 한국의 동학전적지 답사를 계속하고 계신다.

필자는 이상과 같은 나카츠카 교수님의 1차 사료에 바탕한 연구, 한일관계를 연구함에 있어 일본 연구자임에도 불구하고 조선의 주체성에 주목하신 연구, 그리고 현장주의 연구 태도에 대해 역사 연구자의 한 사람으로써 커다란 가르침을 받고 있는 처지이다. 따라서 선생님의 발표에 대해 토론한다는 것은 별로 의미가 없다고 본다.

다만, 한 가지 말씀드리고 싶은 점은 1960년대부터 '조선문제'에 관심을 두시고 연구해

오신 만큼, 60년대 한국을 바라보시던 관점과 현재의 한국을 바라보시는 관점에 어떤 ‘변화’가 있었는지. 관점의 ‘변화’가 있었다면 그 ‘변화’의 계기는 무엇인지에 대해 여쭙고 싶다. 그리고 또 하나는 한국의 역사 연구자들과 교류를 해 오시면서 느끼셨던 문제점을 솔직하게 말씀해 주신다면, 한국의 역사 연구자들에게 귀감이 되지 않겠는가 하는 생각이다.

3. 이노우에 교수님은 현재 일본 내에서 활약하고 계시는 몇 안 되는 ‘동학농민혁명’ 연구자 가운데 한 분이다. 교수님께서 진행하고 있는 연구는 일본측 연구자로서는 가장 꺼려할 수도 있는 ‘일본군에 의한 동학농민군 학살’에 관한 역사적 진실 규명에 초점을 두고 계신다.(위의 연구성과 참조)

周知하듯이, 1894년 동학농민혁명은 일본군의 개입으로 실패로 돌아갔다. 단순히 실패로 귀결된 것이 아니라, 일본군의 ‘불법적 학살’로 인해 최소 3만 명에서 최대 5만 명에 이르는 농민군이 희생당하는 동아시아 최초의 ‘제노사이드’로 인해 갑오년의 조선 땅이 전체가 핏빛으로 물들었었다. 그럼에도 불구하고 지금까지 일본군에 의한 농민군 ‘불법’ 학살 문제는 국내외 연구자들이 전혀 주목하지 못했다. 사각지대에 놓여 있던 농민군 학살 문제를 지속적인 실증적 연구를 통해 쟁점화하신 이노우에 교수님의 노고에 우선 먼저 경의를 표한다.

이노우에 교수님께서 일본군에 의한 농민군 학살 문제에 관심을 갖게 된 결정적 계기는 1995년 7월 25일, 홋카이도대학 문학부 인류학교실 표본고에서 방치된 채로 발견된 전라남도 진도 출신 농민군 지도자 유골(=두개골)이 발견된 사건이었다. 교수님은 유골 발견 직후 홋카이도대학 측의 진상조사위원회 위원으로 선임되어 농민군 지도자 유골이 왜 홋카이도대학에 있게 되었는지, 농민군 지도자 유골 표면에 쓰여 있는 사토 마사지로(佐藤政次郎)라는 인물이 누구인지를 조사하였으며, 이 과정에서 동학농민혁명 당시 일본군이 전라남도 진도까지 남하하여 농민군을 학살했다는 사실을 규명해 내었던 것이다. 이 과정에서 이노우에 교수님은 1997년 이후 지금까지 한국 측 연구자와의 공동조사 및 공동연구, 학문적 교류 등을 지속함으로써 연구 성과의 극대화에 성공하셨다고 알고 있다.

이노우에 교수님께도 몇 가지 질문을 드리고자 한다. 첫째, 질문은 원래 전공이셨던 ‘메이지유신’에서 ‘동학농민혁명’ 연구로 눈을 돌리신 뒤에 무엇이 달라지셨는지, 즉 역사연구자로서 어떤 ‘관점의 변화’나 ‘시야의 확대’가 있었는지 말씀해 주시면 한다. 둘째, 일본군에 의한 농민군 학살에 관한 이노우에 교수님의 연구가 일본사 연구자 또는 일본 내 지식인 사회에서 어떻게 평가되고 있는지, 그리고 매스컴이나 일반 시민들의 반응은 어떠한지에 대해 말씀해 주셨으면 한다. 셋째, 최근 한국에서도 한국방송(KBS)에서도 방영(2010년 8월 11일, 22시 방영)한 바 있는 농민군 진압부대 후비보병 제 19대대 대대장

미나미 고시로(南小四郎)가 남긴 東學文書(현재 山口縣文書館 所藏) 발견 경위에 대해 소개해 주셨으면 한다.

(2010년 10월 14일)

第3部

5. 중국의 청사공정과 동학농민전쟁의 신사료에 관하여
- 新編《李鴻章全集》과 《袁世凱全集》을 중심으로
王曉秋(북경대)
6. 한 청국장병의 조선출병기록 : 십사성의 <동정일기>
金 俊(청화대)

第3部

5. 중국의 청사공정과 동학농민전쟁의 신사료에 관하여
- 新編《李鴻章全集》과 《袁世凱全集》을 중심으로
王曉秋(북경대)

6. 한 청국장병의 조선출병기록 : 섭사성의 <동정일기>
金 俊(청화대)

05

1. 중국의 청사공정과 동학농민전쟁의 신사료에 관하여

— 新編《李鴻章全集》과 《袁世凱全集》을 중심으로

王曉秋(북경대)

中国的清史工程与关于朝鲜东学农民革命的新史料

— 以新编《李鸿章全集》与《袁世凯全集》为中心

王晓秋(北京大学)

首先要感谢韩国主办方的盛情邀请，很荣幸出席这次盛会，回想起十年前，我也曾经应邀参加过在全州举行的东学农民革命研讨会，记得那次会上还模拟了农民军入城式及火炬游行，非常有趣，至今尚记忆犹新。我曾在那次会上发表了关于中国太平天国农民革命与韩国东学农民革命比较研究的论文。

今天我想报告的是围绕这次大会的主题，利用中国国家清史工程最新组织编纂，刚出版的《李鸿章全集》和将要出版的《袁世凯全集》中的有关新史料，研究当年中国清政府主持对朝鲜和日本外交、军事事务的北洋大臣李鸿章，以及清政府派驻朝鲜总理交涉通商事务的道台袁世凯如何看待朝鲜东学农民革命。

首先要简单介绍一下中国的国家清史工程，这是中国在2002年启动的一项新世纪最大的文化学术工程。为此专门成立了国家清史编纂委员会，我也是委员之一。为什么要叫作“工程”呢？因为不仅是要编写一部新的《清史》，而且涵盖整理清代档案、文献、图片和网络等各方面的工作，是一个文化学术系统工程。它主要包括三方面工程，第一是主体工程，即要编一部高水平的新《清史》，预计字数3500万字，共96卷，包括通纪、典志、史表、传记、图录五个部分。第二是基础工程，包括清代文献、档案、外文史料、研究著作的整理、编译及出版等。现已整理清代各种档案、文集、诗集、日记、笔记、谱牒、满文、蒙文与外文史料等约10亿多字。已出版的和将要出版的如《清代军机处电报档汇编》40册、《李鸿章全集》39册、《清代稿抄本》100册、《清代诗文集汇编》800册等。还翻译出版了一些外国关于中国清史的档案、文献和研究著作。这些工作不仅为编纂清史提供了丰富史料，更重要的还是对清代历史文化遗产的整理、保存、传承、利用作出了贡献。第三，还有辅助工程，即网络、图书馆的建设等。参与清史工程的有中国大陆和港、澳、台的上千名清史和有关方面专家学者。主体工程现已大部分完成初稿，正在进入修改、统稿阶段，争取到2012年即清王朝灭亡100周年之际，大体完成《清史》全书。

下面再介绍一下作清史工程文献丛刊成果的新编《李鸿章全集》和《袁世凯全集》及其中有关东学农民革命的史料。

李鸿章是当时中国清政府掌握外交、军事大权的重要人物。他官居北洋大臣、直隶总督，实际上也是清政府对日本和朝鲜外交、军事的决策者和北洋海、陆军的最高统帅。因此他对朝鲜局势包括东学农民战争的情报、信息及其认识、判断，关系到当时中国清政府对朝鲜和日本的外交、军事的决策和行动。

以往关于李鸿章的史料，都是根据其幕僚吴汝纶主编的《李文忠公全书》（又称《李文忠公全集》），该全书共165卷，近700万字。最早是1905年的金陵刻本，流行较广的是1921年上海商务印书馆的影印本，以后出版的各种名目《李鸿章全集》基本上都是该书的翻刻和影印本。实际上该书未收的李鸿章奏议、电报、诗文、书信还有不少。这次国家清史工程组织新编的《李鸿章全集》，由清史编委会主任戴逸教授和上海图书馆馆长顾廷龙先生主编，花了14年时间，收集了历史档案馆、各地图书馆和民间的各种李鸿章已刊未刊稿。2008年由安徽教育出版社出版，全书39册，共2800万字，比原来的《李文忠公全书》字数多出4倍。就电报而言，《李文忠公全书》收电报6000余件，而新编《李鸿章全集》根据中国第一历史档案馆的收藏的宫中电报挡和上海图书馆收藏的李氏电报底稿等共收14000多件，增加了一倍多。甲午前后关于朝鲜局势的许多电报，是原来《李文忠公全书》中未收的。

本人为撰写本次大会论文，查阅了新编《李鸿章全集》甲午前后有关朝鲜局势、东学起义和中日关系的全部电报，并和《李文忠公全书》进行了比较，着重分析研究李鸿章对东学农民革命的认识和态度。通过比较、分析、研究发现：1、这方面的电报一半以上是《李文忠公全书》中未收的，可作为新史料利用。2、反映当时李鸿章对朝鲜局势非常关心，有时一天甚至有好几封来往电报。3、李鸿章对朝鲜局势、东学起义的情报、信息来源，主要是由正在朝鲜的袁世凯提供的，也有少数是他派往朝鲜的淮军和北洋海军将领提供的。4、李鸿章根据这些情报，对朝鲜局势作出了自己的认识、判断和外交、军事行动的决策。

下面举一些重要电报为例(日期均为阴历)。如李鸿章光绪十九年(1893年)二月二十日寄译署(即总理衙门)的电报称：“袁世凯电：东学邪教联名诉请韩王尽逐洋人，……世凯迭劝韩廷严缉惩办，终畏怯不敢。”“查西人既待华弹压自属好事，乞即电飭水师，迅速两船来仁，以尽弹压责。”李鸿章根据袁世凯的情报和建议，命令北洋舰队“靖远”、“来远”两艘军舰驶赴仁川，“会商该道(指袁世凯)，相机巡防、弹压。仍电袁道，切嘱韩廷严缉惩办。”¹⁾这是李鸿章决定派兵赴朝的决策经过。

三月二十六日寄译署电报，李鸿章根据袁世凯的报告对东学起义作出判断，“袁世凯电：顷朴齐纯来称，邪匪数万终必生事，断非谗说所能解。汉京士民多怨政府，思乱者十居八九。该匪亦多伏京内，倘至犯京，远近响应。该匪旗号有‘讨倭’、‘斥夷’等字，如害及洋人，外侮乘之，将何以支？”²⁾以后袁世凯陆续报告，东学道“已将各旗卷收，各山口守望匪徒大半撤去，似可解散”，“雨中露处，数万人必难久支”，“教匪老弱多去，尚未全散”，“教匪仍未散，今王又下敕旨反复申谕，甚严切，匪当惊悚。”³⁾

光绪二十年即1894年，东学农民战争烽火燃起，尤其5、6月间，农民军发展迅速，声势浩大，袁世凯与李鸿章之间电报频繁，有时一天来往好几封。李鸿章十分关心朝鲜局势，最担心的是日本趁火打劫，制造事端。这一时期新编《李鸿章全集》中的许多电报都是《李文忠

1) 《李鸿章全集》第23册，第345页，安徽教育出版社，2008年，集中电报注明日期均为阴历。

2) 《李鸿章全集》第23册，第356页。

3) 《李鸿章全集》第23册，第364页。

公全书》中未收的，值得认真深入研究。如光绪二十年四月初四寄译署电谓：“接袁道电：韩全罗道泰仁县有东学党数千聚众煽乱，现派洪启熏带兵往捕，求调驻防仁川之‘平远’兵船分载韩兵赴格浦海口登岸，聊助声势。袁并派武弁带丁役随往照料等语。已电海军提督照办。”⁴⁾四月初八袁世凯又报告：“平远初五到群山卸兵，韩乱党闻兵到即瓦解。”⁵⁾可是四月二十一日总理衙门从总税务司英国人赫德那里得到消息“韩兵大败，王欲自将”，还听说日本“亦欲派兵前往”。便询问李鸿章“赫言与袁道电互异，究竟情形如何？倭说确否？并查示。”⁶⁾李鸿章根据袁世凯最新报告回答：“舟次迭接袁道电：全罗道匪徒党势猖獗，韩兵辄溃败，又添调江华枪炮队四百余往剿云。韩王未请我派兵援助，倭亦未闻派兵，似未便轻动，应俟续信如何再酌。已速拨毛瑟精枪千枝并子药派轮船解往，以应急需。”⁷⁾第二天他又答复总理衙门：“袁道电复：遵查江华兵尚未接仗，王无自将意……未闻日有派兵说云。”⁸⁾他对日本的动向仍缺乏警惕。

四月二十八日寄总理衙门电，告知朝鲜局势发生了重大变化：“袁道屡电韩兵败，械被夺，韩各军均破胆。”朝鲜政府已“议求华遣兵代剿”。袁世凯认为必须由韩政府正式具文请求。至于日本的动向，他认为“倭如多事，似不过借保护使馆为名，调兵百余名来汉”而已，而且日本驻朝使馆翻译郑永邦“以其使令来询匪情”，也鼓励中国出兵，表示“我政府必无他意”。因此李鸿章对日本出兵严重性也估计不足，决定“现候朝鲜政府文转到，拟派叶提督选带精队千数百乘商轮速往，并派海军四舰赴仁川、釜山各口摄护，一面电知汪使（中国驻日公使汪凤藻）知照倭外部，以符前约”。⁹⁾五月初一袁世凯电报转来朝鲜政府正式请兵文，李鸿章即下令丁汝昌派北洋海军济远、扬威二舰赴仁川、汉城护商，并调直隶提督叶志超率同太原镇总兵聂士成，选派淮军劲旅1500名，分坐招商局轮船先后进发。“一面电驻日本汪使知照日外部，以符前约。”¹⁰⁾李还叮嘱叶志超“诸事谨慎，细心为要”。五月初三，李鸿章还接到朝廷圣旨“此次朝鲜乱匪聚党甚众，中朝派兵助剿，地势、敌情均非素习，必须谋出万全，务操必胜之势，不可意存轻视，稍涉疏虞”。如果兵力不足，尚可增兵。¹¹⁾

五月初五，致叶志超电称，“袁道电：刻见前敌探电，匪闻大兵将至，实甚惊怯，逃散甚多，兵民均气振，韩兵又据高岸，以开花炮攻击，死者姑不知数。”袁建议如果韩军收复全州，匪逃散，中国军队“似即可撤兵，庶得体而免生枝节”。李下令“望届时妥酌，勿与韩兵争功。”¹²⁾实际上韩将谎报军情，夸大战果。初八叶志超抵朝，韩官来见，“询知贼势如旧”。而

4) 《李鸿章全集》第24册，第35页。

5) 《李鸿章全集》第24册，第36页。

6) 《李鸿章全集》第24册，第39页。

7) 《李鸿章全集》第24册，第39页。

8) 《李鸿章全集》第24册，第40页。

9) 《李鸿章全集》第24册，第42页。

10) 《李鸿章全集》第24册，第44页。

11) 《李鸿章全集》第24册，第46页。

12) 《李鸿章全集》第24册，第49页。

日本却乘机出兵，袁世凯尚不警惕，还报告李鸿章“遵告韩人，倭与华争体面，兵来非战，切毋惊忧。……速设法除全匪，全复华兵去，倭自息”。¹³⁾后来日本增兵越来越多，李鸿章才电致驻日汪公使，“查汉城无事，全州已复，已属外署诘问，并请各国员查诘。日调兵过多，自非意在护馆。究属何意？望向外务询阻。”¹⁴⁾五月初九袁世凯来电揭穿韩官军虚报战功：“韩兵初三之捷，因据高施炮，匪以千余人仰攻，欲夺炮，被击败伤。洪启熏即报大捷，夸张甚大。实未与匪大队交战。……韩王甚信之，终必大误。”¹⁵⁾

五月初十袁世凯报告已与日本公使大鸟约定，“已到汉之日兵暂驻即撤，续来者毋登岸，原船回倭，未发者即电阻云”。李鸿章便决定中国军队“勿再前进，如匪已散，应听韩军自办，我军即当陆续撤回，以免韩人疑怨，日人借口留兵”。¹⁶⁾又告叶志超，据袁世凯情报，“所探全州贼情与韩报大不符。韩人既不愿我进兵，徒费力不讨好。日人亦谓须待我撤兵彼才肯撤。是于中外大局有关，望加审慎，姑驻待为妥。”¹⁷⁾五月十一日命袁世凯，“大鸟既与汝约定，日兵究何时必撤？是否尽撤？须取伊信函或回文为据，以便派船往接大队，倘彼游移，或仍留兵若干，我亦应酌留若干。”¹⁸⁾并答复总理衙门，“韩军既分投捕剿，彼又函求我兵勿进，人地生疏，山径丛杂，若无向导，玉石难分，似难冒然深入。叶、聂仍驻牙山，候袁道与大鸟妥议撤法再行酌办。倘倭尚拟留兵，彼留若干我亦应留若干，与之相持。此时防倭较重于防匪也。”¹⁹⁾五月十四日驻日公使报告，“日廷疑贼猖獗，尚欲派兵会剿。”李鸿章急令袁世凯调查实情回报，“前询查贼情未复，现贼散何处？韩军追捕情形若何？是否能克期肃清，务派妥弁确探，详细电示。倭廷总疑贼未能平，兵不肯遽撤，此为紧要关键，勿任谎报。”²⁰⁾五月十五日，日军已大举出兵朝鲜调兵五千陆续到仁川登陆。叶志超要求率军赴汉城仁川，李鸿章仍命其“坚忍约束，以待后命”，“稍安勿躁”。并命丁汝昌添派北洋海军数舰速赴仁川，“壮我军胆”，“妥慎防护”。袁世凯这时也来电说大鸟说话不算数，日军已大批下船登陆，在此谈商无济事，可否乞电汪星使在倭商办。”²¹⁾

李鸿章对朝鲜局势情报不灵，判断不准，既不清楚东学起义军实况，又未看准日军意图和野心，决策摇摆不定。他给叶志超电报仍说：“倭廷欲以重兵协议韩善后，并非与我图战，固不必预播赴汉先声。据刘弁探，全贼遁扶安、古阜等处，韩廷谬谓贼已平，无怪倭人不信。仍令确探贼聚何处，相机办理。但前途生疏，粮运不继，亦未勿言进剿，且恐剿无可剿。”²²⁾这时他才知道日本以前的花言巧语不足信，“前言俱食，后言何可信？”²³⁾五月十六日叶志超

13) 《李鸿章全集》第24册，第54页。

14) 《李鸿章全集》第24册，第56页。

15) 《李鸿章全集》第24册，第56页。

16) 《李鸿章全集》第24册，第57页。

17) 《李鸿章全集》第24册，第57页。

18) 《李鸿章全集》第24册，第61页。

19) 《李鸿章全集》第24册，第61页。

20) 《李鸿章全集》第24册，第65页。

21) 《李鸿章全集》第24册，第66页。

22) 《李鸿章全集》第24册，第68页。

报告探听到东学农民军情报：“东学教匪各持枪，铁刀，自金堤、扶安、古阜等处，分作二股，或四五百，或六七百名，有朴茂长界，有奔高敞界，沿路放枪挥刀，阜守惊慌，不能御敌，郡邑悚惧，任贼横行。”“看此情形，韩将搜捕不力，可见我军若不进剿断难肃清。且恐倭兵乘机进剿。”²⁴⁾李鸿章遂命叶志超“如确，即派聂镇带数百人往还剿。”并指示“聂如往前追捕，向导最要，勿骚扰乱杀为嘱。”²⁵⁾五月十八日又指示袁世凯对于日方条件“原议华日同时撤最要，此外如有别项要求，任他多方恫喝，当据理驳辩，勿怖勿馁。”²⁶⁾五月十九日给总理衙门电报，“叶提督牙山电复：全匪探得伏莽尚多，朝廷讳疾忌医，阻我剿匪，冀弭倭衅。我顿兵十日，倭益恣横，可见倭兵进退不关剿匪与否。”给叶志超的电报同意“派哨官等速往全州西南探捕甚妥”。仍幻想“备倭一节，或无须动大兵，备而不发”。²⁷⁾

清政府总理衙门一方面情况不明，“韩自全城收复，败匪若干，究竟何往？迄无的信。”一方面判断决策有误，“宜饬袁世凯不必促倭退兵，惟在催韩剿匪，并饬叶、聂相机助剿，但能将贼事办有切实头绪，俾外人共见，彼时约倭同撤，当较顺手”。²⁸⁾五月二十二日李鸿章向总理衙门报告，接到探报“全贼逃后，沿途逃乱无依者多而且惨……现退居古阜老巢，绵延数县，或数百数十，聚散无常。”准备派聂镇带队往全州西南一带“妥为办理，以靖余孽。”但是李鸿章也承认：“惟查该匪系为贪虐官吏逼迫起事，此行拟抚多于剿，严办匪首，解散胁从，不敢喜功多杀。”²⁹⁾五月二十二日叶志超报告，“我军小分队无地方官向导，良莠难分，未敢深入。倘倭兵助剿，挑衅尤可虞。拟饬在全州暂驻，相机办理。”他建议“剿匪防倭须分缓急”，现在日本重兵压境，“事势实逼”，我方应“速发大兵，以弭大患”。李鸿章命令：“小队无向导即不必深入，暂驻全，相机妥办。日兵来牙窥探可置不理。彼断不能无故开战，切勿自我先挑衅。”再次强调“仍坚忍，勿张皇切要！”³⁰⁾李还斥责请战的北洋海军提督丁汝昌，“日虽添军，谣言四起，并未与我开衅，何必请战！”³¹⁾中国军队始终未与东学农民军直接交战，而日本军队已经露出凶相。就在李鸿章的妥协退让方针指导下，清军处于被动挨打态势，而日军却步步进逼，1894年7月23日日军用武力占领朝鲜王宫。7月25日，日军袭击北洋海军军舰及运兵船，然后向驻朝鲜牙山的清军发动进攻，终于挑起了甲午中日战争。

袁世凯是当时中国清政府委派驻扎朝鲜总理交涉通商事务的道台，可以说是清政府驻朝鲜的全权代表，与朝鲜国王、政府官员以及各国驻朝使节的交涉都是由袁世凯出面进行的。而北洋大臣李鸿章有关朝鲜局势的情报也主要来自袁的电报。袁世凯关于朝鲜局势的情报、认

23) 《李鸿章全集》第24册，第68页。

24) 《李鸿章全集》第24册，第69页。

25) 《李鸿章全集》第24册，第70页。

26) 《李鸿章全集》第24册，第73页。

27) 《李鸿章全集》第24册，第75页。

28) 《李鸿章全集》第24册，第76页。

29) 《李鸿章全集》第24册，第80页。

30) 《李鸿章全集》第24册，第82页。

31) 《李鸿章全集》第24册，第84页。

识和建议，直接影响或者左右了李鸿章与清政府对朝政策的决策，因此袁世凯的全集应该是中国有关东学农民战争最重要的史料之一。但以往没有袁世凯完整的全集，只有分散的《袁世凯奏议》、《袁世凯书牒》、《袁世凯家书》、《养寿园电稿》等集子。作为国家清史工程文献丛刊将要出版的《袁世凯全集》共有1300万字，是由骆宝善等学者花了十几年精力收集、整理的迄今为止袁世凯最详细、最完整的集子，目前尚在审订、校对、刊印过程中，尚未正式出版。本人征得编者同意，查阅了《袁世凯全集》清样本中有有关东学农民战争的全部史料，主要是电报和信函。虽然1894年的一部分电报与《李鸿章全集》收录的袁世凯来电差不多，但这是袁自己发的电稿，更为原始。值得注意的是1893年发给李鸿章的大量密电，也涉及东学农民革命，而《李鸿章全集》中未能收入，在此再作些介绍。（日期为阳历）

如1893年4月9日致北洋大臣李鸿章密电称：“再东学党前谣，今日聚众，经饬捕禁，多逃回乡，今尚静谧。”³²⁾4月13日致李鸿章密电，又报告“近日韩发捕缉禁，出晓谕，谣言渐息。或有下月初七聚众谣言，然凯见必无事。”4月17日又密电李鸿章：“顷闻韩已获教匪数名，讯供辞涉李夏应及王族数人云，似有人教之。”此处李夏应，疑指大院君。4月19日报告：“查近日韩人谣疑渐息，而洋人终于安静，倭人尤举止可疑，或将构衅生变。”5月初东学党人报恩集会后，局势紧张，韩王遣朴齐纯见袁世凯称“查东学党在报恩县聚众数万，约二十五日来汉攻掠，已派鱼允中充安抚使驰往谕解，求速调兵船及陆兵在马山浦停备，截其来路。”袁世凯答以“邪教乌合，料必自散。倘突聚乱，不及调兵，王可选付凯韩兵千名，以凯处半捕差丁分领，由凯亲率截剿，足可殄灭。如遽调兵，骇闻远近，必多骚谣，务须镇静。”袁世凯密报李鸿章：“查东学谣日间大作，韩廷风鹤皆惊，殊可虑。”1893年5月10日一天之内袁给李发了多次密电，报告：“报恩县境内有教匪二万七千余名，日夜聚诵咒法，称将讨倭举义，官吏谕解不听，亦无力禁捕。”“韩邪教初起，袁时劝韩廷，择吏善抚，捕治渠魁。韩始终疑怯，欲姑息免事，又不革贪政，至乡民相率从邪，积久愈重。人心久思乱，故远近骚动。倘再疑怯，殊难为计。”5月11日又连续发密电向李报告，报恩县东学道“约已聚三四万名，仍出榜招号，骚者甚众。该匪首列陈拥围，毫不畏官。似此，不速剪除，恐非韩人所能收拾。”5月12日报告，“韩士庶怨上切齿，多盼大乱。前迭劝韩速布善政，并拔贤才，以收人望，解匪心，终不听。今惟姑息疑怯，坐待变来。”以上报告一定程度反映了朝鲜东学农民革命爆发的原因和声势，以及袁世凯的认识和态度。

新编《袁世凯全集》还收了两封袁世凯给吴重熹的信，是以前从未发表过的新史料。也反映了他对当时朝鲜局势的看法。袁在信中说“春初，东学教匪扰后……所有教匪首日，亦已于夏秋间诛锄过半，内地稍觉安静。惟韩内政泄泄依然，而地方官吏，大率贪苛，不时仍有毆戕官吏各案件。韩廷徇庇情私，多未能持平妥办。近事若是，未免代切隐忧。兼之南道各产米之区，风雨为灾，收成甚歉，民食极艰。”另一封信也说“惟韩积习既深，骤难更革，度支不节，用人非才，取民不爱，江河日下，挽救殊难。”1894年5月东学农民军再起，袁世凯几

32)据骆宝善主编《袁世凯全集》清样本。因该书尚未出版，故以下引文不再加注。文中日期均为阳历。

乎每天都有几封电报向李鸿章报告，除《李鸿章全集》已收的电报外，《袁世凯全集》中还有一些李集未收的电报，对东学农民战争的实况有详细的描述和评论，也可作为研究东学农民战争史料之参考。如1894年5月12日致李鸿章的两封电报，前一封报告：“迭据南道电称，‘平远’初五到群山卸兵，韩乱党闻兵到即瓦解。经士兵团练截剿，毙十数人，生擒百余人，仍有数千人在扶安、古阜一带，据山自保。兵团姑不得进云。”他认为“饥寇负隅，似亦必不能久支。”后一封却报告，“顷徐都司自全州电称，古阜县之道桥山下，驻有全州兵团一千三百人，昨晚为乱党自山上突出袭击，兵团败退二十里，杀伤甚多。”5月13日，他又连发几封电报给李鸿章，提供东学农民军战况。一封说“刻见全州来电：昨夜乱党突出井邑县，劫放罪囚，抢掠军器，库储一空，官吏逃去，衙署、民房均被拆破，黎明回古阜云。再，忠清道属怀德、沃川两县，亦聚党数千人攻镇岑县甚急，已由清州遣兵往救。”他认为“似以全兵挫，匪徒远近响应。倘京兵再失利，恐未易图。”另一封电报报告“闻古阜匪昨向花岛抢运漕米六千石，又到处掠积米粮云。匪依山聚食，恐难速除。再，见忠清电，匪在怀德计万余人，县储军器火药均被掠去，现向镇岑攻掠云。”第三封电报则发表自己的看法：“教匪起事，韩廷初不甚留恋，谓京兵去即可解散。昨今见各处告急，全兵败，始掠怯。顷来商请指画，已遵详告。嘱令洪后熏已领千兵专剿阜匪，另派将领江华兵赴忠清专剿怀匪。”他认为“特韩无将材，兵皆未经陈，倘贼稍悍，恐未能支。”

由于时间和篇幅关系，不可能再一一列举新编《李鸿章全集》和《袁世凯全集》上关于东学农民革命的其他新史料，在此谨向韩国学者朋友们作一个初略介绍和分析，希望有助于对东学农民革命史的深入研究和新认识。（若需要进一步研究和引用原文，请直接查阅已出版的新编《李鸿章全集》和将要出版的新编《袁世凯全集》为准。）

중국의 청사공정과 동학농민전쟁의 신사료에 관하여

- 新編《李鴻章全集》과 《袁世凱全集》을 중심으로

王曉秋(북경대)

번역 : 노재식(성균관대)

먼저 본 학술회의에 초청해주신 한국 학자분들께 감사의 말씀을 드린다. 지난 10년 전 본인은 쑤주에서 개최된 동학농민혁명국제학술대회에 참가를 하였다. 당시 농민군 복장을 입고 전주성에 입성하는 장면을 재현하는 행사가 있었는데 매우 흥미로웠고 아직도 기억이 생생하다. 당시 본인은 동학농민혁명과 태평천국을 비교한 논문을 발표하였다.

오늘은 본 회의의 주제와 관련하여 중국의 청사 프로젝트에서 편찬된 新史料 중에서 최근에 출판된 『李鴻章全集』과 곧 출판될 『袁世凱全集』중의 新史料를 이용하여 당시 조선과 일본의 외교, 군사사무를 담당했던 북양대신 李鴻章과 總理交涉通商事務로 조선에 파견된 袁世凱가 동학농민전쟁을 어떻게 인식하였는지 연구하고자 한다.

우선 청사프로젝트에 관해서 간단히 설명을 하고자 한다. 이것은 2002년 시작된 최대의 문화학술 프로젝트로서 본 프로젝트를 위해서 전문적인 청사편찬위원회를 설립했고 본인도 위원중의 하나이다. 프로젝트라고 부르는 이유는 새로운 淸史를 편찬하는 것 뿐 아니라 청대의 檔案, 문헌, 사진과 인터넷 자료들을 정리하는 것을 포함하는 문화학술 프로젝트이기 때문이다. 청사프로젝트는 3가지 내용을 포함하고 있는데 첫째는 주체 프로젝트로 약 3500만자의 通記, 典志, 史表, 傳記, 圖錄 등 5부분 총 96권으로 구성된 높은 수준의 청사를 편찬하는 것이다. 둘째는 기초프로젝트로서 청대의 문헌과, 당안, 외국사료, 연구저작을 정리 編譯하고 출판하는 것 등이다. 현재 이미 청대의 각종 당안, 문집, 시집, 일기, 필기, 족보, 만주어, 몽고어 및 외국사료 등 총 10억 자가 넘는 자료를 정리했다. 이미 출판되었고 곧 출판될 『清代軍機處電報檔彙編』 40책, 『李鴻章全集』 39책, 『清代稿抄本』 100책, 『清代詩文集彙編』 800책 등이 있다. 그리고 청사와 관련된 외국의 연구저작을 번역출판하려고 한다. 셋째는 보조 프로젝트로서 인터넷, 도서관의 건설 등이다. 청사프로젝트에는 중국대륙, 대만, 홍콩 등의 천 명에 가까운 청사관련 학자들이 참여하고 있다. 주체 프로젝트는 이미 대부분 초고를 완성하였고 수정단계에 들어가 있다. 2012년 청 왕조 멸망 100주년을 맞이하여 『淸史』 전부를 완성하려고 한다.

다음으로는 청사프로젝트의 성과물인 新編 『李鴻章全集』과 『袁世凱全集』 및 동학농민혁명과 관련된 사료들을 소개하려고 한다.

이홍장은 당시 청정부의 외교, 군사대권을 장악한 중요인물이었다. 그는 북양대신,

직예총독을 맡으면서 실질적인 청조의 일본과 조선의 외교, 군사 決策者였고 북양육해군의 최고 통솔자였다. 그러므로 그의 동학농민전쟁에 대한 정보, 소식 및 인식과 판단은 당시 청정부의 조선과 일본에 대한 외교, 군사 決策과 관련이 있다고 할 수 있다.

이홍장의 사료에 관해서는 그의 幕僚였던 吳汝綸이 주편한 『李文忠公全書』(혹은 『李文忠公全集』이라 부름)에 근거하고 있다. 이 책은 모두 165卷 700만자에 이른다. 최초로 1905년 金陵에서 인쇄하였고 널리 보편화된 것은 1921년 上海商務印書館에서 影印한 것이다. 그 후 출판된 각종의 이홍장전집들은 기본적으로 모두 이것을 기초로 영인한 것이다. 실제로 이 전집에는 이홍장의 상소문, 전보문, 시문, 서신 등에서 수록하지 않은 것들이 많다. 이번 청사프로젝트에서 새로이 편찬한 『李鴻章全集』은 청사편집위원회 주임인 戴逸교수와 상해도서관 관장 顧延龍선생이 주관해서 14년의 시간을 들여서 역사당안관과 각지의 도서관과 민간에 남아있는 이홍장의 미발행된 원고를 수집하였다. 2008년 安徽교육출판사에서 출판하였는데 전체 39冊, 2800만자로 구성되어 있고 원래의 『李文忠公全書』의 글자수보다 4배가 많다. 이홍장의 전보만 가지고 말하더라도 『李文忠公全書』은 6000여건의 전보를 수록하고 있는데 新編 『李鴻章全集』은 중국 제1역사당안관의 宮中 전보당과 상해도서관에서 소장하고 있는 이홍장 전보원고를 바탕으로 모두 14000여건의 전보를 수록하고 있어서 원래보다 2배 이상이나 된다. 갑오전쟁 전후 조선형세에 관한 많은 전보들은 『李文忠公全書』는 수록하고 있지 않다.

본인은 본 학술대회의 논문을 작성하기 위하여 新編 『李鴻章全集』중의 갑오전쟁 전후 조선의 형세, 동학농민전쟁과 일본과의 관계에 대한 전보를 검토하고 원래의 『李文忠公全書』와 비교를 통하여 이홍장의 동학농민혁명에 대한 인식과 태도를 집중적으로 분석, 연구하였다.

비교와 분석연구를 통하여 다음의 사실들을 발견하였다 1. 이 방면의 전보의 절반 이상은 『李文忠公全書』중 수록되지 않은 것으로 新史料로 이용할 수 있다. 2. 당시 이홍장이 조선형세에 대해 매우 관심을 가졌고 하루에도 몇 통의 전보를 보낸 적이 있음이 발견되었다. 3. 이홍장의 조선형세, 동학농민전쟁에 대한 정보는 주로 원세개가 제공한 것이고 일부는 이홍장이 파견한 淮軍과 북양군대 장군들이 제공한 것이다. 4. 이홍장은 이러한 정보를 근거로 조선형세에 대한 자신의 인식, 판단과 외교 군사행동의 決策을 내렸다.

다음으로 몇 몇의 중요한 전보를 예를 들어 설명하고자 한다. (날짜는 모두 음력이다.)

光緒 19년 (1893년) 2월 22일 이홍장이 총리아문에 보낸 전보에서 다음과 같이 보고하고 있다.

“袁世凱電：東學邪教訴請韓王盡逐洋人，..... 世凱迭勸韓廷嚴織懲辦，終畏怯不敢。”

“원세개의 전보: 동학 邪教집단은 조선 국왕에게 양인들을 모두 몰아내라고 요구했

다.... 원세개는 여러번 조선 국왕에게 저들을 엄히 징벌할 것을 권고했다. 결국 그들은 두려워서 감히 하지 못했다.”

“查西人既待華彈壓自屬好事,乞卽電飭水師,迅速兩船來仁,以盡彈壓責。”

“서양인들은 중국이 동학당을 진압해 줄 것을 기대하고 있다. 그러므로 속히 군함 2 척을 인천에 보내어서 동학당을 진압하는 임무를 수행해주기를 바란다.”

이홍장은 원세개의 정보와 건의를 근거로 북양군대 두 척을 인천에 가도록 명하였다.

“會商該道 (指袁世凱), 相機巡防, 彈壓. 仍電袁道, 切囑韓延嚴緝懲辦.”¹⁾

“원세개가 기회에 따라 두루 방어하여 힘으로 막을 것을 모여서 의논하였다. 곧바로 원세개에게 전하여 조선군이 나아가 엄히 단속하여 징벌해 줄 것을 간절히 부탁하였다.”

이것이 이홍장이 군대를 조선에 피견하자고 결정한 과정이다.

3월26일 총리아문에 보낸 전보에서 이홍장은 원세개의 동학농민전쟁의 판단에 대한 보고를 기록하였다.

“袁世凱電：頃朴齊純來稱，邪匪數萬終必生事，斷非諭說所能解。漢京士民多怨政府，思亂者十居八九。該匪亦多伏京內，倘至犯京，遠近響應。該匪旗號有‘討倭’，‘斥夷’等字，如害及洋人，外侮乘之，將何以支？”²⁾

“원세개의 전보: 이전에 박제순이 와서 이르기를 邪敎의 교도 수만명이 마침내 일을 일으켜서 국가의 諭說로서는 능히 해산시킬 수 없다. 漢城의 士民들이 대부분 정부를 원망하고 있고 亂을 생각하는 자가 열의 아홉은 된다. 이 무리들도 역시 대부분 한성 내의 잠복하고 있는데 만약 한성근처를 침범한다면 곳곳에서 호응을 할 것이다. 이 무리들은 ‘討倭’, ‘斥夷’ 글자를 깃발로 내세우고 있다. 만약 서양인들에게 피해가 미친다면 서양이 조선을 능멸할 것이니 장차 어지 지탱하겠는가?”

이후 원세개는 계속적으로 상황을 보고하고 있다.

“東學徒已將各旗卷收，各山口守望匪徒大半撤去，似可解散，雨中露處，數萬人必難久支。”

“敎匪老弱多去，尙未全散”，“敎匪仍未散，今王又下勅旨反復申諭，甚嚴切，匪當驚悚。”³⁾

“동학도들은 이미 깃발을 거두었고 각 山口를 지키고 있던 匪徒들의 태반은 철수해서 거의 해산된 것 같다. 雨中에 처해 있어서 수만인 들이 반드시 오래 버티기 힘들 것이다.”

“匪徒들중 노약자 대부분은 도망갔지만 아직 전부 해산되지는 않았다.”

1) 『李鴻章全集』第23冊, 安徽教育出版社, 2008. p.345. (이하 『李鴻章全集』으로 약칭).

2) 『李鴻章全集』第23冊, p.356.

3) 『李鴻章全集』第23冊, p.364.

“匪徒들이 아직 해산되지 않아서 지금 왕이 또 명령을 내려서 심히 엄하게 하니 비도들은 두렵고 떨고 있다.”

광서 20년, 즉 1894년 동학농민전쟁이 발발하고 5, 6월 사이 동학농민군의 발전은 무척 빨라져서 이홍장과 원세개사이의 전보왕래도 빈번해졌다. 이홍장은 조선의 형세에 대해 큰 관심을 가졌는데 일본이 기회를 틈타서 전쟁을 일으킬 것이 가장 우려되었다. 이 시기의 이홍장의 전보는 『李文忠公全書』중에 수록되지 않은 것으로 심도 있게 연구할 가치가 있다. 예를 들어 광서 24년 4월 初4일에 총리아문에 보낸 전보에는 다음과 같이 전하고 있다.

“接袁道電：韓全羅道泰仁縣有東學黨數千聚衆煽亂，現派洪啓燾帶兵往捕，求調駐防仁川之‘平遠’兵船分載韓兵赴格浦海岸登岸，助聲勢聊。袁并派武弁帶丁役隨往照料等語。已電海軍提督照辦。”⁴⁾

“원세개의 전보: 조선 전라도 태인현의 동학당 수 천명이 소란을 피워서 洪啓燾을 시켜 군대를 보내 진압하게 하였다. 인천에 주둔하고 있는 ‘平遠’兵船에 조선 군사들을 나누어 탑승시켜서 格浦에 도달하게 하여 오르게 하였다. 원세개는 武弁으로 하여금 丁役을 데리고 군대를 수행하게 하여 처리하도록 하였다. 이미 해군제독에게 전보를 보내었다.”

4월 初8日 원세개는 다시 “平遠初五到群山卸兵，韓亂黨聞兵到即瓦解。(평원호가 군산에 도착하자 조선의 동학도들은 군대가 도착했다는 소식을 듣고 곧 해산했다.)”⁵⁾라고 보고하고 있다.

그러나 4월21일 총리아문은 중국 총세무사 영국인 허트로부터 다음과 같은 소식을 얻었다.

“韓兵大敗，王愆自將。”

“조선의 군대가 대패해서 국왕이 스스로 군대를 이끌고 진압을 하려고 한다.”

그리고 일본이 “亦欲派兵前往。(역시 군대를 파견하려고 한다.)”고 들었다. 그래서 이홍장에게 “赫言與袁道電互異，究竟情形如何？倭說確否？并查示。(허트의 말과 원세개와의 보고가 서로 다른데 도대체 상황이 어떠한 것인가? 조사를 하라.”⁶⁾고 묻고 있다. 이홍장은 원세개의 최신의 보고에 근거하여서 다음과 같이 보고하였다.

“舟次迭接袁道電：全羅道匪徒黨勢猖獗，韓兵輒潰敗，又添調江華槍炮隊四百余往勦云。韓王未請我派兵援助，倭亦未聞派兵，似未便輕動，應俟續信如何再酌。已速拔毛瑟精槍千枝并子藥派輪船解往，以應急需。”⁷⁾

4) 『李鴻章全集』第24冊, p.35.

5) 『李鴻章全集』第24冊, p.36.

6) 『李鴻章全集』第24冊, p.39.

“급히 배를 태워 사람을 보내어 원세개를 접견하고 전보를 보냄: 전라도의 匪徒黨의 세력이 猖獗하여 조선의 병사가 패배하여 강화도 槍砲부대 400여명을 추가 이동하여 진압하게 하였다. 조선의 왕은 아직 우리에게 군대를 파병해 줄 것을 청하지 않았고 일본 역시 군대를 파견한다는 소식을 듣지 못했다. 경솔히 행동하지 말고 소식을 기다리면서 어떻게 할 것인지 생각해야 한다. 이미 槍 1000자루와 탄약을 보내어서 필요할 때 사용하게 하였다.”

다음날 이홍장은 또 총리아문에 다음과 같이 답하였다.

“袁道電復: 遵查江華兵尙未接仗, 王無自將意未聞日有派兵說云.” 8)

“원세가가 다시 전보를 보내었다: 강화도의 군대는 아직 전쟁을 하지 않았다. 왕은 스스로 전쟁을 할 의사가 없다..... 일본이 군대를 파병한다는 소식은 아직 듣지 못했다.” 이홍장은 일본의 동향에 대해서 여전히 경계심이 부족하였다.

4월 28일 이홍장은 총리아문에 보낸 전보에서 조선에서 중대한 변화가 일어났다고 보고하고 있다.

“袁道屢電韓兵敗, 械被奪, 韓各軍均破膽.”

“원세개가 여러 번 전보를 보내어 조선의 병사는 패하였고 기물들이 약탈되었다.”

조선정부는 이미 “議求華遣兵代勦. (중국이 군대를 파견해 주기를 청하고 있다)”고 하였다.

원세개는 조선정부가 정식으로 군대를 요청해야 한다고 여겼다. 일본의 동향에 대해서 원세개는 “倭如多事, 似不過借保護使館爲名, 調兵百餘名來漢而已.(일본 군대의 일들은 거의가 使館을 보호하는 명분으로 군대를 100여 명 정도 한성에 보낸 것”일 뿐이며, 또한 駐朝鮮 일본사관의 통역관 鄭永邦도 일본정부는 결코 다른 뜻이 없다고 말하면서 중국의 출병을 권고하고 있다고 여겼다. 그러므로 이홍장은 일본의 출병에 대한 심각성에 대해 인식이 부족하였고 아래와 같이 결정하였다.

“現候朝鮮政府文轉到, 擬派葉提督選帶精帶千數百乘商輪速往, 并派海軍四艦赴仁川, 釜山各口撮護, 一面電知汪使(中國駐日公使汪鳳藻) 知照倭外部, 以符前約.”9)

“현재 조선정부의 공문이 전해져서 엽지초에게 정예부대 수 백명을 商輪에 승선케 하여 출발시키고 해군 4척을 인천, 부산에 파병하였다. 駐日 중국공사 汪鳳藻에게 전보로 알려져서 일본 외무부에 보고하도록 하였다. 이전의 조약(天津조약)에 부합하기 위해서이다.”

5월 初1일, 원세개는 조선정부의 정식 원군의 내용을 전보로 보내왔다. 이홍장은 곧 丁汝昌으로 하여금 북양해군 濟遠, 揚威 두 척을 인천과 漢城에 보내어서 상인들을 보호하게 하였다. 또한 直隸提督 葉志超로 하여금 太原鎮 總兵 攝士成과 함께 정예부대 1500

7) 『李鴻章全集』 第24冊, p.39.

8) 『李鴻章全集』 第24冊, p.40.

9) 『李鴻章全集』 第24冊, p.40.

명을 선발하여 나누어 출발하게 하였다.

이홍장은 葉志超에게 “諸事謹慎，細心爲要.(모든 일은 신중하게 세심히 처리하라.)”고 분부하였다.

5월 初3일에 이홍장은 조선 왕실의 聖旨를 받았다.

“此次朝鮮亂匪聚黨甚衆，中朝派兵助勦，地勢，敵情均非素習，必須謀出萬全，務操必勝之勢，不可意存輕視，稍涉疏虞.”¹⁰⁾

“이번에 조선 亂匪가 모여 무리를 이룬 것이 매우 많아서, 중국 조정에서 병사를 파견하여 수고로이 도왔지만, 지세와 敵情이 모두 중국군에게 본래부터 익숙한 것이 아니니, 반드시 모름지기 도모하여 군사를 만전하게 갖추어 내고 힘써 장악하면 반드시 이길 형세지만 가볍게 보거나 소홀해서는 안 될 것이다.”

5월 初5일에 이홍장은 聶道憲에게 다음과 같이 전보를 보내었다.

“袁道電：刻見前敵探電，匪聞大兵將至，實甚驚怯，逃散甚多，兵民均氣振，韓兵又據高岸，以開花炮攻擊，死者姑不知數.”

“원세개의 전보: 앞서 적이 탐문하여 전한 것을 잘 들이켜 보면, 비도들은 대병이 장차 도착한다는 것을 듣고 실로 매우 놀라고 두려워서 도망가 흩어진 것이 매우 많았지만 병사와 백성이 모두 사기가 진작되어 조선군이 또다시 높은 언덕을 의지하여 화포를 열어 공격하니 죽은 자가 부지기수였다.”

원세개는 조선군대가 전주성을 수복하면 교도들은 해산할 것이고 중국군대는 “似卽可撤兵，庶得體而免生枝節. 11)(철수할 수 있고 일이 발생하는 것을 면할 것이다.)”라고 하였다. 이홍장은 “望屆時妥酌，勿與韓兵爭功.(잠시 상황을 전망하고 조선병사와 전쟁을 하지 말라.)”고 명하였다.

실제로 조선의 장군은 군대사정을 허위보고하고 전쟁의 성과를 과장했다. 5월 初8일에 聶道憲가 조선에 왔고 조선군관이 와서 접견했다. 일본은 기회를 틈타서 출병하였지만 원세개는 아직 이에 대해 경계하지 못하였고 이홍장에게 다음과 같이 보고하였다.

“遵告韓人，倭與華爭體面，兵來非戰，切毋驚憂. 速設法除全匪，全復華兵去，倭自息.”¹²⁾

“일본인과 중국인이 서로 체면을 다투어서 군대를 보냈지만 전쟁은 하지 않으니 놀라거나 두려워할 일은 아니다. 속히 전주의 비도들을 제거할 법을 만들어 전주성이 회복되면 중국 군대가 철수할 것이고 일본군대도 저절로 없어질 것이다.”

후에 일본병사가 점점 많아지자 이홍장은 駐日 汪公使에게 아래와 같이 전보하였다.

“查漢城無事，全州已復，已屬外署詰問，并請各國員查詰，口調兵過多，自匪意在護館. 究屬何意? 望向外務詢問.”¹³⁾

10) 『李鴻章全集』第24冊, p.46.

11) 『李鴻章全集』第24冊, p.49.

12) 『李鴻章全集』第24冊, p.54.

“한성에 일이 없고 전주성은 이미 회복되어서 이미 외무관서에 힐문하고 아울러 각국의 조사원이 조사하여 힐문할 것을 청하였다. 일본은 점차 군대를 증가시키고 있다. 공사관을 보호하는 뜻은 아닌 것 같은데 도대체 무슨 의도인가?”

5월 初9일에 원세개는 조선군관의 허위보고 사실을 폭로했다.

“韓兵初三之捷，因據高施炮，匪以千與人仰攻，慾奪炮，被擊敗傷。洪啓勳卽報大捷，誇張甚大。實未與匪大隊交仗。韓王甚信之，終必大誤。”¹⁴⁾

“조선병이 처음 세 번의 승첩에서 높은 곳을 점거하여 포를 발사하니 비도들 1000명이 백성들과 함께 공격하여 포를 빼앗고자 하여서 습격하니 (조선군이) 패퇴시켜 부상을 입혔다. 홍계훈이 즉시 대첩을 보고하여 매우 크게 자랑하였다. 진실로 匪徒 大隊와 교전을 한 적이 없는데 조선왕이 그것을 심히 믿어 끝내 잘못된 것이다.”

5월 初10일 원세개는 일본공사 大鳥와 다음과 같이 約定하였다.

“已到漢之日兵暫駐卽撤，續來者毋登岸，原船回倭，未發者卽電阻云。”

“이미 한성에 도착한 병사들은 잠시 머물다가 즉시 철수하고 뒤이어 오는 자들은 육지에 오르지 않는다. 아직 출발하지 않은 자들은 출발하지 말라는 전보를 보낸다.”

이에 이홍장은 곧 중국군대에게 다음과 같이 명하였다.

“勿再前進，如匪已散，應聽韓軍自辦，我軍卽當陸續撤回，以免韓人疑怨，日人藉口留兵。”

“더 이상 전진을 하지 말고 만약 匪徒들이 이미 해산했다면 마땅히 조선 군대가 스스로 처리하도록 해야 할 것이다. 우리군대는 즉각 철수를 하여 조선인들의 원망과 의심 없애고 일본이 이것을 구실삼아 군대를 주둔하는 것을 면하게 해야 한다.”¹⁵⁾

또한 엽지초에게 원세개의 정보를 근거로 다음과 같이 통지하였다.

“所探全州賊情與韓報大不符。韓人既不愿我進兵，徒費力不討好。日人亦謂須待我撤兵彼才肯撤。是于中外大局有關，望加審慎，姑駐待爲妥。”¹⁶⁾

“전주성의 적의 상황과 조선이 보고한 것과는 매우 다르다. 조선은 중국군대가 진군하기를 원하지 않는다. 일본 또한 우리군대가 철병하기를 기다린 후에야 비로소 철수를 하려고 한다. 이는 중외관계와 크게 관련이 있으니 잘 살피고 신중해야 한다.”

5월 11일 원세개에게 다음과 같이 명하였다.

“大鳥既與汝約定，日兵究何時必撤？是否盡撤？須取伊信函或回文爲據，以便派船往接大隊，倘彼游移，或仍留兵若干，我亦應留若干。”¹⁷⁾

“大鳥는 이미 너와 약정을 하였는데 일본 군대는 언제 철병할 것인가? 반드시 서신이나 문서를 취하여 근거로 삼아라. 만약 저들이 군대를 이동하거나 혹은 군대 약간을

13) 『李鴻章全集』第24冊, p.56.

14) 『李鴻章全集』第24冊, p.56.

15) 『李鴻章全集』第24冊, p.57.

16) 『李鴻章全集』第24冊, p.57.

17) 『李鴻章全集』第24冊, p.61.

남겨둔다면 나도 역시 군대 약간을 남겨 둘 것이다.”

또한 총리아문에 다음과 같이 답하고 있다.

“韓軍既分投捕勦，彼又函口我兵勿進，人地生疏，山徑叢雜，若無向導，玉石難分，似難冒然深入。葉，聶仍駐牙山，候袁道與大鳥妥議撤法再行酌辦。倘倭尚擬留兵，彼留若干我亦應留若干，與之相持。此時防倭較重于防匪也。”¹⁸⁾

“조선의 군사는 이미 진압을 하였고 우리 군대가 더 전진하지 말라고 서신을 보냈다. 지형이 생소하고 山徑이 복잡하여 만약 인도자가 없으면 玉石을 구분하기가 어렵다. 엽지초, 섭사성은 아직 아산에 주둔하고 있고 원세개와 大鳥는 철병에 대해서 논의하고 있다. 그 후에 어떻게 행동할 지 결정할 것이다.. 만약 일본이 군대를 남겨둔다면 나 또한 약간의 군대를 남겨두어 저들과 균형을 맞출 것이다. 지금 일본을 방어하는 것이 匪徒들을 방어하는 것보다 중요하다.”

5월14일 駐日공사는 다음과 같이 보고하였다.

“日延疑賊猖獗，尙慾派兵會勦”

“일본정부는 匪徒들이 猖獗하는 것이 걱정되어 아직 군대를 보내어 진압을 하고자 한다.”

이홍장은 급히 원세개에게 상황을 파악하여 보고하라고 지시하였다.

“前詢查賊情未復，現賊散何處？韓軍追捕情形若何？是否能克期肅清，務派妥弁確探，詳細電示。倭廷總疑賊未能平，兵不肯遽撤，此爲緊要關鍵，勿任謊報。”¹⁹⁾

“이전에 적의 상황에 대해 물었는데 답신이 없었다. 현재 적들이 해산해서 어디로 갔는가? 조선 군사들이 뒤쫓고 체포한 상황은 어떠한가? 어지러운 상황을 바로잡을 수 있을지 없을지 힘써 합당한 무관을 파견하여 정확하게 탐문하도록 하여 전보로서 상세하게 보고하도록 하라. 일본은 적들이 아직 평정되지 않아서 군사들을 철수하는 것을 원하지 않다고 하는데 이것은 매우 중요한 관건이다. 허위로 보고하지 마라.”

5월15일 일본은 이미 군사 5천을 이동시켜 인천에 상륙시켰다. 엽지초는 군대를 이끌고 인천에 가기를 요구했지만 이홍장은 여전히 명령을 기다리라고 하였다.

“堅忍約束，以待後命，稍安勿躁。”

“굳게 참고 견디어 후에 명을 기다리고 조금 안정하고 절대 조급하지 말라.”

그리고 정여창에게 북양해군 수 척을 추가하여 인천에 도달하도록 명하였다. 이때에 원세개는 일본공사가 약속한 대로 이행하지 않고 일본군이 이미 상륙했으며 일본과의 담판은 쓸모가 없었다고 보고하였다.²⁰⁾

이홍장은 조선의 형세에 대한 판단이 정확하지가 않았다. 동학농민전쟁에 상황에 대

18) 『李鴻章全集』第24冊, p.61.

19) 『李鴻章全集』第24冊, p.65.

20) 『李鴻章全集』第24冊, p.66.

해서도 불확실하고 일본군의 야심에 대해서도 정확히 파악하지 못하여서 정책이 확고하지 못하였다. 그가 엽지초에게 보낸 전보에는 다음과 같이 말하였다.

“倭延慾以重兵脇議韓善後，并非與我圖戰，固不必預播赴漢先聲。據劉弁探，全賊逖扶安，古阜等處，韓延諧謂賊已平，無怪倭人不信。仍令確探賊聚何處，相機辦理。但前途生疏，糧運不繼，亦未勿言進勦，且恐勦無可勦。”²¹⁾

“일본 조정에서 막강한 군대로 조선을 위협하여 의논한 후에, 아울러 우리와 전투를 도모하지 않으니 진실로 미리 퍼트려 중국에 먼저 소식이 닿지는 않을 것이다. 劉弁이 탐문한 것에 따르면, 전주의 비도들은 불안, 고부 등지로 물러났고 조선 조정과 화해하여 이미 평정되었다고 일렀으나 일본이 믿지 않는 것은 궤이할 것이 없다. 인하여 적이 어떤 곳에 모여 있는지를 정확하게 탐문토록 하여 기회에 따라 변리토록 하였다.”

이때서야 그는 비로소 일본이 이전에 한 감언이설은 믿을 만한 것이 못됨을 알게 되었다.

“前言俱食，後言何可信。”

“이전의 말들을 모두 食言이었으니 후에 한 말들을 어찌 믿겠는가?”

5월16일 엽지초는 동학농민전쟁군의 정보에 대해 보고했다.

“東學教匪各持槍，鐵刀，自金堤，扶安，古阜等處，分作二股，或四五百，或六七百名，有朴茂長界，有奔高敞界，沿路放槍揮刀，阜守惊慌，不能御敵，郡邑悚惧，任賊橫行。”

“看此情形，韓將搜捕不力，可見我軍若不進勦斷難肅清。且恐倭兵乘機進勦。”²²⁾

“정황을 보니 조선의 병사들은 힘이 부족하고 우리 군사들이 가지 않으면 적을 소탕하기가 어렵게 보인다. 일본 군사들이 기회를 틈타서 군사를 보낼지 두렵다.”

이홍장은 엽지초에게 다음과 같이 명하였다.

“如確，卽派聶鎮帶數百人往還勦。”

“접사성으로 수 백인을 데리고 가서 진압하게 하라.”

그리고 이렇게 지시하고 있다.

“聶如往前追捕，向導最要，勿騷擾亂殺爲囑。”²³⁾

5월18일 또 원세개에게 다음과 같이 지시하였다.

“原議華日同時撤最要，此外如有別項要求，任他多方恫喝，當据理駁辯，勿怖勿餒。”²⁴⁾

5월19일 총리아문에 보낸 전보에서는 다음과 같이 말하고 있다.

“葉提督牙山復全電：匪探得伏莽尚多，朝廷諱疾忌醫，阻我勦匪，冀弭倭孽。我純兵十日，倭益恣橫，可見倭兵進退不關勦匪與否。”

21) 『李鴻章全集』第24冊, p.68.

22) 『李鴻章全集』第24冊, p.68.

23) 『李鴻章全集』第24冊, p.69.

24) 『李鴻章全集』第24冊, p.73.

엽지초의 전보에 대해서도 동의하고 있다.

“派哨官等速往全州西南探捕甚妥。”

“備倭一節，或無須動大兵，備而不發。”²⁵⁾

청조의 총리아문은 한편으로는 상황과악이 불분명하였고 한편으로는 판단상에서 실수가 있었다.

“韓自全城收復，敗匪若干，究竟何往？迄無的信。”

“宜飭袁世凱不必促倭退兵，惟在催韓勦匪，并飭葉、聶相機助勦，但能將賊事辦有切實頭緒，俾外人共見，彼時約倭同撤，當較順手。”²⁶⁾

“원세개로 하여금 일본군사들을 철병하라고 재촉하지 마라. 조선병사들이 비도들을 진압하도록 재촉해라. 그리고 엽지초, 섭사성에게 진압을 돕게 해라.”

5월22일, 이홍장이 총리아문에 보낸 보고에서 다음과 같이 말하고 있다.

“全賊逃後，沿途逃亂無依者多而且慘……現退居古阜老巢，綿延數縣，或數百數十，聚散無常。”

“전주의 비도들이 도망간 후에 난을 쫓아 간 자들이 많다. 현재 고부에 가서 거하는 자들이 수십, 수백이니 모이고 흩어짐이 無常하다.”

그리고 섭사성을 전주 서남 일대에 파견할 준비를 하였다.

그러나 이홍장도 다음과 같이 여겼다.

“惟查該匪繫爲貪虐官吏逼迫起事，此行擬撫多于勦，嚴辦匪首，解散脅脇從，不敢喜功多殺。”²⁷⁾

5월22일 엽지초의 보고에서는 다음과 같이 이르고 있다.

“我軍小分隊無地方官向導，良莠難分，未敢深入。倘倭兵助勦，挑釁尤可虞。擬飭在全州暫駐，相機辦理。”

동시에 그는 현재 일본군은 막강한 군사력으로 변경을 압박하고 있어서 중국도 신속히 대군을 이끌어 큰禍를 면해야 한다고 건의하고 있다.

이에 이홍장은 다음과 같이 명하였다.

“小隊無向導即不必深入，暫駐全，相機妥辦。日兵來牙窺探可置不理。彼斷不能無故開戰，切勿自我先挑釁。”

“저들이 무고한 이유로 개전하게 해서 안 된다. 우리가 먼저 전쟁을 일으켜서는 안 된다.”

이홍장은 거듭 “仍堅忍，勿張皇切要！”²⁸⁾라고 강조하였다.

이홍장은 또한 북양해군 제독 정여창을 질책하고 있다.

25) 『李鴻章全集』第24冊，p.75.

26) 『李鴻章全集』第24冊，p.76.

27) 『李鴻章全集』第24冊，p.80.

28) 『李鴻章全集』第24冊，p.82.

“日雖添軍，謠言四起，并未與開釁，何必請戰！”²⁹⁾

중국군대는 시종 동학농민군과 직접적인 교전을 피지 않았음에도 불구하고 일본군대는 이미 그 凶相을 드러냈다.

이홍장의 타협과 후퇴의 방침 하에 청군은 피동적인 상황에 놓였고 일본군은 점점 진군하였다. 1894년 7월 23일, 일본군은 무력으로 조선왕궁을 점령하고 25일 북양해군군대를 습격하고 아산만에 거주하던 청군에게 진공을 하여서 甲午中日戰爭이 발발하게 되었다.

袁世凱는 당시 청정부가 조선에 파견한 조선총리교섭통상사무의 道台로서 조선에 거주하는 청조의 全權대표였다고 할 수 있다. 조선국왕, 정부 관원 및 외국사절들은 모두 원세개와 만나서 진행이 되었다. 북양대신 이홍장의 조선에 대한 정보도 주로 원세개를 통해 얻은 것이었다. 원세개의 조선의 형세에 대한 정보, 인식과 건의 등은 모두 직접적으로 이홍장과 청조의 對조선정책 결정에 결정적인 영향을 주었다. 그러므로 『袁世凱全集』은 동학농민전쟁과 관련된 가장 중요한 사료중의 하나라고 할 수 있다. 이전에는 완성된 『袁世凱全集』이 없었고 부분적인 『袁世凱奏議』, 『袁世凱詩牘』, 『袁世凱家書』 등의 문집 등이었다. 청사프로젝트 문헌총간에서는 곧 『袁世凱全集』을 출판할 예정인데 모두 1300만자로 駱寶善등 학자들이 10여년에 걸쳐서 원세개와 관련된 문집들을 수집 정리하였고 최근에 교정과 수정과정 중에 있다. 본인은 編者들의 동의를 얻어서 『袁世凱全集』중 동학농민전쟁과 관련된 사료를 검토하였는데 주로 전보와 서신류이다. 비록 1894년 시기 일부의 전보는 『李鴻章全集』에 수록된 袁世凱와의 교환전보와 비슷하지만 『袁世凱全集』에 실린 것이 더 일차사료에 근접한다고 하겠다. 주목할 점은 1893년 이홍장에게 보낸 대량의 비밀전보인데 동학농민혁명에 대해 언급하고 있다는 점이다. 『李鴻章全集』에는 수록되지 않아서 여기에서 몇 가지를 소개하고자 한다. (날짜는 모두 양력이다.)

예를 들어 1893년 4월 9일 이홍장에게 보낸 비밀전보에서 다음과 같이 말하였다.

“再東學黨前謠，今日聚衆，經飭捕禁，多逃回鄉，今尙靜謐。”

“동학당의 이전에 소문에 의하면 금일 모인 회중들은 체포되고 대부분이 고향으로 돌아갔으며 아직 평정되지 않았다.”³⁰⁾

4월 13일 이홍장에게 보낸 전보에는 다음과 같이 말하고 있다.

“近日韓發捕緝禁，出曉諭，謠言漸息。或有下月初七聚衆謠言，然凱見必無事。”

“최근에 조선 정부에 체포령을 내리고 공문을 내려서 謠言이 점차 사라졌다. 다음 달 초7일에 민중들이 모인다는 謠言이 있지만 내가 보기에는 별 일이 없을 것 같다.”

4월 17일 다시 이홍장에게 비밀전보를 보내어서 다음과 같이 보고하였다.

29) 『李鴻章全集』第24冊, p.84.

30) 駱寶善主編, 『袁世凱全集』清祥本. 이 책은 아직 정식으로 출판되지 않아서 이하의 인용문에 따로 각주를 하지 않았다. 본문에 나오는 일자는 모두 양력이다.

“頃聞韓已獲教匪數名，詢供辭涉李夏應及王族數人云，似有人教之。”

“조선정부에게 이미 교도 수 명을 체포했다고 들었다.”

4월 19일 전보에는 이렇게 보고하고 있다.

“查近日韓人謠疑漸息，而洋人終於安靜，倭人尤舉止可疑，或將構釁生變。”

“돌아보니 근래 일본인의 소요가 점차 가라앉는다는 것을 의심하였는데 서양인이 끝내 안정되고 일본인의 행동이 더욱 의심스러우니 혹 장차 틈이 가서 변란이 생길까 걱정스럽다.”

5월초 동학교도들이 報恩集會를 연 후 긴장국면이 되자 조선 국왕은 朴濟純을 원세개에게 파견하였고 다음과 같이 말하였다.

“查東學黨在報恩縣聚衆數萬，約二十五日來漢功掠，已派魚允中充安撫使馳往諭解，求速調兵船及陸兵在馬山浦停備截其來路。”

“동학당이 보은현에서 수 만명을 모아서 집회를 열고 대략 25일 한성에 가서 공약을 한다고 한다. 이미 按撫使 어윤중을 파견하여 해산하도록 명하였다. 군사와 兵船을 마산으로 이동시키도록 청하였다.”

이에 원세개는 다음과 같이 답하였다.

“邪教烏合，料必自散。倘突聚亂，不及調兵，王可選付凱韓兵千名，以凱處華捕差丁分領，由開親率截勦，足可殄滅。如遽調兵，駭聞遠近，必多騷謠，務須鎮靜。”

“사교도들은 오합지졸로서 반드시 실로 해산될 것이라 생각된다. 만약 원세개가 친히 이끌고 진압하면 충분히 진압시킬 수 있을 것이다.”

원세개는 이홍장에게 비밀전보를 보내어서 다음과 같이 전하였다.

“查東學謠日間大作，韓廷風鶴皆驚，殊可慮。”

“돌아보니 동학의 소요가 크게 일어나는 것이 날마다 들려서 조선 조정이 공포에 사로잡혀 모두 두려워 떨고 있으니 걱정스럽다.”

1893년 5월 10일 하루 사이에 원세개는 이홍장에게 여러 차례 비밀전보를 보내었는데 보고에는 이렇게 말하고 있다.

“報恩縣境內有教匪二萬七千余名，日夜聚誦呪法，稱將討倭舉義，官吏諭解不聽，亦無力禁捕。”

“報恩顯 境內的 교도 2만7천여 명이 밤낮으로 주문을 외우면서 장차 왜구를 토벌하는 거병을 일으킬 것이라고 말하고 있다. 관리들이 해산하려 했지만 듣지 않고 금지하거나 체포할 힘이 없다.”

“韓邪教初起，袁時勸韓廷，擇吏善撫，捕治巨魁。韓始終疑怯，愆姑息免事，又不革貪政，至鄉民相率從邪，積久癩重。人心久思亂，故遠近騷動。倘再疑怯，殊難爲計。”

“조선의 동학교도들이 처음 일어났을 적에 원세개는 조선정부에 관리를 선발하여

처리하도록 권고하였다. 조선조정은 시중 두려워하며 임시적으로 해결하고 일을 면하려고 하였다. 또한 貪政을 개혁하지 않아서 鄉民들이 서로 邪敎를 추종하게 이르렀다. 人心이 오래동안 난을 생각하여 도처에서 소란이 일어났다. 만약 다시 두려워한다면 계획을 도모하기가 어렵다.”

5월 11일 다시 연속해서 이홍장에게 비밀전보를 보내어서 다음과 같이 보고하였다.

“報恩顯東學徒約已聚三四萬名，仍出榜招號，騷者甚衆。該匪首列陣擁圍，毫不畏官。似此，不速剪除，恐非韓人所能收拾。”

“보은현의 동학도가 이 3,4만 명이 모였고 소란을 피우는 자가 심히 많다. 이 비도들은 조금도 관리들을 두려워하지 않는다. 아마도 조선인들이 능히 해결하지 못할 것이다.”

5월 12일 보고에는 다음과 같이 말하였다.

“韓土庶怨上切齒，多盼大亂。前迭勸韓速布善政，并拔賢才，以收人望，解匪心，終不聽。今惟姑息疑怯，坐待變來。”

“조선의 선비들이 정부에 대해서 분하게 여기고 포정사를 보내어 도적들의 마음을 풀고자 했지만 그들은 결국 듣지 않았다. 지금 단지 일시적인 안정만을 생각하면서 앉아서 변화가 있기만을 기다리고 있다.”

이상의 보고에서 동학농민전쟁 발발의 원인과 기세, 그리고 원세개의 인식과 태도가 어느 정도 반영되어 있다고 할 수 있다.

신편 『袁世凱全集』에는 또한 두 통의 원세개가 吳重燾에게 보낸 편지가 수록되어 있다. 이것은 이전에 발표되지 않은 新史料이다. 또한 원세개의 당시 조선형세에 대한 인식이 반영되어 있다. 원세개는 편지에서 다음과 같이 말하고 있다.

“春初，東學教匪擾後……所有教匪首目，亦已于夏秋間誅鋤過半，內地稍覺安靜。惟韓內政泄漶依然，而地方官吏，大率貪苛，不時仍有毆戕官吏各案件。韓廷循庇情私，多未能持平妥辦。近事若是，未免代切隱憂。兼之南道各產米之區，風雨爲災，收成甚歉，民食極艱。”

“봄 초에 동학교도들의 소란 이후 비도중의 과반 이상이 처형되었고 內地는 조금 안정이 되었다. 단지 조선 정부의 지방 관리들의 虐政이 크고 불공정한 경우가 많다. 전라남도도 곡식 생산지인데 자연재난으로 수확량이 적어 백성들의 식량이 극히 부족하다.”

또 다른 편지에서도 다음과 같이 말하고 있다.

“惟韓積習既深，驟難更革，度支不節，用人非才，馭民不愛，江河日下，輓救殊難。”

“조선의 악습이 심히 깊고 개혁하기가 어렵다. 백성들을 사랑하지 않고 천하를 구하기가 매우 어렵다.”

1894년 5월 동학농민군이 다시 일어나자 원세개는 거의 매일 이홍장에게 비밀전보

를 보내어서 보고하였다. 『李鴻章全集』에 수록된 전보이 외에도 『袁世凱全集』 중에는 『李鴻章全集』에 수록되지 않은 전보들도 있다. 이 자료들은 동학농민전쟁의 실제상황에 대한 상세한 묘사와 평론을 나타내고 있어서 동학농민전쟁을 연구하는 사료로 이용될 수 있다.

1894년 5월12일 원세개는 이홍장에게 두 통의 전보를 보내었다. 첫 번째 보낸 전보에는 다음과 같이 보고하고 있다.

“迭據南道電稱，‘平遠’初五到群山卸兵，韓亂黨聞兵到即解。經士兵團練截勦，斃十數人，生擒百余人，仍有數千人在扶安，古阜一帶，據山自保。兵團姑不得進云。”

“전라도에서 온 전보에 의하면 ‘平遠’호가 초5일 군산에 이르렀을 때 조선의 동학당은 군대가 왔다는 소식을 듣고 곧 해산되었다. 죽은자가 十數人이고 생포한자가 100여인이었다. 수 천인이 부안, 고부 일대로 가서 스스로 보위하고 있다.”

그는 “飢寇負隅，似亦必不能久支.” 라고 여기었다.

두 번째 보낸 전보에서는 오히려

“頃徐都司自全州電稱，古阜縣之道橋山下，駐有全州兵團一千三百人，昨晚爲亂黨自山上突出襲擊，兵團敗退二十里，殺傷甚多。”

“이전에 徐都司 전주에서 온 전보는 고부현의 어제 저녁 산 밑에서 갑자기 습격을 하여 군사들이 20리를 퇴격하였고 죽고 부상당한 자가 심히 많았다.”

라고 보고하고 있다.

5월13일 그는 연속해서 이홍장에게 전보를 보내어서 동학농민군의 전황을 설명했다. 전보에서 그는 다음과 같이 말하고 있다.

“刻見全州來電：昨夜亂黨突出井邑縣，劫放罪囚，搶掠軍器，庫儲一空，官吏逃去，衙署，民房均被拆破，黎明回古阜雲。再，忠清道屬懷德，沃川兩縣，亦聚黨數千人攻鎮岑縣甚急，已由清州遣兵往救。”

“전주에서 온 전보: 지난 밤 동학당은 죄수들을 풀어주고 군기물을 약탈하고 관리들은 도망갔다. 官衙와 가옥등이 파괴되고 새벽 무렵에 古阜로 돌아왔다. 다시 이르기를 忠清道에 있는 懷德, 沃川 두 곳에서 동학당 수 천명이 공격하여 심히 위급하다고 하였다. 이미 군사를 보내어서 구하게 하였다.”

그는 다음과 같이 여기었다.

“似以全兵挫，匪徒遠近響應。倘京兵再失利，恐未易圖。”

“전주의 병사들이 실패하여 곳곳의 匪徒들이 호응을 하였다. 만약에 한성의 군사들이 다시 실패한다면 상황을 바꾸지 못할까 두렵다.”

또 다른 전보에서 그는 아래와 같이 말하고 있다.

“聞古阜匪昨向花島搶運漕米六千石，又到處掠積米糧云。匪依山聚食，恐難速除。再，見忠清電，匪在懷德計万余人，縣儲軍器火藥均被掠去，現向鎮岑攻掠云。”

“듣자하니 高阜의 匪徒들이 도처에서 식량을 약탈했다고 들었다. 비도들을 속히 제거하기 어려울 것 같다. 다시 충청도에서 온 전보에는 懷德에서 비도 만여 명이 顯에 있는 군기화약을 모두 빼앗아 약탈해 갔다고 한다.”

세 번째 전보에서는 원세개 자신의 견해를 밝히고 있다.

“教匪起事，韓廷初不甚留戀，謂京兵去即可解散。昨今見各處告急，全兵敗，始掠怯。頃來商請指畫，已遵詳告。囑令洪啓熏已領千兵專勦阜匪，另派將領江華兵赴忠清專勦懷匪。”

“교도들이 일을 일으킬 때 처음에 조선 조정에서는 동정을 하지 않고 한성의 병사들이 가면 즉 해산할 것이라고 말했다. 요즘의 각 처에서 온 보고를 보면 병사들은 패하였다. 홍계훈이 이미 천 명을 데리고 진압을 하러 갔고 강화도에 있는 장령으로 충청도에 가서 匪徒들을 진압하게 하였다.”

그는 다음과 같이 여기고 있다.

“特韓無將材，兵皆未經陳，倘賊稍悍，恐未能支。”

“조선에 장군과 병사들은 모두 펼치지 못하고 있어서 만약에 적이 강하다면 능히 지탱하지 못할 것이다.”

시간과 분량의 제한 때문에 『李鴻章全集』과 『袁世凱全集』 중의 동학농민혁명과 관련된 신사료를 일일이 소개할 수는 없다. 여기에서 한국학자 분들께 개략적인 소개와 분석을 하였을 뿐이다. 동학농민혁명사의 심도있는 연구와 새로운 인식에 도움이 되기를 바란다.

(만약 원문의 내용이 필요하시면 이미 출판된 『李鴻章全集』과 곧 출판될 『袁世凱全集』을 참고하시기를 바란다.)

06

한 청국장병의 조선출병기록 : 섭사성의 <동정일기>
金 俊(청화대)

一位清军将领的赴朝记录

- 聂士成的《东征日记》

金俊(清华大学)

序言

本报告的目的是，通过介绍和分析聂士成的《东征日记》¹⁾，厘清为镇压东学农民运动²⁾赴朝的清军的行军时间、路线，以及清军的活动情况。

众所周知，东学农民运动最终引发了甲午战争，进而改变了整个东亚的政治版图，东亚传统的朝贡——册封体制最终瓦解，而日本正式走向了近代帝国主义之路。从这个意义上讲，东学农民运动不仅仅是韩国近代的一大事件，而且也是整个近代东亚的一场重大事件。关于这一点，时任日本外务大臣的陆奥宗光深有体会，他说：“将来如有人编写中日两国间当时的外交史，当必以东学党之乱为开宗明义第一章。”³⁾

作为发生在近代朝鲜半岛的一大事件，东学农民运动理所当然地受到了韩国学界的关注，除了大量的公刊论文、学位论文外，还有专门学刊《东学研究》，更有《东学农民革命综合知识情报体系》网站⁴⁾。通过这些，我们可以看到有关东学农民运动的很多第一手材料和最新研究状况。然而，本报告论及的清军与农民运动关系的相关研究，大多集中在清军赴朝的原因及其决策过程⁵⁾，而对清军在朝鲜半岛的初期活动情况却很少涉及，给东学农民运动的全面研究带来了一些负面影响。《东学农民革命综合知识情报体系》网站里的年表（日志）中的一些细小然而却明显的错误记载足以证明这一点。导致这一现象的固然有各种原因，但是中国史学界对东学农民运动的极端忽视，以及由此造成的中韩两国在相关领域的交流的贫乏应该是最主要的原因。迄今为止，中国尚未出现专论东学农民运动的文章⁶⁾。

1) 聂士成撰、李宝森校：《东征日记》，载中国史学会主编：《中国近代史资料丛刊 第5种：中日战争（第六册）》，上海，新知识出版社，1956年版。

2) 关于这场运动，本报告将用东学农民运动而不是用东学农民革命来表述。因为笔者认为，革命意味着事物本身的质变。作为结果的东学农民运动，的确给朝鲜半岛以及东亚局势带来了翻天覆地的变化，但是，至于这场运动本身是否具有这种质的变化，笔者是持怀疑态度的。

3) 陆奥宗光：《蹇蹇录》，东京，岩波书店，1941年，第14页。引文出处：陆奥宗光著，伊舍石译，谷长青校：《蹇蹇录》，北京，商务印书馆1963年版，第8页。

4) 网站地址：<http://www.e-donghak.go.kr/>

5) 有关清军赴朝的原委及其决策过程的最新研究，可参阅姜文皓先生的《동학농민혁명과 清軍》，《東學農民革命과 袁世凱》，《東學農民戰爭과 李鴻章의 對外認識》（《동학연구》17·18·23辑，2004、2005、2007）。另，可参阅李泰鎮：《1894년 6월 청군(清軍) 조선(朝鮮) 출병 결정과정의 진상》（《한국문화》24辑，1999）；具仙姬：《開化期 朝鮮의 對清政策 研究》（《혜안》，1999）。

6) 笔者搜索的有关东学农民运动的中文论文仅限如下两篇：卢在弼：《中国太平天国农民战争和朝鲜东学农民战争的比较》，北京大学2000年度硕士学位论文；王晓秋：《中国太平天国农民革命与韩国东学农民革命之比较研

本报告所介绍的，是奉命前往朝鲜镇压东学农民运动的山西太原镇总兵聂士成的《东征日记》。实际上，聂士成所部800人作为前锋部队，是第一批到达朝鲜而且唯一向全州城移师的清军，聂士成本人则是进入全州城的最高级别的清军将领。《东征日记》较为翔实地记录了聂士成所部的行军时间、路线，以及清军的活动情况，其中有相当一部分内容与东学农民运动有关。它是了解清军与东学农民运动关系的不可多得的原始文献。《东征日记》早在1956年得到刊行，然而，据我所知，尚未在韩国得到介绍。

本报告分三个部分：第一部分将介绍聂士成本人及《东征日记》的基本情况，第二部分则介绍清军。

1. 聂士成其人与《东征日记》

聂士成（1836~1900）是清末著名的爱国将领。2000年，天津市政府为纪念聂士成为国捐躯100周年，在原聂公碑所在地建一个高4.18米的聂士成铜像。米新华为其撰写的《聂士成碑记》，简明扼要地记述了他的一生，但有一些与事实出入较大之处。全文如下⁷⁾：

聂士成碑记

聂公讳士成，生于1836年，殉于1900年⁸⁾，字功亭，安徽合肥人⁹⁾。1862年，以武童投效淮军，累迁至记名提督、太原镇总兵¹⁰⁾、直隶提督¹¹⁾。1884年，中法之战，公慷慨请缨保卫台湾，屡挫入侵法军。1893年，驻芦台，复请行，巡防东北三省，历程两万余里，图其山川、要隘，著有《东游记程》，缕陈防俄之要略。1894年，中日之战，奉命入朝¹²⁾，扼摩天岭，克连山矣收草河口，击毙日将富刚三造¹³⁾。卧雪餐风，倍尝艰险，卓著战功，威震中外。既而还驻芦台，创立武卫军并为统帅。公为官清廉，治军严整，所部秋毫无犯。曾数次上书吁请加强海防。1900年初¹⁴⁾，公率部于津八里台抗击八国联军，喋血八昼夜，身负数伤，仍挥刀督战，不幸炮弹穿胸殉国。公赫赫勋劳，凛凛正气，足与诸民族英雄相将昭日月泣鬼神，为世人所缅怀。敕斯碑记，以慰忠魂。

公元二零零零年四月 天津市人民政府 立

究》，载《韩国学研究》第9辑，2001年（后收录于王晓秋：《近代中国与世界——互动与比较》，北京，紫金城出版社，2003年版）。

7) 碑记之符号与注均为笔者所加。

8) 1900年7月9日，殉于天津市南开区八里台。

9) 确切的是安徽合肥北乡人。

10) 任期为1892~1894年。

11) 任期为1895~1900年。

12) “1894年，中日之战，奉命入朝……”，应为“1894年，奉命入朝，中日之战……”。

13) 应系“福冈三造”之误。

14) 应系“1900年7月”之误。

米新华撰文 刘炳森书丹

聂士成是淮系集团的重要人物，与王孝祺（?~1898）、章高元（1829~1912）一同被誉为“淮军后期三名将”。众所周知，淮军是1862年3月李鸿章（1823~1901）在曾国藩（1811~1872）的指示下一手组建的部队。此后，淮军日益壮大，在镇压捻军起义后，成为清军的主力部队，担负起中国南北数千里江海要地的防守。李鸿章正是以淮军势力为基础，担任直隶总督兼北洋大臣，掌握国家外交、军事和经济大权的。与此同时，淮军也在李鸿章的大力扶持下成为当时中国最先进的部队，不仅采用洋操、洋器，并聘请欧美教官为教习。聂士成自1859年从军以来，一直参与清政府重大的对内外军事活动，且战绩卓著，有着敏锐的战略眼光和丰富的战斗经验。聂士成治军以纪律严明著称，所部极具战斗力。聂士成和与他一同赴朝的直隶提督叶志超（1838~1901）均为镇压热河朝阳金丹道起义的首要功臣。李鸿章首派这两元大将赴朝是经过深思熟虑的。

聂士成的《东征日记》始于奉命赴朝的1894年6月6日¹⁵⁾，止于赴直隶被谷口任直隶提督的1895年2月26日。日记共有9639字，记录了清军在朝鲜半岛的活动以及中日两国在朝鲜和中国辽宁的交战情况。其中，朝鲜部分（从清军第一批部队抵达朝鲜境内的6月8日至清军全部撤离到鸭绿江以北的9月15日，共100日）共6920字，约占71.79%。而与东学农民运动有关的部分（1894年6月4日至7月10日，共37日）共3913字，约占日记的40.6%，约占朝鲜部分的56.54%¹⁶⁾。这足以说明东学农民运动与清军的关系在《东征日记》中占据很重要的位置。

2. 东学农民运动与清军

1894年5月31日，东学农民军攻克全罗道首府全州，惊动了朝鲜朝廷。朝鲜政府经过反复商讨，遂决定向清政府请求派兵。6月3日晚上，驻扎朝鲜总理交涉通商事宜袁世凯接到朝鲜政府为请求派兵代剿“东学教匪”的正式照会，随即电禀北洋大臣李鸿章¹⁷⁾。李鸿章接到电稿，马上电奏朝廷请求向朝鲜派兵1500人“助剿”“朝鲜乱匪”，于6月5日得到恩准¹⁸⁾。随即李鸿章命令镇守山海关的直隶提督叶志超和坐镇直隶芦台¹⁹⁾的山西太原镇总兵聂士成率精锐赴朝。6月6日，聂士成率800精兵自芦台出发，当晚乘船赴往朝鲜²⁰⁾。

15) 本报告采用的日期除引文均为阳历。

16) 上述数字，均为笔者统计，如有出入，敬请谅解。

17) 顾廷龙、叶亚廉主编：《李鸿章全集（二）》（电稿二），上海，上海人民出版社，1986年版，第684页。

18) 同上，686页。

19) 今天津市芦台镇。

20) 聂士成同上书第1页。

日 期	行军地点与路线
6月6日	聂士成率800精锐乘船离开天津塘沽港口，赴往朝鲜。
8日	聂军：抵达朝鲜沿海，泊马三浦。
9日	聂士成：部舟行40里，抵达白石浦，登岸整队，进驻牙山县。
11日	叶志超：自白石浦登岸，驻牙山。
12日	聂士成：派弁兵百人，随带通事，持告示前往全州招抚。
26日	李鸿章：电令“剿匪”。
27日	聂士成：凌晨2点，拔队前往全州，行五十里，驻安州。
28日	聂军：至广亭。
29日	聂军：凌晨2点，拔队起行，晨刻至公州河干。击楫渡江，驻城北熊津州。 接到叶志超电令：速回军。
7月2日	聂军：接到叶志超电令——继续前往全州“剿匪”。
4日	聂士成：命程平齐带队回天安。 独率数十骑往全，宿廷津县。
5日	鸡鸣启行，八点钟过砺山，十一点钟至山理马号午馕。三点钟抵全州。进南门，住州署。
7日	聂士成：早，叶军门来电，令速回。出示晓谕归诚乱党，令李谷生带勇丁数人先发。晚10点，将抚匪事宜交金道毕，即率骑驰归。
8日	凌晨4点钟，至恩泽，晚宿公州。
9日	早2点钟，发公州，至广亭午馕。宿天安。
10日	轻骑驰归牙山，向叶志超称“匪乱”已平，并要求速撤朝鲜。

【表1】清军行军表。根据《东征日记》记录整理。

【图表1】清楚地展现出了第一批赴朝的清军的行军路线。首先，聂士成和叶志超分别率军抵达朝鲜后，先后在6月9日和11日进驻牙山。但是，直到6月27日才派一小部分兵力前往全州。这一部分兵力由聂士成统率，由牙山经安州（27日）——广亭（28日）——公州——熊津州（以上29日）——廷津县（7月4日）——砺山——山理马号（以上5日），5日下午三点在全州“文武各官列队郊迎”的氛围中进入全州城。需补充说明的是，从熊津到全州的清军只有数十骑，其余的清军则在程平齐的率领下回天安（7月4日）。聂士成则于7日晚上10点出全州城，经恩泽——公州（以上8日）——广亭——天安（以上9日），于10日到牙山，结束了全州之行。日记中丝毫没有与东学农民军作战甚至是接触过的记录，全然不像前来镇压“匪乱”的援军。这固然与东学农民军的状况有关系，但是清政府及清军在朝鲜的极端谨慎的行动有密切的联系。而淮军常年镇压农民起义的经验也起到了重要的作用。

首先，此次赴朝的清军，特别是聂士成部纪律严明。聂士成早在登岸驻扎雅山的第一天（6月9日），就“出示禁骚扰”²¹⁾，出征全州的第二天（6月27日）则“有勇丁取民间一蔬，割耳以徇，全军肃然”²²⁾的事件。这些措施，取得了朝鲜民众的好感。当然，这与李鸿章的再三嘱咐是分不开的。他不断地告诫叶、聂二人“诸事谨慎，细心为要”、“勿骚扰乱杀为嘱。”²³⁾

21) 聂士成同上书，第2页。

22) 聂士成同上书，第4页。

23) 转引自王晓秋：《中国的清史工程与关于朝鲜东学农民革命的新史料——以新编《李鸿章全集》与《袁世凯全集》为中心》，韩国东学农民革命国际学术大会宣读论文，2010年。

其次，采用恩威并施的方式，动摇和瓦解东学农民军。早在6月2日，聂士成便“派弁兵百人，随带通事，持告示前往全州招抚”²⁴⁾。告示全文如下²⁵⁾：

为剴切晓谕事：

窃照朝鲜全罗道属地方党匪作乱，占据省会，杀伤军民，尔国王发电告急。我中朝爱恤属国，不忍坐视不救，奉谕钦差北洋大臣李奏派本统领率带马步枪炮大队前来征剿。特念尔等本属良善，或一念差失，或为所胁从，岂尽甘心从贼？据膺大戮，殊堪怜悯。大兵到日，尔等能悔罪投诚，洗心革面，均予免杀；能将首恶擒献，必加重赏。若仍执迷不悟，敢行抗拒，悉杀无赦。为此出示晓谕。本统领纪律严明，令出法随，勿谓言之不早也。各宜凛遵毋违！特示。

这种颇具说服力的告示似乎确实引起了不少东学农民军的动摇。《东征日记》记载：“史筱斋乘马自全回，称党匪读招抚示谕，皆感泣，愿投戈归诚”（7月3日）²⁶⁾，“刘弁宝泰回，称带有党魁数人，具禀投诚缴械，听候发落；即请金道妥为处置”（7月6日）²⁷⁾。

另外，慷慨解囊，救济困难户，从而稳定社会秩序也是清军在这一时期取得朝鲜官民好感的一个重要原因。日记记录：7月5日，聂士成进入全州城时，“见庐舍焚毁，民无栖止，心甚悯之。……初四日（7月6日），回拜观察使金道，令查明难户共九百家，发洋一千八百零六元交闵判官按户给发，助修庐舍。……旋据闵判官回称，出示后，难民得赈，均极感激云”²⁸⁾，告示原文如下：为出示晓谕事：

照得本统领日昨轻骑至全，见西南门内外民房多被乱匪焚毁，居民露宿风餐，殊堪悯恻。本统领拟查明被难之家，开列名单，每家给以洋银二元，聊助牵萝补屋之费，以仰副中朝体恤尔等之仁。且本统领在途次见百姓称颂贵闵判官德政，万口同声，足见平日仁爱及民，无微不至，深堪嘉尚。本统领即将赈款交其查明难户，按照给发。尔等人各可向领洋二元，归营家室，各安生业，毋负区区赈恤至意。为此出示晓谕，尔等难民知悉。切切！此谕。

总之，为镇压朝鲜农民运动而赴朝的清军，在日益紧张的东亚国际局势与日益复杂的朝鲜局势之下，实际上并没有直接参与东学农民军的镇压活动。相反，不久他们与东学农民军共同的对手——一个日益强大的日军交战了。其结果是，东学农民军和清军都不愿意接受的

24) 聂士成同上书，第2页。

25) 同上。

26) 聂士成同上书，第5页。

27) 聂士成同上书，第6页。

28) 同上。韩方资料《随录》也记载了此件事情：“上国聂统领丁提督率军五十名今初三日（7月5日）到营而银钱持二万两持来火户恤典云云事”。丁提督应系为他人之误。转引自“东学农民革命综合知识情报体系”。

事实——清朝的败退与朝鲜的殖民地化。

结语

本报告在极其简单地介绍聂士成的《东征日记》的基础上，提出了在过去的研究中出现的若干错误。由于笔者的水平有限，本报告仅止于介绍聂士成的《东征日记》的层面上。至于如何深入研究这一分新的原始材料，如何应用于东学农民运动以及聂士成的研究，将是笔者今后的课题。

한 청국장병의 조선출병기록 : 섭사성의 <동정일기>

金 俊(청화대)

번역 : 이동훈(고려대)

서언

본 보고서의 목적은 섭사성(聶士成)의 『동정일기』¹⁾의 소개와 분석을 통하여 동학농민운동²⁾을 진압하기 위하여 조선에 간 청군의 행군시간, 노선 및 청군의 활동상황을 밝히기 위한 것이다.

주지하듯이 동학농민운동은 최종적으로 갑오전쟁을 유발하였으며 나아가 동아시아 전체의 정치판도를 바꾸어 동아시아 전통의 조공-책봉체제를 최종적으로 와해시켰다. 그리고 일본은 정식으로 근대제국주의의 길로 나아갔다. 이러한 의미에서 말하자면 동학농민운동은 한국근대의 일대사건일 뿐만 아니라 근대동아시아 전반의 중대한 사건이었다. 이 점에 관하여는 당시 일본외무대신을 맡고 있던 무쓰 무네미쓰(陸奥宗光)가 깊이 체득한 바 있다. 그는 “장래 누군가 중일 양국 간의 당시의 외교사를 집필한다면 동학당의 난을 글의 요지를 밝히는 첫 장으로 해야 한다.”³⁾고 하였다.

근대 한반도에서 발생한 일대사건으로 동학농민운동은 당연히 한국학계의 관심을 받았다. 대량의 공간된 논문과 학위논문 이외에도 『동학연구』라는 전문학술지와 『동학농민혁명종합지식정보시스템』이란 사이트⁴⁾가 개설되어 있다. 이러한 것들을 통하여 우리들은 동학농민운동과 관련된 많은 제1차 사료와 최신연구동향을 알 수 있다. 그러나 본 보고서에서 언급하는 청군과 농민운동관계의 관련연구는 대부분 청군이 조선에 간 원인과 그 결책과정에 집중되어 있는 반면,⁵⁾ 한반도에서의 청군의 초기 활동상황에 대해서는 거의 다루고 있지 않아 동학농민운동의 전반적인 연구에 부정적인 영향을 주고 있다. 『

1) 聶士成撰, 李寶森校, 『東征日記』, 中國史學會主編: 『中國近代史資料叢刊第5種: 中日戰爭(第6冊)』, 上海, 新知識出版社, 1956년판에 수록.

2) 이 운동에 관하여 본 보고서는 동학농민혁명이라고 표현하지 않고 동학농민운동이라는 용어를 사용할 것이다. 왜냐하면 필자는 혁명이란 사물 본래의 질적인 변화를 의미하고 있기 때문이다. 결과적으로 동학농민운동은 확실히 한반도 및 동아시아 정세에 경천동지할만한 변화를 가져왔다. 그러나 이 운동 자체가 이러한 질적변화를 구비했는지에 대해서는 필자는 회의적인 태도를 가지고 있다.

3) 陸奥宗光: 『蹇蹇錄』, 東京, 岩波書店. 북경, 1941년, 14쪽. 인용문의 출처는 商務印書館, 1963년판. 陸奥宗光著, 伊舍石譯, 谷長靑校: 『蹇蹇錄』, 북경, 商務印書館, 1963년판. 8쪽이다.

4) 사이트주소: <http://www.e-donghak.go.kr/>

5) 청군이 조선에 출동한 원인과 그 결책과정의 최신연구로는 강문호선생의 「동학농민혁명과 淸軍」, 「東學農民革命과 袁世凱」, 「東學農民革命과 李鴻章의 對外認識」, 『동학연구』 17·18·23, 2004, 2005, 2007 을 참고할 수 있다. 그 밖에 이태진, 「1894년 6월 청군조선출병 결정과정의 진상」(『한국문화』 24, 1999). 구선희, 『開化期 朝鮮의 對淸政策研究』, 혜안, 1999. 도 참고할 수 있다.

『동학농민혁명종합지식정보시스템』 사이트 내의 연표(일지)중의 작지만 명백히 잘못된 기록은 이 점을 증명하기에 충분하다. 이러한 현상을 가져온 것은 물론 각종 원인이 있지만 중국사학계의 동학농민운동에 대한 극단적인 경시 및 이로써 조성된 한중양국의 관련분야에서의 교류의 결핍도 가장 중요한 원인임에 틀림없다. 현재까지 중국에서 동학농민운동을 전문적으로 논한 글은 아직 등장하지 않고 있다.⁶⁾

본 보고서에서 소개하고자 하는 것은 명령을 받고 조선에 가서 동학농민운동을 진압 하였던 산서(山西) 태원진(太原鎮) 총병(總兵) 섭사성의 동정일기이다. 실제로 섭사성이 통솔한 8000명은 선봉대로서 처음으로 조선에 도착하여 유일하게 전주성을 향하여 이동한 청군이고, 섭사성 본인은 전주성에 진입한 최고위급 청군(淸軍)장군이다. 『동정일기』는 비교적 상세하게 섭사성 부대의 행군시간, 노선 및 청군의 활동상황을 기록하였다. 그 중 상당 부분의 내용은 동학농민운동과 관련이 있다. 이것은 청군과 동학농민운동관계를 이해하는 보기 드문 원시문헌이다. 『동정일기』는 1956년에 간행되었다. 그러나 내가 아는 바에 의하면 아직 한국에는 소개되지 않았다.

본 보고서는 두 부분으로 구분되는데 첫 번째 부분은 섭사성 본인 및 『동정일기』의 기본상황을 소개하는 것이고 두 번째 부분은 청군을 소개하는 것이다.

1. 聶士成과 『東征日記』

섭사성(1836~1900)은 청말 저명한 애국장군이다. 2000년 천진시 정부는 섭사성 순국 100주년을 기념하기 위하여 원래의 섭공비(聶公碑)소재지에 높이 4.18미터의 섭사성동상을 건립하였다. 미신화(米新華)가 그를 위하여 집필한 『聶士成碑記』는 간명하게 그의 일생을 기술하였다. 그러나 사실과 상당히 차이가 나는 부분도 있다. 전문은 다음과 같다.⁷⁾

섭사성비문(聶士成碑文)

攝公(섭공)은 諱(휘)가 士成(사성)이고, 1939년에 태어나서 1900년에 순국하였다.⁸⁾ 字(자)는 功亨(공형)이고 安徽省(안휘성) 합비(合肥) 사람이다.⁹⁾

6) 필자가 찾은 동학운동과 관련한 중국어논문은 다음 두 편에 한정된다. 盧在軾, 『中國太平天國農民戰爭和朝鮮東學農民戰爭的比較』, 北京大學2000年度碩士學位論文; 王曉秋: 「中國太平天國農民戰爭和朝鮮東學農民戰爭的比較研究」, 『韓國學研究』 9, 2001. 후에 (王曉秋, 『近代中國與世界-互動與比較』, 北京, 紫金城出版社, 2003년판)에 수록되었다.

7) 비기의 부호와 주석은 모두 필자가 표시한 것임.

8) 1900년 7월 9일 천진시(天津市) 남개구(南開區) 팔리대(八里臺)에서 순국하였음.

9) 정확하게는 안휘(安徽)합비(合肥)북향인(北鄉人)이다.

1862년 무동(武童)으로 회군(淮軍)에 투신하여 진력을 다하여 누천(累遷)하여 기명도독(記名提督), 태원진총병(太原鎮總兵)¹⁰⁾, 직예제독(直隸提督)¹¹⁾이 되었다. 1884년 청프전쟁 때에 공은 분연히 종군을 지원하여 대만을 보위하였는데, 누차 쳐들어오던 프랑스군을 격파하였다. 1293년 호대(芦臺)에 주둔하였다. 다시 가기를 청하여 동북3성을 순찰 경비하였다. 2만여리를 지나가면서 그 산천과 요충지를 그려 『동유기정(東游記程)』을 저술하고, 누차 러시아를 방비하는 요지를 설명하였다. 1894년 중일전쟁 때 명을 받들고 조선에 들어가서¹²⁾ 마천령(摩天嶺)을 지키고 연산관(連山關)을 함락하고 초하구(草河口)를 수복하고, 일본 장군인 부강삼조(富剛三造)¹³⁾를 사살하였다. 눈보라가 치는 야외에서 누워 자고 바람을 맞이하면서 식사를 하면서 곤란과 위험을 감절로 맛보았으나, 전공이 탁월하여 위엄을 중국과 외국에 떨치었다. 그리고 나서 호대(芦臺)에 돌아와 주둔하면서 무위군(武威軍)을 창립하여 원수를 겸하였다. 공은 관리로서 청렴하였으며 군대를 다스림이 매우 정연하여 그의 부대는 털끝만큼도 잘못을 범함이 없었다. 일찍이 누차 글을 올려 해안 방비를 강화할 것을 청하였다. 1900년 초에¹⁴⁾ 공은 부대를 이끌고 천진(天津) 팔리대(八里臺)에서 8국 연합군에 반격하였다. 8일 밤낮으로 피를 흘리고 신체 여러 곳에 부상을 당하였지만, 여전히 칼을 휘두르면서 독전하다가 불행히 포탄이 가슴을 관통하여 순국하였다. 공의 험격한 공로와 능률한 정기는 여러 민족영웅과 함께 해와 달을 비추고 귀신을 울렸으며, 세상 사람들의 추념(追念)이 되고 있다. 이에 삼가 비문(碑文)을 지어 충혼을 위로한다.

2000년 4월 천진시인민정부 건립

미신화(米新華) 글 유병삼(劉炳森) 새김

섭사성은 회계(淮係)집단의 중요인물로서 왕효기(王孝祺, ?-1898), 장고원(張高元, 1829-1912)와 함께 ‘회군(淮軍) 후기 3명장’으로 찬양받고 있다. 주지하듯이 회군(淮軍)은 1862년 3월 이홍장(1823-1901)이 중국변(1811-1872)의 지시를 받고 혼자서 건립한 부대이다. 이후 회군은 점차 강대해져 염군(揜軍)기의를 진압한 이후 청군의 주력부대가 되어 중국의 남북 수 천리 강과 바다의 요충지 방어를 담당하였다. 이홍장은 바로 이 회군 세력을 기반으로 하여 직예총독(直隸總督) 겸 북양대신(北洋大臣)을 맡고 국가외교·군사·경제대권을 장악한 것이다. 이와 동시에 회군도 이홍장의 대대적인 도움으로 당시

10) 1892~1897년 재직하였음.

11) 1895~1900년 재직하였음

12) 원문의 ‘1894年 中日之戰, 奉命入朝……’는 ‘1894年 奉命入朝 中日之戰 ……」이라고 해야 함.

13) ‘福剛三造’의 잘못.

14) 1900년 7월의 잘못.

중국의 가장 선진적인 부대가 되어 서양식 훈련과 서양식 무기를 채택하였을 뿐만 아니라 유럽과 아메리카의 교관을 초빙하여 훈련을 받았다. 섭사성은 1859년부터 종군한 이래 청정부의 중대한 국내의 군사활동에 줄곧 참여하였는데, 전적이 탁월하고, 날카로운 전략적 안목과 풍부한 전투경험을 가지고 있었다. 섭사성은 군대의 기율이 엄격하기로 이름이 높았으며 부대는 강한 전투력을 보유하고 있었다. 섭사성은 그와 함께 조선에 간 직예제독 엽지초(葉志超, 1838-1901)와 함께 열하(熱河) 조양(朝陽)의 김단도(金丹道)기의를 진압한 가장 중요한 공신이였다. 이홍장이 먼저 이 두 대장을 조선에 파견한 것은 심사숙고한 결과였다.

섭사성의 『동정일기』는 명령을 받고 조선에 간 1894년 6월 6일¹⁵⁾부터 시작하여 직예(直隸) 피곡구(被谷口)에서 직예제독에 임명된 1895년 2월 26일에서 끝난다. 일기는 모두 9639자로서 한반도에서의 청군의 활동 및 조선과 중국 요녕(遼寧)에서의 중일 양국의 교전상황을 기록하였다. 그 중 조선부분(청군의 제1차 부대가 조선경내에 도달한 6월 8일부터 청군이 압록강이북으로 전부 철수한 9월 15일까지 모두 100일)은 모두 6920자로서 대략 71.79%를 차지하고 있다. 그리고 동학농민운동과 관련된 부분(1894년 6월 4일부터 7월 10일까지 모두 37일)은 3913자로서 일기의 약 40.6%를 점하고 있으며 조선부분의 약 56.54%를 차지하고 있다.¹⁶⁾ 이것은 동학농민운동과 청군의 관계가 『동정일기』에서 매우 중요한 위치를 차지하고 있다는 것을 족히 설명한다.

2. 동학농민운동과 청군

1894년 5월 31일 동학농민군은 전라도 중심도시인 전주를 공격 점령하여 조선조정을 놀라게 하였다. 조선정부는 논의를 거듭한 끝에 마침내 청정부에게 파병을 요청하기로 결정하였다. 6월3일 저녁 조선에 주둔하던 총리교섭통상사의(總理交涉通商事宜) 원세개는 ‘동학도적(東學敎匪)’들을 대신 토벌할 군대를 파병해 줄 것을 청하는 조선정부의 정식 공문을 받자, 즉시 전보로 북양대신 이홍장에게 품신하였다.¹⁷⁾ 이홍장은 전문의 원고를 받자마자 즉시, 조정에 조선에 1500명을 파병하여 ‘조선의 난적(朝鮮亂匪)’들의 ‘토벌을 도울 것’을 전보로 주청하였고, 6월 5일 비준을 받았다.¹⁸⁾ 이홍장은 즉시 산해관에 주둔하고 있던 직예제독 엽지초와 직예 호대(芦臺)¹⁹⁾에 주둔하고 있던 산서 태원진 총병 섭사성에게 정예를 이끌고 조선에 가도록 명령하였다. 6월 6일 섭사성은 정병 800명을

15) 본 보고서에서 채택한 날짜는 인용문을 제외하고는 모두 양력이다.

16) 상술한 숫자는 모두 필자가 통계한 것임. 잘못이 있다면 이해를 바랍.

17) 顧廷龍·葉亞廉 主編, 『李鴻章全集』, 上海, 上海人民出版社, 1986년판. 684쪽.

18) 상동, 686쪽.

19) 현재의 천진시(天津市) 호대진(芦臺鎮)

이끌고 호대에서 출발하여 당일 저녁 배를 타고 조선으로 갔다.²⁰⁾

날짜	행군지점과 노선
6월6일	섭사성 정에 800명을 이끌고 승선, 천진 당고항(塘沽港)을 떠나서 조선으로 감.
8일	섭사성군대 : 조선연해 도착, 마삼포(馬三浦) 정박.
9일	섭사성: 뱃길 40리 이동, 백석포(白石浦) 도착, 상륙하여 군대 정돈, 아산현(牙山縣) 주둔.
11일	엽지초:백석포(白石浦)에서 상륙하여 아산에 주둔
12일	섭사성: 하급무관 100인 파견, 통사를 대동하고 포고문을 가지고 전주에 가서 초무
26일	이홍장: 전보로 '도적토벌' 명령
27일	섭사성: 새벽 2시 부대를 이동하여 전주로 향함. 50리 행군, 안주(安州)에 주둔.
28일	섭사성군대: 광정(廣亭)에 도착
29일	섭사성군대: 새벽 2시 군대이동, 새벽에 공주하(公州河) 강변에 도달, 노를 저어 도강, 성 북쪽의 웅진주(熊津州)에 주둔. '속히 회군'하라는 엽지초의 전령 받음.
7월2일	섭사성군대: 계속 전주로 가서 '도적을 토벌' 하라는 엽지초의 전령을 받음.
4일	섭사성: 정평재(程平齋)에게 군대를 이끌고 천안으로 돌아가라고 명령. 단독으로 수습 기를 이끌고 전주로 감. 정진현(廷津縣)에 숙박.
5일	닭이 울자 행군 개시, 8시 여산(廬山) 통과, 11시 산리마호(山里馬號)에 도착 점심 식사, 3시 전주도착 남문으로 들어가 관서에 머무름.
7일	섭사성: 아침 엽지초의 군대에서 전보가 와서 속히 회군하도록 명령. 효유를 보여주면서 난적들을 회유. 이곡생(李谷生)에게 명하여 의용병(勇丁) 몇 명을 데리고 먼저 출발하도록 함. 저녁 10시 도적을 초무하는 일을 김도(金道)에게 넘겨주고, 말을 달려 돌아감.
8일	새벽 4시 은택(恩澤)에 도착. 밤에 공주(公州)에서 숙박.
9일	새벽 2시 공주(公州)에서 출발, 광정(廣亭)에서 오찬, 천안(天安)에 숙박.
10일	경기로 아산으로 급히 돌아옴. 엽지초에게 '도적의 난'이 이미 평정되었다고 말하고, 속히 조선에서 철수할 것을 요구.

【표1】 청군(淸軍)행군표. 『동정일기』 기록에 근거하여 정리.

【도표1】은 조선에 첫 번째로 파병된 청군의 행군노선을 분명하게 보여주고 있다. 먼저 섭사성과 엽사초는 각각 군대를 이끌고 조선에 도착한 후, 차례로 6월 9일과 11일에 아산으로 들어가 주둔하였다. 그러나 6월 27일에 이르러서야 일부 병력을 전주로 파견하였다. 이 일부병력은 섭사성이 통솔하였는데, 아산에서 안주(27일)-광정(28일)-공주-웅진주(이상 29일)-정진현(7월 4일)-여산-산리마호(이상 5일)를 경유하여, 5일 오후 3시에 전주의 '문무 각 관리가 대열을 이루어 교외에서 맞이하는' 분위기 속에 전주성에 진입하였다. 보충 설명할 필요가 있는 것은 웅진에서 전주까지의 청군은 수습기에 불과하였으며, 나머지 청군은 정평재(程平齋: 역주:논문에는 '齋'라고 하였으나 원문에는 '齋'라고 기록되어 있음)의 지휘하에 천안으로 돌아갔다는 것이다.(7월 4일) 섭사성은 7일 저녁 10시에 전주성을 출발하여, 은택-공주(이상 8일)-광정-천안(이상 9일)을 경유한 후, 10일

20) 聶士成, 위의 책, 1쪽.

아산에 도착하여 전주까지의 행차를 마쳤다. 일기에는 동학농민군과 작전하거나 심지어 접촉하였던 기록이 털끝만큼도 없어 전혀 ‘도적의 난’을 진압하러 온 구원군 같지 않다. 이것은 물론 동학농민군의 상황과 관련이 있다. 그러나 청정부와 청군이 조선에서 극단적으로 근신하였던 행동과 밀접한 관계가 있다. 그리고 회군(淮軍)이 평상시 농민기의를 진압하였던 경험도 중요한 역할을 하였다.

우선 이번에 조선에 간 청군은 특별히 섭사성부대는 기율이 엄격하였다. 섭사성은 일찍이 아산에 상륙한 첫째 날(6월 9일) “소란을 금할 것을 명령하였다.”²¹⁾ 전주에 출정한 첫째 날(6월 27일)에는 “민간에서 채소를 취한 의용병(勇丁)이 있자 귀를 잘라서 돌려서 보게 하자 전군(全軍)이 숙연해진”²²⁾ 사건이 있었다. 이러한 조치는 조선민중의 호감을 얻었다. 당연히 이것은 이홍장이 거듭 당부한 것과 땄 수가 없다. 그는 엽지초와 섭사성에게 “모든 일에 근신하고 세심히 할 것을 중요시할 것”과 “소란을 피우거나 함부로 살해하지 말 것을 당부하였다.”²³⁾

다음은 은혜와 위엄을 동시에 베푸는 방식을 채택하여 동학농민군을 동요시키고 와해시켰다. 일찍이 6월 2일 섭사성은 즉각 “하급무관 100인을 파견하여 통사(通事)를 대동하고 포고문을 가지고 전주에 가서 초무하였다.”²⁴⁾ 포고한 전문은 다음과 같다²⁵⁾

진실로 효유함

삼가 살펴보면 조선 전라도 관할의 지방 도적떼가 난을 일으켜 감영을 점거하고 군민을 살상하니 너희 국왕이 전보를 보내어 위급함을 알렸다. 우리 중조(中朝)는 속국을 사랑하고 불쌍히 여겨 차마 좌시하고 구하지 아니할 수 없어 흠차복양대신 이홍장이 주청하여 본 통령(統領)에게 마군과 보군·화승총·포병의 대부대를 거느리고 가서 정벌하게 하였다. 특별히 생각해보니 너희들은 본래 선량하여 한번 잘못 생각하여 실수를 하였거나 혹은 협박하는 바에 따랐을 뿐으로 어찌 도적을 기꺼이 즐겨 따랐겠느냐? 대대적으로 살육당하여 매우 불쌍함을 금치 못하겠다. 대병력이 오는 날 너희들이 죄를 후회하고 귀순하여 옛 생각을 다 없애고 면목을 일신하여 죄를 철저히 뉘우치면 모두 죽음을 면하게 해주겠다. 도적의 수괴를 사로잡아 바칠 수 있다면 반드시 큰상을 내리겠다. 만일 여전히 미혹되어 깨닫지 못하고 감히 저항한다면

21) 聶士成, 위의 책, 2쪽.

22) 聶士成, 위의 책, 4쪽.

23) 王曉秋: 『中國的清史工程與關於朝鮮東學農民革命的新史料—以新編『李鴻章全集』與『袁世凱全集』爲中心』, 韓國東學農民革命國際學術大會宣讀論文, 2010. 재인용.

24) 聶士成, 위의 책, 2쪽.

25) 상동.

모두 죽이고 용서하지 않겠다. 이 때문에 효유하는 것이다. 본 통령은 기율이 엄격하여 명령이 내려지면 반드시 법을 집행하니, 미리서 말해주지 않았다고 하지 말라. 각자 삼가 준수하고 어기지 말라. 특별히 알림.

이렇게 설득력을 갖춘 포고문은 많은 동학농민군의 동요를 불러일으킨 것 같다. 『동정일기』는 다음과 같이 기록하고 있다. “사주재(史蓑齋)가 말을 타고 전주에서 돌아와서 말하기를 도적떼가 초무하는 포고문을 읽고 모두 감읍하여 무기를 던지고 귀순하기를 원했다고 하였다.”(7월 3일)²⁶⁾, “기보(弁寶) 유태(劉泰)가 돌아와서 말하기를 데려온 도적의 수괴 몇 사람이 투항하여 무기를 내놓고 처분을 기다리고 있다고 서면으로 보고하자, 즉시 김도(金道)에게 적당히 처리하기를 요청하였다.”(7월 6일)²⁷⁾

그 밖에 아낌없이 주머니를 풀어 곤란한 가호를 구제하여 사회질서를 안정시킨 것도 청군이 이 시기에 조선 관민의 호감을 얻은 중요한 원인이다. 일기는 7월 5일 섭사성이 “전주성에 진입하였을 때 오두막집이 불에 타 헐어 백성들이 거처할 곳이 없는 것을 보고, 매우 가없이 여겼다. …… 초4일(7월 6일) 관찰사 김도를 답방하여, 조사하도록 명령하여 난민 900호를 밝혀내고, 양은 1806원을 민판관에게 교부하여 가호에 따라 발급하고 오두막집을 수리하는 것을 돕도록 하였다. ……얼마 후에 민판관은 보고를 하였는데, 고시 후 난민은 진휼을 받고 모두 매우 감격하였다고 운운하였다”²⁸⁾고 기록하고 있다. 포고문의 원문은 다음과 같다.

효유를 고시함

말을 하자면 본 통령(統領)이 일전에 경무장한 기병으로서 전주에 이르렀을 때 서남문 안팎의 민간가옥이 난적들에 의해 불에 타 허물어져 주민들이 노천에서 밥을 지새우고, 바람을 맞이하면서 밥을 먹는 것을 보고 매우 불쌍히 여겼다. 본 통령은 재난을 당한 가호를 조사하여 명단을 하나하나 써넣고, 매 가구마다 양은(洋銀) 2원씩 주어 가옥을 수리할 비용에 보태도록 하노니 이것은 너희들의 입장을 고려하는 중조(中朝)의 인정(仁政)에 부합하는 것이다. 그리고 본 통령은 도중에 숙박하던 곳에서 백성들이 민판관의 덕정(德政)을 한목소리로 칭송하는 것을 보고 평상시 인애(仁愛)가 백성에 미치고, 보살피지 않는 곳이 없다는 것을 즉시 알게 되어 이를 심히 가상하게 여겼다. 본 통령은 진휼 자금을 그에게 교부하여 재난을 입은 가호를 조사하여

26) 聶士成, 위의 책, 5쪽.

27) 聶士成, 위의 책, 6쪽.

28) 위와 같음. 한국측 자료인 『隨錄』에도 이 일을 기록하였다. “上國의 聶統領, 丁提督이 군사 50명을 이끌고 이번 초 3일(7월 5일) 감영에 도착하여 은전 2만냥을 가지고 와서 주면서 불에 탄 가호를 구휼하기 위한 홀전(恤典)이라고 운운하였다고 함” 그런데 여기서 丁提督은 다른 사람을 잘못 기록한 것이다. ‘동학농민혁명종합지식정보시스템’에서 재인용.

전에 하던 것처럼 발급하도록 할 것이다. 너희들은 각각 양은 2원씩을 받아서 집으로 돌아가서 각자 생업에 종사하여 보잘 것 없지만 구휼하는 성의를 저버리지 말라. 이로써 효유를 고시하니 너희 난민들은 명심하길 바란다. 거듭 알림, 이상.

요컨대 조선농민운동을 진압하기 위하여 조선에 간 청군은 나날이 긴장되어 가던 동아시아 국제정세와 나날이 복잡해져가는 조선의 정세 하에 실제 동학농민군의 진압활동에 직접 참여하지 않았다. 반대로 그들은 얼마 후 동학농민군의 공동의 적-나날이 강대해져가던 일본군과 교전하였다. 그 결과는 동학농민군과 청군이 모두 받아들이기를 원하지 않았던 사실-청조의 패퇴와 조선의 식민지화였다.

결어

본 보고서는 매우 간단하게 섭사성의 『동정일기』를 소개하는 것을 기초로 하여 과거 연구에서 나타났던 약간의 잘못을 지적하였다. 필자의 수준에 한계가 있어 본 보고서는 다만 섭사성의 『동정일기』를 소개하는 정도에 그쳤다. 이 새로운 원시사료를 어떻게 깊이 연구하고, 동학농민운동 및 섭사성의 연구에 어떻게 응용할 것인가가 필자의 금후의 과제이다.

토론문

토론 : 구선희(국사편찬위원회)

「中國의清史工程與關於朝鮮東學農民革命的新史料 - 以新編 《李鴻章全集》與《袁世凱全集》爲中心」에 대한 토론문

구선희(국사편찬위원회)

필자에 의하면 이 글은 중국의 청사 프로젝트에 의해 편찬된 史料 중에서 최근에 출판된 『李鴻章全集』과 곧 출판될 『袁世凱全集』 중의 新史料를 이용하여 당시 조선과 일본의 외교·군사 사무를 담당했던 북양대신 李鴻章과 총리교섭통상사의로 조선에 파견된 袁世凱가 1894년 농민전쟁을 어떻게 인식하였는지 연구한 것이다. 우선 청사공정에 대해 소개를 해주심에 감사드리고, 글을 읽으면서 느낀 점을 몇 가지 얘기하고자 한다.

1. 필자는 앞서 출간된 『李文忠公全書』와 최근에 간행된 『李鴻章全集』에 나타난 이홍장의 동학농민전쟁에 대한 인식과 태도를 분석한 결과 4가지 사실들을 발견하였다고 한다. 이 4가지에 대해 차례로 토론자의 의견을 말하면 다음과 같다.

1) 이 방면 電報의 절반 이상은 『李文忠公全書』에 수록되지 않았기 때문에 신사료로 이용할 수 있다.

그런데 필자가 이 글을 서술하며 이용한 전보의 대부분은 『李文忠公全書』에 수록된 것이다. 새로 나온 『李鴻章全集』에 수록된 전보는 지금까지 드러난 이홍장의 농민전쟁에 대한 인식을 더욱 더 보완할 수 있는 내용이라고 생각된다. 그러나 필자는 신사료 보다는 기왕에 알려진 사료를 더 많이 활용하여 이 글을 작성하고 있어 ‘신사료’의 전반적인 내용이 어떠한지 제대로 알 수가 없다.

2) 당시 이홍장이 조선의 상황에 매우 관심을 가졌고, 하루에도 몇 통의 전보를 보낸 적이 있음이 발견되었다.

이것은 기왕의 『李文忠公全書』에 수록된 전보를 보아도 이홍장의 조선 상황에 대한 관심이 어느 정도였는지 쉽게 알 수 있다. 또한 전보이기 때문에 같은 날의 것이라도 시각이 기록이 되어 있어 어느 날, 어느 시각에 전보가 오갔는지 알 수 있는데 하루에도 몇 통의 전보를 보내고 있었다. 따라서 이런 사실들이 ‘신사료’를 통해서, 혹은 ‘신사료’와 비교해서 알 수 있는 것은 아니라는 것이다.

3) 이홍장의 조선 상황, 동학농민전쟁에 대한 정보는 주로 袁世凱가 제공한 것이었고, 李鴻章이 파견한 淮軍과 북양군대 장군들이 제공한 것이다.

4) 이홍장은 이러한 정보를 근거로 조선 상황에 대한 자신의 판단과 외교·군사 행동의 결정을 내렸다.

3)번과 4)번 또한 ‘신사료’를 활용하지 않고서도 이미 알려진 사실이다.

이홍장의 조선에 대한 정보는 우선적으로 袁世凱로부터 제공되었다. 그렇다면 이홍장의 조선 상황과 당시 일본의 의도에 대한 판단은 원세개가 보내는 보고에 의해 영향을 받을 수밖에 없었다. 그런데 필자는 李鴻章과 袁世凱 사이에 이루어졌던 당시 조선과 일본의 움직임에 대한 의견 교환과 그로부터 비롯된 두 사람의 상황 판단에 대해 유기적으로 연결시키지 못하고 있다. 이홍장의 조선 상황에 대한 판단 미숙이 어디로부터 비롯되었는지에 대한 분석이 결여된 것은 이로부터 비롯된 것이라 생각된다.

2. 인용한 자료 중에 ‘日’자가 ‘倭’자로 쓰여진 곳이 있다. 물론 『李文忠公全書』에는 ‘日’자로 나와 있다. 필자가 인용한 자료는 『李鴻章全集』에서 인용하여 ‘倭’자로 쓰여진 것인가? 그렇지 않다면 잘못 이기한 것인가?

3. 1894년 농민전쟁과 관련한 『李鴻章全集』과 『袁世凱全集』의 내용은 일본측 자료와 비교하여 분석할 필요가 있다. 또한 청일전쟁이 청국과 일본만의 전쟁이 아니라 조선과 청, 일본과의 전쟁이었던 만큼 한국측 자료와도 비교 검토가 필요하지 않을까 생각된다.

「一位清軍將領的赴朝記錄 - 聶士成的『東征日記』」에 대한 토론문

구선희(국사찬위원회)

필자는 1894년 농민전쟁 당시 농민군을 진압하기 위해 파병된 청군의 부사령관 聶士成이 쓴 『東征日記』를 소개하고 있다. 필자는 『동정일기』의 소개와 분석을 통하여 조선에 파견된 聶士成 군대의 행군시간, 노선 및 청군의 활동상황을 밝히고자 한다고 했다. 이에 따라 제1장에서는 聶士成과 『東征日記』 그리고 제2장에서는 동학농민운동과 청군이라는 제목으로 서술을 했다. 聶士成이란 인물과 『東征日記』에 대한 내용을 소개해주시는 필자에게 고마움을 표한다. 그럼에도 불구하고 필자의 글을 읽으면서 생긴 몇 가지 의문점에 대해 말하고자 한다.

1. 필자는 서언에서 지금까지 동학농민운동과 청군과의 관련 연구에서 청군의 초기 활동 상황에 대해서는 거의 다루고 있지 않아 동학농민운동의 연구에 부정적 영향을 주고 있다고 했다. 이에 이어 본문에서 필자는 청군 특히 聶士成 군은 기율이 엄격하여 조선에서 근신하고 소란을 피우지 않았다고 하여 조선에서의 청군의 초기 활동에 매우 긍정적인 평가를 하고 있는 것 같다. 그런데 청군의 파병 초기, 이동하는 과정에서 인마를 증발하기 위해 조선인에게 피해를 주었고, 이로 인해 조선인은 청군을 매우 싫어하였다는 연구도 있다. 이 점에 대해 필자는 어떻게 생각하고 있는지 묻고 싶다.

2. 위의 질문과 관련되는 것인데, 청 정부가 조선에 파병한 청군에게 조선에서 극단적으로 행동을 조심하게 한 이유에 대해 구체적인 설명이 부족하다. 필자가 청군이 행동을 정숙하게 하자 조선민중의 호감을 사게 되었다고 하는 것은 매우 피상적인 설명이다. 왜 청 정부가 조선주재 청군의 행동을 엄하게 단속시켰는지에 대한 구체적인 분석이 있어야 한다. 당시 사료에 의하면 청 정부 입장은 농민군을 진압하는 것보다는 일본과의 충돌을 막는 일에 우선하였다. 그래서 조선에 주재하는 청군이 일본과 조금이라도 마찰을 일으킬 만한 일을 만들지 못하도록 단속하였다. 이 점을 간과하고 청군의 조선에서의 활동을 서술해서는 곤란하지 않을까 생각된다.

3. 『동정일기』는 1894년 6월 6일부터 1895년 2월 26일까지 일기인데, 그 중 동학농민운동과 관련한 부분은 1894년 6월 4일부터 1894년 7월 10일까지 총 37일분이라고 했다. 6월 6일부터 시작된 일기인데 동학농민운동관련은 6월 4일부터라고 한 점에 의문이 간

다. 이 글에서는 특별한 경우를 제외하고는 모두 양력을 쓰고 있는데, 음력과 약력의 환산 과정에서 나온 오류인가?

4. 필자는 『동정일기』의 기록에 근거하여 청군의 행군표를 정리해 놓았다. 『동정일기』 중 조선과 관련된 내용은 청군이 조선에 도달한 1894년 6월 8일부터 압록강 이북으로 철수한 9월 15일까지라고 했다. 그런데 필자는 청군의 행군 경로에 대해 6월 6일부터 7월 10일까지만 표로 정리해 보여주고 있다. 당시 청군이 조선에 도착하는 시기도 중요하지만 9월 15일에 벌어지는 청군과 일본군의 평양전투까지, 그리고 그 이후의 청군의 행보를 밝히는 것도 필요하다. 필자가 이것을 누락한 것은 일기에 없기 때문인가?

5. 필자는 결어에서 聶士成의 『東征日記』를 소개함으로써 과거 연구에서 나타났던 약간의 잘못을 지적하였다고 하였는데, ‘약간의 잘못’된 연구가 무엇인지 알고 싶다.

6. 조선의 지명이 틀린 곳이 있는데, 자료에 그렇게 나오는 것인지 필자가 이기하는 과정에서 잘못된 것인지 모르겠다(예, 馬三浦, 恩澤 등). 그리고 山里馬號는 어디를 말합니까?

동학농민혁명기념재단

주소 : 전라북도 정읍시 덕천면 하학리 산8

동학농민혁명기념재단

연락처 : 063-538-2894 (fax)063-538-2893

한국사연구회

주소 : 서울특별시 성북구 안암동 5가

고려대학교 한국사학과 이진한교수 연구실

연락처 : 02-2245-0746

만든 날짜 : 2010년 10월 22일

